

令和3年度
内閣府委託調査

女子生徒等の理工系分野への進路選択に おける地域性についての調査研究

調査報告書

令和4年3月



三菱UFJリサーチ&コンサルティング

目 次

第1章 調査概要	1
1-1. 調査の背景と目的	1
1-2. 調査概要	2
(1) 委員会の開催	2
(2) 統計に基づく集計・分析	2
(3) 高校生に対する進路選択アンケート	3
第2章 調査の仮説及び調査の結果概要	6
2-1. 調査の仮説	6
2-2. 調査の結果概要	8
(1) 女性の進学に影響を与える要因	8
(2) 女性の理工系分野への進路選択に影響を与える要因	9
(3) 理工系分野への女性の進学に関する地域性についての分析	10
2-3. 今後のフォーカス・エリアについて	12
第3章 統計に基づく集計・分析結果	15
3-1. 都道府県別にみた高等教育機関等への進学に関する特徴	15
(1) 都道府県別の進学状況	15
(2) 地元への進学状況	20
3-2. 理工系分野への進学の状況	22
3-3. 女性の進学状況に係る地域間格差の分析	26
(1) 分析方法と使用するデータ	26
(2) 地域間格差に関する分析結果	29
(3) 散布図	30
第4章 高校生に対する進路選択アンケート調査結果	39
4-1. 基本集計結果	39
4-1-1. 回答者の概要	39
(1) 学年	39
(2) 居住地域	40
(3) 学校種別	41
(4) 在学校の進学状況	43
(5) 進路希望	45
(6) 4年制大学へ進学する可能性（4年制大学への進学が第一希望でない者）	47
4-1-2. 保護者・家庭について	48
(1) 保護者の就労状況	48
(2) 家庭の暮らしの状況	50
(3) 保護者の最終学歴	51

(4) 保護者が卒業した学部	55
4-1-3. 理系・文系について	59
(1) 通っている学校の課程	59
(2) 通っている学校の区分	59
(3) 通っている学校の学科	61
(4) 所属するコース	63
(5) 文理タイプ	64
(6) 中学生の頃に勉強することが好きだった科目	65
(7) 中学生の頃の成績	69
(8) 理系のイメージ	73
(9) 文系のイメージ	77
(10) 女性教員に教えてもらった経験	81
(11) 学校以外での理科・数学（算数）に関する経験	86
4-1-4. 進路について	95
(1) 文系・理系の志望	95
(2) 進学を希望する学部	96
(3) 進路希望の理由	98
(4) 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること	100
(5) 進路選択において重視・参考にしていること	103
(6) 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと	110
(7) 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと	113
4-1-5. 固定的性別役割分担意識	116
(1) 自身の固定的性別役割分担意識	116
(2) 保護者の固定的性別役割分担意識	121
(3) 将来のライフコースの希望	126
4-2. テーマ別分析	128
4-2-1. 女性の進学に影響を与える要因についての分析	128
(1) 集計・分析の概要	128
(2) 結果の概要	128
4-2-2. 女性の理工系分野への進路選択に影響を与える要因の分析	152
(1) 集計・分析の概要	152
(2) 結果の概要	152

参考資料

1. 高校生に対する進路選択アンケート 地域別クロス集計表 -参-1-
2. 高校生に対する進路選択アンケート 調査票 -参-95-

第1章 調査概要

1-1. 調査の背景と目的

我が国の理工系分野における女性研究者・技術者の割合は、増加傾向にあるものの依然として低い水準となっており、今後、本格的な人口減少社会を迎える中でイノベーションの創出によって社会の課題を解決するためにも、女性研究者等の活躍を推進することは急務である。このため、第5次男女共同参画基本計画（令和2年12月25日閣議決定）及び第6期科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月26日閣議決定）において、女性が研究者・技術者や、科学技術イノベーションを担う多様な人材として活躍できるよう活躍を促進していくこととしている。また、第5次男女共同参画基本計画では、「大学の理工系の教員に占める女性の割合」「大学の研究者の採用に占める女性の割合」「大学（学部）の理工系の学生に占める女性の割合」についての目標値¹を定め、科学技術・学術における女性の採用・登用の促進を図っている。さらに、STEM（科学・技術・工学・数学）分野における女性の活躍を推進するため、平成28年にはG7首脳による「女性の理系キャリア促進のためのイニシアティブ（WINDS）」が立ち上がり、国内外で理工系分野の女性リーダー育成を推進する動きなどもみられる。

このように、女性研究者・技術者の育成は国の政策課題として位置付けられており、様々な取組も行われているが、理系の中でも特に理工系分野において次代を担う女子学生比率は依然として低い状況であり、女子生徒等の理工系分野への進路選択が促進されることが求められる。

女子生徒の理工系分野への進学状況が地域によってどのような特徴がみられるのか、そうした違いが何によってもたらされるのか等、理工系分野の専攻における地域性については、これまで十分な調査が行われていないといえる。そこで、本調査では既存統計データを活用して、地域別にみた理工系分野への進学状況の実態を把握するとともに、高校生の進路選択に関するアンケート調査を通じて、地域によって異なる進路選択についてその要因分析を行う。その結果を踏まえて、女子生徒の理工系分野への進路選択を促進するうえで重点的な取組が求められる分野・地域等、今後の事業のフォーカス・エリアを特定することを本調査の目的とする。

¹ 大学の理工系の教員に占める女性の割合については、2025年までに理学系を12.0%、工学系を9.0%とすることが目標値とされている（2019年の実績値：理学系8.7%、工学系5.7%）。大学の研究者の採用に占める女性の割合については、2025年までに理学系を20%、工学系を15%とすることが目標とされている（2019年の実績値：理学系16.2%、工学系13.0%）。

1-2. 調査概要

(1) 委員会の開催

①委員名簿

本調査研究の方針、企画、調査設計、調査結果の分析にあたり、専門的な知見を有する者より助言を得ることを目的として、「女子生徒等の理工系分野への進路選択における地域性についての調査企画委員会」を設置した。委員名簿は、以下のとおりである。

【委員】（敬称略、五十音順、 ○：座長）

秋山 治彦 徳島県立阿波西高等学校 教頭

○ 河野 銀子 山形大学学術研究院 教授

木村 治生 ベネッセ教育総合研究所 主席研究員

②委員会の開催履歴

委員会は、全3回開催した。各回の概要は、以下のとおりである。

回	開催日	議題
第1回	令和3年11月2日	・調査研究の方針について ・統計データの分析方法の検討 ・アンケート調査の調査設計、調査票案の検討
第2回	令和4年1月12日	・統計データに基づく集計・分析結果の検討 ・アンケート調査基本集計結果の検討 ・今後の集計・分析方針について
第3回	令和4年2月21日	・最終報告書案の検討

(2) 統計に基づく集計・分析

文部科学省「学校基本調査」の二次分析により、出身都道府県ごとの学部別男女別入学者数を集計し、都道府県別にみた理工系分野への進学状況の実態把握を行った。

加えて、理工系分野への進路選択以前に、当該地域における女性の進路として4年制大学や短期大学、専修学校の専門課程（いわゆる専門学校）への進学がどの程度想定されているのかについても把握するため、「学校基本調査」のデータに基づき、進路選択に関する地域別の特徴の整理を行った。

さらに、4年制大学や理工系分野への進路選択に係る課題について、地域ごとの傾向を分析するため、各種統計データに基づき、理工学部の設置状況、地域の社会経済状況、産業構造等に関する指標との関連性について分析を行い、大学進学率や理工系分野に占める女性比率の地域格差に影響を与える要因について検討を行った。

（３）高校生に対する進路選択アンケート

①目的

理工系分野への進路選択に地域性がもたらす影響を明らかにするため、高校生を対象として、進路の希望や進路選択の理由、保護者や教員からの働きかけ、さらに固定的性別役割分担意識や将来のライフコースの意向等についてアンケート調査を実施した。

②調査方法

インターネット・モニターを対象とした Web アンケート調査を実施した。

③調査対象数

高校生本人を対象とし、計 5,000 サンプルの回収を目指した。なお、高校生本人からの回答のみで目標数に達しない場合は、保護者による代理回答で不足する件数を補うこととした。具体的な抽出方法については、後述のとおりである。

全国の高校生から性別や居住地域に偏りなく回答を得るため、性別・地域ブロックによる割付を行った。性別は男女 2,500 サンプルずつの均等割付とし、地域ブロックは、「令和 2 年度学校基本調査」に基づき、各地域ブロックの高校生の人口規模比率に応じた割付を行った。具体的な割付区分及び割付件数は下表のとおりである。

図表 1 割付区分及び割付件数

性別	地域ブロック								計
	北海道・東北	南関東	北関東・甲信	北陸	東海	近畿	中国・四国	九州・沖縄	
女性	273	666	200	106	310	415	224	306	2,500
男性	274	661	208	107	310	411	225	304	2,500
合計	547	1,327	408	213	620	826	449	610	5,000

注) 地域ブロックは、総務省「労働力調査」を参考に、以下のとおり設定した。

北海道・東北 …北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

南関東 …埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

北関東・甲信 …茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県

北陸 …新潟県、富山県、石川県、福井県

東海 …岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

近畿 …滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中国・四国 …鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州・沖縄 …福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

④調査対象者の抽出方法

以下の（ア）～（ウ）の方法を組み合わせ、モニター会社の登録者にアンケートを配信した。
初めに（ア）、（イ）の方法によって高校生本人からの回答を収集し、回収目標数に達しない分について、（ウ）の方法により保護者による代理回答で補った。なお、保護者による代理回答が困難な一部設問については、高校生本人が回答する（ア）、（イ）の場合のみ回答を求めた。

（ア）【高校生本人からの回答】高校生本人に配信し、回答を依頼

（イ）【高校生本人からの回答】高校生の子を持つ保護者に配信し、Q3以降の設問について、子（高校生本人）に回答を依頼

（ウ）【保護者による代理回答】高校生の子を持つ保護者に配信し、保護者による代理回答が困難な一部設問を除き、保護者に回答を依頼

⑤実施時期

令和3年12月10日（金）～12月20日（月）

⑥回収状況

高校生本人から4,594件、保護者による代理回答で446件の回答を得て、計5,040サンプルを回収した。高校生本人からの回答、保護者による代理回答を合わせ、各割付区分について所定の件数に達した。

図表2 回収状況

性別	地域ブロック								計
	北海道・東北	南関東	北関東・甲信	北陸	東海	近畿	中国・四国	九州・沖縄	
女性	273	666	200	106	310	415	224	306 (15)	2,500 (15)
男性	274 (71)	661	208 (62)	107 (39)	310 (64)	411 (18)	225 (48)	304 (129)	2,500 (431)
その他	9	10	5	0	2	8	1	5	40
合計	556	1337	413	213	622	844	450	615	5,040

注1）括弧書きは、各割付区分の回収数のうち、保護者による代理回答で回収した件数を表す。

注2）回答者が自身の性別について「その他」と回答した場合は、当初の割付区分に関わらず、回収を行った。

⑦調査の集計・分析方法

調査結果の集計にあたっては、高校生本人の回答と保護者による代理回答が含まれることから、特に保護者による代理回答の取扱いについて、検討を行った。図表2に示すとおり、回収したサンプルのうち、保護者による代理回答は女性が15件であるのに対して、男性は431件と男女で件数の偏りが大きく、高校生本人と合わせて集計・分析を行った場合、男性において保護者による回答の影響がより強く反映されることとなる。

高校生本人と保護者による代理回答の傾向の違いを確認したところ、保護者による代理回答では、高校生本人に比べて「わからない」の選択肢を選択する傾向がみられたほか、各教科の成績に関する設問について、高校生本人に比べてやや否定的な回答（「あまり得意ではない」など）が多い傾向等がみられた。

設問によっては高校生本人と保護者による代理回答で大きな傾向の違いがみられないものもあるが、一部において上述のような回答傾向の違いがみられること、高校生本人のみの回答が約4,600件と一定数確保できており、分析に必要なサンプルが確保できていることから、本報告書では、保護者による代理回答を含まずに高校生本人のみの回答に基づいて集計・分析を行うこととした。

なお、回答者の年齢や性別等が国内全体の分布のそれと同じになるようなウェイトバック（復元）は行っていない。本報告書に示す調査結果は、回収サンプルにおける集計結果である。

⑧主な調査項目

回答者の概要	・ 学年 ・ 回答者（本人／保護者） ・ 居住地域 ・ 学校種別 ・ 在学校の進学状況 ・ 進路希望 ・ 4年制大学へ進学する可能性
保護者・家庭について	・ 保護者の就労状況 ・ 家庭の暮らしの状況 ・ 保護者の最終学歴 ・ 保護者が卒業した学部
理系・文系について	・ 通っている学校の課程 ・ 通っている学校の区分 ・ 通っている学校の学科 ・ 所属するコース ・ 文理タイプ ・ 中学校の頃に勉強することが好きだった科目 ・ 中学校の頃の成績 ・ 理系／文系のイメージ ・ 理数系教科について、女性教員に教えてもらった経験 ・ 学校以外での理系的経験
進路について	・ 文系・理系の志望 ・ 進学を希望する学部 ・ 進学希望の理由 ・ 進路選択をするうえで、考慮しようとしていること ・ 進路選択において重視・参考にしていること ・ 自身の進路について、保護者／教員はどのようなことを望んでいると思うか
ジェンダー意識	・ 自身の固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ ・ 保護者の固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ ・ 将来のライフコースの希望

第2章 調査の仮説及び調査の結果概要

2-1. 調査の仮説

本調査では、女子生徒の理工系分野への進路選択における地域性について分析を行うにあたり、まず女子生徒の理工系分野への進路選択に、どのような要因が影響を及ぼしているかを検討するため、仮説の構築を試みた。なお、理工系分野への進路選択にあたっては4年制大学への進学が前提となることから、仮説設定においては大学進学に影響を及ぼす要因も含めている。

女子生徒の理工系分野への進路選択及び女性の大学進学率についての先行研究をもとに、図表3に示すとおり、「個人要因」「環境要因」「構造要因」に大別し、仮説として設定した²。

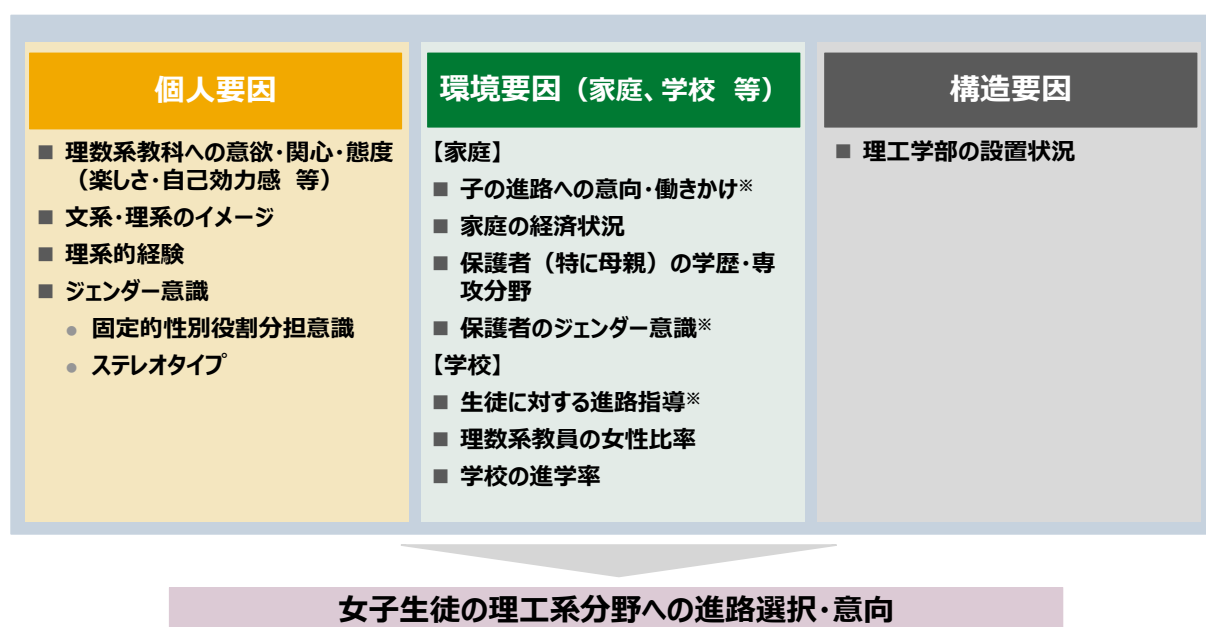
「個人要因」としては、生徒本人の意欲・関心・態度、文系・理系のイメージ、幼少期からの理系的経験、ジェンダー意識（固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ）を取り上げた。

「環境要因」は大きく家庭と学校に分けることができるが、家庭の環境要因については子の進路への意向・働きかけ、家庭の経済状況、保護者の学歴・専攻分野、保護者のジェンダー意識を取り上げた。学校の環境要因については、生徒に対する進路指導、理数系教員の女性比率、学校の進学率を取り上げた。

「構造要因」としては、地域における理工学部を設置状況を取り上げた。なお、「構造要因」はアンケート調査では聴取できないため、統計調査に基づく集計・分析において検証を行った。

上記の仮説に基づいて、女子生徒の理工系分野への進路選択に関係している要因を検証したうえで、さらに関係が確認された要因の地域性を検討するという枠組みを設定した。

図表3 女子生徒の理工系分野への進路選択に影響を及ぼす要因



注1）上記の要因には、女子生徒の理工系分野への進路選択だけでなく、大学進学に影響を与えと考えられる要因も含めている。

注2）アンケート調査では生徒本人の認知について聴取し、保護者・教員の意識に対する子の認知をみている。

² 河野（2019）では、女性が大学の理工系分野を選択しない背景として、意欲・関心・態度、経験などの「個人要因」、家庭、学校などの「環境要因」、教育課程、入試制度などの「構造要因」などに整理することができるとしている。また、上山（2011）は、大学進学率の地域差についての時系列分析を通して、男女ともに社会経済的条件（所得、学歴）及び供給側要因（大学収容力）の影響が大きいことを明らかにしている。

図表 4 仮説

大項目	小項目	仮説
個人要因 (意欲・関心・態度・経験等)	理数系教科に対する意欲・関心・態度	理数系教科を楽しんでいる経験や、理数系教科への自己効力感(得意不得意の自己認識)があるほど、理工系分野への進学を希望しやすくなるのではないかな。
	文系・理系イメージ	文系や理系に対するイメージが、理工系分野への進学希望に影響するのではないかな。
	理系的経験	理数系教科への関心を育む機会(科学館・博物館、イベント等)や、自然体験の機会(観察、野外活動等)、理工系の職業につながる体験機会(工作経験、プログラミング等)が多いと、理工系分野への進学を希望しやすくなるのではないかな。
	ジェンダー意識	固定的性別役割分担意識や理工系に関するステレオタイプ、将来のライフコースの意向が、理工系分野への進学希望に影響するのではないかな。
環境要因(家庭)	子の進路への意向・働きかけ	子の進路に対する保護者の意向、保護者から子に対する働きかけ(資格取得を勧める、保護者が女子生徒に対し、理系進学／文系進学を勧める等)によって、理工系分野への進学希望が異なるのではないかな。
	家庭の経済状況	経済状況によって、理工系分野への進学希望(進学可否)が異なるのではないかな(学費が高い理工系分野への進学を諦めざるを得ない等)。
	保護者(特に母親)の学歴・専攻分野	保護者、特に母親の最終学歴や専攻分野は、女子生徒のロールモデルとなると考えられるため、進路選択に影響するのではないかな。
	保護者のジェンダー意識	保護者の固定的性別役割分担意識や理工系に関するステレオタイプ、将来のライフコースの意向が、理工系分野への進路選択に影響するのではないかな。(子の進路への意向・働きかけとの関係も想定される)
環境要因(学校)	生徒の進路指導	教員による進路指導が、生徒の進路選択、理工系分野への進学希望に影響するのではないかな。(教員が女子生徒に対し、理系進学／文系進学を勧める等)
	理数系教員の女性比率	教員は生徒のロールモデルになることから、理数系科目の女性教員に教わった経験があると、女子生徒が理工系分野への進学を希望しやすくなるのではないかな。
	学校の進学率	4年制大学への進学者が多い学校や、それ以外の進学先(短期大学、専門学校等)への進学者が多い学校、就職する生徒が多い学校など、学校における進学状況が、生徒の進路選択に影響するのではないかな。
構造要因	理工学部設置状況	女子生徒においては地元進学を志向する割合が高い傾向にあることから、地域の理工系学部の設置状況等が、理工系分野への進路選択に影響するのではないかな。

2-2. 調査の結果概要

以下では、「第3章 統計による集計・分析結果」及び「第4章 高校生に対する進路選択アンケート調査結果」の概要を記載する。分析の結果から、主に以下の点が明らかとなった。

(1) 女性の進学に影響を与える要因

統計に基づく分析結果からは、女性の4年制大学進学率（以下、「大学進学率」という）と、親世代の女性大卒者率、大学収容力、一人当たり県民所得、女性の自県大学進学率、同地域ブロック内大学進学率、女性有業率との間に相関がみられた。このうち、親世代の学歴との相関係数はもっとも高く、母親の学歴が女性の大学進学率に与える影響は、相当強いといえる。また、大学収容力、自県大学進学率、同地域ブロック内大学進学率との相関は、女性において、地元で進学できるかどうか、大学進学に影響を与えていることを示している。また、一人当たり県民所得も比較的相関係数が高く、地域の経済状況の影響も大きいことが分かる。以上はいずれも女性の4年制大学進学率との間に正の相関がみられたものであるが、一方で女性有業率との間には負の相関がみられた。この解釈については本編でもふれているが、女性の場合、大学への進学が、必ずしも労働市場を通じた地位の向上に結びついていないことを示していると考えられる。

次に、アンケート調査結果からは、生徒本人のジェンダー意識、家庭の暮らしの状況、保護者（母親・父親）の最終学歴、保護者や教員の意向に対する認知、保護者のジェンダー意識、在学校の進学状況が、女性への進学・就職の進路選択に影響を与える要因として挙げられた。家庭の暮らしの状況、保護者（母親・父親）の最終学歴は、統計調査と同様の結果であり、地域単位だけでなく、世帯単位でみても保護者の学歴や所得水準が、女性の大学進学率へ影響を与えていることが確認された。また、本人のジェンダー意識では、4年制大学希望者は、将来のライフコース意向として、「結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）」という希望が強く、短期大学志望者は「結婚や出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない（専業主婦コース）」という希望が強い傾向がみられた。将来のライフコースの意向は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」といった本人の固定的性別役割分担意識とも関連しており、固定的性別役割分担意識が強いほうが専業主婦コース、弱いほうが両立コースを希望する傾向にある。また、保護者のジェンダー意識³でも、短期大学志望者は保護者の固定的性別役割分担意識やステレオタイプが強いと認知している傾向がみられ、本人や保護者のジェンダー意識が、進路選択に影響を与えていることがうかがわれる結果となった。

このほか、自身の進路について保護者が望んでいると思うこと、教員が望んでいると思うこと⁴として、4年制大学、短期大学、専門学校、就職等、子（生徒）の進路について保護者・教員の意向に対する認知が、生徒自身が希望する進路と一致している割合が高くなっていた。当然ながら、保護者や教員の意向を生徒本人が認知する過程では、周囲からの様々な働きかけや進路選択に関する勧め等が影響していると考えられる。そうした働きかけを通じて、生徒自身がどのように認知するかが、生徒自身の進路選択において重要であるということが指摘できる。

³ 生徒本人の回答であるため、実際の保護者の意識とは乖離が生じている可能性には留意が必要である。

⁴ 上記と同様、生徒本人による回答であり、実際の保護者や教員の意向とは乖離が生じている可能性がある点には留意が必要である。

（２）女性の理工系分野への進路選択に影響を与える要因

統計に基づく分析結果からは、理学分野の入学者における女性比率と、理学部収容力⁵、親世代の女性大卒者率、女性の４年制大学進学率との間に相関がみられた。理学部収容力は、地域における理学部の供給状況を示す指標であり、地元進学の高い女性において、収容力の増大（すなわち地元での進学機会を増やすこと）が理学分野への女性の進学を促進することが示唆されている。

また、親世代の女性大卒者率は女性の４年制大学進学率に影響を与える要因と共通しており、女性の理学分野への進路選択においても、母親の学歴の影響が大きいことがうかがえる結果となっている。

一方で、県内総生産に占める製造業や情報通信業の割合は、理学分野の入学者における女性比率とは有意な相関がみられなかった。大学進学後の就職先として、地域に大学の専攻分野とつながる就職口が多いことが、女性において理学分野への進学の動機付けになっている可能性があると考え分析を行ったが、結果をみると、必ずしも地域の産業構造が、女性の理学分野等への進路選択を規定するものではないということがいえる。

また、工学分野については、工学分野の入学者における女性比率と、有業者に占める製造業に従事している者の割合、県内総生産に占める製造業の割合、県内総生産に占める情報通信業の割合、理科教員における女性比率との間に相関がみられた。このうち、地域産業との関連性という点では、工学分野の入学者における女性比率と県内総生産に占める製造業の割合及び有業者に占める製造業に従事している者の割合との間には負の相関、県内総生産に占める情報通信業の割合との間には正の相関がみられた。製造業との相関がいずれも負の相関となっている理由としては、本編でもふれているが、製造業が盛んな地域では、男性のほうが大学の工学部へ進学する傾向が強いことによるものと推測される。

また、情報通信業との間には正の相関がみられたが、県内総生産に占める情報通信業の割合は、東京都が外れ値となっており、東京都以外の４６道府県でみると有意差がなくなる点には留意が必要である。

そのほか、工学分野の入学者における女性比率と理科教員における女性比率との間にも正の相関がみられ、女性にとってのロールモデルとして女性教員に教わる経験が多いほど、女性の工学分野への進学志望が高まることがうかがえる結果となった。ただし、数学教員の女性比率や、理学分野の入学者における女性比率と理科教員及び数学教員の女性比率との間にはいずれも有意な相関がみられていないため、そのような解釈ができるかどうかについては、さらなる検討が必要であろう。

次に、アンケート調査では、サンプルサイズの関係上、理学部と工学部を区別せずに女性の理工学部志望者の特徴について分析を行った。その結果、理数系教科に対する意欲・関心・態度（数学や理科が好きかどうか、成績がよいかどうか、将来像が明確など教科学習への動機付けがあるかどうか）、理系のイメージ、理系的経験、保護者（母親・父親）の専攻分野、保護者や教員の意向に対する生徒本人の認知、保護者のステレオタイプ、在学校の進学状況が、女性の理工系分野

⁵ 理学部収容力は、大学所在県の理学部入学者数を、当該地域の１８歳人口で除したものである。なお、分子の入学者数は学部定員を代替するものとして扱っており、地域における理学部の供給量を示す指標となる。

への進路選択に影響を与える要因として挙げられた。

意欲・関心・態度に関連する指標では、理工系志望者は、中学生の頃に数学や理科が好きだった割合が高く、理数系科目の成績が良い傾向がみられる。進路希望の理由でも、理工系志望者は「自身の得意科目で判断した」との割合が高く、理数系教科の成績が進路選択に影響を与えていることがうかがえる。また、進路希望の理由として、理系志望者は「将来像が明確であるから」「転職や就職に有利だから」「将来高い収入が得られるから」を挙げる割合や、理系のイメージとして「理系科目を学ぶと、進学や就職、資格取得に役立つ」と捉えている傾向が強く、理科学習に対する道具的動機付け（理科の学習が将来の職業に役立つという信念）が高いことが特徴的であった。

さらに、理工系志望者は保護者（母親・父親）も理工系を専攻していた割合が高く、生徒の進路について、保護者が理系進学を望んでいると認知している割合が高くなっていた。理工系学部出身の大人が身近にすることで、理工系の職業イメージが湧きやすくなったり、理工系への進学を勧められる機会が増えたりすることが、理系に対する前向きなイメージにつながっている可能性が考えられる。

そのほか理系的な経験として、大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験、自身での工作や天体観測、プログラミング等、理工系に関連する活動経験が多い傾向にあり、こうした日常的な体験が、理工系への興味を深めるきっかけとなっていることが考えられる。ただし、全体としてみれば、理工系志望者であっても工作や天体観測、プログラミング等の体験がない者も過半数にのぼり、そうした経験が理工系を志望する前提となっているわけではない点には留意が必要である。

なお、女性教員に理数系科目を教わった経験については、理工系志望者とそれ以外で明確な違いはみられず、理工系志望の女性において女性教員に理系科目を教わった経験を多く有するという調査結果とはならなかった。ただし、本調査では中学・高校で女性教員に教わった経験について聴取したところ、男女で教わった経験に大きな違いがみられ、同性の教員に教わったことのほうがより記憶に残り、回答に影響を与えている様子もうかがわれた。そうした点も含めて、今後、より丁寧な検証が行われることが望まれる。

（３）理工系分野への女性の進学に関する地域性についての分析

最後に、上記（１）（２）に挙げられた要因と「地域性」との関係について整理する。

「地域性」に関しては様々な捉え方ができるが、女性の大学進学に対して、まず、地域における大学の設置状況（＝地元での進学機会）や、保護者の学歴・所得水準といった地域の社会経済状況が大きな影響を与えていることが確認された。居住地域の人口規模が大きくなるほど、保護者が大卒以上である割合や所得水準が高い傾向にあるなど、保護者の学歴や所得水準は人口規模とも関連がみられ、都市部ほど大学進学率が高い傾向にあった。関連して、人口５万人未満の地域では、進路選択にあたって生徒が「経済的なこと（教育費がかからないこと、奨学金が受けられることなど）」を考慮する割合や、保護者が「専門学校に進学すること」を希望していると認知している割合が他と比べて高く、進学費用がかかる４年制大学を避けて専門学校等の他の進学先や、就職等を選択していることが考えられる。

生徒のジェンダー意識については、「夫は外で働き、妻は家庭」といった固定的性別役割分担意

識は、「50 万人以上」でやや弱い傾向がみられるが、必ずしも人口規模が小さいほど固定的役割分担意識が強まるという傾向にはなっていない。また、女性と男性では異なる回答傾向がみられることから、都市部・地方部により一律の傾向を仮定することについては、慎重に検討する必要があるといえる。

次に、女性の理工系分野への進路選択についても「地域性」の影響をみると、大学進学率と同様、地域における理学部の設置状況（＝地元での進学機会）や、保護者の学歴といった地域の社会経済状況が進路選択に影響を与えていることが確認された。

一方で、女性の理工系分野への進路選択に影響を与える要因のうち、教科・科目の好き嫌いや、成績、理系のイメージ等について、人口規模による大きな差はみられなかった。これらについては、女性の中での地域性の違いという観点でみると、地域によって異なる進路の選択に与えている影響は小さいと考えられる。

このように、理数系教科に対する関心に地域差がないにも関わらず、進学には地域差がみられている。女性の中で人口規模による差がみられるものとしては、理系的経験が挙げられる。具体的には、幼少期の科学館・博物館体験や、大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験は、人口規模が「5 万人未満」の地域では経験したことがある割合が低くなっていた。前者については科学館・博物館の立地やアクセスの利便性等が関係しているものと考えられる。後者については大学等の設置状況とも関連があると考えられ、地方部では都市部と比べてこうしたイベントの開催回数が少なく、参加機会が少ないことによるものと考えられる。

2-3. 今後のフォーカス・エリアについて

「2-2. 調査の結果概要」を踏まえ、本節では、今後の事業のフォーカス・エリア及び求められる取組について提言を行う。

女性の理工系分野への進路選択における地域性についての分析結果からは、地域差は、人口規模による差、及び居住地域別（「北海道・東北」「南関東」といった地域ブロック）による差が確認された。

特に、人口規模別にみると「5万人未満」の地域において、大学や理学部等の設置が他の地域に比べて少なく、保護者の学歴・所得水準等の進路選択に影響を与える各種指標が低い水準にあることが指摘できる。また、大学や自治体が主催するイベントをはじめとする理系的経験についても、「5万人未満」ではそれ以外の地域に比べて参加経験が少ないという結果がみられており、「5万人以上」に比べて、相対的に課題が大きい地域といえる。このように地域差に着目した場合、「5万人未満」の特徴として、主に以下の点が挙げられる。

- 進路に関して、近隣に大学等の高等教育機関が少なく選択肢が狭い
- 地域的に、理系的経験に関する資源が少ない（イベント等の開催頻度が低い、イベント等へのアクセスが悪い、等）
- 家庭内に大学に関する有形無形の資源が少ない（親世代における大卒者の比率が低い等）

そこで、本報告書では女性の理工系分野への進路選択を促進するにあたり、今後の事業のフォーカス・エリアとして「5万人未満」を対象とすることを提案する。そのうえで、重点的な取組が求められる分野として、「高等教育機関へのアクセスの改善（情報提供等を通じた、理工系分野への進学・職業イメージの向上）」、「幼少期からの体験やイベント等を通じた理工系分野への興味を深める機会の創出」の大きく2点を提案する。

■高等教育機関へのアクセスの改善（情報提供等を通じた、理工系分野への進学・職業イメージの向上）

先述したように、「5万人未満」の市町村においては、人口5万人以上の市町村に比べて、4年制大学等の高等教育機関が立地していないことが多く、各種教育機関へアクセスがしづらいことが、女性の理工系分野への進路選択を阻害している可能性が考えられる。大学進学の地域間格差に関する先行研究においても、地域における大学収容力の違いは、進学前に個人の達成動機を刺激することと進学時において機会を提供することの両側面を通して、個人の学歴達成に影響を及ぼしていると指摘されている⁶。

ただし、大学等の高等教育機関に対するアクセス改善への具体的な取組として、「5万人未満」の市町村に理工系の学部を有する大学を増設するということは現実的ではない。むしろ、既存の教育機関へのアクセスをいかに高めるかという点が重要であるといえる。

その際には地理的な問題だけではなく、生徒の進学意欲を高めるという観点から情報提供に関するアプローチが有効であると考えられる。「5万人未満」の市町村では、近隣に理工系の学部を

⁶ 佐々木（2006）「教育機会の地域間格差—高度成長期以降の趨勢に関する基礎的検討—」『教育社会学研究』78, pp.303-320

有する高等教育機関がないことから中学生・高校生にとってなじみがなく、理工系の学部で学ぶことについてのイメージを持ちにくいことが考えられる。そこで、理工系の学部で学んだり研究したりする内容の具体的なイメージや、卒業後の理工系分野での就職に関する情報提供を、中学生や高校生に対して積極的に行うことが方策として考えられる。その際には、教員や保護者、地域（自治体）、塾等、様々なルート・媒体を通じて働きかけが行われるよう工夫が求められる。なお、理工系の進路選択に関するイベント等に関しては、次の項目において言及する。

これらの施策は、女性の理工系進学を推進するために全国的に取組が求められるものではあるが、「5万人未満」では地域に大学が所在することで進学意欲が高まるといった効果が期待しにくいことや、都市部に設置されている理工系の大学に関する情報の入手が難しいといった課題が大きいと考えられるため、とりわけ「5万人未満」の市町村において、より重点的に取組を行っていく必要があるといえる。

さらに、高等教育機関における多様な入学者の確保という観点から、文部科学省「令和7年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」（令和3年）⁷においては、「家庭環境、居住地域、国籍、性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者（例えば、理工系分野における女子等）のような、多様な入学者の選抜を工夫することが望ましい」⁸と記載されており、例えば家庭環境や居住地域により進学しにくい状況にある生徒や、理工系分野への入学を希望する女性等を対象として、入学者の確保や入学後のサポートを行うことが予定されている。こうした取組も、女性の進学における地域差を解消する取組として有効といえる。

■幼少期からの体験やイベント等を通じた、理工系分野への興味を深める機会の創出

二点目として、本調査の結果からは「5万人未満」において、幼少期の科学館・博物館体験や、大学や自治体などが主催するイベントへの参加機会が少なく、理科に対する興味を深める機会が不足していることがうかがえた。科学館・博物館体験については、「50万人以上」で経験がある割合がやや高い傾向にあるほか、大学や自治体などが主催する理科実験教室や工作教室、理工系進学に関するイベント・シンポジウム等については、5万人以上では規模による参加経験の差はみられない。「5万人未満」の市町村では、イベントの開催頻度の低さやイベントへのアクセスが悪いこと等により、参加機会が少なくなっている可能性が考えられる。

そこで、地方部においてこうした理系的経験を増やす方策として、出前実験教室やオンライン教室が有効と考えられる。企画する大学や自治体などにおいては、5万人未満の市町村の児童・生徒が参加しやすいような工夫を講じるとともに、参加者の性別が偏らないためにも、児童・生徒及びイベント登壇者の性別統計収集を必須とすることが望まれる。

オンライン教室については、実験等は実際に体験することが重要であるため会場で参加するほうが望ましいといえるが、内容によってはオンライン参加でも意欲や関心を高める効果があると考えられる。これまで「5万人未満」の市町村では、地域に大学等が少なくイベントの開催が少

⁷ 文部科学省「令和7年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」

https://www.mext.go.jp/content/20210729-mxt_daigakuc02-000005144_3.pdf（令和4年3月15日確認）

⁸ 各大学の判断により、入学者の多様性を確保する観点から、入学定員の一部について、「専門学科・総合学科卒業生」、「帰国生徒、社会人」、「家庭環境、居住地域、国籍、性別等の要因により進学機会の確保に困難があると認められる者その他各大学において入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者（例えば、理工系分野における女子等）」のような、多様な入学者の選抜を工夫することが望ましいことを追加する。

ないことに加え、都市部で開催されるイベントへのアクセスが悪いことも参加にあたっての障壁であったと考えられるため、オンラインの活用も一案と考えられる。ただし、必ずしも小中学校等に充実した Wi-Fi 環境が整っているわけではないため、タブレット端末及びインターネット回線等のインフラ整備は必須である。

さらに、行政が協力して公民館等の地域の拠点でパブリックビューイング形式の講座を開催するなど、市町村の協力体制の下でオンラインイベントを開催することも有効であろう。Wi-Fi 環境が整備された会場で開催ができれば、前述した学校等におけるインフラ面の課題も克服することができる。

このほか、地理的なアクセスの改善という点では、中学校や高校、町村等が保有しているスクールバスを活用し、都市部で開催されるイベントへの参加を促すことも方策の一つとして挙げられる。

こうした取組を通じて、「5万人未満」の市町村で、幼少期を含めて科学館・博物館や実験教室等の科学にふれる機会を増やすことや、大学や自治体が主催するイベントに参加できる機会を増やしていくことが、大学等で理工系分野を学ぶ魅力を女性に伝える一助となると考えられる。

以上、女性の理工系分野への進路選択の促進に向けて、今後の重点的な取組が求められる分野・地域について提言を行った。本調査の結果を踏まえて、今後、効果的な取組が一層推進されることを期待したい。

第3章 統計に基づく集計・分析結果

本章では、文部科学省「学校基本調査」の二次分析により、都道府県別にみた女性の理工系分野への進学状況を把握するとともに、進学状況の地域差について検討を行うこととする。

ここで、理工系分野への進学状況とは、4年制大学入学者数のうち理学部または工学部への入学者に着目するものであるが、4年制大学進学率自体に男女差が存在することはよく知られている。さらに、高校卒業後の進路には4年制大学のほか、短期大学（以下、「短大」という。）や専修学校の専門課程（以下、「専門学校」という。）等の選択肢もある。こうした教育機関等への進学状況について把握するため、以下ではまず、「学校基本調査」に基づき、高等教育機関等への進学に関する地域別の特徴について整理を行った。

続いて、4年制大学や理工系分野への女性の進路選択における地域差について、どのような背景があるのかを検討するため、国の基幹統計等に基づいて地域における大学や理工学部を設置状況、地域の社会経済状況、産業特性等との関連性について分析を行った。

なお、学校基本調査は都道府県別の集計となるため、本章における「地域」別の分析は、主に都道府県単位の差異に着目して実施することとする。

3-1. 都道府県別にみた高等教育機関等への進学に関する特徴

（1）都道府県別の進学状況

図表 5～図表 7に、各都道府県における4年制大学進学率、短期大学進学率、専門学校進学率を男女別に示した。各々の全国数値をみると4年制大学進学率は54.9%（女性51.7%、男性58.1%）、短期大学進学率は4.0%（女性7.2%、男性0.9%）、専門学校進学率は17.8%（女性21.3%、男性14.3%）であり、4年制大学は男性のほうが女性よりも進学率が高く、短期大学及び専門学校は女性のほうがいずれも進学率が高い傾向にある。

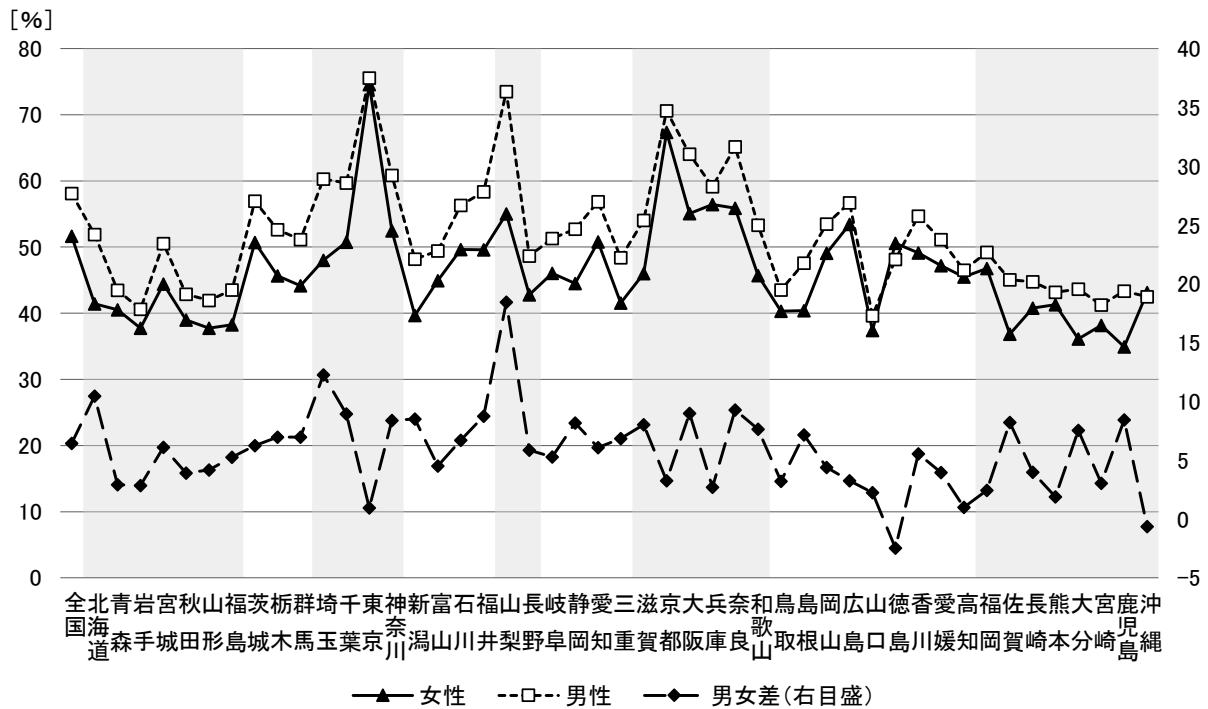
また、女性の進学率の地域差について、それぞれの教育機関への進学率が高い都道府県をみると、4年制大学では、東京都（74.6%）、京都府（67.3%）、兵庫県（56.4%）、短期大学では、鹿児島県（13.5%）、大分県（12.8%）、長野県（12.1%）、専門学校では、新潟県（33.9%）、北海道（29.3%）、沖縄県（28.3%）などが上位となっている。

4年制大学進学率の男女差をみると、徳島県（女性：50.6%、男性：48.1%）、沖縄県（女性：43.1%、男性：42.5%）を除く全ての都道府県で男性が女性を上回っている。中でも、山梨県（女性：55.0%、男性：73.5%）、埼玉県（女性：48.0%、男性：60.3%）、北海道（女性：41.4%、男性：51.9%）では男女差が10ポイント以上開いており、他の都府県に比べて進学率の差が大きいことが分かる。

他方、短期大学と専門学校については、いずれの都道府県でも女性の進学率が男性の進学率を上回っている。特に短期大学は、全都道府県で男性の進学率が3%未満となっており、女性の進学率が高い都道府県で男女差が開いている傾向にある。

このように、高等教育機関等への進学状況には男女間格差が存在するだけでなく、女性のみに着目してみても、各教育機関への進学は地域により異なる様相を呈していることが分かる。

図表 5 男女別 4 年制大学進学率（都道府県別・令和 3 年度）



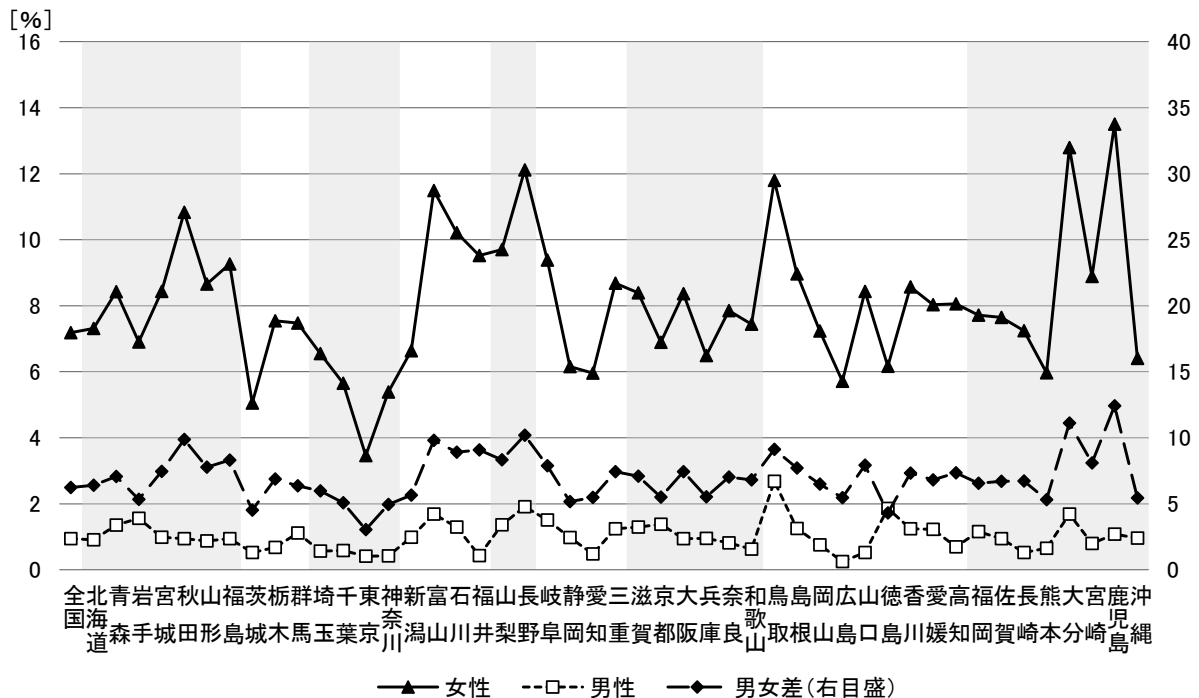
出典) 文部科学省 (2021) 「令和 3 年度学校基本調査」

注 1) 4 年制大学進学率は、高校所在地県における 18 歳人口 (3 年前の中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者) に占める大学 (学部) 進学者数の割合 (過年度卒業生等を含む) を示す。

注 2) 男女差 = 男性の 4 年制大学進学率 - 女性の 4 年制大学進学率で算出。

注 3) 都道府県別の数値は、図表 9 参照のこと。

図表 6 男女別短期大学進学率（都道府県別・令和 3 年度）



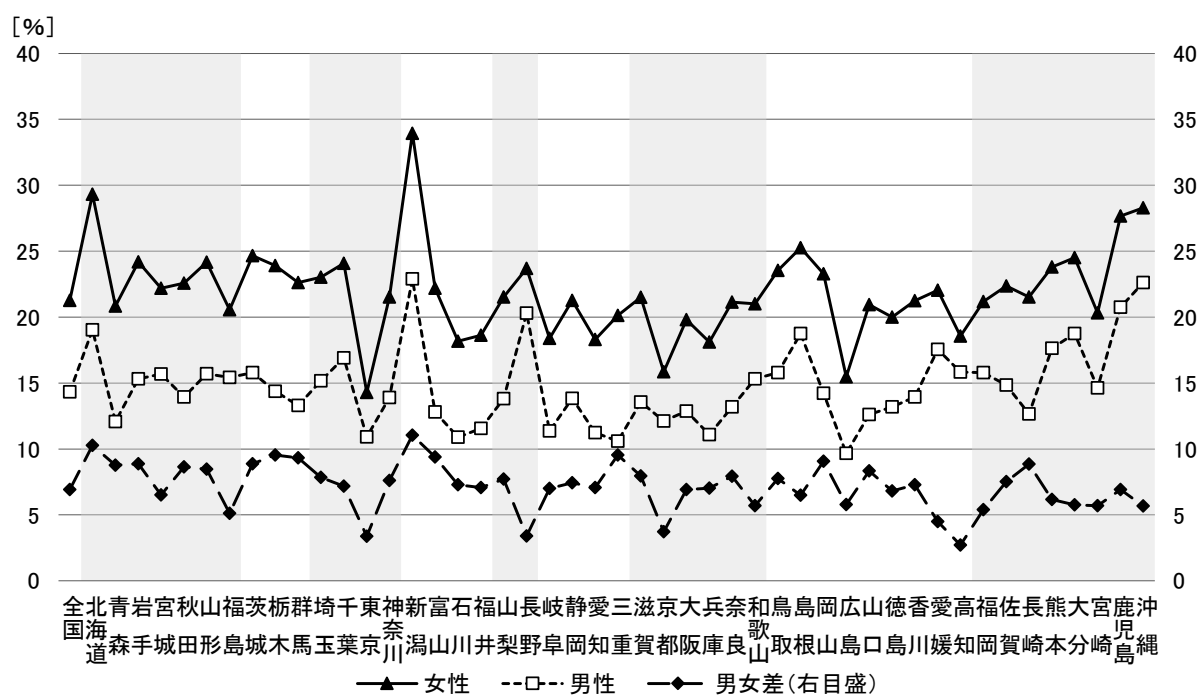
出典) 文部科学省 (2021) 「令和 3 年度学校基本調査」

注 1) 短期大学進学率は、高校所在地県における 18 歳人口 (3 年前の中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者) に占める短期大学進学者数の割合 (過年度卒業生等を含む) を示す。

注 2) 男女差 = 女性の短期大学進学率 - 男性の短期大学進学率で算出。

注 3) 都道府県別の数値は、図表 9 参照のこと。

図表 7 男女別専門学校進学率（都道府県別・令和3年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和3年度学校基本調査」

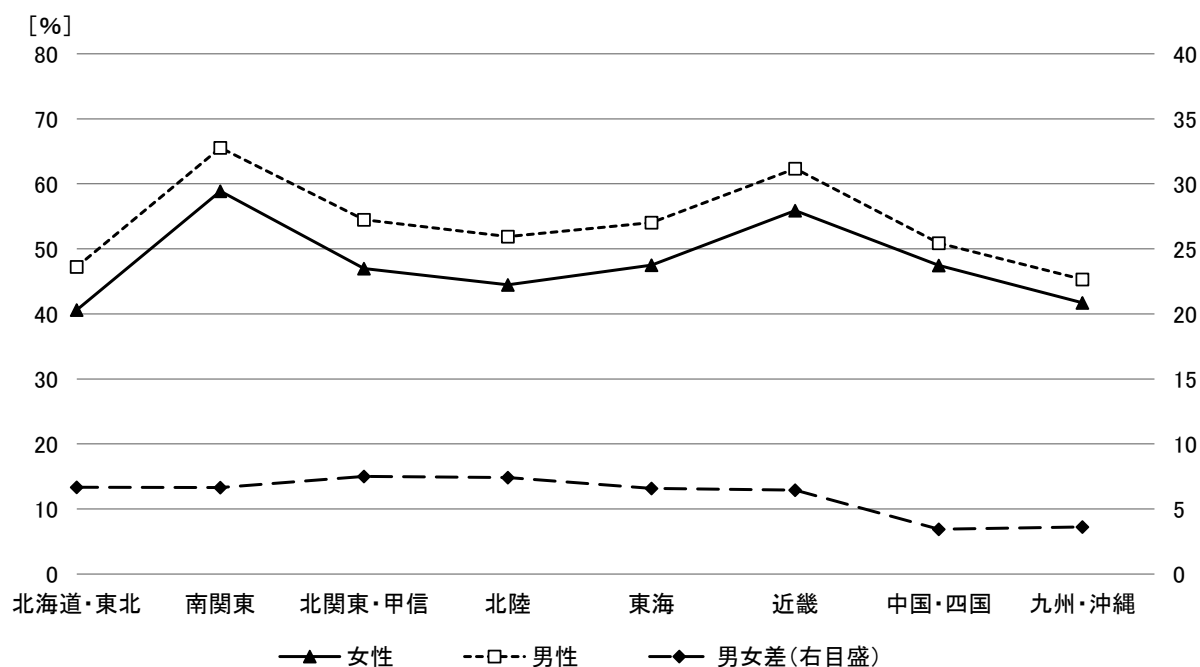
注1) 専門学校進学率は、高校所在地県における高等学校 (全日制・定時制・通信制) 卒業者のうち、直ちに専修学校 (専門課程) へ進学した者の割合を示す。

注2) 男女差 = 女性の専門学校進学率 - 男性の専門学校進学率で算出。

注3) 都道府県別の数値は、図表 9 参照のこと。

都道府県別データをもとに、全国8地域ブロック別に4年制大学進学率をみたものが、図表8、図表10（数値表）である。図表8をみると、「南関東」「近畿」など大都市圏において、男女ともに進学率が高い傾向がみられる。また、男女差についてみると、「中国・四国」「九州・沖縄」では、他の地域ブロックに比べて男女の差がやや小さい傾向にある。

図表 8 男女別4年制大学進学率（地域ブロック別・令和3年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和3年度学校基本調査」

注1) 地域ブロックは、「北海道・東北」(北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県)、「南関東」(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)、「北関東・甲信」(茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県)、「北陸」(新潟県、富山県、石川県、福井県)、「東海」(岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)、「近畿」(滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)、「中国・四国」(鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県)、「九州・沖縄」(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県)としている。以下同様。

注2) 4年制大学進学率は、高校所在地県における18歳人口(3年前の中学校・義務教育学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者)に占める大学(学部)進学者数の割合(過年度卒業生等を含む)を示す。

注3) 男女差=男性の4年制大学進学率-女性の4年制大学進学率で算出。

注4) 地域ブロック別の数値は、図表10を参照のこと。

図表 9 男女別 4 年制大学進学率、短期大学進学率、専門学校進学率（都道府県別・令和 3 年度）

[%]

	4 年制大学進学率			短期大学進学率			専門学校（専門課程）進学率		
	全体	女性	男性	全体	女性	男性	全体	女性	男性
全国	54.9	51.7	58.1	4.0	7.2	0.9	17.8	21.3	14.3
北海道	46.7	41.4	51.9	4.1	7.3	0.9	24.1	29.3	19.0
青 森	42.1	40.5	43.5	4.8	8.4	1.4	16.3	20.8	12.1
岩 手	39.2	37.7	40.6	4.2	6.9	1.6	19.7	24.2	15.3
宮 城	47.5	44.4	50.5	4.6	8.4	1.0	19.0	22.2	15.7
秋 田	40.9	39.0	42.9	5.9	10.8	0.9	18.3	22.6	13.9
山 形	39.9	37.8	41.9	4.7	8.7	0.9	19.9	24.2	15.7
福 島	40.9	38.3	43.5	5.0	9.3	0.9	17.9	20.5	15.4
茨 城	53.9	50.7	56.9	2.7	5.1	0.5	20.2	24.7	15.8
栃 木	49.2	45.6	52.6	4.0	7.5	0.7	19.0	23.9	14.4
群 馬	47.7	44.2	51.1	4.2	7.5	1.1	17.9	22.6	13.3
埼 玉	54.3	48.0	60.3	3.5	6.5	0.6	18.9	23.0	15.2
千 葉	55.3	50.7	59.7	3.1	5.7	0.6	20.4	24.1	16.9
東 京	75.1	74.6	75.5	1.9	3.5	0.4	12.6	14.3	10.9
神奈川	56.7	52.5	60.8	2.9	5.4	0.4	17.7	21.5	13.9
新 潟	43.9	39.6	48.2	3.8	6.6	1.0	28.4	33.9	22.9
富 山	47.2	44.9	49.4	6.4	11.5	1.7	17.4	22.2	12.8
石 川	53.0	49.6	56.3	5.7	10.2	1.3	14.5	18.2	10.9
福 井	54.1	49.6	58.3	4.8	9.5	0.4	15.0	18.6	11.6
山 梨	64.6	55.0	73.5	5.4	9.7	1.4	17.3	21.5	13.8
長 野	45.8	42.8	48.7	6.9	12.1	1.9	22.0	23.7	20.3
岐 阜	48.7	46.0	51.3	5.4	9.4	1.5	14.8	18.4	11.4
静 岡	48.8	44.5	52.7	3.5	6.2	1.0	17.4	21.3	13.8
愛 知	53.9	50.8	56.9	3.1	6.0	0.5	14.7	18.3	11.2
三 重	45.0	41.6	48.4	4.9	8.7	1.2	15.4	20.1	10.6
滋 賀	50.1	46.0	54.0	4.7	8.4	1.3	17.4	21.5	13.6
京 都	69.0	67.3	70.6	4.1	6.9	1.4	14.0	15.9	12.1
大 阪	59.7	55.1	64.0	4.6	8.4	0.9	16.3	19.8	12.9
兵 庫	57.8	56.4	59.1	3.6	6.5	1.0	14.6	18.1	11.1
奈 良	60.7	55.9	65.2	4.2	7.9	0.8	17.3	21.1	13.2
和歌山	49.6	45.7	53.3	4.0	7.4	0.6	18.1	21.0	15.3
鳥 取	41.9	40.3	43.5	7.2	11.8	2.7	19.7	23.5	15.8
島 根	44.1	40.4	47.6	5.0	9.0	1.3	21.9	25.3	18.8
岡 山	51.3	49.1	53.5	4.0	7.2	0.8	18.8	23.3	14.2
広 島	55.1	53.4	56.7	2.9	5.7	0.3	12.5	15.5	9.7
山 口	38.5	37.4	39.6	4.5	8.4	0.5	16.8	20.9	12.6
徳 島	49.3	50.6	48.1	4.0	6.2	1.9	16.6	20.0	13.2
香 川	52.0	49.1	54.7	4.8	8.6	1.2	17.5	21.2	14.0
愛 媛	49.2	47.2	51.1	4.5	8.0	1.2	19.7	22.0	17.5
高 知	46.0	45.5	46.5	4.3	8.1	0.7	17.2	18.6	15.8
福 岡	48.0	46.8	49.2	4.4	7.7	1.2	18.5	21.2	15.8
佐 賀	41.1	36.9	45.1	4.2	7.6	0.9	18.4	22.4	14.8
長 崎	42.8	40.8	44.8	3.8	7.2	0.5	17.0	21.5	12.7
熊 本	42.3	41.3	43.2	3.2	6.0	0.7	20.7	23.8	17.6
大 分	39.9	36.1	43.6	7.1	12.8	1.7	21.6	24.5	18.7
宮 崎	39.7	38.2	41.2	4.7	8.9	0.8	17.4	20.3	14.6
鹿児島	39.2	34.9	43.3	7.2	13.5	1.1	24.2	27.7	20.7
沖 縄	42.8	43.1	42.5	3.6	6.4	1.0	25.5	28.3	22.6

出典）文部科学省（2021）「令和 3 年度学校基本調査」

図表 10 男女別 4 年制大学進学率、短期大学進学率、専門学校進学率
(地域ブロック別・令和 3 年度)

[%]

	4 年制大学進学率			短期大学進学率			専門学校(専門課程)進学率		
	全体	女性	男性	全体	女性	男性	全体	女性	男性
全国	54.9	51.7	58.1	4.0	7.2	0.9	17.8	21.3	14.3
北海道・東北	44.0	40.6	47.3	4.5	8.2	1.0	20.6	24.9	16.5
南関東	62.3	58.9	65.5	2.7	5.0	0.5	16.6	19.6	13.6
北関東・甲信	50.8	47.0	54.5	4.4	8.0	1.1	19.7	23.7	15.8
北陸	48.2	44.5	51.9	4.9	8.9	1.1	20.8	25.5	16.2
東海	50.9	47.5	54.1	3.7	6.8	0.8	15.5	19.3	11.8
近畿	59.2	55.9	62.3	4.2	7.6	1.0	15.8	19.1	12.5
中国・四国	49.2	47.4	50.9	4.1	7.5	0.9	17.0	20.4	13.7
九州・沖縄	43.5	41.7	45.3	4.6	8.4	1.0	20.6	23.7	17.5

出典) 文部科学省 (2021) 「令和 3 年度学校基本調査」

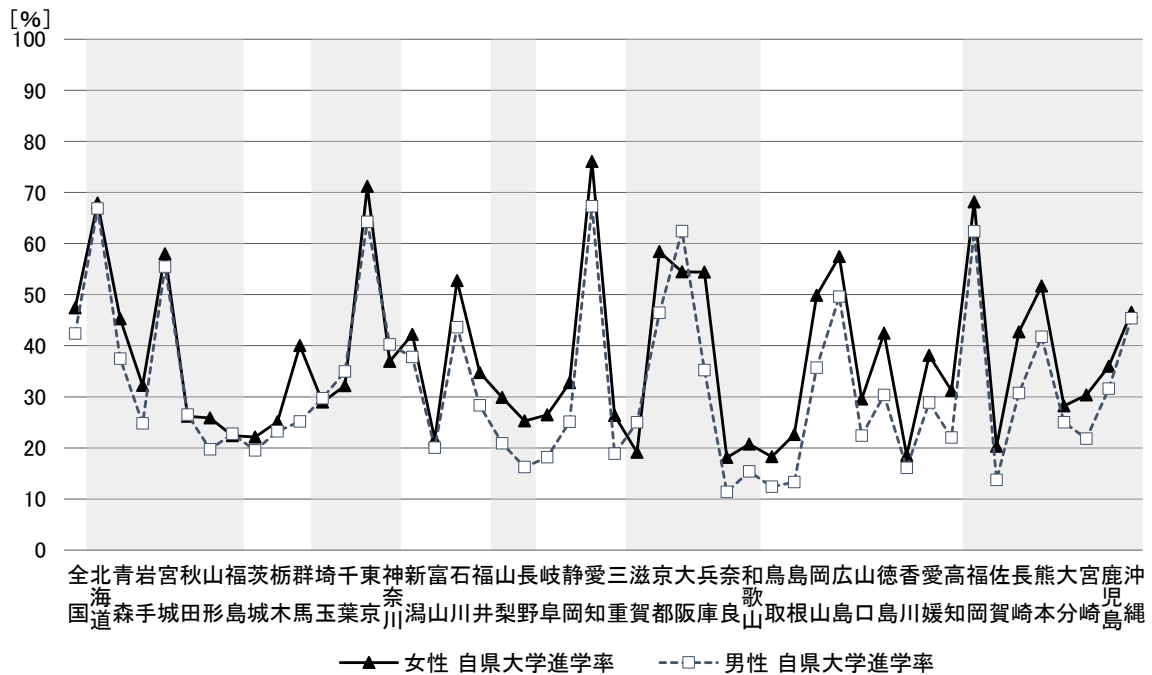
(2) 地元への進学状況

地元への大学進学状況を把握するため、図表 11、図表 12 に男女別自県大学と同地域ブロック内大学への進学率をそれぞれ示した。先述のとおり、大学進学率全体では男性の進学率が女性よりも高い傾向がみられたが、自県または同地域ブロック内に所在する大学への進学率については、ほとんどの都道府県において女性のほうが男性よりも高くなっている。県外大学への進学に関する要因を分析した先行研究⁹では、入学者に占める男子学生比率が高いほど県外大学進学率が高くなることが指摘されているが、令和 3 年度データでも同様に、男性に比べて女性の地元進学傾向が強いことがうかがえる。

地域による差異に着目すると、女性の同地域ブロック内大学への進学率は「南関東」及び「近畿」では概ね 8～9 割と高い一方、「北関東・甲信」では概ね 3～4 割と低い傾向にあり、ブロックによって大きな差がみられる。

⁹ 田村一軌 (2017) 「県外大学進学率のパネル分析」『AGI Working Paper Series』2, pp.1-23

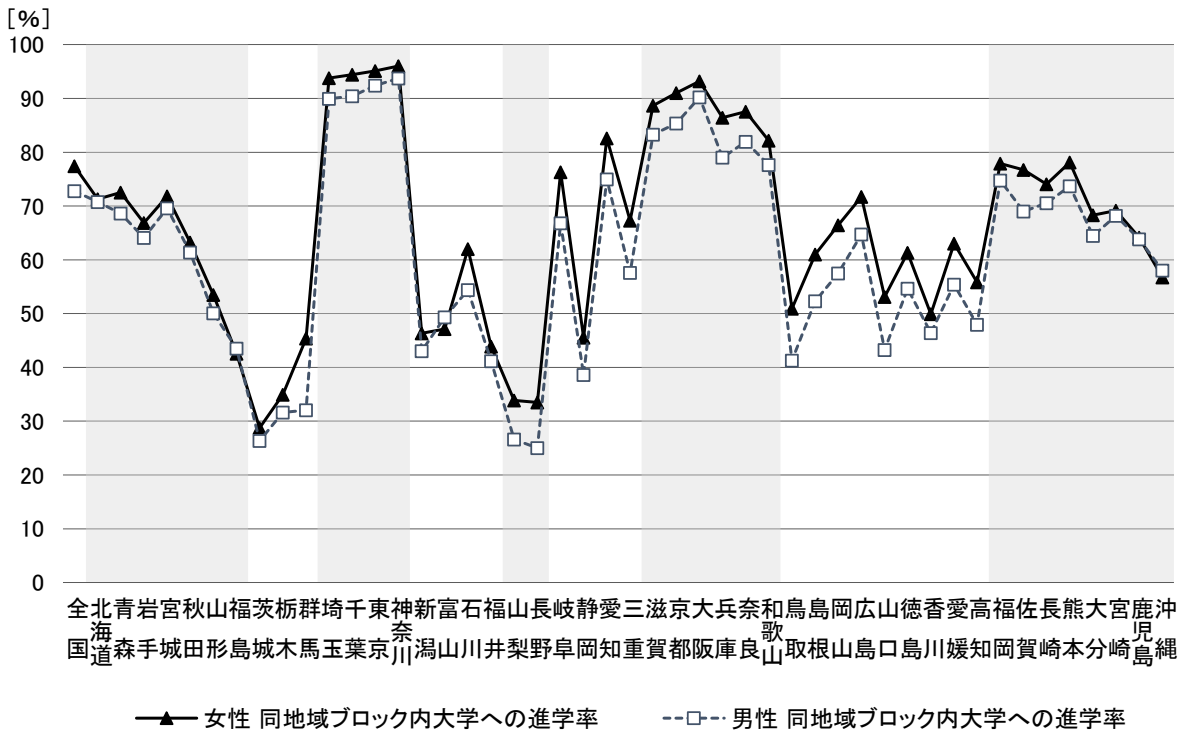
図表 11 男女別自県大学進学率（都道府県別・令和3年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和3年度学校基本調査」

注) 自県大学進学率は、高校所在地県における大学入学者のうち、同県の大学への入学者の割合を示す。

図表 12 男女別同地域ブロック内大学進学率（都道府県別・令和3年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和3年度学校基本調査」

注) 同地域ブロック内大学進学率は、高校所在地県における大学入学者のうち、当該県と同じ地域ブロックに所在する大学への入学者の割合を示す。なお、地域ブロックの設定については、図表8の注釈を参照。

3-2. 理工系分野への進学状況

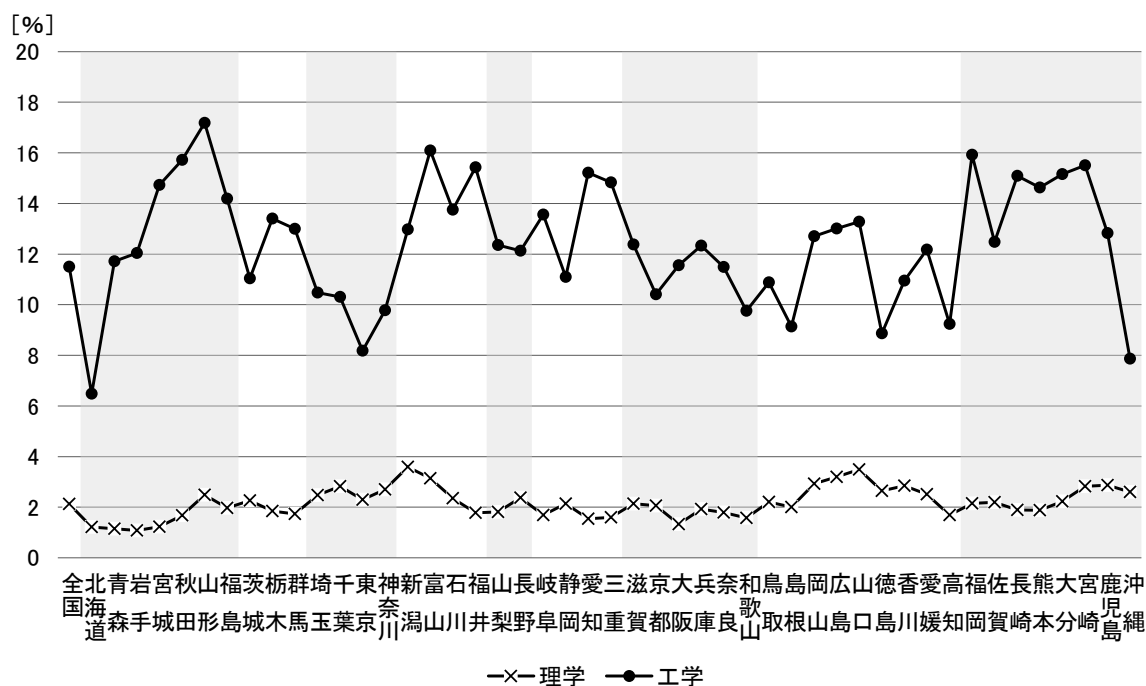
本節では大学における理工系分野への進学状況について、地域別の特徴を把握する。使用するデータは、文部科学省「学校基本調査」の都道府県別にみた学部別男女別入学者数である。本データは一般に公表されていないことから、統計調査の二次利用を申請し、データ分析を行った。

図表 13 に、各都道府県における大学入学者全体に占める理工系分野入学者の割合をグラフで示すとともに、図表 14 には数値表を掲載している。

全国では、理学分野入学者の割合は 2.1%、工学分野入学者の割合は 11.5%であり、工学分野の割合が比較的高くなっている。

都道府県別にみると、理学分野入学者の割合は、新潟県(3.6%)、山口県(3.5%)、広島県(3.2%)などが上位で、岩手県(1.1%)、青森県(1.1%)、北海道(1.2%)、宮城県(1.2%)などで低くなっている。工学分野入学者の割合は、山形県(17.2%)、富山県(16.1%)、福岡県(15.9%)などで高く、北海道(6.5%)、沖縄県(7.9%)、東京都(8.2%)などで低くなっている。

図表 13 大学入学者に占める理工系分野入学者の割合（都道府県別・男女計・令和3年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和3年度学校基本調査」

注1) 専攻分野は「令和3年度 大学学部番号」の分類に基づいて算出している。このため、「全国」の数値は文部科学省が公表している「関係学科別大学入学状況」(学科別の入学者数により算出)より算出される理工系分野入学者の割合とは数値が異なる。

注2) 大学入学者に占める理工系分野入学者の割合は、高校所在地県における大学入学者のうち、理学分野と工学分野に分類される学部への入学者の割合を示す。

図表 14 大学入学者に占める理工系分野入学者の割合（都道府県別・令和3年度）

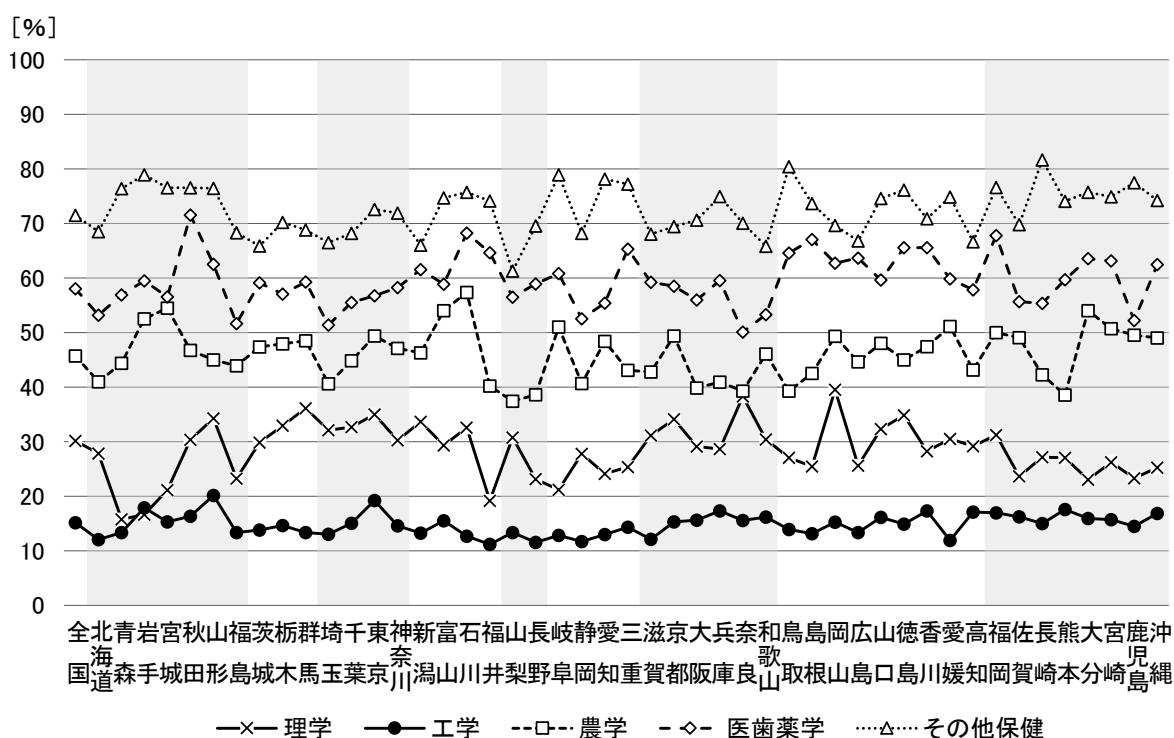
	4年制大学入学者に占める 理学分野入学者割合			4年制大学入学者に占める 工学分野入学者割合		
	全体	女性	男性	全体	女性	男性
全 国	2.1	1.4	2.7	11.5	3.8	18.0
北海道	1.2	0.8	1.5	6.5	1.8	10.1
青 森	1.1	0.4	1.8	11.7	3.4	18.9
岩 手	1.1	0.4	1.7	12.0	4.5	18.9
宮 城	1.2	0.6	1.8	14.7	4.9	22.9
秋 田	1.7	1.1	2.2	15.7	5.4	25.0
山 形	2.5	1.8	3.0	17.2	7.5	25.5
福 島	2.0	1.0	2.8	14.2	4.1	22.7
茨 城	2.3	1.5	2.9	11.0	3.3	17.6
栃 木	1.8	1.3	2.3	13.4	4.3	20.9
群 馬	1.7	1.4	2.0	13.0	3.8	20.6
埼 玉	2.5	1.9	2.9	10.5	3.2	15.9
千 葉	2.8	2.1	3.4	10.3	3.5	15.9
東 京	2.3	1.6	2.9	8.2	3.2	12.9
神奈川	2.7	1.8	3.4	9.8	3.2	15.3
新 潟	3.6	2.7	4.3	13.0	3.8	20.5
富 山	3.1	2.0	4.1	16.1	5.4	25.2
石 川	2.4	1.7	2.9	13.8	3.8	22.2
福 井	1.8	0.8	2.6	15.4	3.9	24.6
山 梨	1.8	1.4	2.1	12.4	4.0	18.1
長 野	2.4	1.2	3.4	12.1	3.1	19.7
岐 阜	1.7	0.8	2.5	13.6	3.8	22.0
静 岡	2.1	1.3	2.7	11.1	3.0	17.5
愛 知	1.5	0.8	2.2	15.2	4.3	24.4
三 重	1.6	0.9	2.2	14.8	4.7	23.2
滋 賀	2.1	1.5	2.6	12.4	3.4	19.5
京 都	2.1	1.5	2.6	10.4	3.3	16.9
大 阪	1.3	0.9	1.7	11.6	4.0	17.7
兵 庫	1.9	1.2	2.6	12.3	4.5	19.4
奈 良	1.8	1.6	2.0	11.5	4.1	17.4
和歌山	1.6	1.1	2.0	9.8	3.5	15.0
鳥 取	2.2	1.2	3.1	10.9	3.2	18.0
島 根	2.0	1.1	2.7	9.1	2.7	14.3
岡 山	2.9	2.4	3.4	12.7	4.1	20.5
広 島	3.2	1.7	4.5	13.0	3.7	21.3
山 口	3.5	2.3	4.6	13.3	4.4	21.5
徳 島	2.6	1.8	3.5	8.9	2.6	15.3
香 川	2.9	1.8	3.8	11.0	4.2	16.7
愛 媛	2.5	1.7	3.2	12.2	3.1	20.0
高 知	1.7	1.0	2.3	9.2	3.3	14.9
福 岡	2.1	1.4	2.8	15.9	5.7	25.3
佐 賀	2.2	1.2	3.0	12.5	4.6	18.5
長 崎	1.9	1.1	2.6	15.1	4.9	24.0
熊 本	1.9	1.1	2.6	14.6	5.4	23.0
大 分	2.2	1.2	3.1	15.2	5.4	22.9
宮 崎	2.8	1.6	3.9	15.5	5.2	24.6
鹿児島	2.9	1.5	3.9	12.8	4.3	19.4
沖 縄	2.6	1.4	3.8	7.9	2.8	12.6

出典）文部科学省（2021）「令和3年度学校基本調査」

さらに、各都道府県における分野別入学者に占める女性比率をみたものが図表 15 であり、数値表は図表 16 のとおりである。各々の全国数値をみると、「理学」は 30.2%、「工学」は 15.2% であり、「工学」において特に女性比率が低いことが分かる。またいずれの都道府県でも「その他保健」、「医歯薬学」、「農学」に比べて両者の女性比率は低い。

「理学」「工学」について女性比率が高い都道府県をみると、「理学」では、岡山県（39.6%）、奈良県（38.3%）、群馬県（36.1%）、「工学」では、山形県（20.2%）、東京都（19.3%）、岩手県（17.9%）などが上位となっている。一方、女性比率が低い都道府県をみると、「理学」では、青森県（15.8%）、岩手県（16.7%）、福井県（19.2%）、「工学」では福井県（11.2%）、長野県（11.6%）、静岡県（11.7%）となっている。理学部、工学部と一口に言っても、都道府県によってその女性比率には開きがあることが分かる。

図表 15 分野別入学者に占める女性比率（都道府県別・令和 3 年度）



出典) 文部科学省 (2021) 「令和 3 年度学校基本調査」

注 1) 専攻分野は「令和 3 年度 大学学部番号」の分類に基づいて算出している。このため、「全国」の数値は文部科学省が公表している「関係学科別大学入学状況」(学科別の入学者数により算出) より算出される女性比率とは数値が異なる。なお、「医歯薬学」と「その他保健」については、「令和 3 年度 大学学部番号」の大分類「保健 (M,N,O)」のうち、M01~M10、M16~M18、M48、M61 を「医歯薬学」、その他を「その他保健」として分類している。以下、同様。

注 2) 分野別入学者に占める女性比率は、高校所在地県における各分野への入学者のうち、女性の入学者の割合を示す。

図表 16 分野別入学者に占める女性比率（都道府県別・令和３年度）

[%]

	人文科学 女性比率	社会科学 女性比率	理学 女性比率	工学 女性比率	農学 女性比率	医歯薬学 女性比率	その他保健 女性比率	その他 女性比率
全 国	63.2	35.6	30.2	15.2	45.7	58.1	71.5	54.1
北海道	63.3	33.0	27.8	12.1	41.0	53.2	68.5	43.6
青 森	63.3	36.2	15.8	13.4	44.4	56.9	76.4	50.3
岩 手	56.8	32.3	16.7	17.9	52.6	59.5	78.9	53.7
宮 城	52.9	36.0	21.1	15.3	54.5	56.6	76.6	56.1
秋 田	57.9	34.8	30.4	16.3	46.8	71.5	76.6	56.9
山 形	60.8	34.1	34.3	20.2	45.0	62.6	76.5	57.6
福 島	60.8	37.4	23.2	13.4	43.9	51.7	68.3	56.4
茨 城	65.0	34.4	29.9	13.8	47.4	59.1	65.9	53.2
栃 木	61.2	33.5	32.9	14.7	47.9	57.1	70.2	55.0
群 馬	66.9	36.2	36.1	13.4	48.5	59.3	68.8	51.0
埼 玉	59.4	31.4	32.1	13.1	40.6	51.4	66.5	52.0
千 葉	64.8	33.5	32.7	15.1	44.8	55.5	68.2	53.2
東 京	64.2	40.5	35.0	19.3	49.4	56.8	72.6	55.2
神奈川	61.8	35.8	30.3	14.6	47.2	58.3	71.9	53.4
新 潟	58.1	32.4	33.7	13.3	46.3	61.6	66.1	57.1
富 山	64.9	37.8	29.4	15.5	54.0	58.9	74.7	55.2
石 川	63.0	37.3	32.6	12.7	57.4	68.2	75.7	49.5
福 井	61.4	37.2	19.2	11.2	40.2	64.7	74.1	50.7
山 梨	59.5	30.2	30.8	13.4	37.4	56.5	61.3	50.0
長 野	62.7	36.0	23.2	11.6	38.6	58.9	69.6	53.7
岐 阜	63.4	32.9	21.2	12.8	51.1	60.8	78.9	54.3
静 岡	62.1	32.1	27.8	11.7	40.7	52.6	68.2	52.4
愛 知	61.2	34.6	24.1	13.0	48.4	55.4	78.2	56.3
三 重	58.9	31.6	25.4	14.3	43.1	65.3	77.2	54.2
滋 賀	61.3	35.7	31.2	12.1	42.8	59.3	68.1	52.0
京 都	62.1	40.9	34.1	15.3	49.4	58.5	69.4	56.3
大 阪	61.7	34.3	29.1	15.6	39.9	56.0	70.6	55.8
兵 庫	68.5	34.5	28.7	17.3	40.9	59.5	75.0	57.0
奈 良	60.0	34.9	38.3	15.6	39.3	50.1	70.1	52.8
和歌山	62.7	34.0	30.4	16.2	46.1	53.3	65.8	52.3
鳥 取	67.4	32.4	27.1	13.9	39.3	64.6	80.4	54.9
島 根	61.4	26.8	25.5	13.1	42.5	67.1	73.7	53.1
岡 山	68.5	32.0	39.6	15.3	49.3	62.7	69.7	57.3
広 島	66.9	36.0	25.7	13.4	44.7	63.7	66.8	57.2
山 口	69.2	36.2	32.3	16.2	48.0	59.7	74.6	58.5
徳 島	66.4	38.3	34.9	14.9	45.0	65.6	76.1	58.1
香 川	63.1	33.0	28.3	17.4	47.4	65.6	70.9	58.3
愛 媛	68.2	38.4	30.5	11.9	51.1	59.8	74.9	55.5
高 知	65.3	37.8	29.2	17.1	43.2	57.9	66.7	54.4
福 岡	72.2	35.6	31.3	17.0	50.0	67.8	76.6	58.6
佐 賀	63.0	32.2	23.7	16.2	49.1	55.7	69.8	50.6
長 崎	72.0	33.1	27.2	15.0	42.3	55.4	81.7	55.3
熊 本	73.7	36.4	27.1	17.6	38.6	59.7	74.1	56.9
大 分	64.5	37.6	23.1	16.0	54.1	63.6	75.7	49.5
宮 崎	69.3	36.0	26.3	15.7	50.7	63.2	74.9	56.2
鹿児島	62.6	31.5	23.3	14.5	49.6	52.2	77.5	54.9
沖 縄	61.8	37.2	25.3	16.9	49.0	62.5	74.3	59.1

出典）文部科学省（2021）「令和３年度学校基本調査」

注）「その他」は、「令和３年度 大学学部番号」における「商船（P）」、「教育（S,T,U）」、「芸術（V,W）」、「家政（Q,R）」、「その他（X,Y,Z）」に分類されるものを指す。

3-3. 女性の進学状況に係る地域間格差の分析

前節までにみたように、大学進学率は男性のほうが女性に比べて高く、理工系分野入学者に占める女性比率も半数を大きく下回っており、高等教育機関等への進学及び理工系分野への進路選択には大きな男女差があることが明らかとなった。教育におけるジェンダー差についてはこれまでも繰り返し指摘されているが、大学進学者数という量的な側面、専攻内容という質的な側面のいずれにも依然として課題が存在していることがうかがえる¹⁰。

大学進学率をめぐっては、男女差・地域差の説明を試みる先行研究が多数みられるところであるが¹¹、本調査は、女性の理工系分野への進路選択における地域性をテーマとするため、以降の分析の主眼はあくまでも女性の進路選択に据え、女性においてなぜ都道府県間で違いがみられるのかを分析の対象とする。

以下、本節では、①女性の4年制大学進学率、②理学分野の入学者における女性比率、③工学分野の入学者における女性比率の3つの指標を取り上げ、各種統計調査を元に地域性との関連を分析し、地域間格差の要因について検討を行う。

(1) 分析方法と使用するデータ

①被説明変数

47都道府県において、女性の理工系分野への進路選択にどのような差があるのか、また格差を生じさせるメカニズムがどのような構造によるものかを検討するため、①女性の4年制大学進学率、②理学分野の入学者における女性比率、③工学分野の入学者における女性比率の3つを被説明変数において分析を行う。なお、各都道府県の①女性の4年制大学進学率は前掲図表9、②理学分野の入学者における女性比率、③工学分野の入学者における女性比率は、前掲図表16のとおりである。

②説明変数

大学進学率の地域差を分析した先行研究¹²からは、所得や親世代の学歴、大学の設置状況等が大学進学率の地域間格差に影響していることが指摘されているが、とりわけ女性の大学進学率については、所得水準、職業構成、学歴水準をはじめとする社会経済特性との関連は男性よりも女性において弱く、他方、県内の大学供給量（大学収容力）の効果は、女性のほうが重要であることが指摘されている¹³。

これらを踏まえ、女性の理工系分野への進学の分析に用いる説明変数を図表17に記載した。

¹⁰ 河野ほか編（2018）では、教育におけるジェンダー・ギャップを捉える際、教育の量的な側面（進学者数、在学者数などの人数や就学率・進学率、中退率・卒業率等）と質的な側面（進学可能な教育機関や、中等教育レベルの教科や高等教育レベルの専攻の選択）の両方から検討する必要性について言及している。

¹¹ 大学進学率の都道府県間格差を分析した先行研究として、例えば上山（2011）は、多母集団パス解析の結果より、2006年時点では、男女ともに「大学収容率」という供給側の要因、「所得」という経済的要因、また男子においては「学歴」という要因によって大学進学率の都道府県格差が規定されていると指摘している。

¹² 上山浩次郎（2011）「大学進学率の都道府県間格差の要因構造とその変容—多母集団パス解析による4時点比較—」『教育社会学研究』88, pp.207-227、朴澤泰男（2012）「大学進学率の地域格差の再検討—男子の大学教育投資の都道府県別便益に着目して—」『教育社会学研究』91, pp.51-71等が挙げられる。

¹³ 朴澤泰男（2014）「女子の大学進学率の地域格差—大学教育投資の便益に着目した説明の試み—」『教育学研究』81（1）pp.14-25

まず、理工系進学と大学進学自体の関係性をみるために、女性の4年制大学進学率を変数に設定し、理学分野／工学分野の入学者における女性比率との関係を確認する。

次に、大学進学における地元志向を表す指標として、女性の自県大学進学率と同地域ブロック内大学進学率を用いている。これらの変数は、理工系学部への入学状況との直接的な関連は低いと考えられるが、理工系教育の前提となる大学進学と関連があると予想される。すなわち、女性は男性に比べて地元志向が高いことから、自県大学進学率及び同地域ブロック内大学進学率が高い地域ほど女性の4年制大学進学率も高い可能性がある。

続いて、先述のとおり、女性の大学進学率と地域の大学供給量（大学収容力：大学所在都道府県の入学者数／当該都道府県の18歳人口＝3年前の中学校・義務教育学校卒業者及び中等教育学校前期課程修了者の合計）との関連が指摘されている¹⁴ことから、大学収容力を変数として設定した。また、各都道府県における理工系教育の供給量も同様に女性の理工系進学に影響を与えることが予想されることから、理工学部の供給量を表す変数として、理学部収容力（大学所在都道府県の理学部入学者数／当該都道府県の18歳人口）と、工学部収容力（大学所在都道府県の工学部入学者数／当該都道府県の18歳人口）を変数として設定した。これらの収容力が大きいことは地域の理工学部の定員が多いことを意味しているため、収容力の増大によって自宅から通学できる可能性が高まり、特に女性の理工系分野への進学に影響を与えることが想定される。

また、地域の学歴水準や経済状況を表す変数については、親世代（40～64歳）の女性大卒者率と一人当たり県民所得を用いている。先行研究¹⁵では、母親が理系である場合、その子どもは理系の学部に進学する傾向が強いことが指摘されているほか、母親が子どもの進路選択に大きな影響を与えることが多くの調査研究にて示されている。そこで、母親世代にあたる女性の大学進学率を学歴に関する指標として設定する。また、地域の経済状況については、一人当たり県民所得を指標として設定する。全国的に私立大学の理工学部の授業料及び入学金は、法文経学部比べて高く設定されている（総務省「小売物価統計調査」）ことから、地域の経済状況と理工系分野への進学も関連があることが予想される。

最後に卒業後のキャリアやロールモデルに関する変数として、理工系分野からの就職が多いであろう製造業、建設業、情報通信業の県内総生産に占める割合及び有業者に占める各業種従事者の割合を設定する。また、地域における女性活躍状況を示す指標として、女性有業率（15歳～64歳）、女性の大学等卒業者に占める就職者の割合、女性管理職割合、そして理科教員及び数学教員の女性比率を変数として設定する。先行研究¹⁶では、女性の母親は、資格や免許が取得でき、「将来像が明確」な薬学部や医学部への志向が高いことが指摘されているほか、内閣府（2019）においても、大都市圏以外では女性の資格志向・安定志向が強く、将来の職業やキャリアコース等を見据えた進路選択が行われる傾向があることが明らかになっている。すなわち、理工系分野への進学にあたって卒業後のキャリアイメージを持てるか否か、地域に就職先としての受け皿があるかどうかによっても、理工系分野への進路選択の状況が異なる可能性が考えられる。

¹⁴ 上山浩次郎（2011）「大学進学率の都道府県間格差の要因構造とその変容—多母集団パス解析による時点比較—」『教育社会学研究』88, pp.207-227、朴澤泰男（2015）「大学進学率の地域格差の変化と課題」『大学時報』64（365）pp.70-77 等

¹⁵ 林裕子・河野銀子ほか（2015）『女性の理系進路選択における親の意識の影響に関する調査・分析』（JSPS 科研報告書）

¹⁶ 林裕子・河野銀子ほか（2015）『女性の理系進路選択における親の意識の影響に関する調査・分析』（JSPS 科研報告書）

図表 17 分析に使用する都道府県別データ

分類	分析の対象			関連が想定される 各種指標	データの出典
	女性 大学進学率	理学分野 女性比率	工学分野 女性比率		
大学進学		○	○	女性の4年制大学進学率	文部科学省(R3) 「学校基本調査」
大学進学に おける 地元志向	○			女性の自県大学進学率	
	○			女性の同地域ブロック内 大学進学率	
大学の 供給量	○			大学収容力	
理工学部 の 供給量		○		理学部収容力	
			○	工学部収容力	総務省(H29) 「就業構造基本調査」
学歴、 経済状況	○	○	○	親世代(40歳～64歳)の 女性大卒者率	
	○	○	○	一人当たり県民所得	内閣府(H30) 「県民経済計算」
卒業後の キャリア、 ロールモデル		○	○	県内総生産に占める 製造業の割合	
			○	県内総生産に占める 建設業の割合	
		○	○	県内総生産に占める 情報通信業の割合	
		○	○	有業者に占める製造業に 従事している者の割合	総務省(H29) 「就業構造基本調査」
			○	有業者に占める建設業に 従事している者の割合	
		○	○	有業者に占める情報通信業に 従事している者の割合	
	○	○	○	女性有業率(15歳～64歳)	
	○			女性の大学等卒業者に占める 就職者の割合	文部科学省(R3) 「学校基本調査」
	○			女性管理職割合	総務省(H29) 「就業構造基本調査」
		○	○	理科教員における女性比率	文部科学省(R1) 「学校教員統計調査」
		○	○	数学教員における女性比率	

注1) それぞれの列について、○の付いた指標を分析対象とし、次ページに分析結果を掲載した。

注2) 「理科教員における女性比率」「数学教員における女性比率」については、男女別・担任教科別の教員数の都道府県別データを使用した。本データは一般に公表されていないことから、統計調査の二次利用を申請し、データ分析を行った。

注3) 「県内総生産に占める建設業の割合」「有業者に占める建設業に従事している者の割合」については、工学分野と異なり、理学分野卒業後の進路として直接の関係が薄いと考えられることから、理学分野の入学者における女性比率との分析の対象外としている。

(2) 地域間格差に関する分析結果

分析結果について、①～③の3指標と各変数との相関係数を図表 18 に示している。まず女性の4年制大学進学率との相関がみられた変数は、「女性の自県大学進学率」、「女性の同地域ブロック内大学進学率」、「大学収容力」、「親世代（40 歳～64 歳）の女性大卒者率」、「一人当たり県民所得」、「女性有業率（15 歳～64 歳）」であった¹⁷。

次に、理学分野の入学者における女性比率との相関がみられた変数は、「女性の4年制大学進学率」、「理学部収容力」、「親世代（40 歳～64 歳）の女性大卒者率」であった¹⁸。

最後に、工学分野の入学者における女性比率との相関がみられた変数は、「県内総生産に占める製造業の割合」、「県内総生産に占める情報通信業の割合」、「有業者に占める製造業に従事している者の割合」、「理科教員における女性比率」であった¹⁹。

図表 18 相関表²⁰

	女性 大学進学率	理学分野 女性比率	工学分野 女性比率	中央値	標準偏差
女性の4年制大学進学率	—	.43 **	.08	45.49	7.82
女性の自県大学進学率	.43 **			32.22	15.71
女性の同地域ブロック内大学進学率	.38 **			66.89	18.36
大学収容力	.82 **			31.14	26.78
理学部収容力		.52 **		0.70	1.03
工学部収容力			.14	4.69	3.33
親世代(40歳～64歳)の女性大卒者率	.85 **	.49 **	.20	12.23	4.38
一人当たり県民所得	.63 **	.26	.06	294.49	46.79
県内総生産に占める製造業の割合		.19	-.38 **	24.08	9.35
県内総生産に占める建設業の割合			.14	5.85	1.98
県内総生産に占める情報通信業の割合		.11	.33 *	2.80	1.39
有業者に占める製造業に従事している者の割合		.05	-.41 **	16.64	5.58
有業者に占める建設業に従事している者の割合			.04	7.83	1.32
有業者に占める情報通信業に従事している者の割合		.28	.19	1.48	1.74
女性有業率(15歳～64歳)	-.35 **	-.28	-.07	69.50	2.67
女性の大学等卒業者に占める就職者の割合	.16			79.78	3.69
女性管理職割合	-.01			14.80	2.80
理科教員における女性比率		-.04	.33 *	19.22	6.76
数学教員における女性比率		.16	.12	15.07	5.03

** $p < .01$, * $p < .05$

¹⁷ いずれも1%水準で有意である。

¹⁸ いずれも1%水準で有意である。

¹⁹ 「県内総生産に占める製造業の割合」、「有業者に占める製造業に従事している者の割合」はいずれも1%水準で有意、「県内総生産に占める情報通信業の割合」、「理科教員における女性比率」はいずれも5%水準で有意である。

²⁰ 女性の4年制大学進学率と女性の自県大学進学率の相関係数は.43である。このように相関係数の符号がプラスの場合、女性の自県大学進学率が高いほど、女性の大学進学率も高くなることを示している。逆に、女性の大学進学率と女性有業率（15 歳～64 歳）の相関係数は-.35 となっている。このようにマイナスの符号の場合は、女性有業率が高い地域では女性の大学進学率が低いことを示している。

（３） 散布図

以下では①～③それぞれの指標と相関がみられた変数について、散布図を掲載している。

①女性の４年制大学進学率との関連

女性の大学進学率と各変数の散布図を図表 19～図表 24 に記載した。図表 18 のとおり、女性の大学進学率との相関係数がもっとも大きいのは親世代（40 歳～64 歳）の女性大卒者率（0.85）であり、正の相関になっている。これは親世代の女性の大学進学率が高い地域ほど女性の大学進学率が高いことを意味している。図表 22 をみると、東京都、京都府、奈良県、兵庫県、神奈川県等において親世代の女性の大学大卒者率が高く、かつ女性の大学進学率も高い地域であることが分かる。

次に相関係数が大きいのは大学収容力（0.82）であり、正の相関がみられた。先行研究で指摘されているとおり、大学収容力が大きい都道府県、つまり大学が多く設置されている都道府県では女性の４年制大学進学率が高いことが分かる。なお、図表 21 をみると東京都と京都府は 100% 以上と特に値が大きく、相関係数の算出において当該 2 都府県の影響が大きい点には留意が必要である。

また、女性の自県大学進学率（図表 19）及び女性の同地域ブロック内大学進学率（図表 20）も正の相関がみられることから、自宅から通学可能圏域にある大学への進学が女性の大学進学率を支えていることがうかがえる。そのほか、一人当たり県民所得が高い地域では女性の大学進学率が高いことが分かるが、図表 23 のとおり、東京都が外れ値となる点には留意が必要である²¹。

なお、女性有業率（15 歳～64 歳）との間には負の相関がみられた。これについては、先行研究²²にて指摘されているとおり、男性と女性で教育達成メカニズムが異なることがその背景にあると考えられる。すなわち、男性においては学力（成績）が進路選択に与える影響が大きく、かつ大学進学のための投資的な要素が強い一方、女性は家庭の経済状況や幼少期の文化資本等が学力や進路選択に与える影響が大きく、結婚や出産、育児のために離職する女性も多くいる中で大学教育の投資的な側面が弱いという違いがある。

女性有業率は、婚姻カップルにおいては共働き世帯か専業主婦世帯かを示すものであるが、専業主婦世帯が多い地域（＝女性有業率が低い地域）ほど女性の大学進学率が多いという結果は、先行研究²³で指摘されているとおり、女性にとっての大学進学が、労働市場を通じた地位上昇につながっていないことが示唆される。

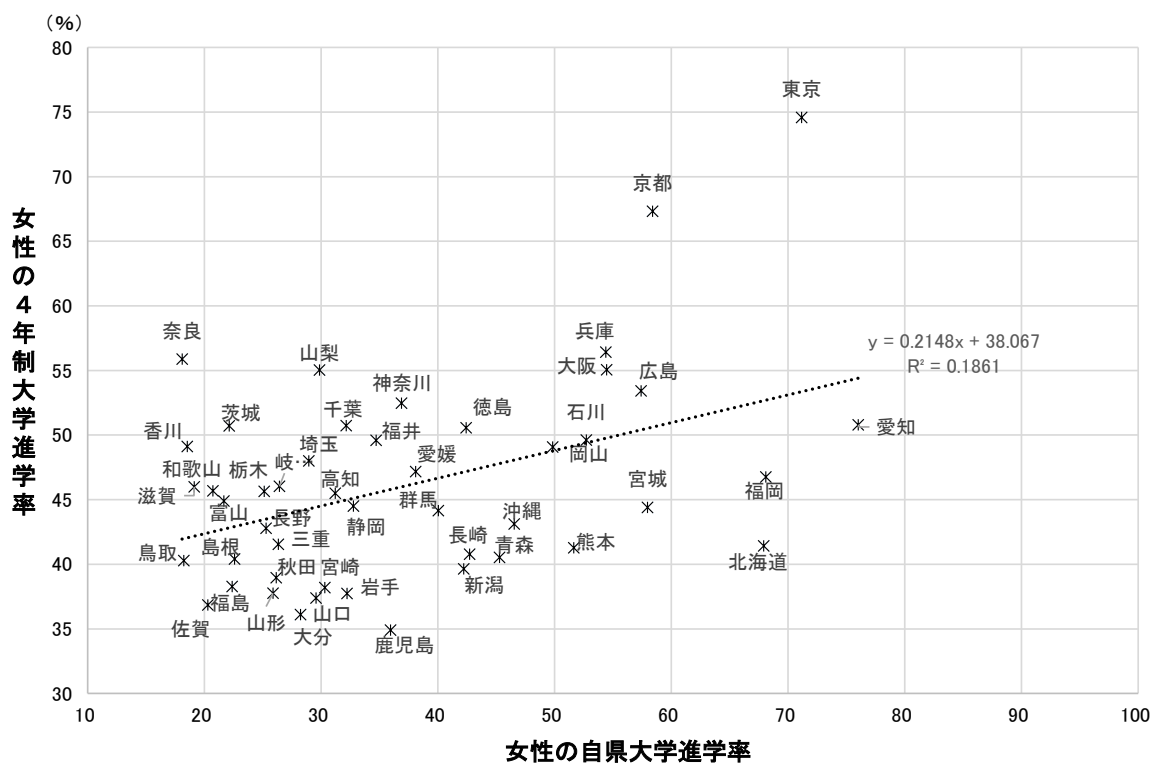
²¹ 東京都以外の 46 道府県で相関をみると、1%水準で有意であるものの相関係数は.40 と若干低くなる。

²² 片岡栄美（2001）「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』68（3）pp.259-273、田中寧・千葉能宏（2011）「女子の大学教育需要と雇用環境の変化—4 年制大学と短期大学の志願率決定の二項・多項ロジットモデルによる時系列分析」『京都産業大学論集 社会科学系列』（28）pp.89-113 等

²³ 片岡栄美（2001）「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』68（3）pp.259-273

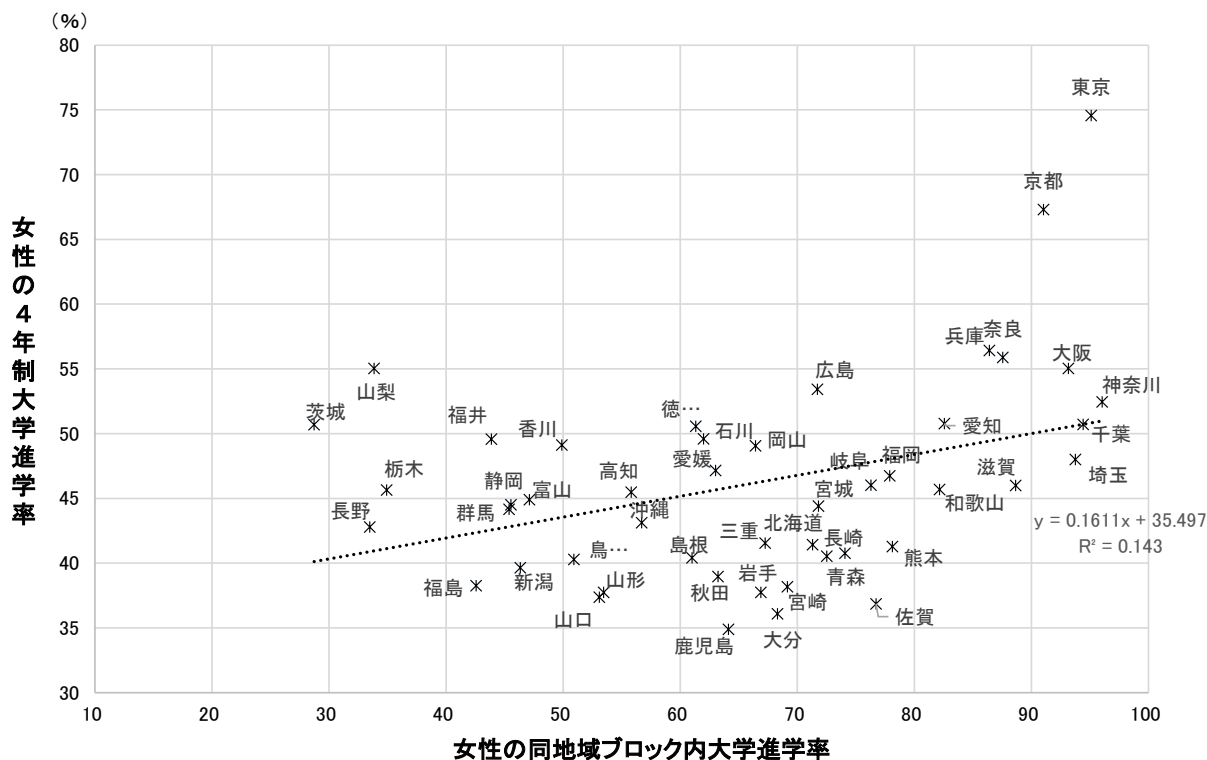
i) 女性の自県大学進学率

図表 19 女性の自県大学進学率と女性の4年制大学進学率の関係



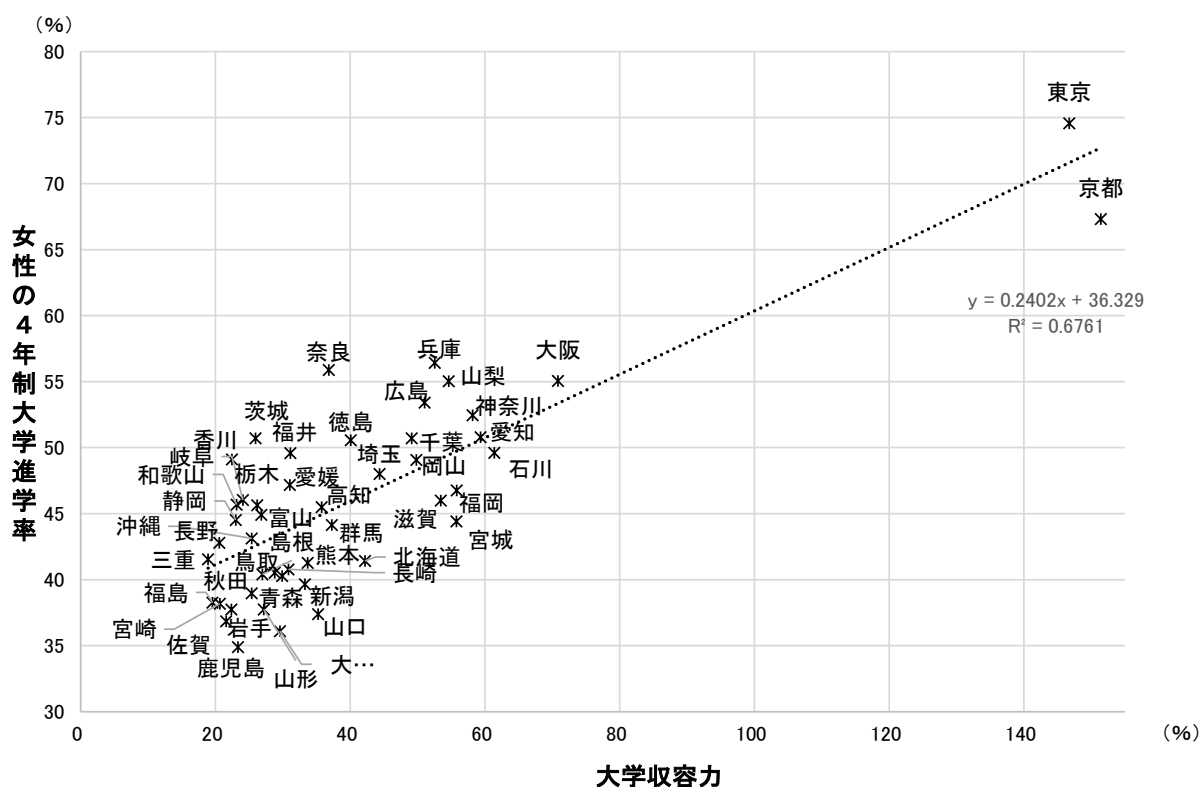
ii) 女性の同地域ブロック内への大学進学率

図表 20 女性の同地域ブロック内大学進学率と女性の4年制大学進学率の関係



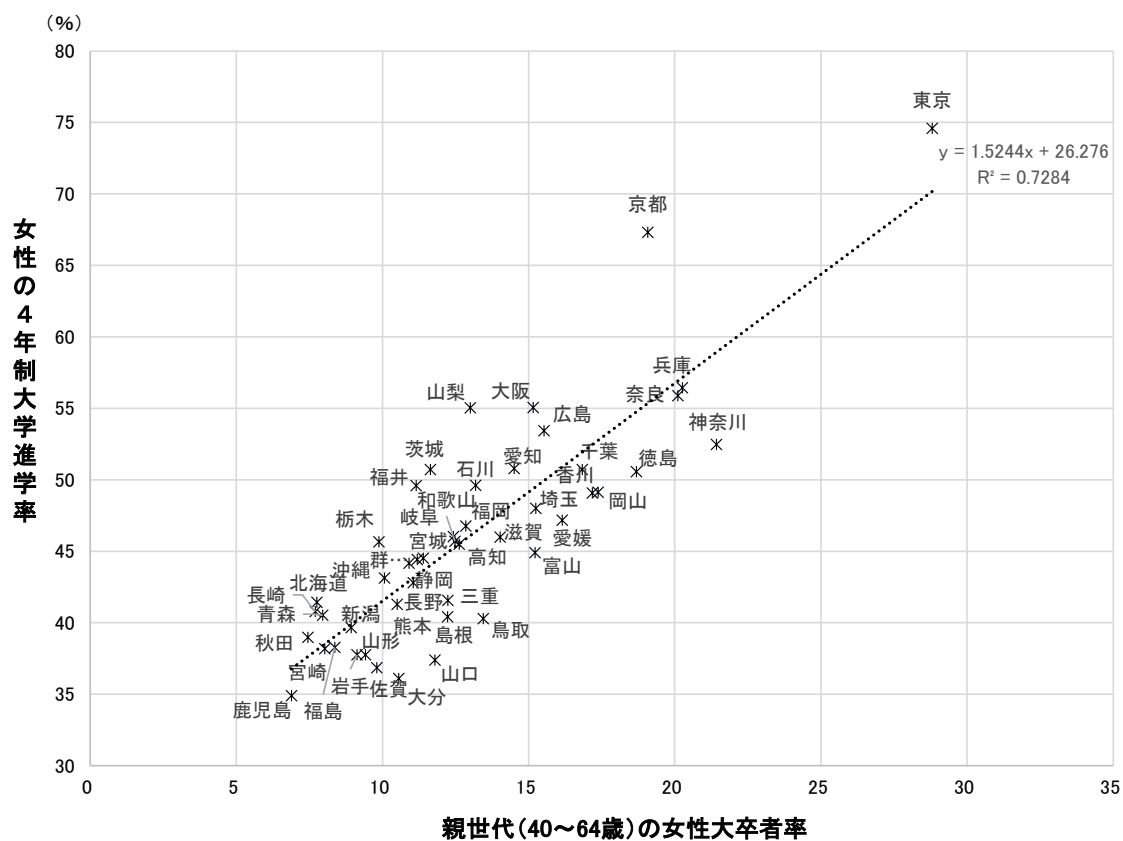
iii) 大学収容力

図表 21 大学収容力と女性の4年制大学進学率の関係



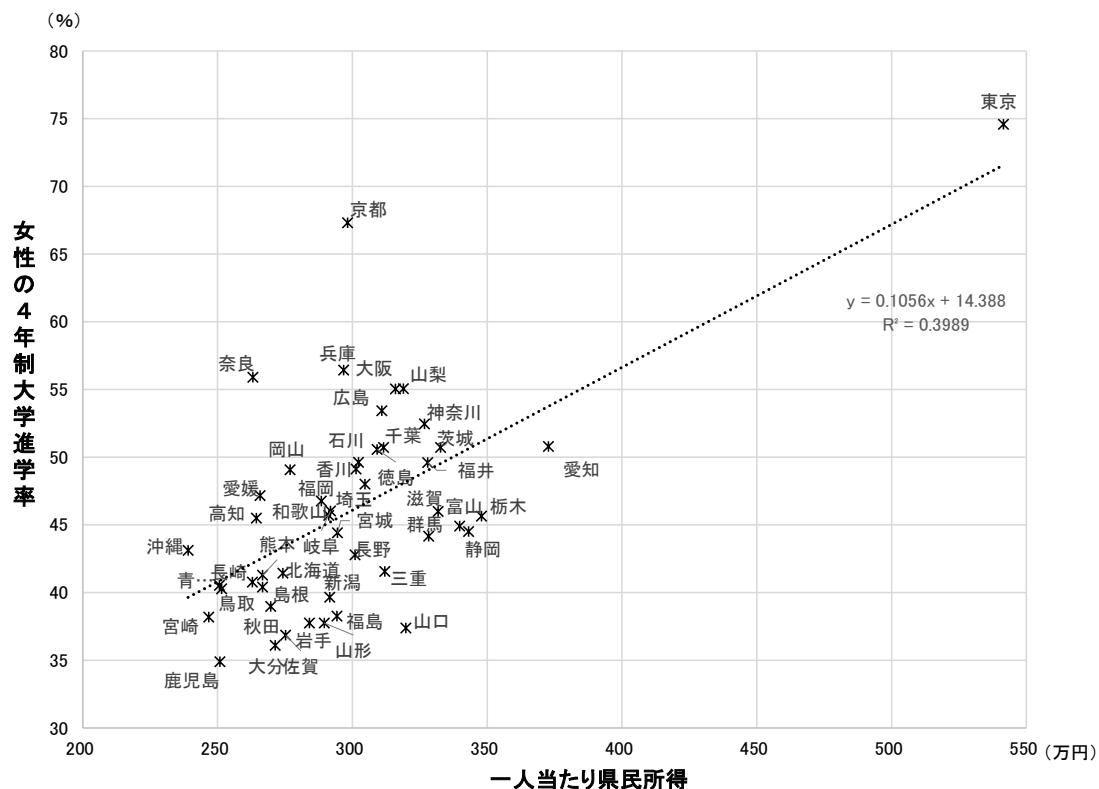
iv) 親世代（40歳～64歳）の女性大卒者率

図表 22 親世代（40歳～64歳）の女性大卒者率と女性の4年制大学進学率の関係



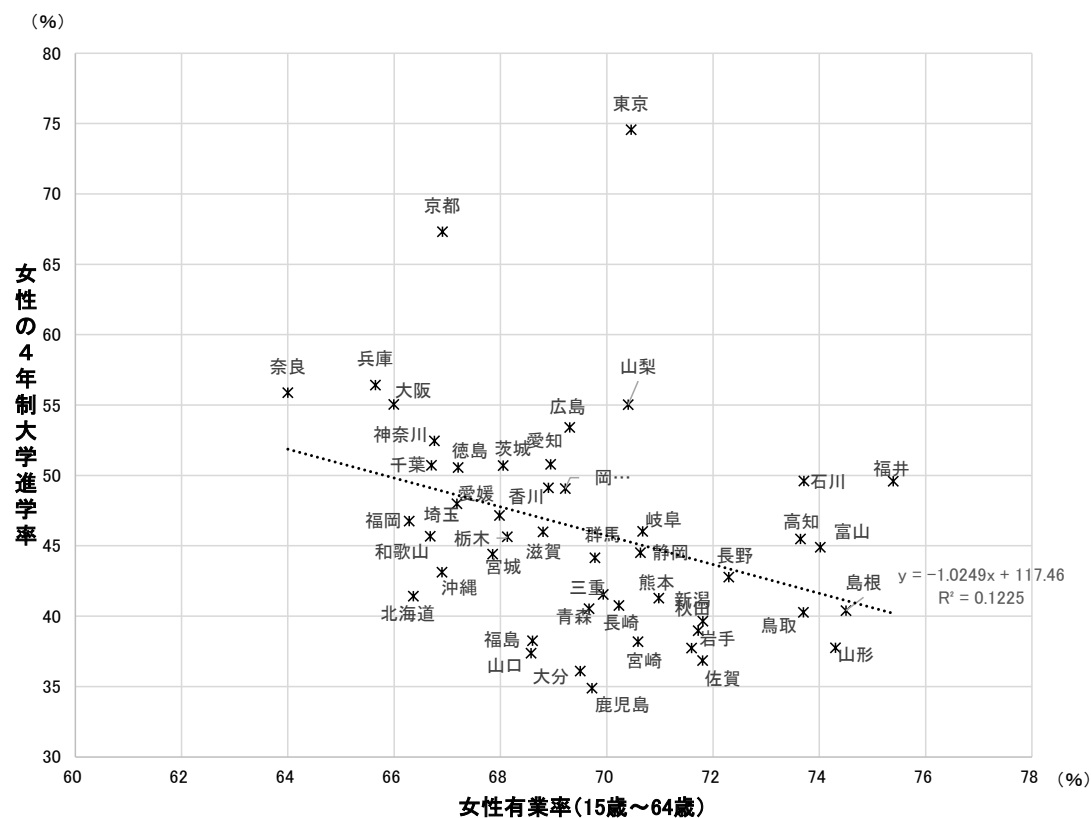
v) 一人当たり県民所得

図表 23 一人当たり県民所得と女性の4年制大学進学率の関係



vi) 女性有業率（15歳～64歳）

図表 24 女性有業率（15歳～64歳）と女性の4年制大学進学率の関係



続いて、理学分野の入学者における女性比率と各変数との散布図を図表 25～図表 27 に示した。理学分野の入学者における女性比率との相関がもっとも大きいのは理学部収容力で、相関係数(0.52)の符号はプラスであった。理学部収容力が大きいことは当該県の18歳人口に対する理学部定員が多いことを意味しているが、収容力が大きくなることによって、自宅から理学部が設置されている大学に進学できる可能性が高まる。男性に比べて自県大学進学率の高い女性においては、特に、収容力の増大が理学分野への進学を促進することが示唆される。

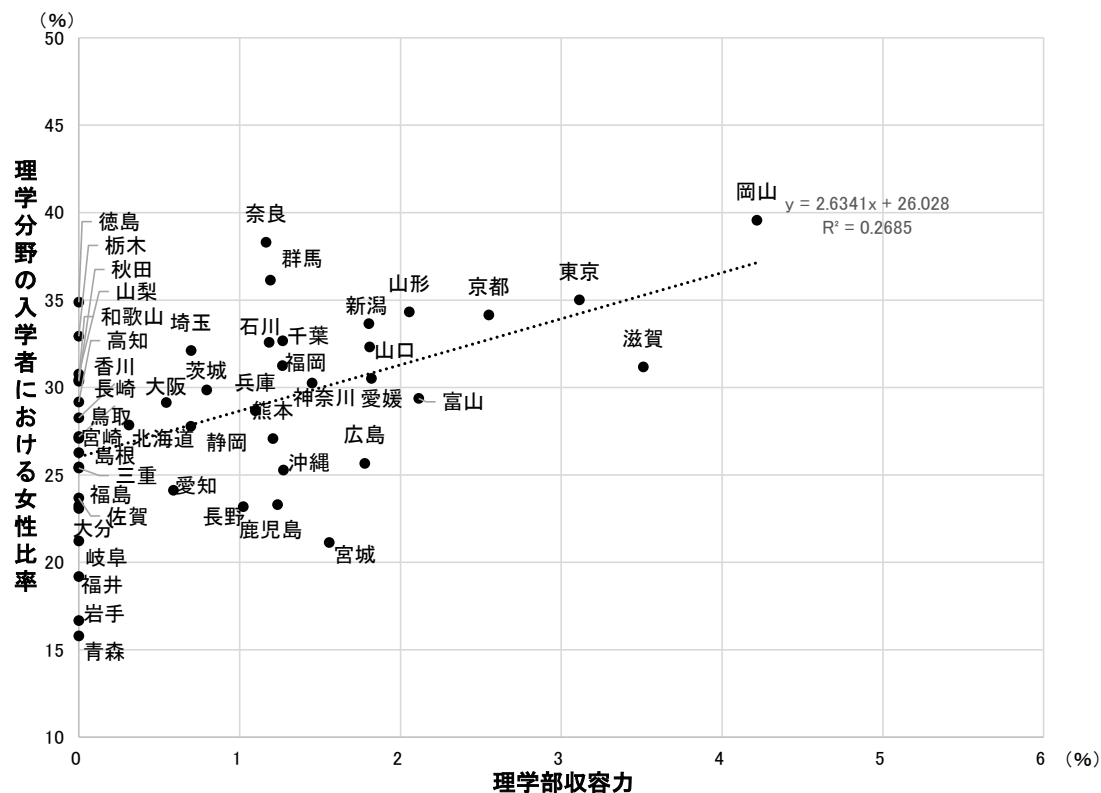
また、女性の4年制大学進学率とも正の相関がみられたことから、大学進学率が高い地域で女性の理学部進学者も多い傾向があることが分かる。

図表 25 女性の4年制大学進学率と理学分野の入学者における女性比率の関係



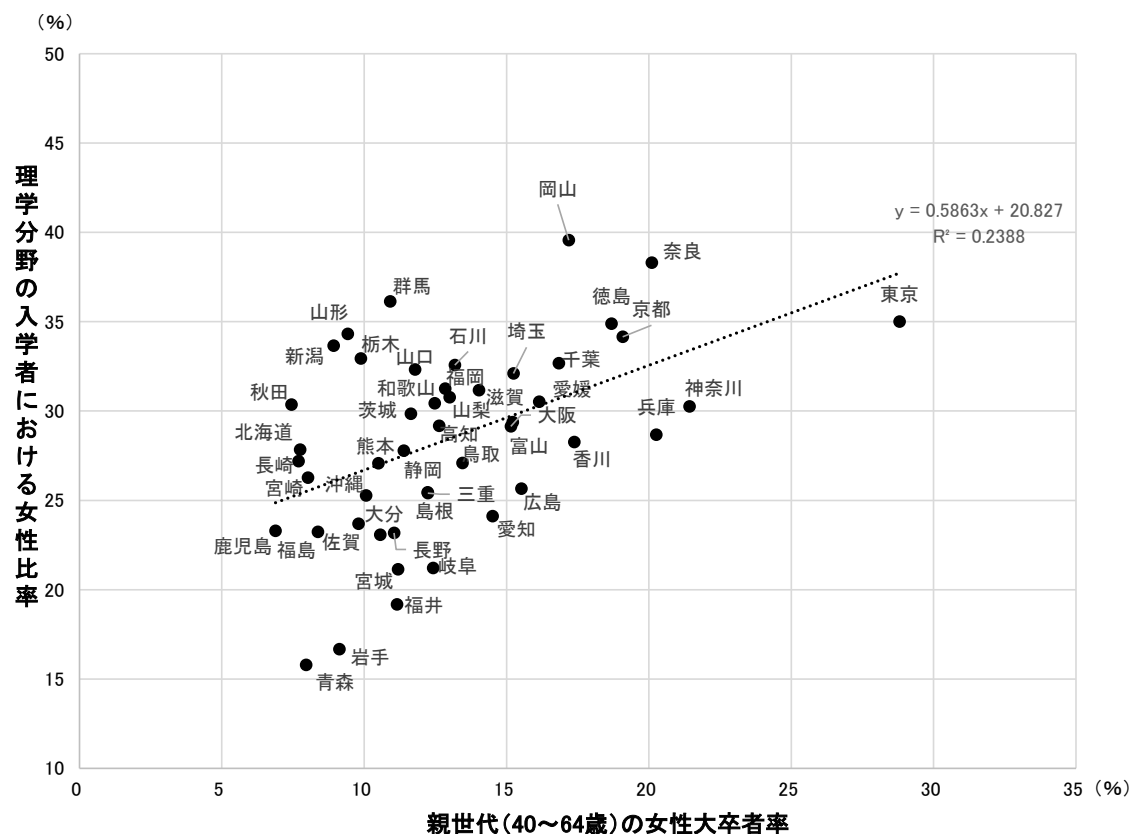
ii) 理学部収容力

図表 26 理学部収容力と理学分野の入学者における女性比率の関係



iii) 親世代（40歳～64歳）の女性大卒者率

図表 27 親世代（40歳～64歳）の女性大卒者率と理学分野の入学者における女性比率の関係



③工学分野の入学者における女性比率との関連

工学分野の入学者における女性比率と各変数との散布図は図表 28～図表 31 のとおりである。工学分野の入学者における女性比率との相関がもっとも大きいのは有業者に占める製造業に従事している者の割合で、相関係数（0.41）の符号はマイナスであった。すなわち、有業者全体に占める製造業従事者の割合が高い都道府県では工学分野の入学者における女性比率が低いといえる。同様に、県内総生産に占める製造業の割合とも負の相関がみられている。全日制・定時制の高等学校卒業後の女性・男性の就職者数を産業別にみると、いずれも製造業への就職がもっとも高く、それぞれ全体の 28.9%、42.7%を占めている²⁴。製造業自体が高等学校卒業者の主な就職先となっているが、地域産業として製造業の比重が大きい都道府県では、女性に比べて男性のほうが、工学分野が学べる大学への進学を選択する傾向が強いためと考えられる²⁵。

そのほか、県内総生産に占める情報通信業の割合及び理科教員における女性比率とも正の相関がみられたが、県内総生産に占める情報通信業については、図表 29 をみると東京都が他道府県に比べて特に高くなっているため、留意が必要である²⁶。

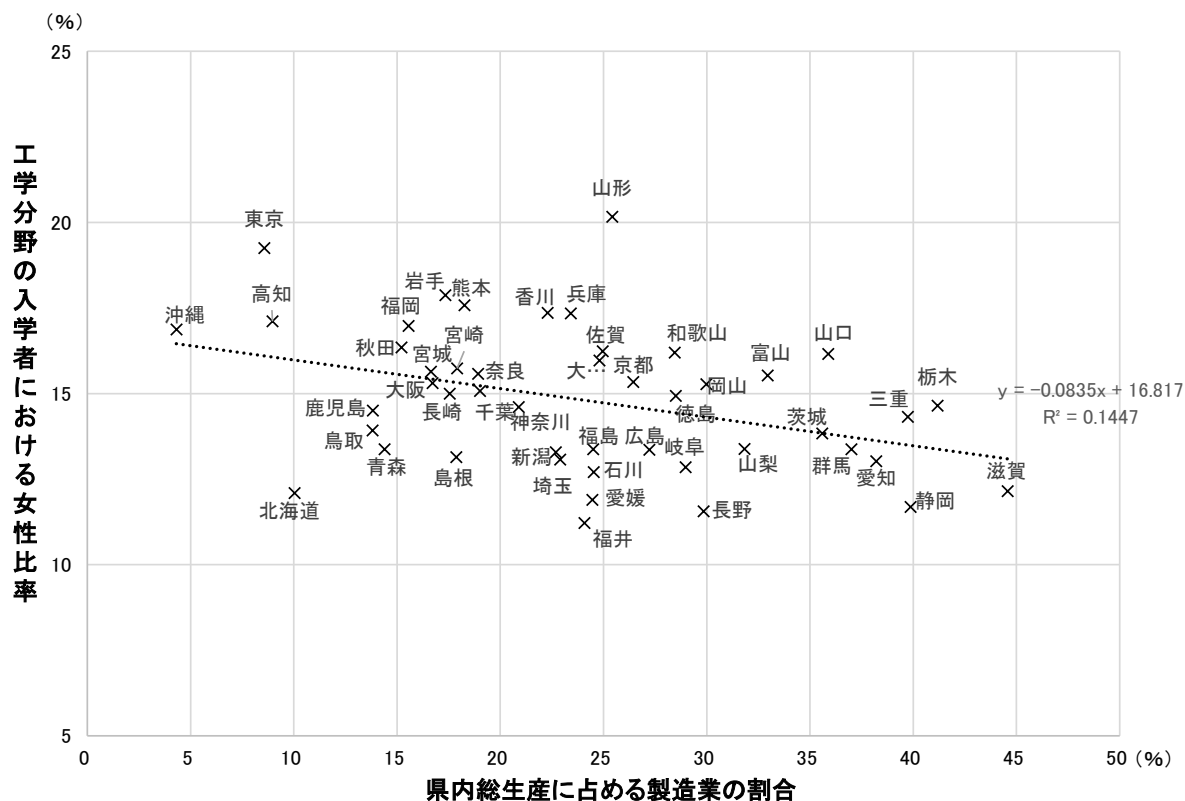
²⁴ 文部科学省（2021）「令和 3 年度学校基本調査」による。全日制・定時制の高等学校で女性の就職者は産業計で 59,388 人中、製造業への就職者は 17,184 人であった。同様に、男性の就職者は産業計で 99,738 人中、製造業への就職者は 42,539 人であった。

²⁵ 男性の工学分野進学率（高校所在地県における 18 歳人口（3 年前の中学校・義務教育学校卒業者及び中等教育学校前期課程修了者）に占める工学分野入学数との割合）と有業者全体に占める製造業に従事している者の割合及び県内総生産に占める製造業の割合との間には、それぞれ 1 % 有意で正の相関がみられた（それぞれの相関係数は 0.58、0.43）。なお、女性の工学分野進学率と有業者全体に占める製造業に従事している者の割合及び県内総生産に占める製造業の割合との間には有意差はみられなかった。

²⁶ 工学分野の入学者における女性比率と、県内総生産に占める情報通信業の割合との相関については、東京以外の 46 道府県に限って相関をみると有意差はみられない。

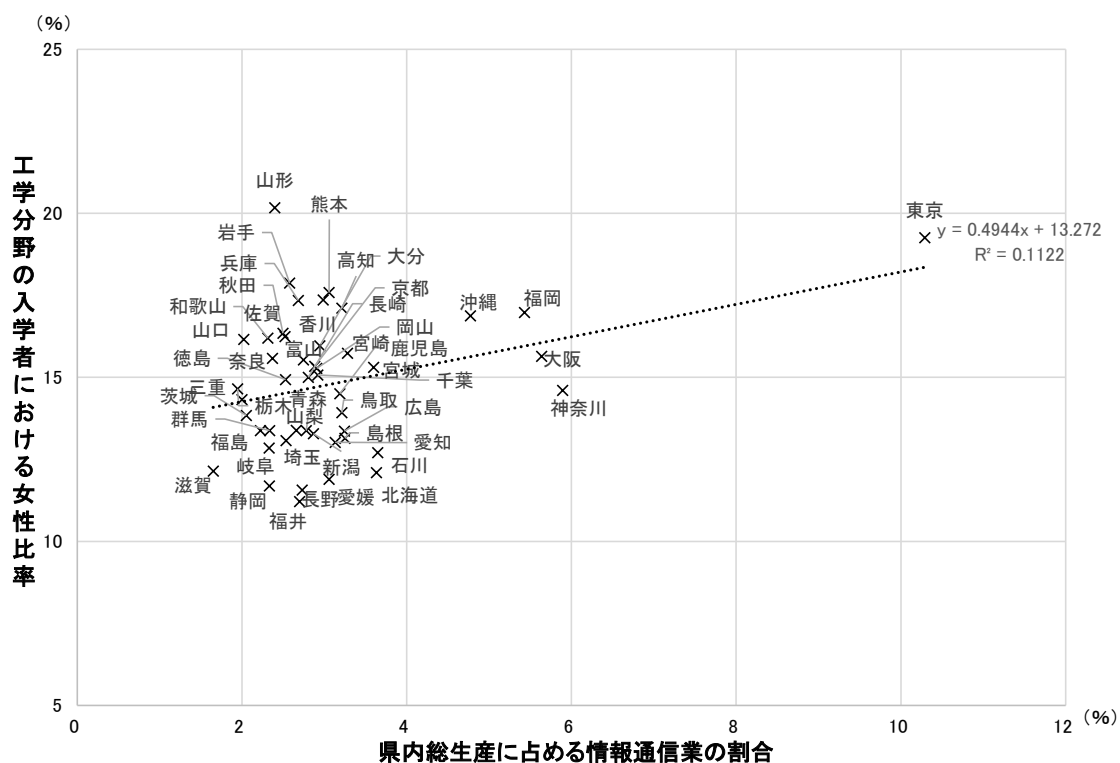
i) 県内総生産に占める製造業の割合

図表 28 県内総生産に占める製造業の割合と工学分野の入学者における女性比率の関係



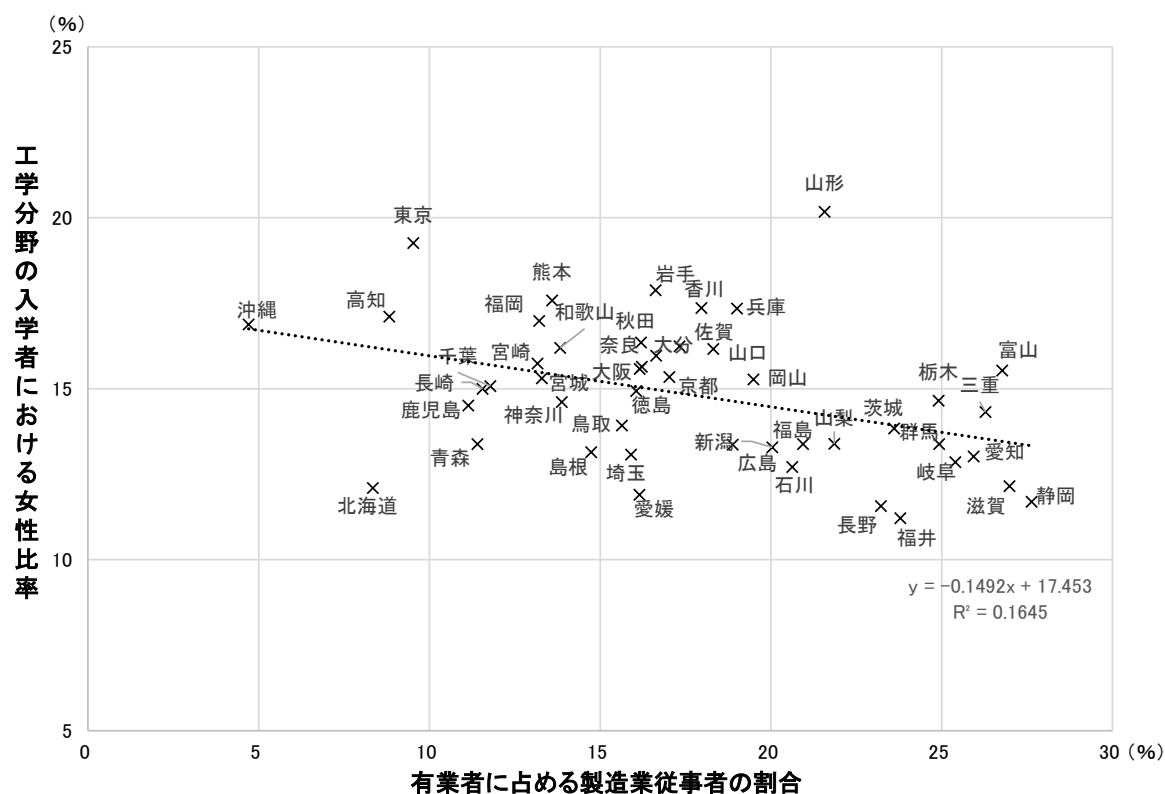
ii) 県内総生産に占める情報通信業の割合

図表 29 県内総生産に占める情報通信業の割合と工学分野の入学者における女性比率の関係



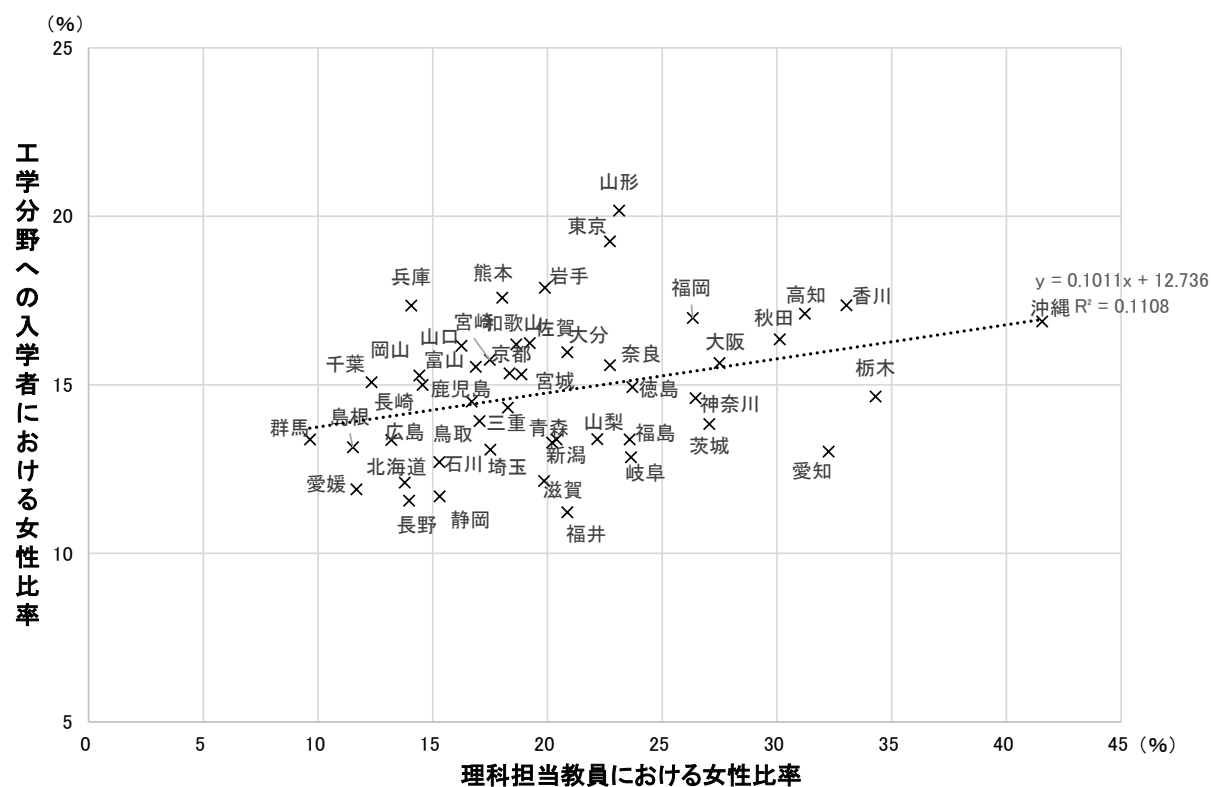
iii) 有業者に占める製造業に従事している者の割合

図表 30 有業者に占める製造業従事者の割合と工学分野の入学者における女性比率の関係



iv) 理科教員における女性比率

図表 31 理科教員における女性比率と工学分野の入学者における女性比率の関係



第4章 高校生に対する進路選択アンケート調査結果

4-1. 基本集計結果

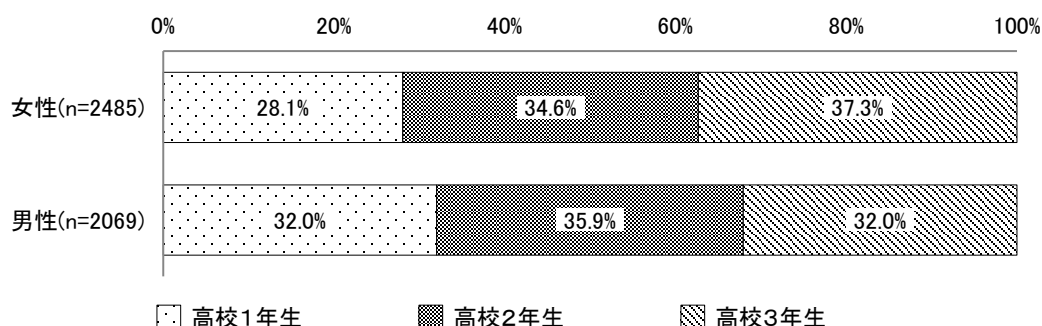
4-1-1. 回答者の概要

(1) 学年

女性では、「高校3年生」が37.3%でもっとも割合が高く、次いで「高校2年生」が34.6%となっている。男性では、「高校2年生」が35.9%でもっとも割合が高く、次いで「高校1年生」「高校3年生」が32.0%となっている。

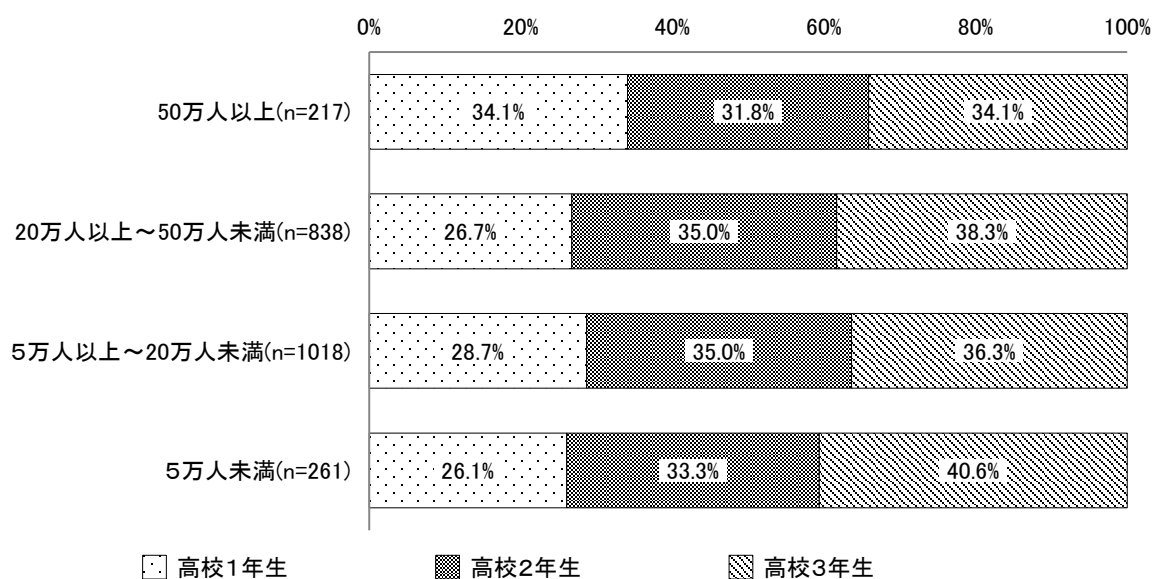
また、女性について、人口規模別に回答者の学年をみると、「50万人以上」では他と比べて、「高校1年生」が34.1%と高くなっている。

図表 32 学年：単数回答（Q2）



注) 構成比の数値は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、個々の集計値の合計は必ずしも100%とならない場合がある。以下、同様。

図表 33 人口規模別 学年（女性）：単数回答（Q6×Q2）



注1) 人口規模は総務省「平成27年国勢調査」に基づいて、回答者が居住する市区町村を4区分に分類した。なお、居住市区町村は郵便番号から紐付けを行っているが、郵便番号が無回答もしくは不明確なサンプルについては、人口規模別の集計から除外している。以下同様。

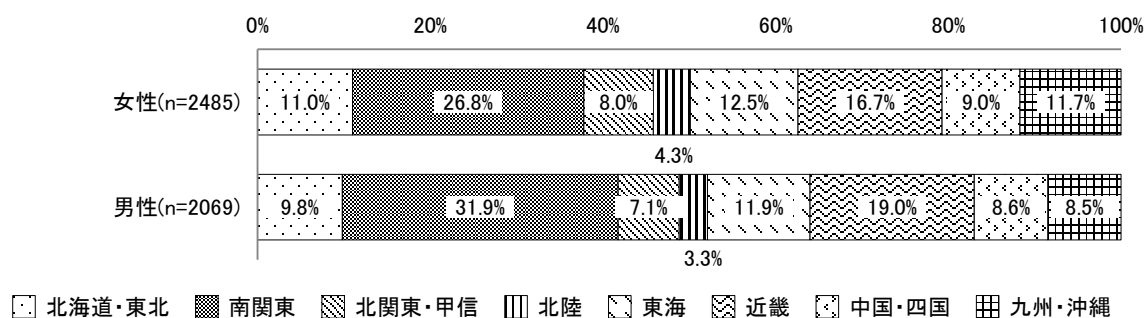
注2) 人口規模別、居住地域別の集計結果は、特筆すべき傾向の違いがみられたもののみ掲載している。以下同様。

(2) 居住地域

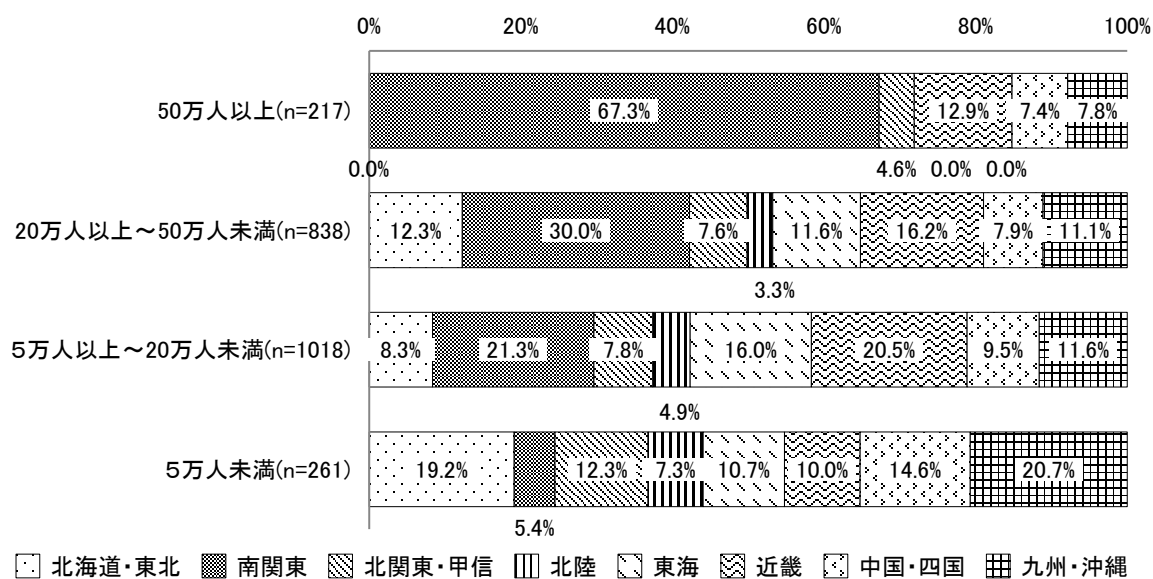
女性では、「南関東」が26.8%でもっとも割合が高く、次いで「近畿」が16.7%となっている。
男性では、「南関東」が31.9%でもっとも割合が高く、次いで「近畿」が19.0%となっている。

また、女性について、人口規模別に居住地域をみると、規模が大きくなるほど「南関東」の割合が高く、小さくなるほど「九州・沖縄」「中国・四国」の割合が高い傾向がみられる。

図表 34 居住地域：単数回答（Q5）



図表 35 人口規模別 居住地域（女性）：単数回答（Q6×Q5）



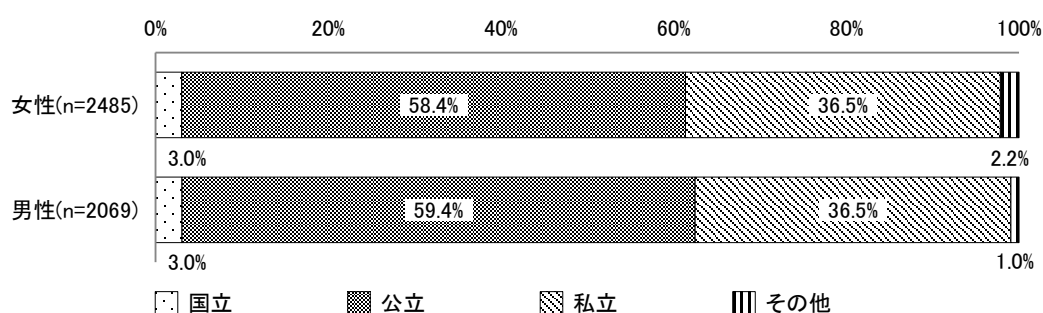
(3) 学校種別

女性では、「公立」が58.4%でもっとも割合が高く、次いで「私立」が36.5%となっている。
男性では、「公立」が59.4%でもっとも割合が高く、次いで「私立」が36.5%となっている。

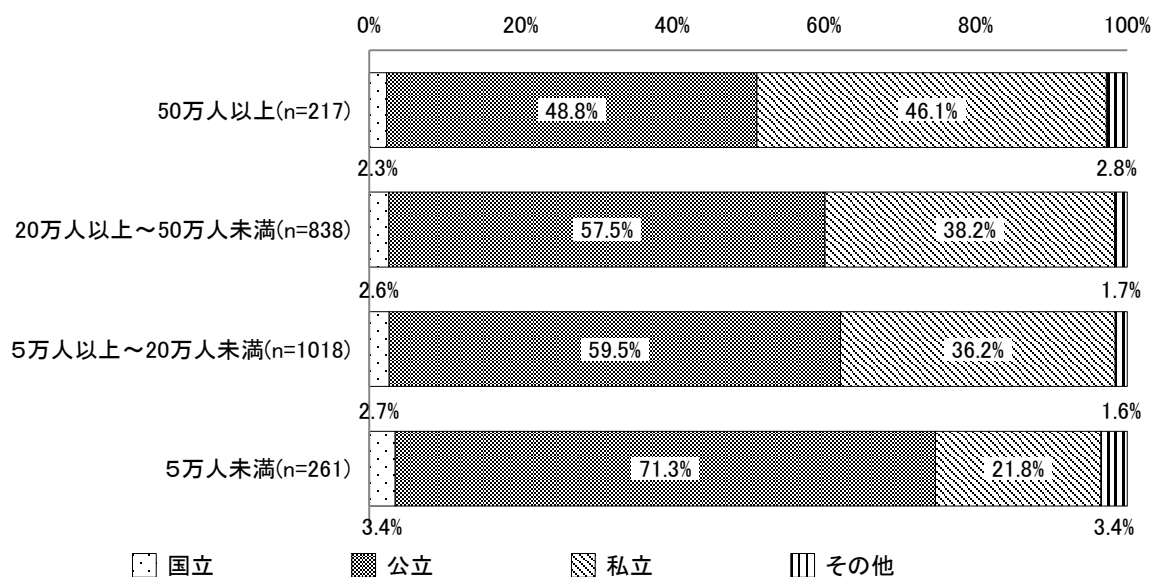
また、女性について、人口規模別に学校種別をみると、規模が大きくなるほど「私立」の割合が高く、小さくなるほど「公立」の割合が高い傾向がみられる。

同じく居住地域別にみると、他と比べて特に「南関東」では「私立」が49.5%と高く、「公立」が46.2%と低くなっている。

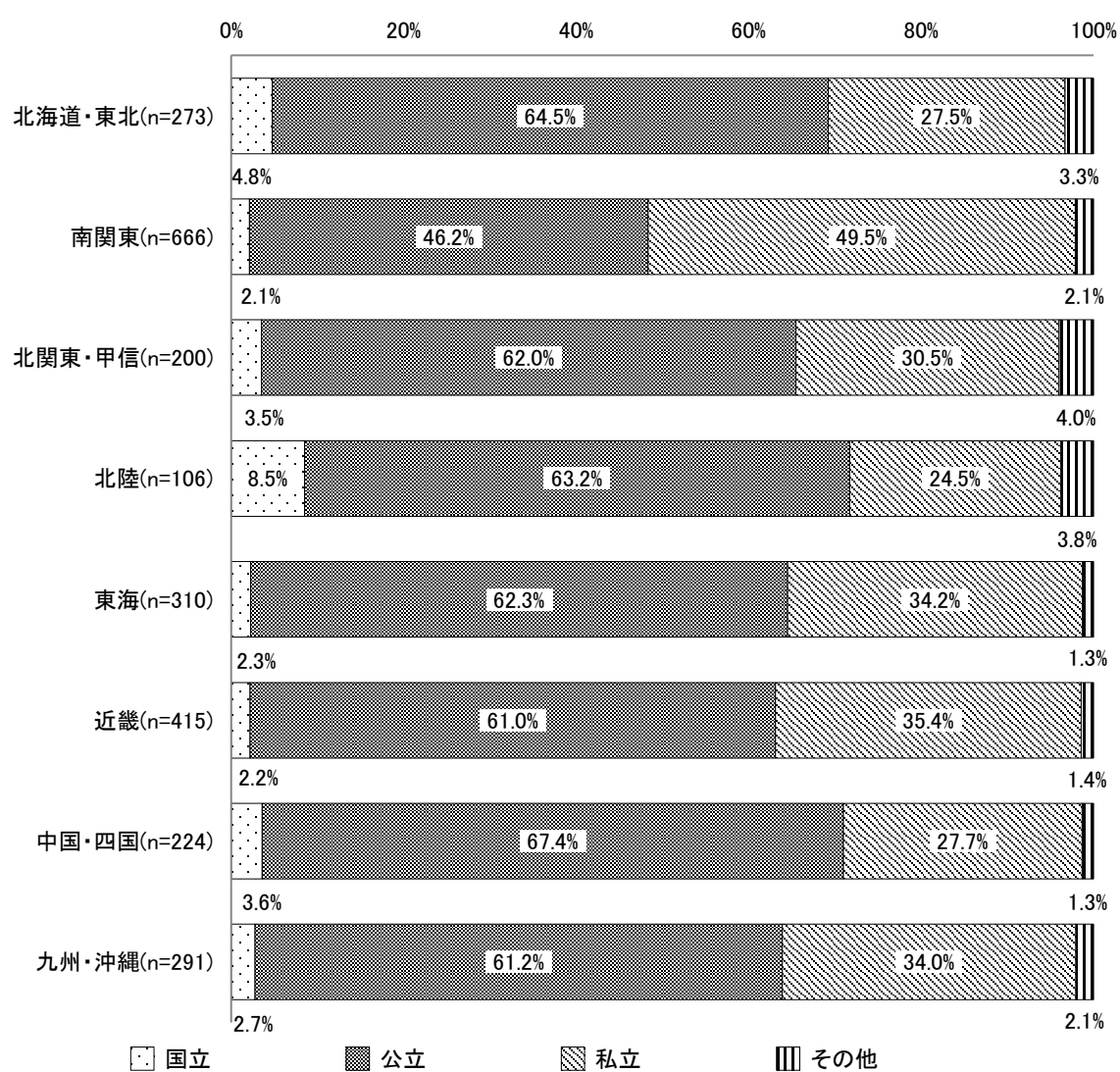
図表 36 学校種別：単数回答（Q7）



図表 37 人口規模別 学校種別（女性）：単数回答（Q6×Q7）



図表 38 居住地域別 学校種別（女性）：単数回答（Q5×Q7）



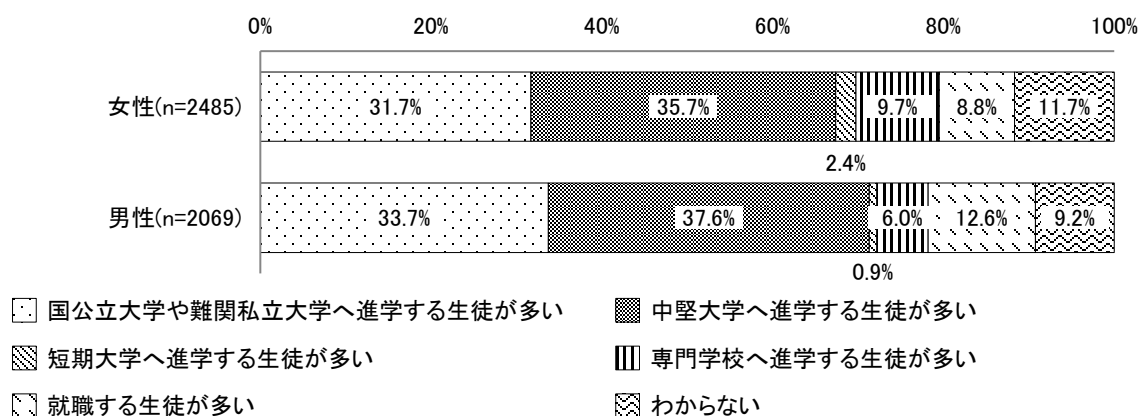
(4) 在学校の進学状況

女性では、「中堅大学へ進学する生徒が多い」が 35.7%でもっとも割合が高く、次いで「国公立大学や難関私立大学へ進学する生徒が多い」が 31.7%となっている。男性では、「中堅大学へ進学する生徒が多い」が 37.6%でもっとも割合が高く、次いで「国公立大学や難関私立大学へ進学する生徒が多い」が 33.7%となっている。

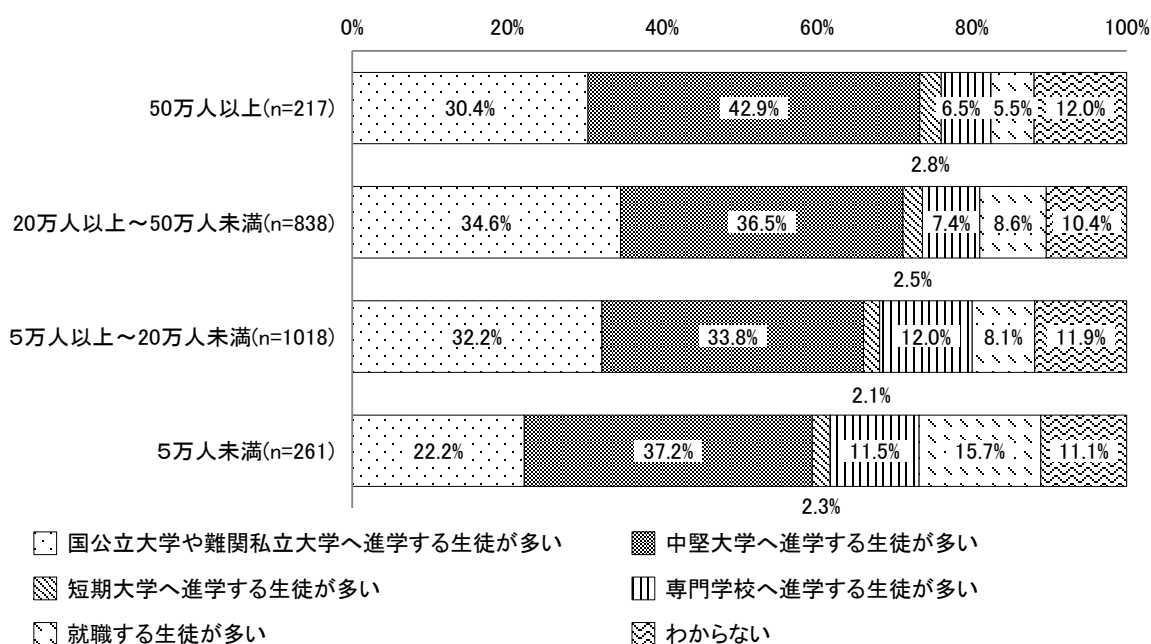
また、女性について、人口規模別に在学校の進学状況をみると、「50 万人以上」では他と比べて、「中堅大学へ進学する生徒が多い」の割合が 42.9%、「5 万人未満」では「就職する生徒が多い」の割合が 15.7%と高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北海道・東北」「北陸」では「就職する生徒が多い」、「南関東」「近畿」「中国・四国」では「国公立大学や難関私立大学へ進学する生徒が多い」の割合がやや高くなっている。

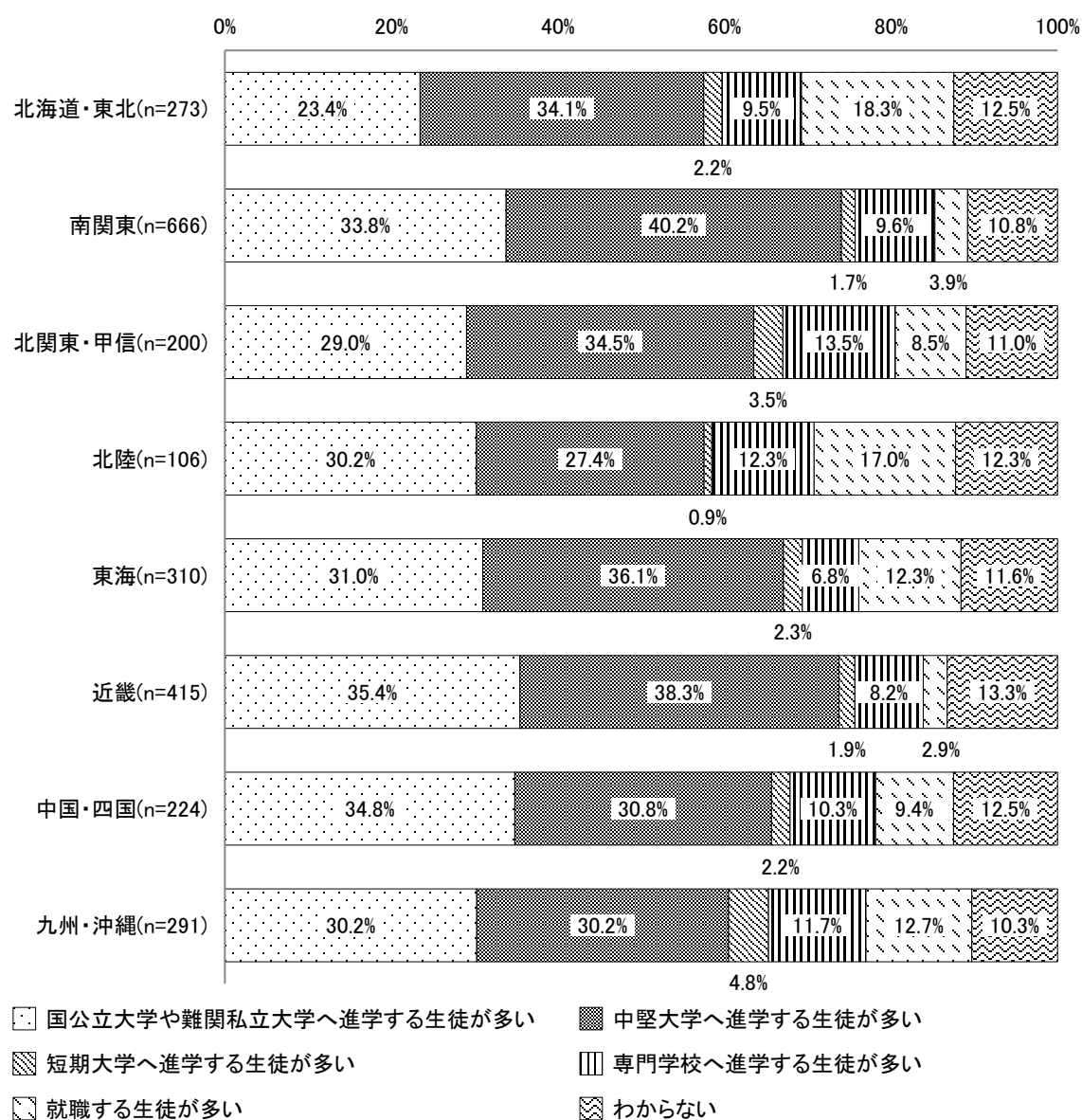
図表 39 在学校の進学状況：単数回答（Q8）



図表 40 人口規模別 在学校の進学状況（女性）：単数回答（Q6×Q8）



図表 41 居住地域別 在学校の進学状況（女性）：単数回答（Q5×Q8）



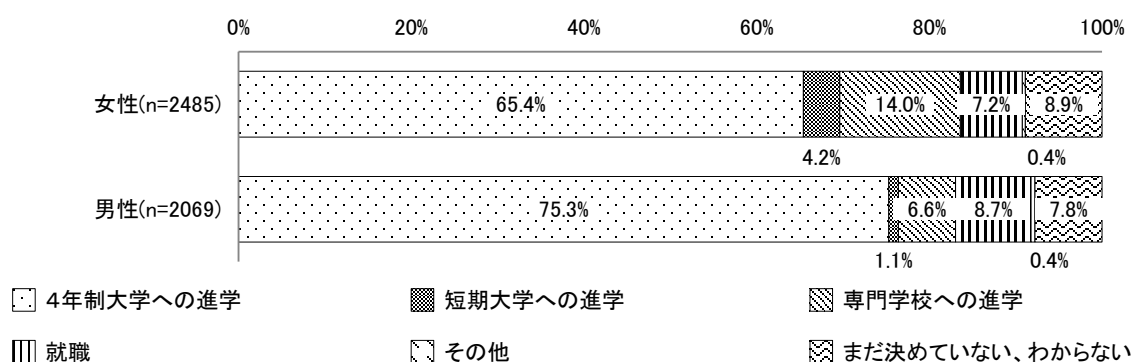
（５）進路希望

女性では、「４年制大学への進学」が 65.4%でもっとも割合が高く、次いで「専門学校への進学」が 14.0%となっている。男性では、「４年制大学への進学」が 75.3%でもっとも割合が高く、次いで「就職」が 8.7%となっている。女性は男性に比べて「専門学校への進学」を希望する割合が高い傾向がみられる。

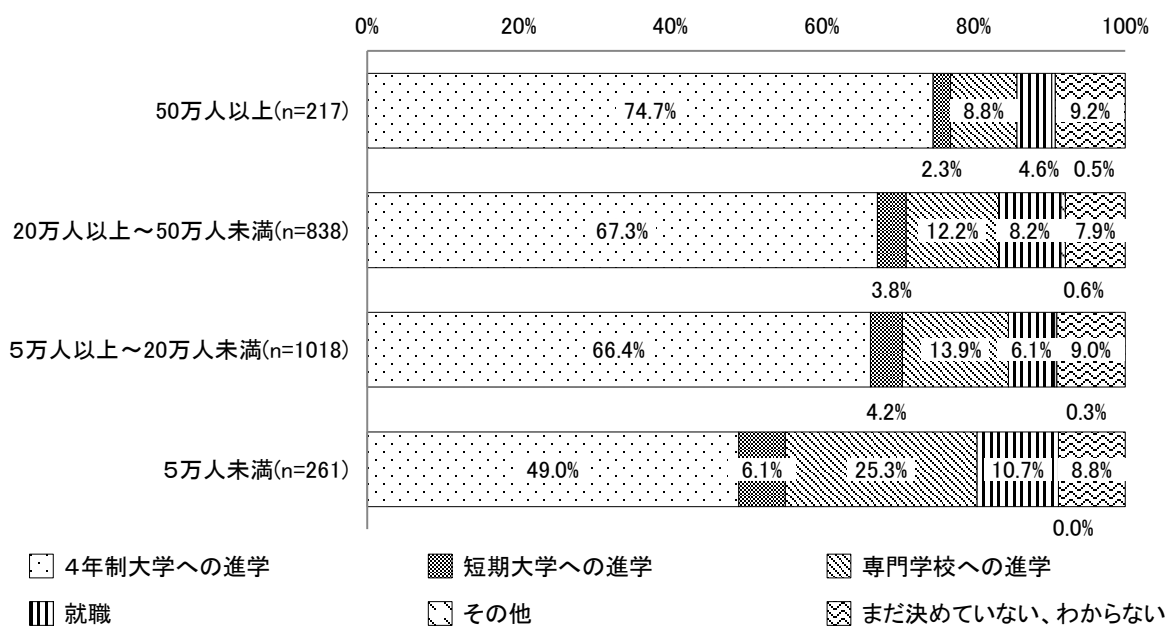
また、女性について、人口規模別に進路希望をみると、規模が大きくなるほど「４年制大学への進学」を希望する割合が高く、規模が小さくなるほど「専門学校への進学」「短期大学への進学」を希望する割合が高い傾向がみられる。特に、「50 万人以上」では「４年制大学への進学」が 74.7%、「5 万人未満」では「専門学校への進学」が 25.3%と、他と比べて高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」「近畿」「東海」において、「４年制大学への進学」の割合が高い傾向がみられる。

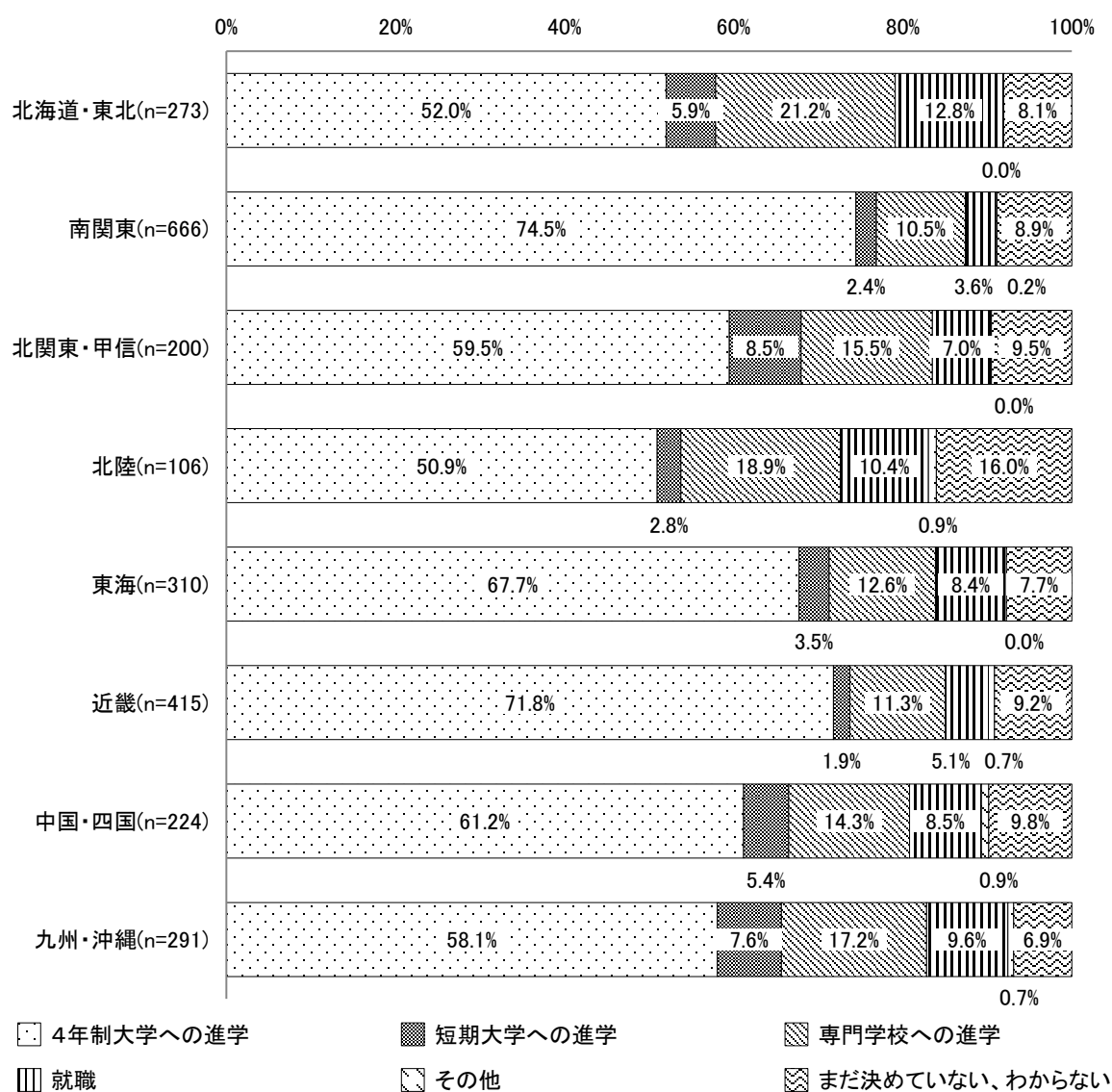
図表 42 進路希望：単数回答（Q9）



図表 43 人口規模別 進路希望（女性）：単数回答（Q6×Q9）



図表 44 居住地域別 進路希望（女性）：単数回答（Q5×Q9）

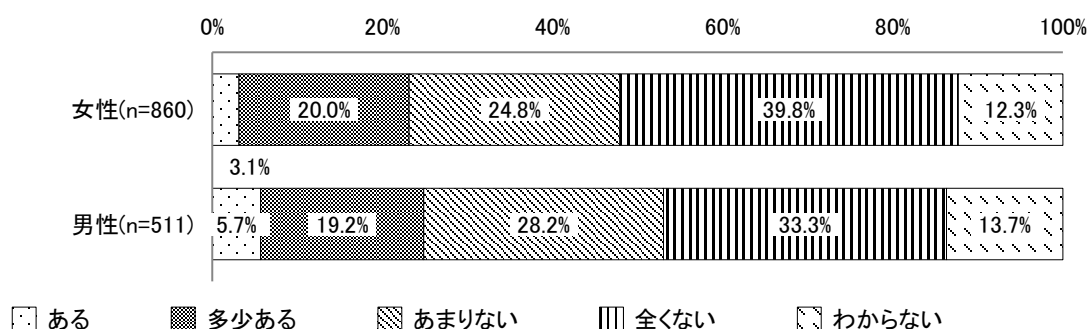


(6) 4年制大学へ進学する可能性（4年制大学への進学が第一希望でない者）

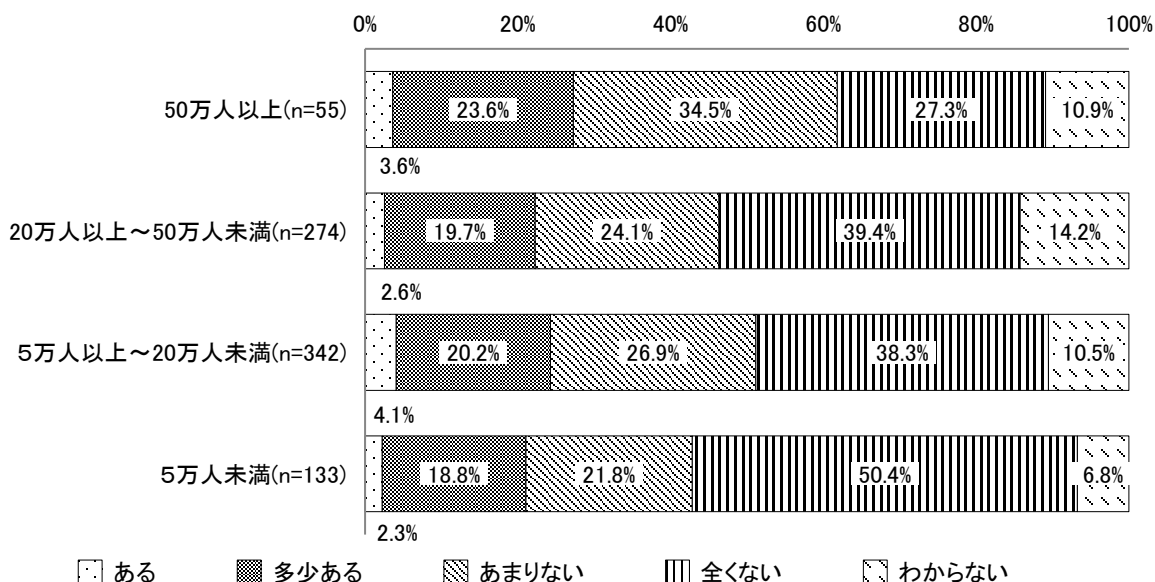
進路の希望について「短期大学への進学」「専門学校への進学」「就職」「その他」「まだ決めていない、わからない」のいずれかを選択した人のうち、4年制大学へ進学する可能性をみると、女性では、「全くない」が39.9%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が24.5%となっている。男性では、「全くない」が33.3%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が28.1%となっている。

また、女性について、人口規模別に4年制大学へ進学する可能性をみると、「5万人未満」では他と比べて、「全くない」が50.0%と高い割合となっている。

図表 45 4年制大学へ進学する可能性：単数回答（Q10）



図表 46 人口規模別 4年制大学へ進学する可能性（女性）：単数回答（Q6×Q10）



4-1-2. 保護者・家庭について

(1) 保護者の就労状況

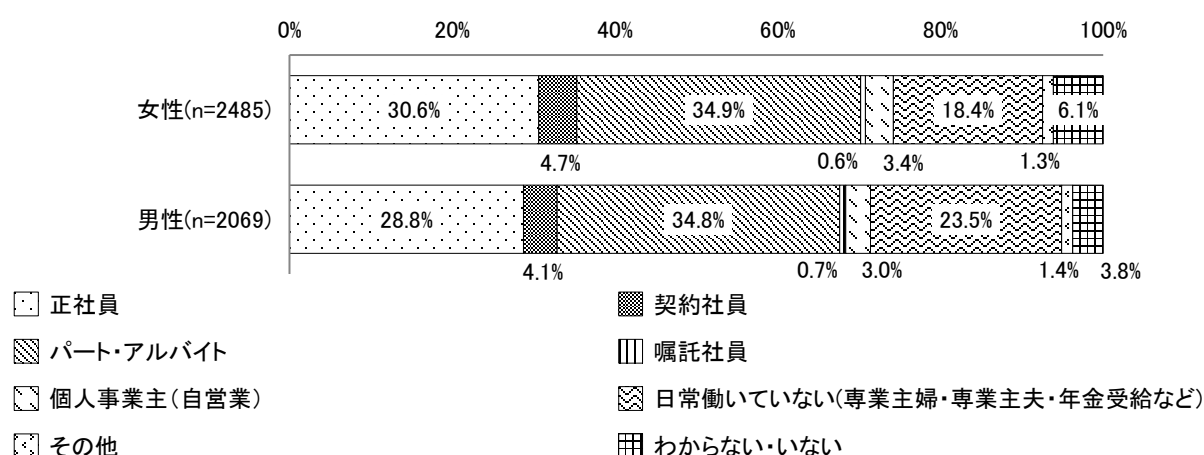
①母親

女性では、「パート・アルバイト」が34.9%でもっとも割合が高く、次いで「正社員」が30.6%となっている。男性では、「パート・アルバイト」が34.8%でもっとも割合が高く、次いで「正社員」が28.8%となっている。

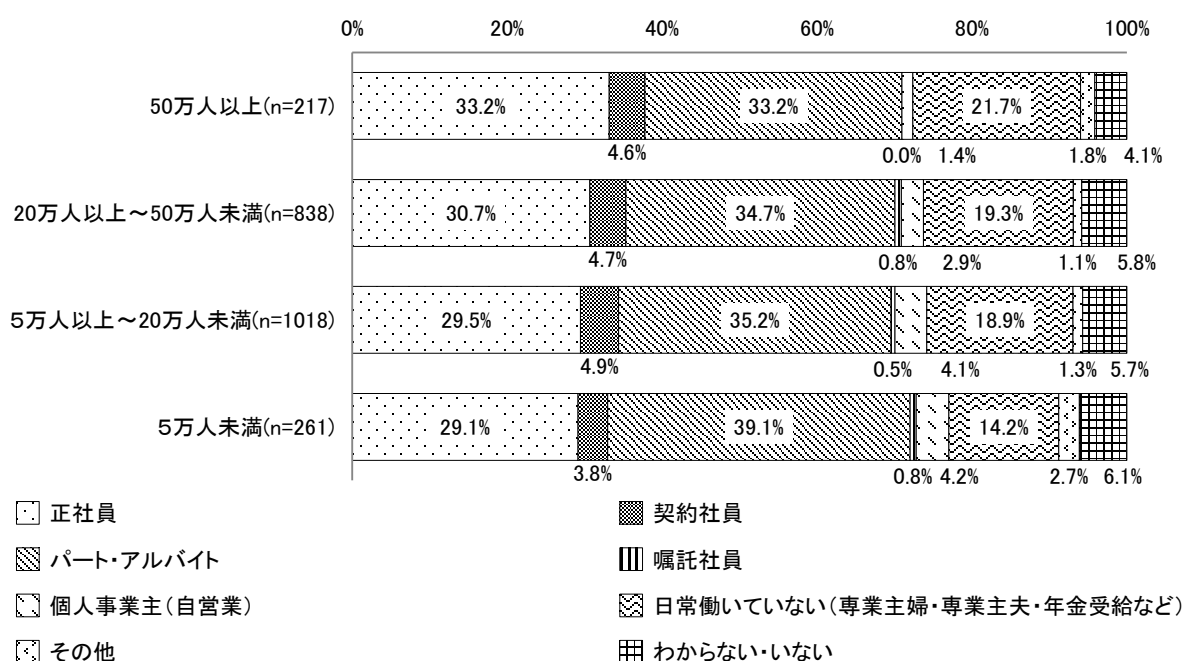
また、女性について、人口規模別に母親の就労状況をみると、規模が大きくなるほど「日常働いていない（専業主婦・専業主夫・年金受給など）」の割合が高いほか、「正社員」もやや高い傾向がみられる。一方、規模が小さくなるほど「パート・アルバイト」「個人事業主（自営業）」の割合が高い傾向がみられる。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北陸」では「正社員」が41.5%と高くなっている。

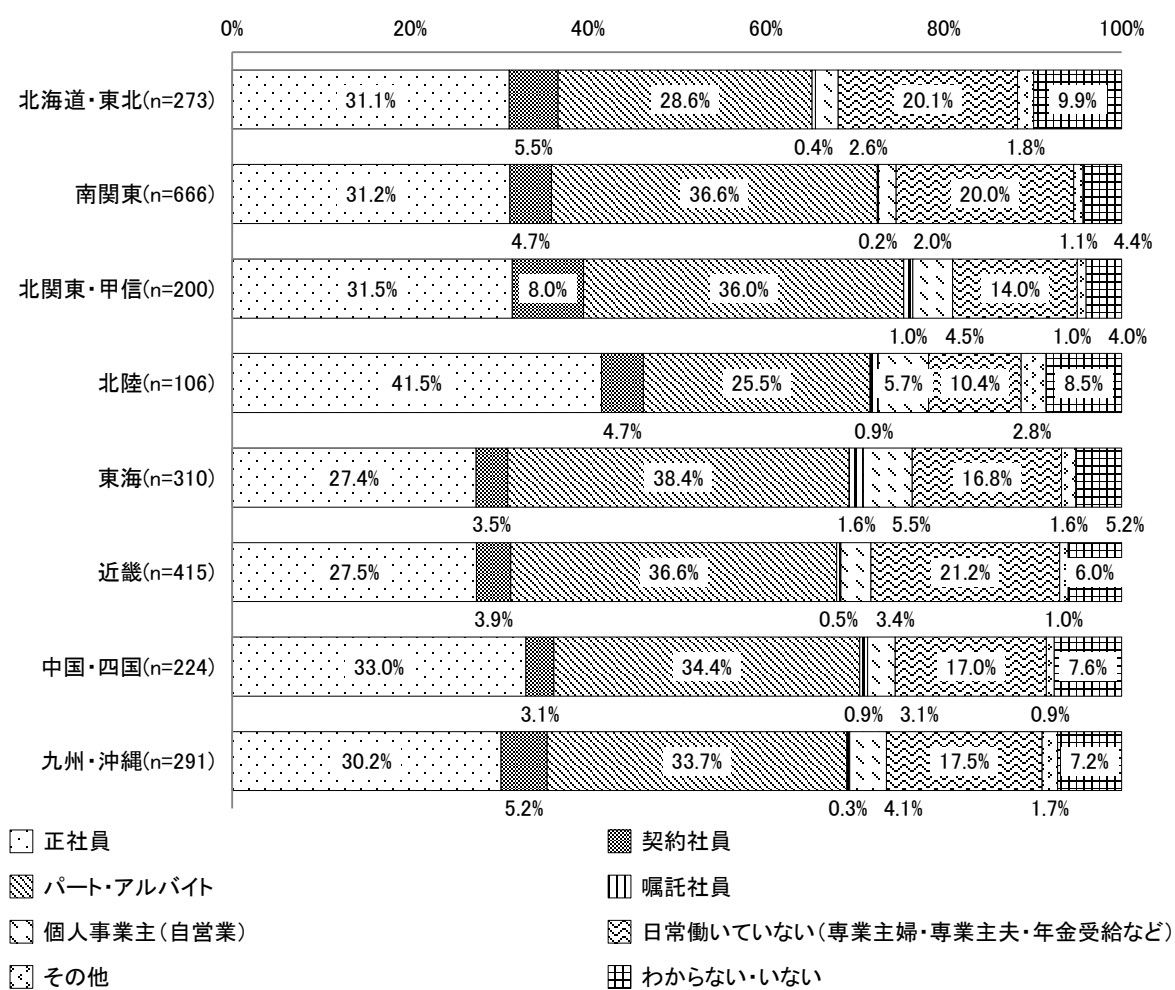
図表 47 母親の就労状況：単数回答（Q11_1）



図表 48 人口規模別 母親の就労状況（女性）：単数回答（Q6×Q11_1）



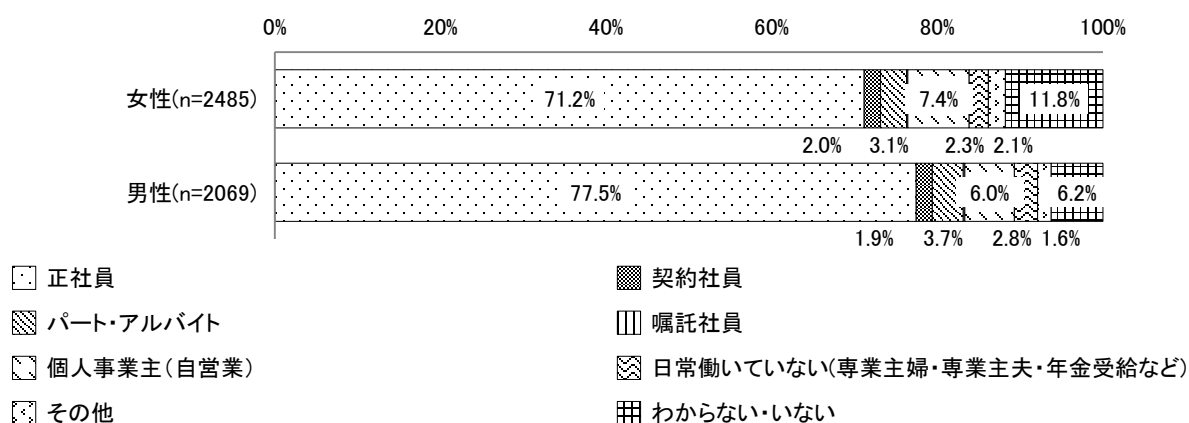
図表 49 居住地域別 母親の就労状況（女性）：単数回答（Q5×Q11_1）



②父親

女性では、「正社員」が 71.2%でもっとも割合が高く、次いで「わからない・いない」が 11.8%となっている。男性では、「正社員」が 77.5%でもっとも割合が高く、次いで「わからない・いない」が 6.2%となっている。

図表 50 父親の就労状況：単数回答（Q11_2）

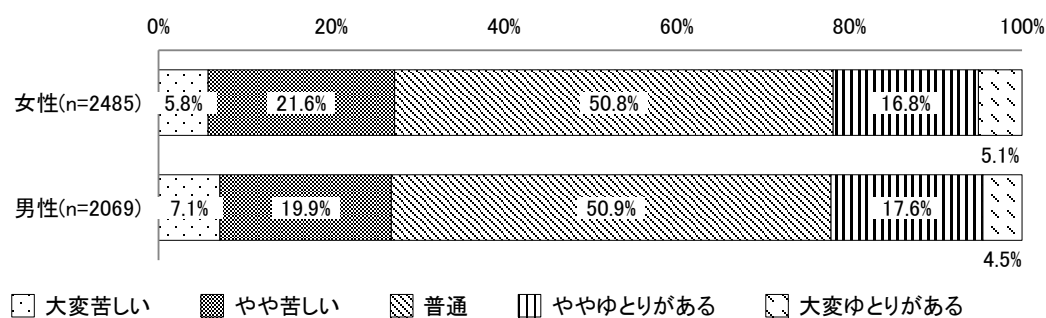


（２）家庭の暮らしの状況

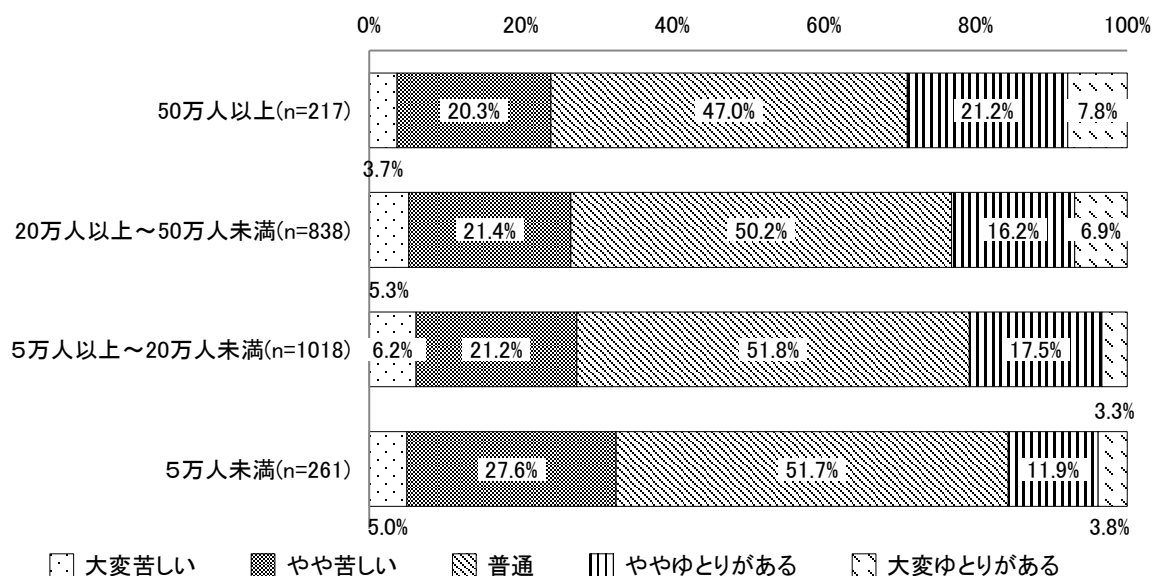
女性では、「普通」が 50.8%でもっとも割合が高く、次いで「やや苦しい」が 21.6%となっている。男性では、「普通」が 50.9%でもっとも割合が高く、次いで「やや苦しい」が 19.9%となっている。

また、女性について、人口規模別に家庭の暮らしの状況をみると、概ね規模が大きくなるほど「大変ゆとりがある」の割合が高い傾向がみられる。

図表 51 家庭の暮らしの状況：単数回答（Q12）



図表 52 人口規模別 家庭の暮らしの状況（女性）：単数回答（Q6×Q12）



（３）保護者の最終学歴

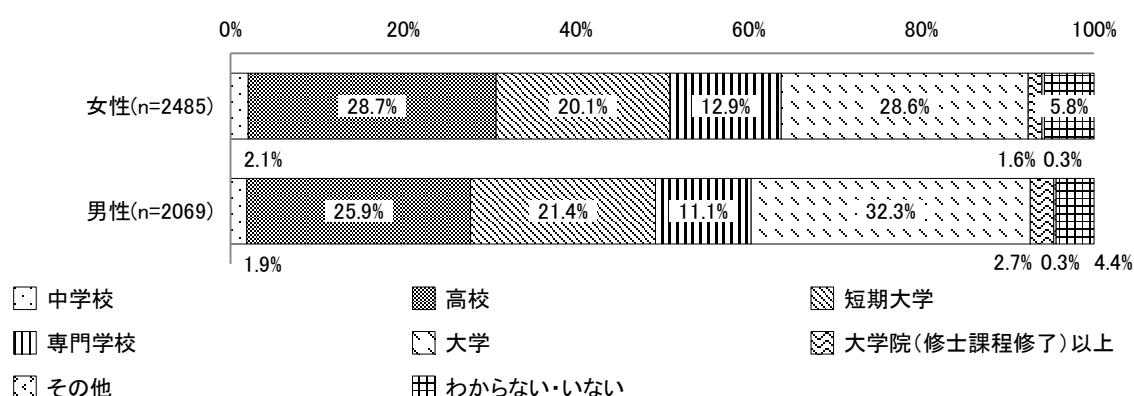
①母親

女性では、「高校」が 28.7%でもっとも割合が高く、次いで「大学」が 28.6%となっている。男性では、「大学」が 32.3%でもっとも割合が高く、次いで「高校」が 25.9%となっている。

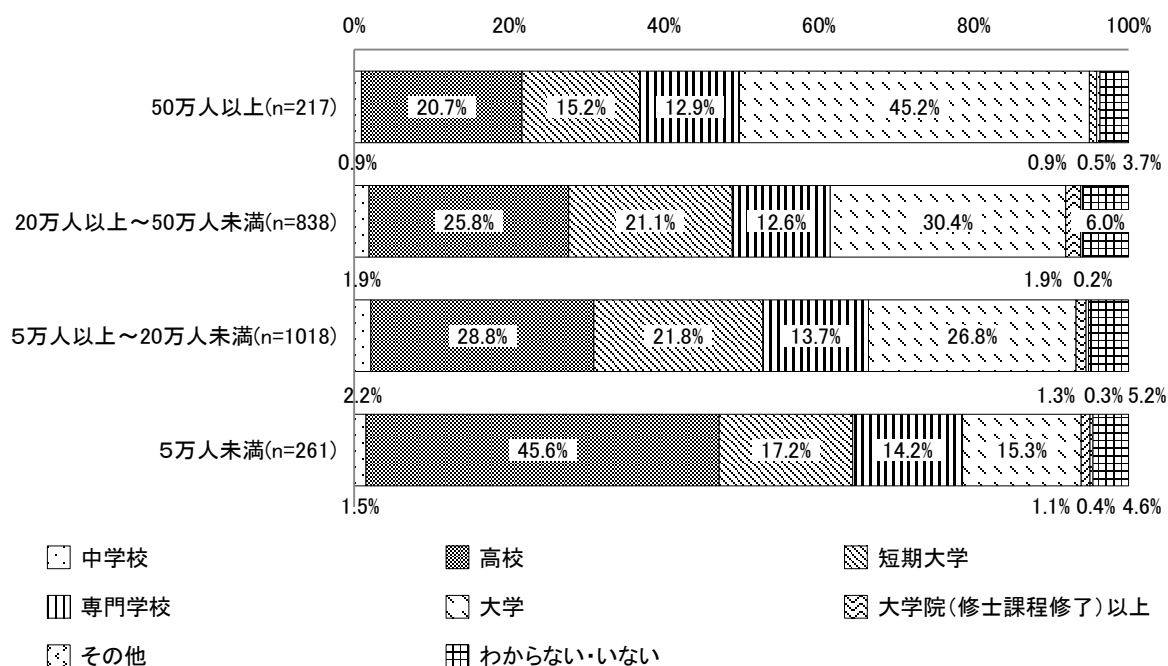
また、女性について、人口規模別に母親の最終学歴をみると、規模が大きくなるほど「大学」の割合が高く、規模が小さくなるほど「高校」の割合が高い傾向がみられる。特に、「5万人未満」で「高校」が 45.6%、「50万人以上」で「大学」が 45.2%と他と比べて高くなっている。

また、居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「大学」が 40.4%、「北海道・東北」「北陸」で「高校」が 40.3%、39.6%とそれぞれ高くなっている。

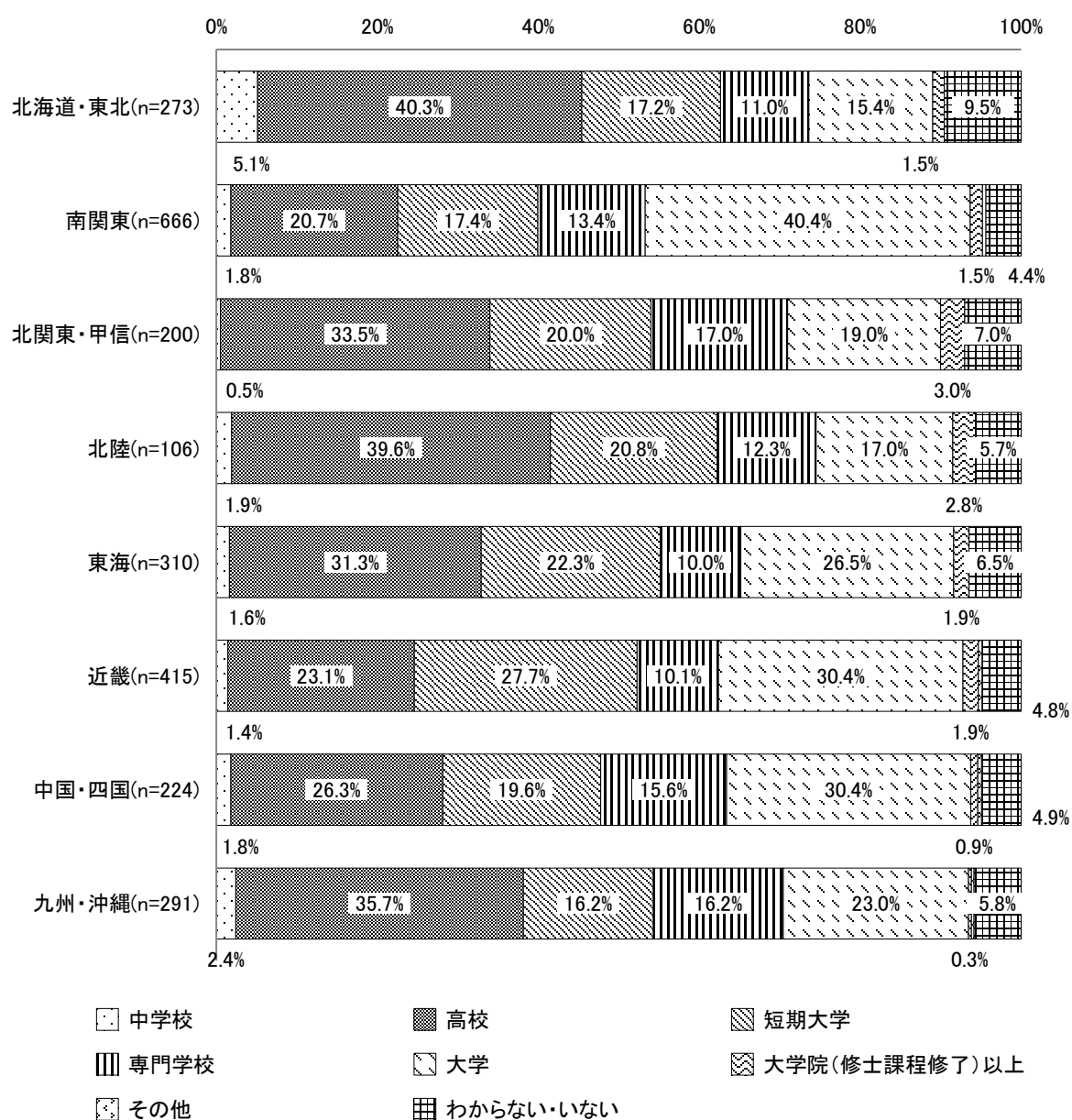
図表 53 母親の最終学歴：単数回答（Q13_1）



図表 54 人口規模別 母親の最終学歴（女性）：単数回答（Q6×Q13_1）



図表 55 居住地域別 母親の最終学歴（女性）：単数回答（Q5×Q13_1）



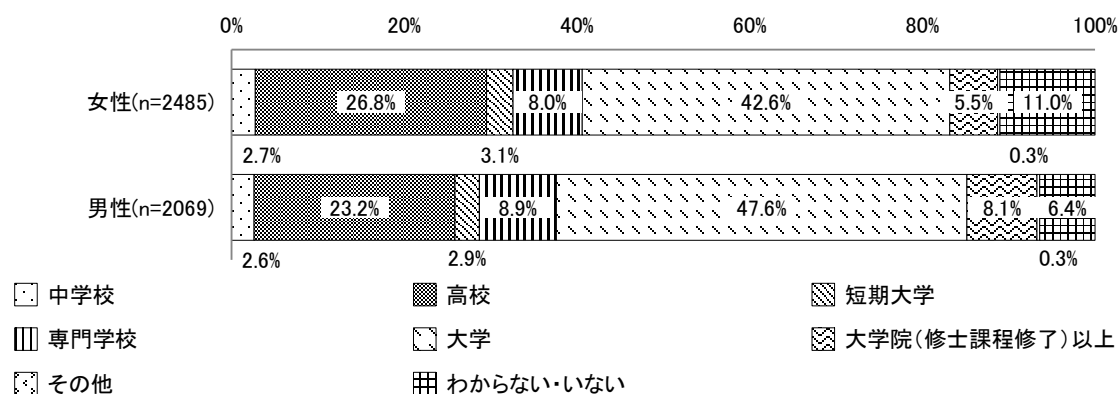
②父親

女性では、「大学」が42.6%でもっとも割合が高く、次いで「高校」が26.8%となっている。
男性では、「大学」が47.6%でもっとも割合が高く、次いで「高校」が23.2%となっている。

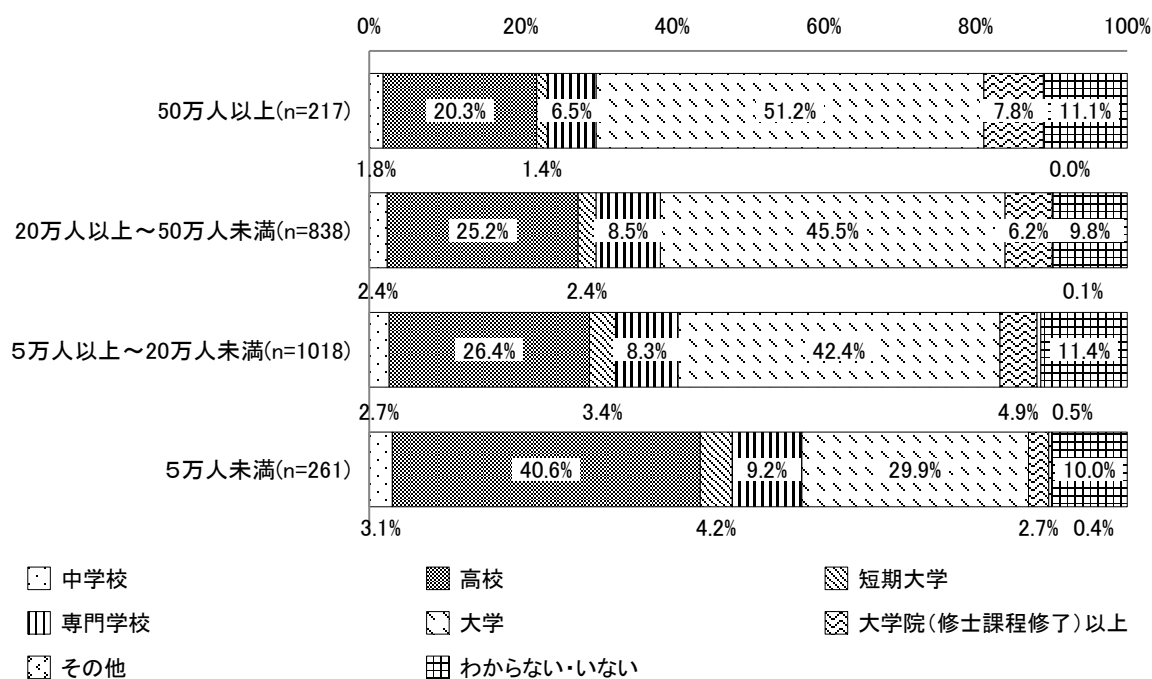
また、女性について、人口規模別に父親の最終学歴をみると、規模が大きくなるほど「大学」「大学院（修士課程修了以上）」の割合が高く、規模が小さくなるほど「大学」「大学院（修士課程修了以上）」以外の割合が高い傾向がみられる。特に、「5万人未満」で「高校」が40.6%、「50万人以上」で「大学」が51.2%と他と比べて高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「大学」が54.7%と高くなっている。

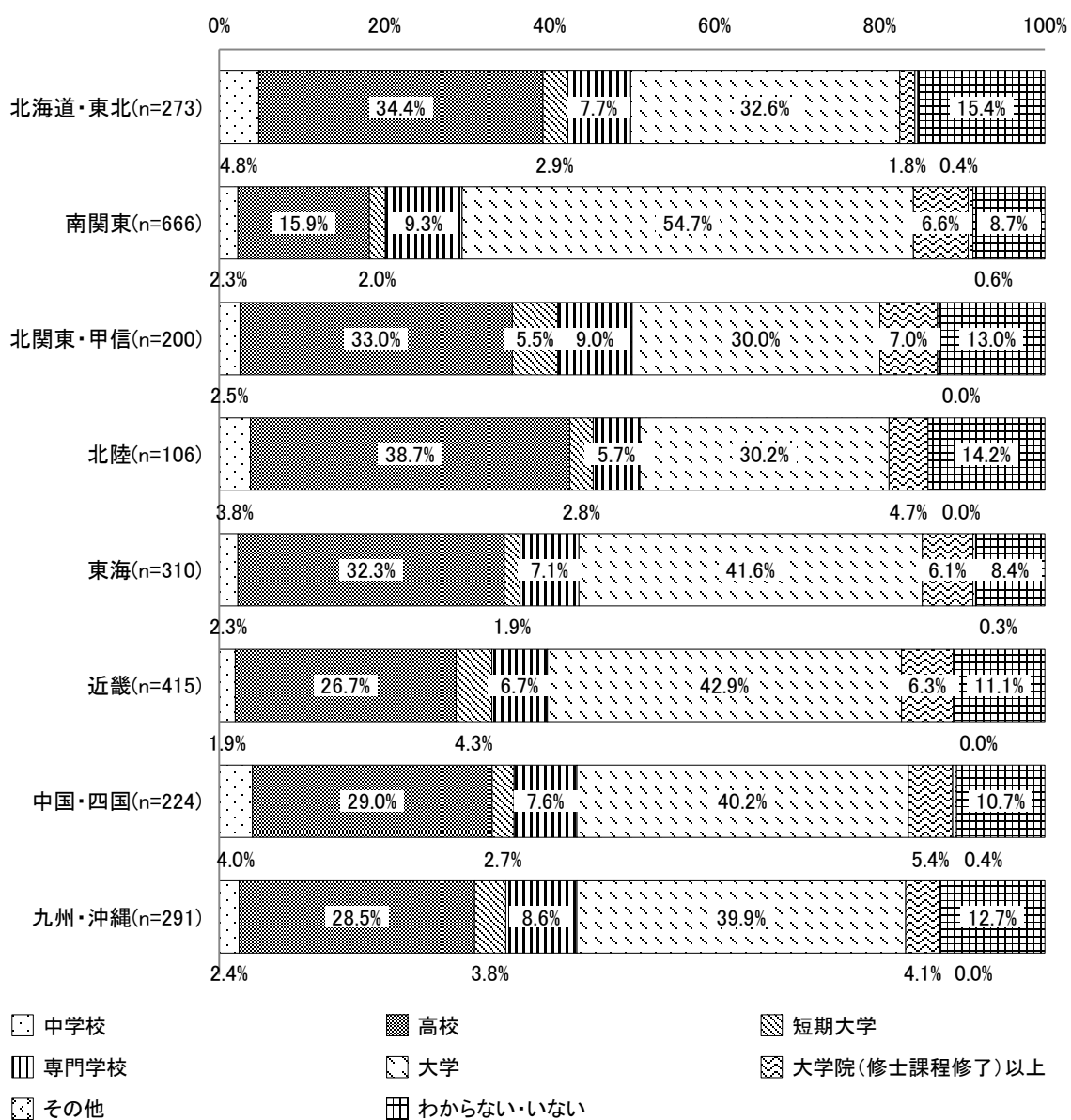
図表 56 父親の最終学歴：単数回答（Q13_2）



図表 57 人口規模別 父親の最終学歴（女性）：単数回答（Q6×Q13_2）



図表 58 居住地域別 父親の最終学歴（女性）：単数回答（Q5×Q13_2）



（４）保護者が卒業した学部

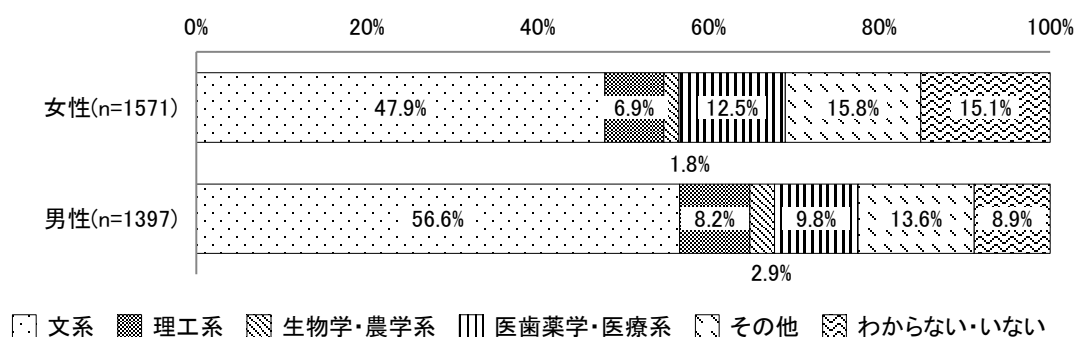
①母親

母親の最終学歴について、「短期大学」「専門学校」「大学」「大学院（修士課程修了）以上」のいずれかに回答した人について、母親が卒業した学部をみると、女性では、「文系」が 47.9% でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 15.8% となっている。男性では、「文系」が 56.6% でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 13.6% となっている。

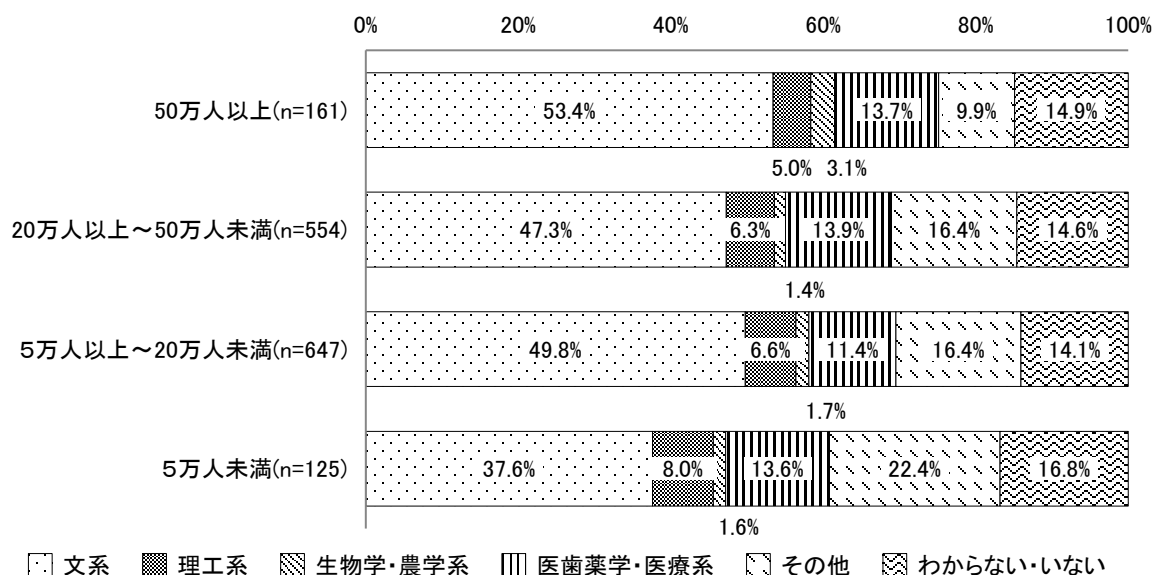
また、女性について、人口規模別に母親の最終学歴をみると、「50 万人以上」では他と比べて「文系」の割合が高く、「5 万人未満」では「その他」の割合が高い傾向がみられる。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北陸」「中国・四国」で「医歯薬学・医療系」の割合が高い傾向がみられる。

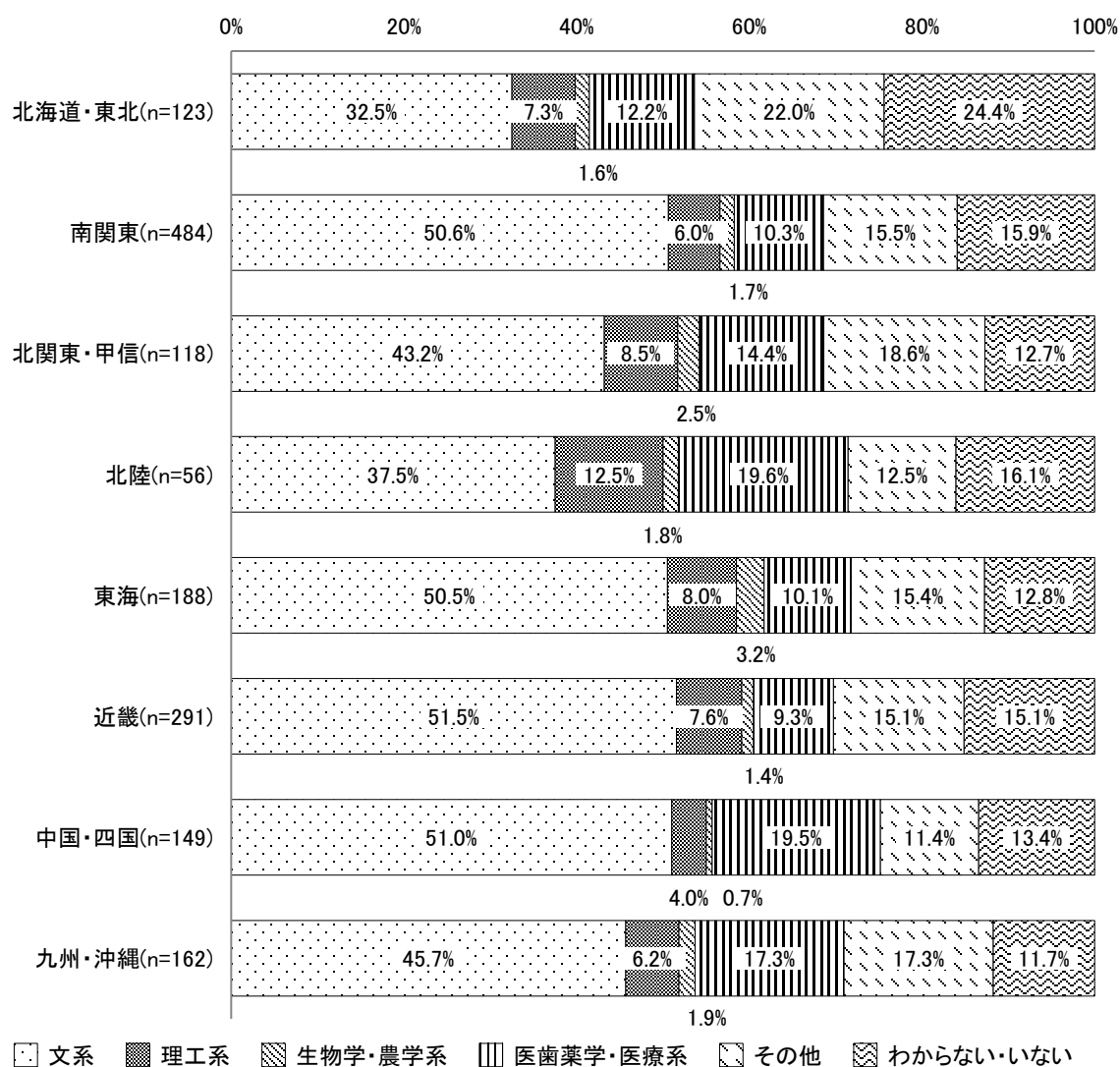
図表 59 母親の最終学歴_学部（専門科目）：単数回答（Q14_1）



図表 60 人口規模別 母親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q6×Q14_1）



図表 61 居住地域別 母親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q5×Q14_1）



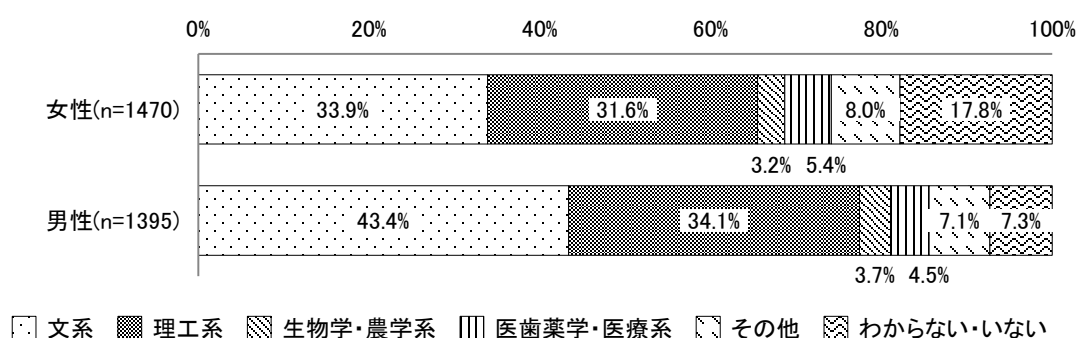
②父親

父親の最終学歴について、「短期大学」「専門学校」「大学」「大学院（修士課程修了）以上」のいずれかに回答した人について、父親が卒業した学部をみると、女性では、「文系」が 33.9%でもっとも割合が高く、次いで「理工系」が 31.6%となっている。男性では、「文系」が 43.4%でもっとも割合が高く、次いで「理工系」が 34.1%となっている。

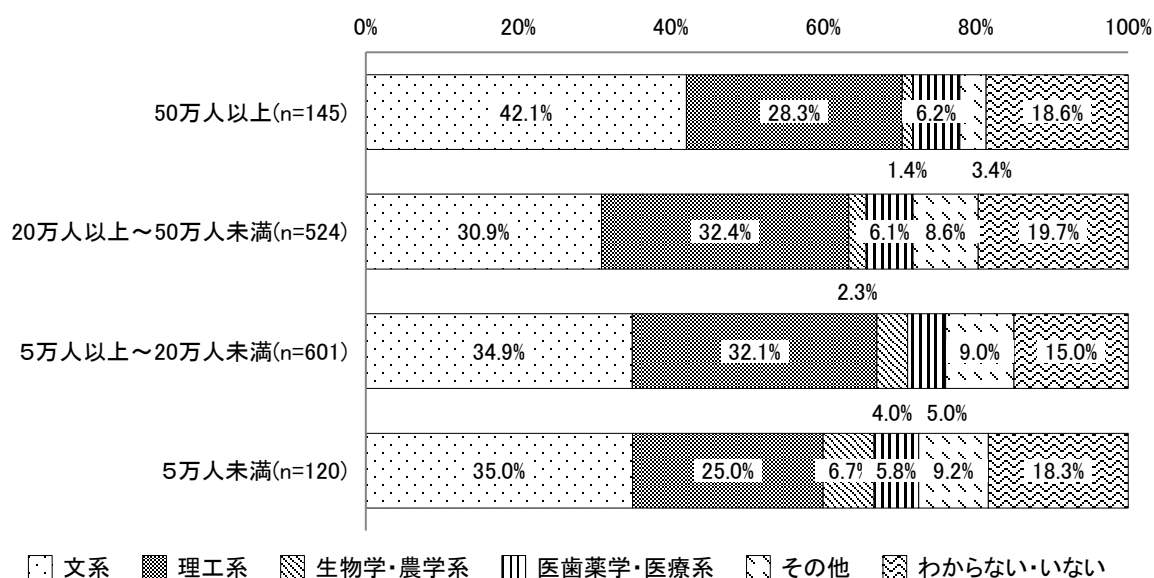
また、女性について、人口規模別に父親の最終学歴をみると、「50 万人以上」で「文系」が 42.1%と他と比べて高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北関東・甲信」「東海」で「理工系」が 42.7%、38.6%とそれぞれ割合が高くなっている。

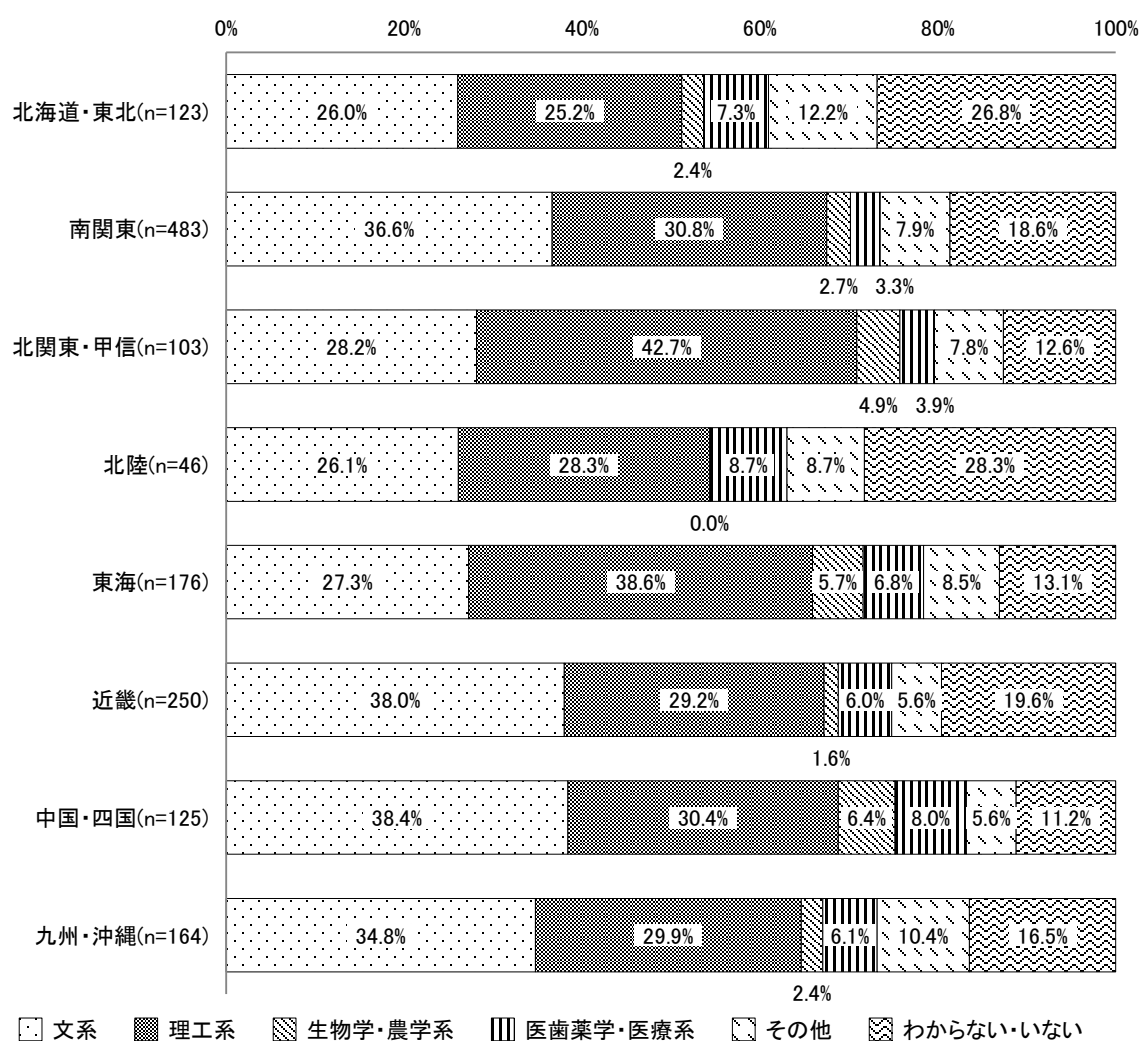
図表 62 父親の最終学歴_学部（専門科目）：単数回答（Q14_2）



図表 63 人口規模別 父親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q6×Q14_2）



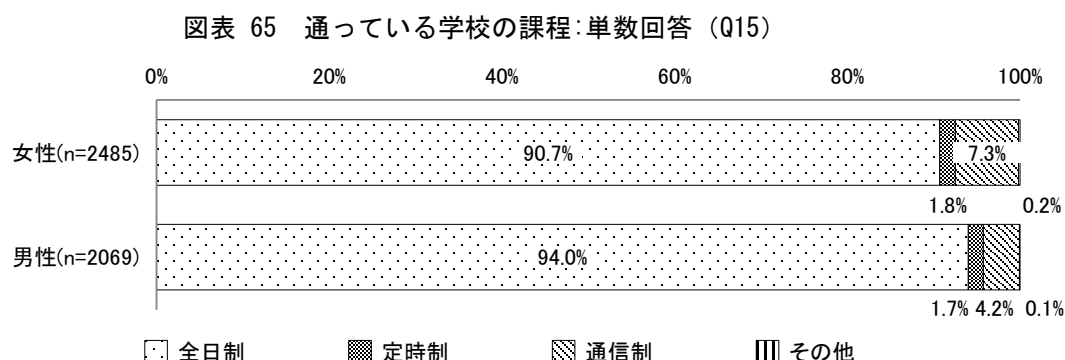
図表 64 居住地域別 父親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q5×Q14_2）



4-1-3. 理系・文系について

(1) 通っている学校の課程

女性では、「全日制」が90.7%でもっとも割合が高く、次いで「通信制」が7.3%となっている。
男性では、「全日制」が94.0%でもっとも割合が高く、次いで「通信制」が4.2%となっている。

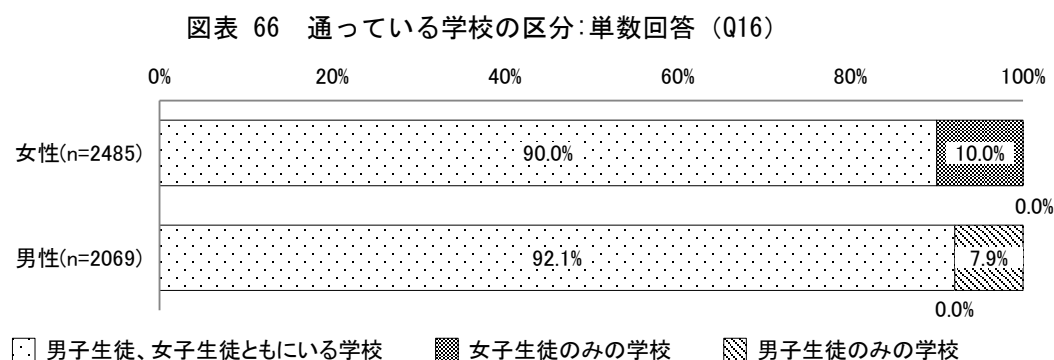


(2) 通っている学校の区分

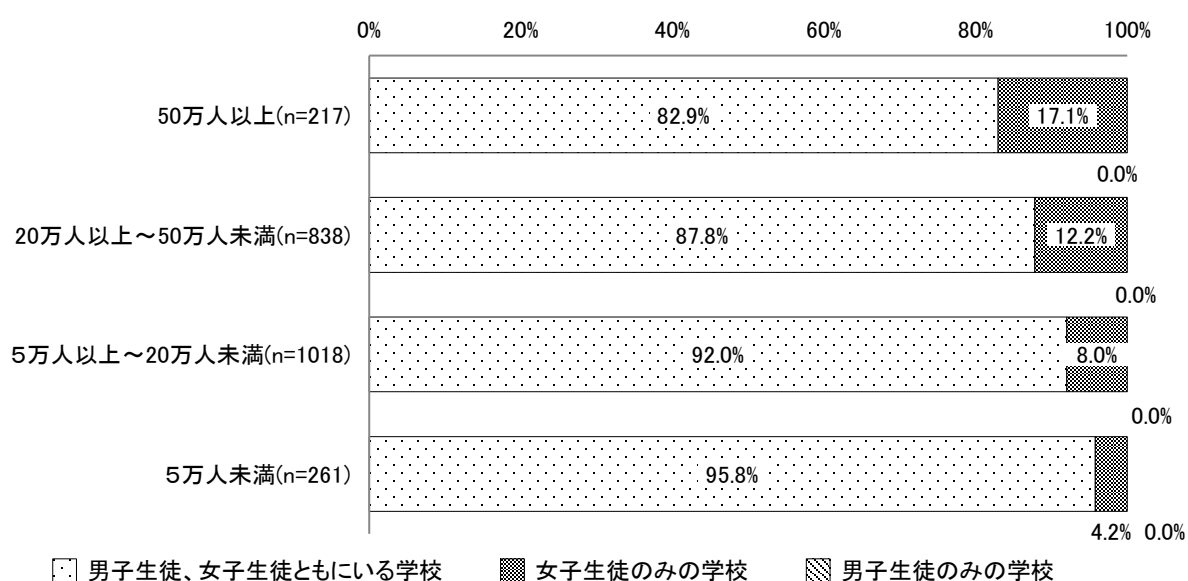
女性では、「男子生徒、女子生徒ともにいる学校」が90.0%、「女子生徒のみの学校」が10.0%となっている。男性では、「男子生徒、女子生徒ともにいる学校」が92.1%、「男子生徒のみの学校」が7.9%となっている。

また、女性について、人口規模別に通っている学校の区分をみると、規模が大きくなるほど「女子生徒のみの学校」の割合が高く、規模が小さくなるほど「男子生徒、女子生徒ともにいる学校」の割合が高い傾向がみられる。

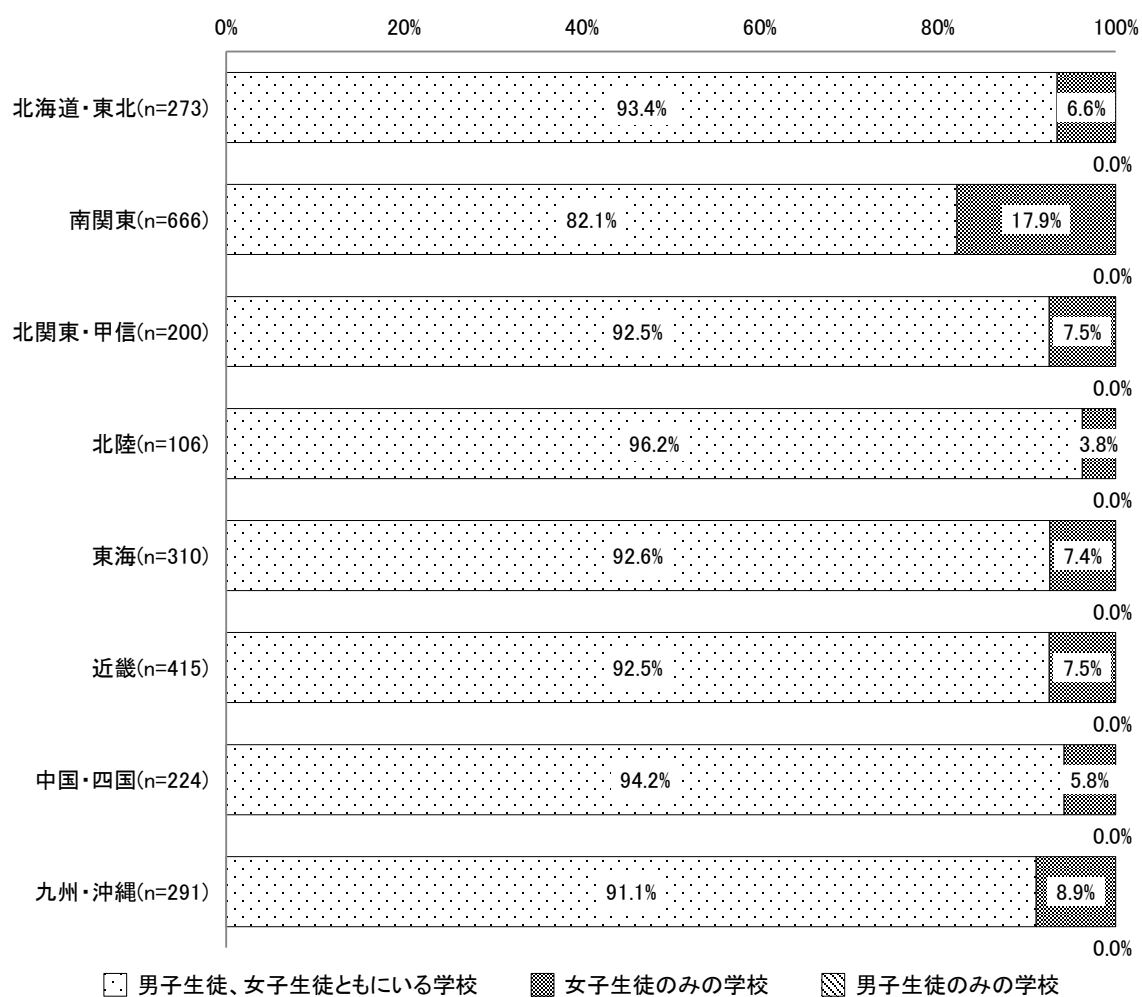
同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「女子生徒のみの学校」の割合が17.9%と高くなっている。



図表 67 人口規模別 通っている学校の区分（女性）：単数回答（Q6×Q16）



図表 68 居住地域別 通っている学校の区分（女性）：単数回答（Q5×Q16）

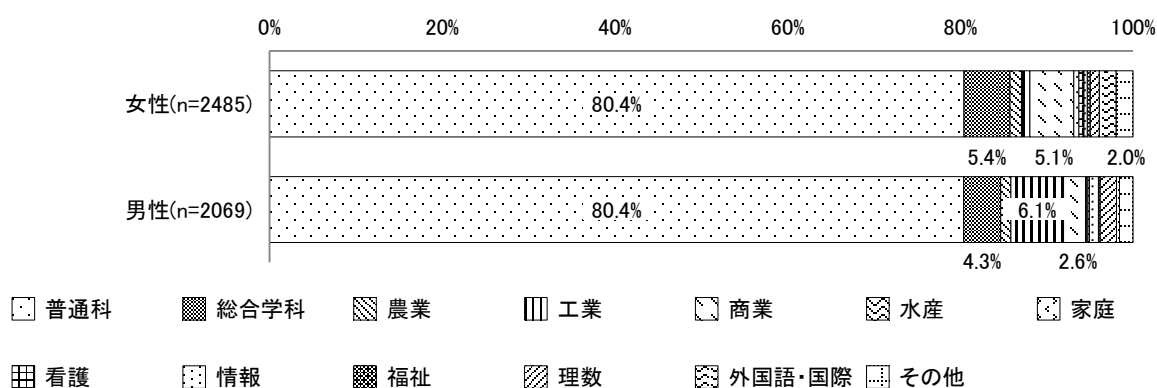


（３）通っている学校の学科

女性では、「普通科」が 80.4%でもっとも割合が高く、次いで「総合学科」が 5.4%となっている。男性では、「普通科」が 80.4%でもっとも割合が高く、次いで「工業」が 6.1%となっている。

また、女性について、人口規模別に通っている学校の学科をみると、「50 万人以上」において「普通科」の割合が高い傾向がみられる。

図表 69 通っている学校の学科:単数回答 (Q17)



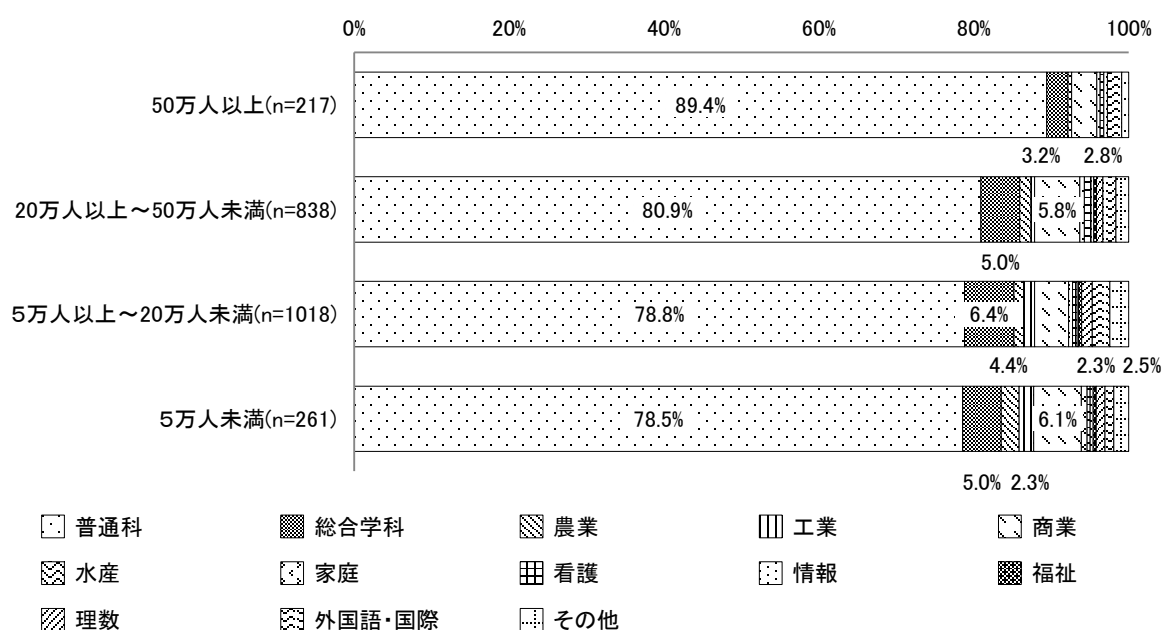
注) グラフ中では、割合の小さいものについて表示を省略している。

<数値表>

	合計	Q17 通っている学校の学科						
		普通科	総合学科	農業	工業	商業	水産	家庭
女性	2,485	80.4	5.4	1.3	1.0	5.1	0.0	0.6
男性	2,069	80.4	4.3	1.2	6.1	2.6	0.1	0.1

	合計	Q17 通っている学校の学科					
		看護	情報	福祉	理数	外国語・国際	その他
女性	2,485	0.6	0.4	0.4	1.0	1.9	2.0
男性	2,069	0.1	1.1	0.2	1.9	0.3	1.6

図表 70 人口規模別 通っている学校の学科（女性）：単数回答（Q6×Q17）



注）グラフ中では、割合の小さいものについて表示を省略している。

<数値表>

	合計	Q17 通っている学校の学科						
		普通科	総合学科	農業	工業	商業	水産	家庭
50万人以上	217	89.4	2.8	0.5	0.0	3.2	0.0	0.5
20万人以上～50万人未満	838	80.9	5.0	1.4	0.5	5.8	0.0	0.6
5万人以上～20万人未満	1,018	78.8	6.4	1.3	1.4	4.4	0.0	0.5
5万人未満	261	78.5	5.0	2.3	1.9	6.1	0.0	0.8

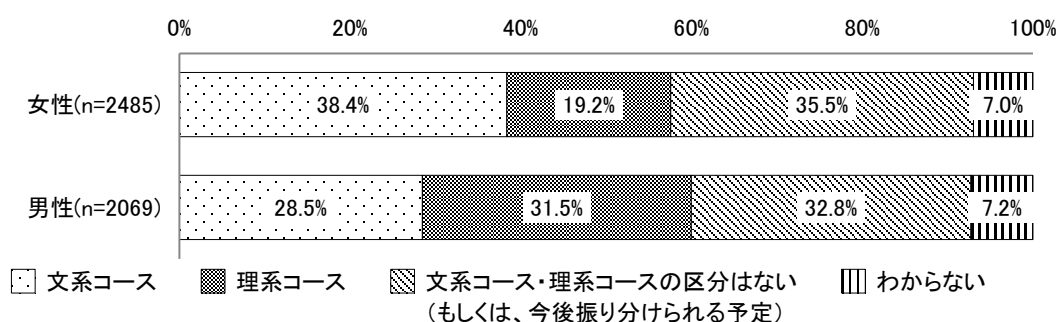
	合計	Q17 通っている学校の学科					
		看護	情報	福祉	理数	外国語・国際	その他
50万人以上	217	0.5	0.5	0.0	0.0	1.8	0.9
20万人以上～50万人未満	838	0.8	0.4	0.4	0.8	1.7	1.7
5万人以上～20万人未満	1,018	0.6	0.2	0.4	1.4	2.3	2.5
5万人未満	261	0.4	0.4	0.4	1.1	1.1	1.9

(4) 所属するコース

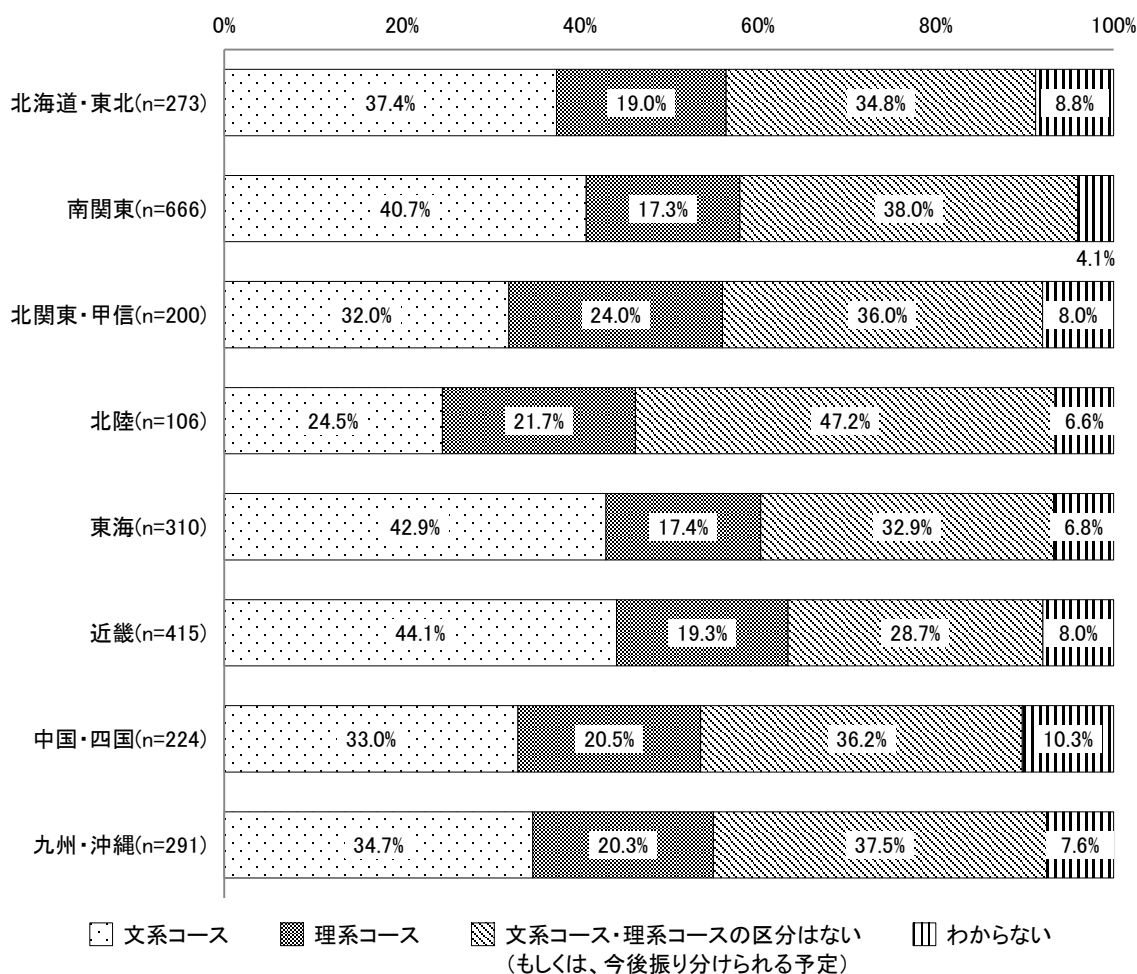
女性では、「文系コース」が38.4%でもっとも割合が高く、次いで「文系コース・理系コースの区分はない（もしくは、今後振り分けられる予定）」が35.5%となっている。男性では、「文系コース・理系コースの区分はない（もしくは、今後振り分けられる予定）」が32.8%でもっとも割合が高く、次いで「理系コース」が31.5%となっている。男女を比べると、女性は「文系コース」、男性は「理系コース」に所属する割合がそれぞれ高い傾向がみられる。

また、女性について居住地域別にみると、他と比べて「北陸」で「文系コース・理系コースの区分はない（もしくは、今後振り分けられる予定）」の割合が47.2%と高くなっている。

図表 71 所属するコース：単数回答（Q18）



図表 72 居住地域別 所属するコース（女性）：単数回答（Q5×Q18）

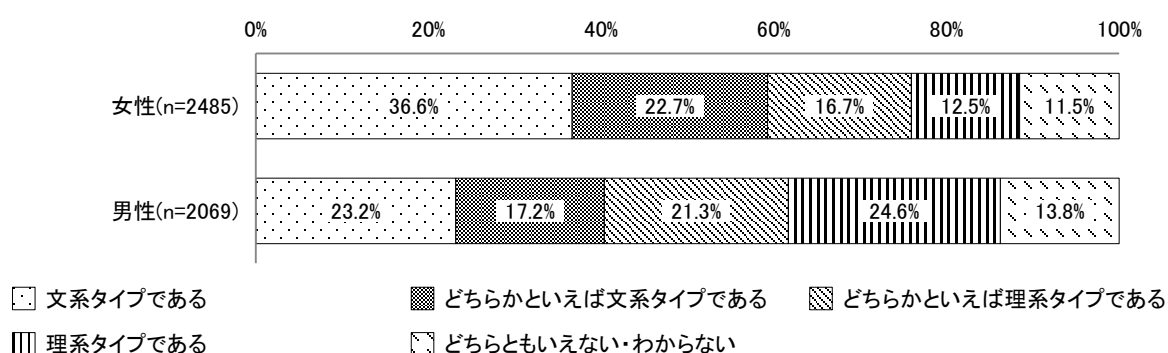


（５）文理タイプ

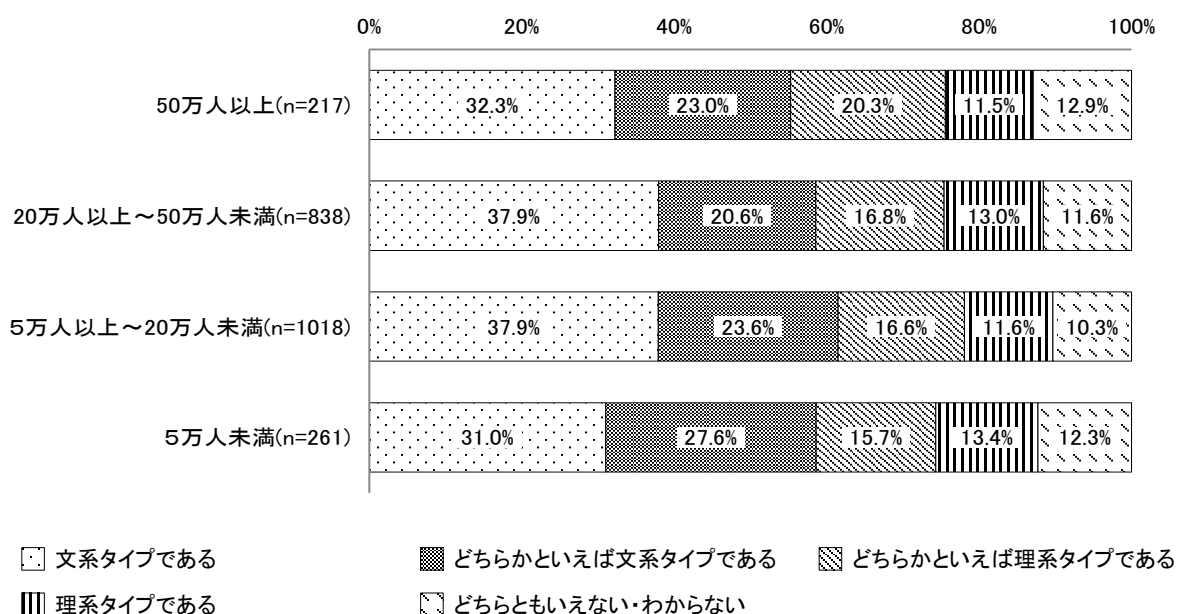
女性では、「文系タイプである」が 36.6%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば文系タイプである」が 22.7%となっている。男性では、「理系タイプである」が 24.6%でもっとも割合が高く、次いで「文系タイプである」が 23.2%となっている。男女を比べると、女性は「文系タイプである（どちらかといえば文系タイプを含む）」、男性は「理系タイプである（どちらかといえば理系タイプを含む）」とする割合がそれぞれ高い傾向がみられる。

また、女性について、人口規模別に文理タイプをみると、「50 万人以上」では他と比べて、「どちらかといえば理系タイプである」の割合がやや高い傾向がみられる。ただし、人口規模による差はあまりみられない。

図表 73 文理タイプ：単数回答（Q19）



図表 74 人口規模別 文理タイプ（女性）：単数回答（Q6×Q19）



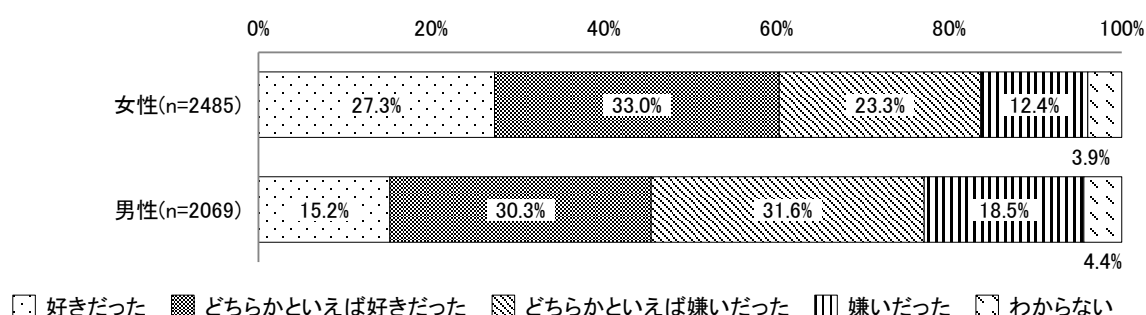
（６）中学生の頃に勉強することが好きだった科目

①中学生の頃に「国語（現代文・古典など）」が好きだったか

女性では、「どちらかといえば好きだった」が 33.0%でもっとも割合が高く、次いで「好きだった」が 27.3%となっている。男性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 31.6%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 30.3%となっている。

女性のほうが男性よりも、国語（現代文・古典など）が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 75 中学生の頃に「国語（現代文・古典など）」が好きだったか：単数回答（Q20_1）



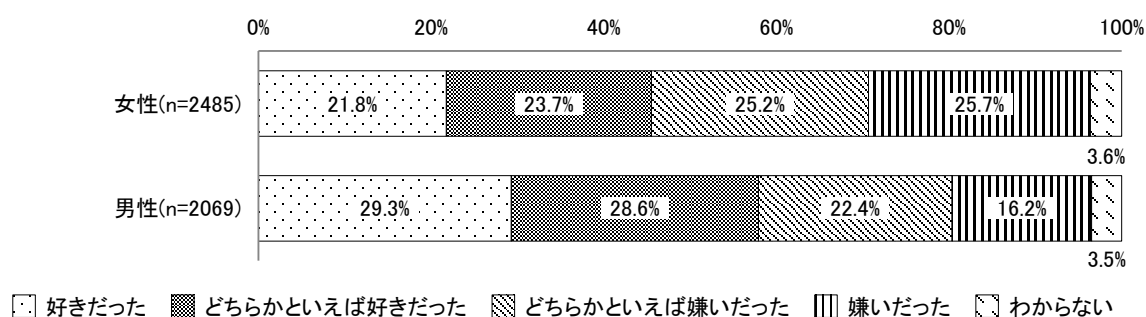
注) ①～⑧について、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。

②中学生の頃に「数学」が好きだったか

女性では、「嫌いだった」が 25.7%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 25.2%となっている。男性では、「好きだった」が 29.3%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 28.6%となっている。

男性のほうが女性よりも、数学が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 76 中学生の頃に「数学」が好きだったか：単数回答（Q20_2）

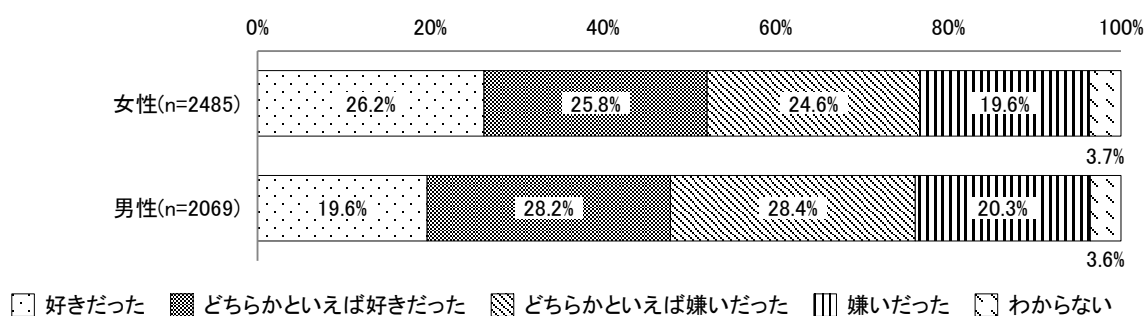


③中学生の頃に「英語」が好きだったか

女性では、「好きだった」が 26.2%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 25.8%となっている。男性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 28.4%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 28.2%となっている。

女性のほうが男性よりも、英語が「好きだった」割合が高い傾向がみられる。

図表 77 中学生の頃に「英語」が好きだったか：単数回答（Q20_3）

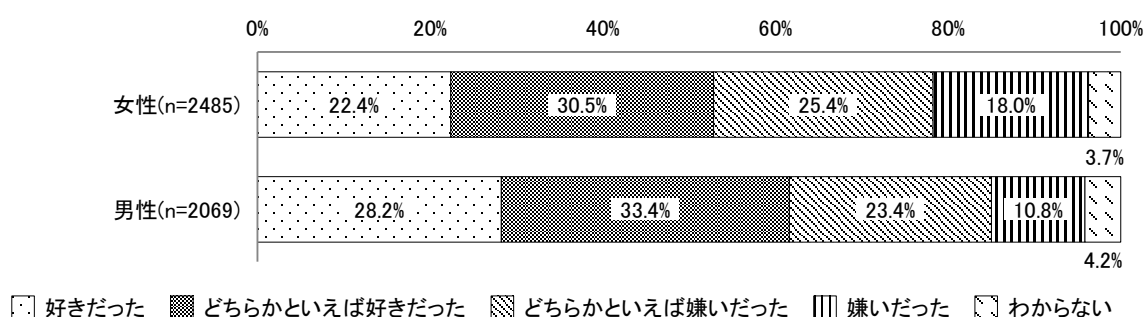


④中学生の頃に「社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）」が好きだったか

女性では、「どちらかといえば好きだった」が 30.5%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 25.4%となっている。男性では、「どちらかといえば好きだった」が 33.4%でもっとも割合が高く、次いで「好きだった」が 28.2%となっている。

男性のほうが女性よりも、社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 78 中学生の頃に「社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）」が好きだったか：単数回答（Q20_4）

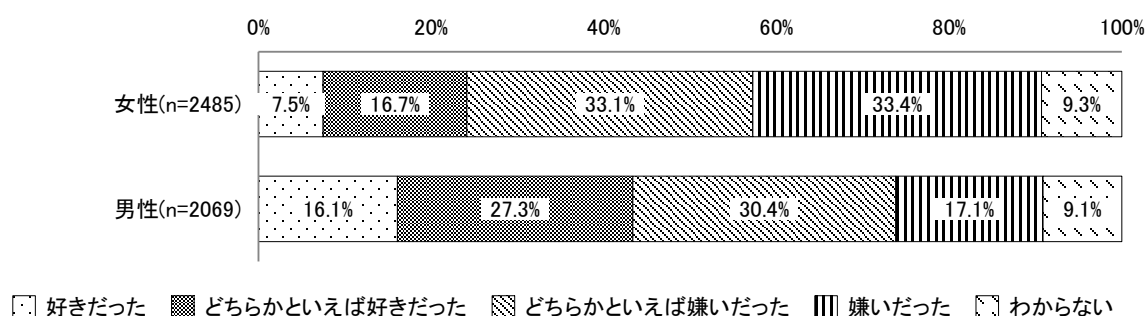


⑤中学生の頃に「物理」が好きだったか

女性では、「嫌いだった」が 33.4%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 33.1%となっている。男性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 30.4%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 27.3%となっている。

男性のほうが女性よりも、物理が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 79 中学生の頃に「物理」が好きだったか:単数回答 (Q20_5)

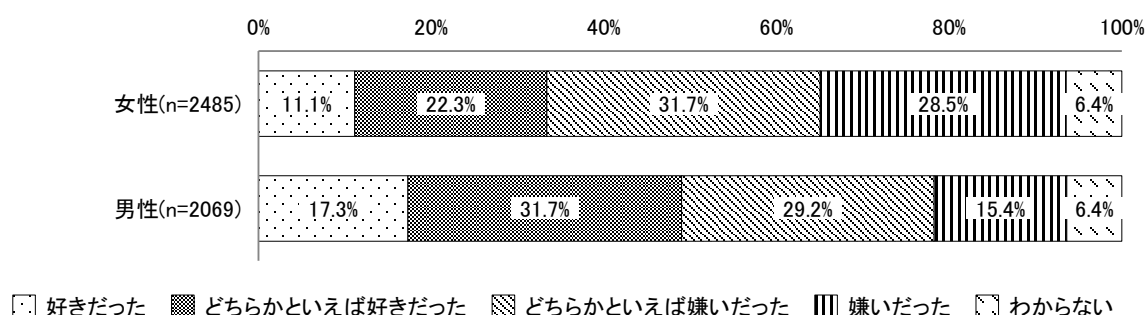


⑥中学生の頃に「化学」が好きだったか

女性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 31.7%でもっとも割合が高く、次いで「嫌いだった」が 28.5%となっている。男性では、「どちらかといえば好きだった」が 31.7%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 29.2%となっている。

男性のほうが女性よりも、化学が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 80 中学生の頃に「化学」が好きだったか:単数回答 (Q20_6)

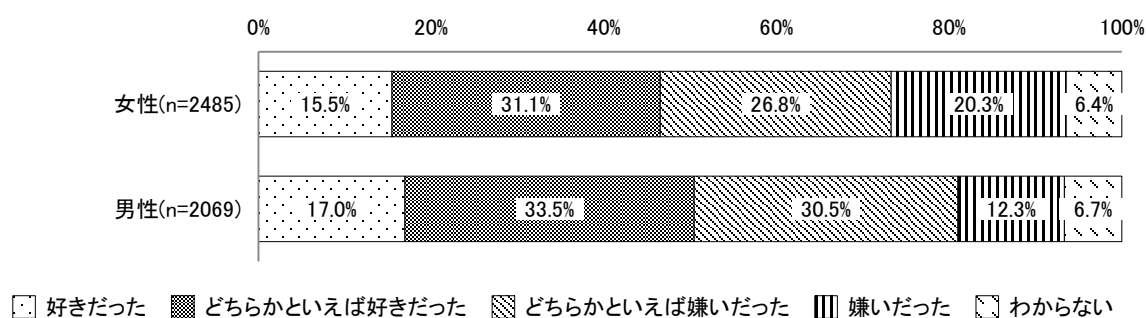


⑦中学生の頃に「生物」が好きだったか

女性では、「どちらかといえば好きだった」が 31.1%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 26.8%となっている。男性では、「どちらかといえば好きだった」が 33.5%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば嫌いだった」が 30.5%となっている。

生物が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合は、男女で大きな差はみられない。

図表 81 中学生の頃に「生物」が好きだったか:単数回答 (Q20_7)

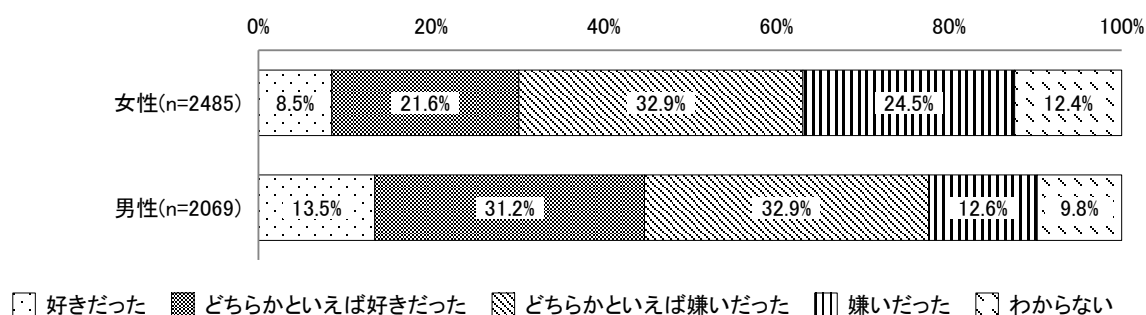


⑧中学生の頃に「地学」が好きだったか

女性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 32.9%でもっとも割合が高く、次いで「嫌いだった」が 24.5%となっている。男性では、「どちらかといえば嫌いだった」が 32.9%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえば好きだった」が 31.2%となっている。

男性のほうが女性よりも、地学が「好きだった（どちらかといえば好きだったを含む）」割合が高い傾向がみられる。

図表 82 中学生の頃に「地学」が好きだったか:単数回答 (Q20_8)



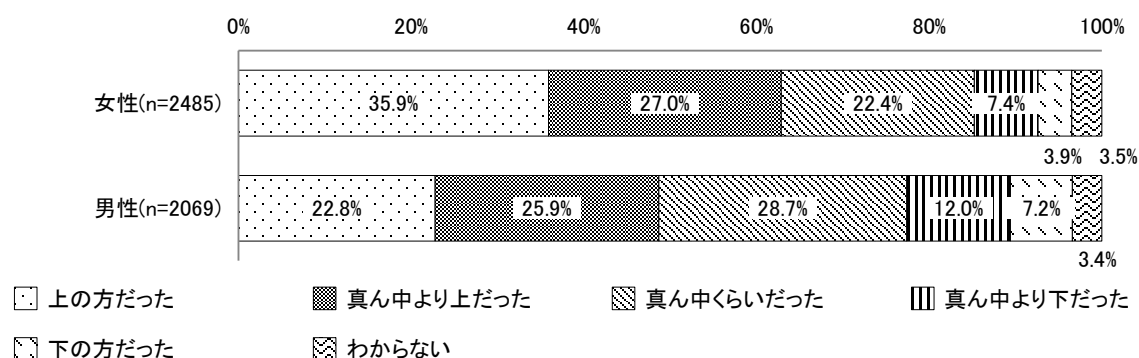
（７）中学生の頃の成績

①中学生の頃の「国語（現代文・古典など）」の成績

女性では、「上の方だった」が35.9%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が27.0%となっている。男性では、「真ん中くらいだった」が28.7%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が25.9%となっている。

女性のほうが男性よりも、国語（現代文・古典など）の成績が「上の方だった」割合が高い傾向がみられる。

図表 83 中学生の頃の「国語（現代文・古典など）」の成績：単数回答（Q21_1）



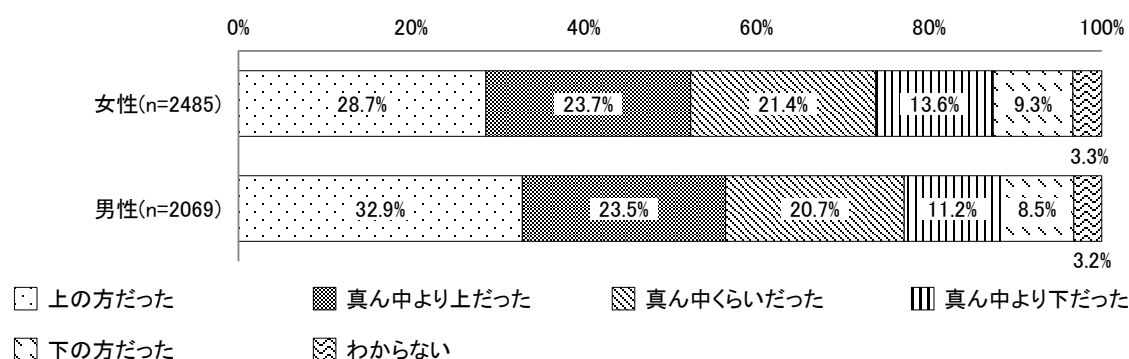
注) ①～⑧について、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。

②中学生の頃の「数学」の成績

女性では、「上の方だった」が28.7%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が23.7%となっている。男性では、「上の方だった」が32.9%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が23.5%となっている。

数学の成績については、男性のほうが「上の方だった」割合がやや高いものの、男女で大きな差はみられない。

図表 84 中学生の頃の「数学」の成績：単数回答（Q21_2）

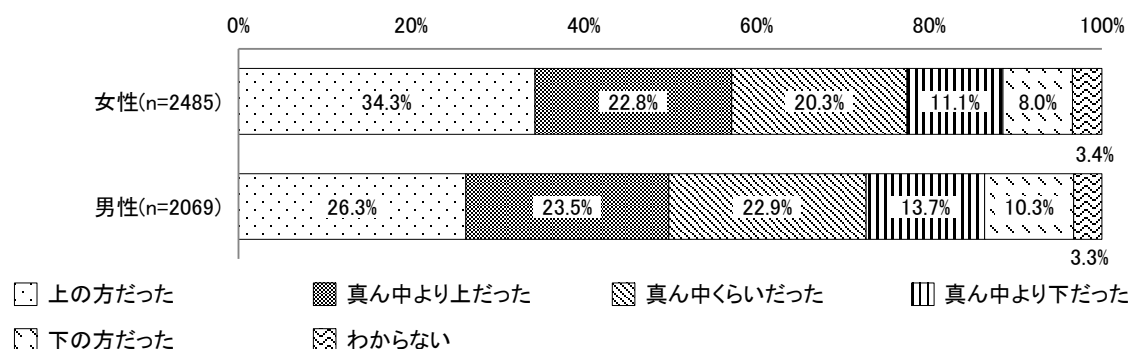


③中学生の頃の「英語」の成績

女性では、「上の方だった」が34.3%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が22.8%となっている。男性では、「上の方だった」が26.3%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が23.5%となっている。

女性のほうが男性よりも、英語の成績が「上の方だった」割合が高い傾向がみられる。

図表 85 中学生の頃の「英語」の成績：単数回答（Q21_3）

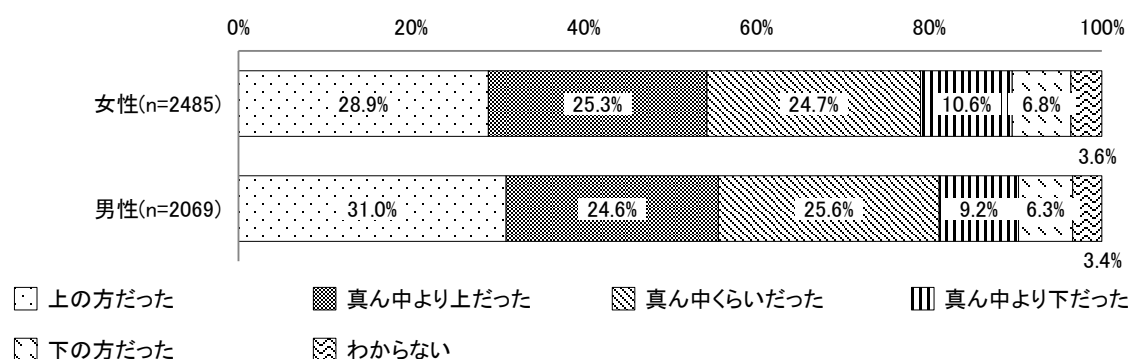


④中学生の頃の「社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）」の成績

女性では、「上の方だった」が28.9%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が25.3%となっている。男性では、「上の方だった」が31.0%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中くらいだった」が25.6%となっている。

社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）の成績については、男女で大きな差はみられない。

図表 86 中学生の頃の「社会（日本史・世界史・地理・倫理・政治経済など）」の成績：単数回答（Q21_4）

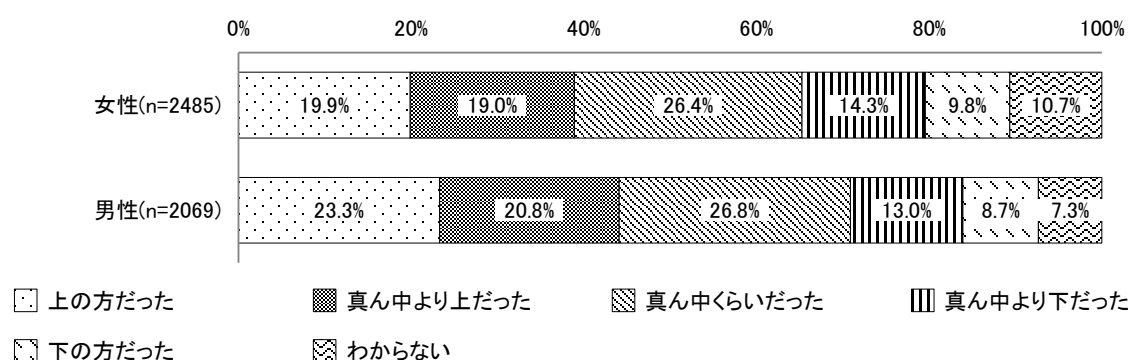


⑤中学生の頃の「物理」の成績

女性では、「真ん中くらいだった」が26.4%でもっとも割合が高く、次いで「上の方だった」が19.9%となっている。男性では、「真ん中くらいだった」が26.8%でもっとも割合が高く、次いで「上の方だった」が23.3%となっている。

物理の成績については、男性のほうが「上の方だった」割合がやや高いものの、男女で大きな差はみられない。

図表 87 中学生の頃の「物理」の成績：単数回答（Q21_5）

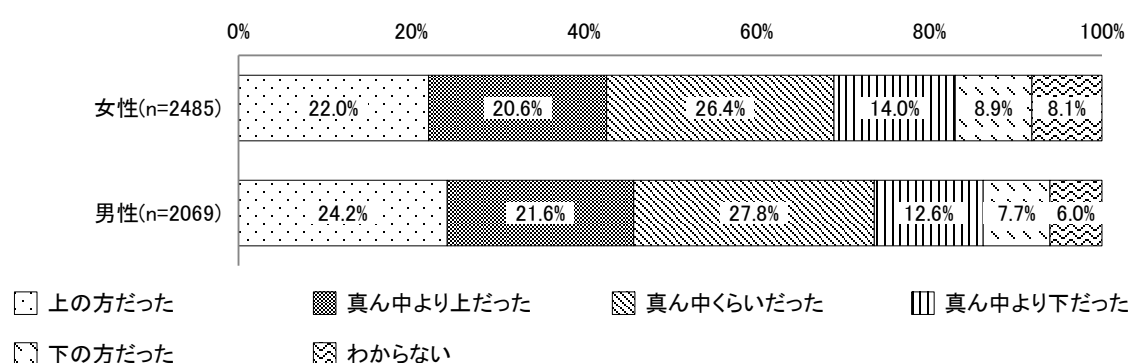


⑥中学生の頃の「化学」の成績

女性では、「真ん中くらいだった」が26.4%でもっとも割合が高く、次いで「上の方だった」が22.0%となっている。男性では、「真ん中くらいだった」が27.8%でもっとも割合が高く、次いで「上の方だった」が24.2%となっている。

化学の成績については、男女で大きな差はみられない。

図表 88 中学生の頃の「化学」の成績：単数回答（Q21_6）

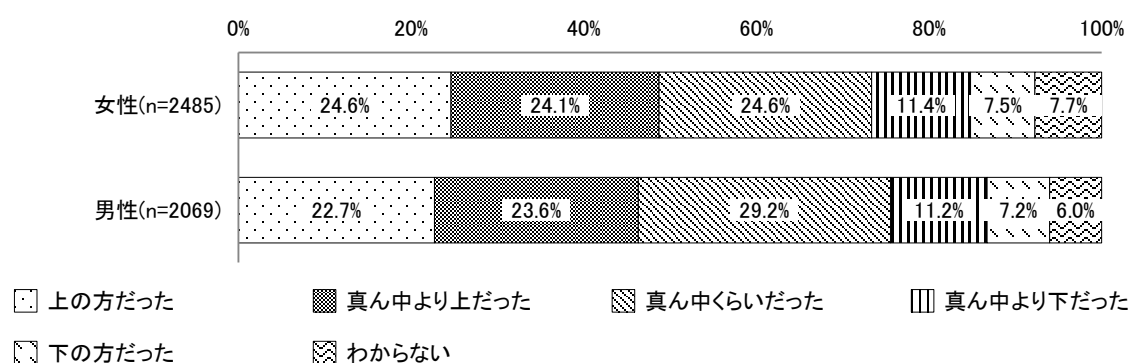


⑦中学生の頃の「生物」の成績

女性では、「上の方だった」「真ん中くらいだった」が24.6%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が24.1%となっている。男性では、「真ん中くらいだった」が29.2%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が23.6%となっている。

生物の成績については、男女で大きな差はみられない。

図表 89 中学生の頃の「生物」の成績：単数回答（Q21_7）

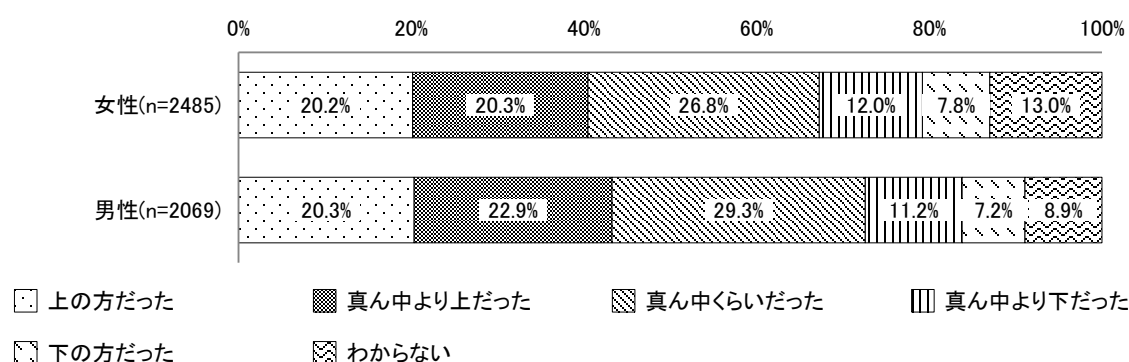


⑧中学生の頃の「地学」の成績

女性では、「真ん中くらいだった」が26.8%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が20.3%となっている。男性では、「真ん中くらいだった」が29.3%でもっとも割合が高く、次いで「真ん中より上だった」が22.9%となっている。

地学の成績については、男女で大きな差はみられない。

図表 90 中学生の頃の「地学」の成績：単数回答（Q21_8）

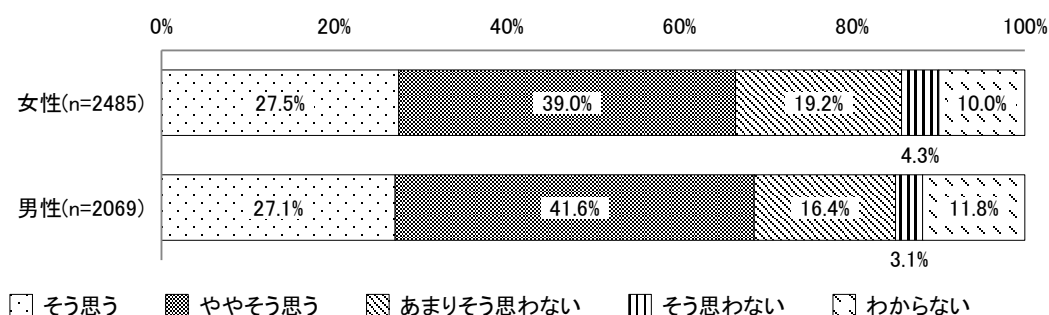


（８）理系のイメージ

①「理系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が 39.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 27.5%となっている。男性では、「ややそう思う」が 41.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 27.1%となっている。

図表 91 「理系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか:単数回答 (Q22_1)

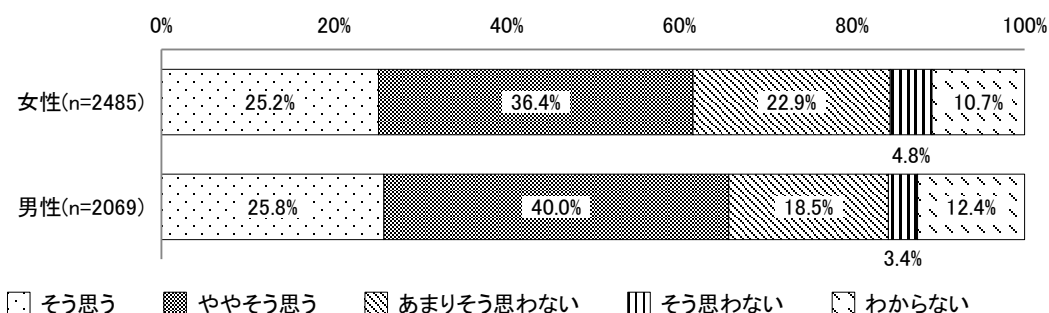


注) ①～⑧について、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。

②「理系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が 36.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 25.2%となっている。男性では、「ややそう思う」が 40.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 25.8%となっている。

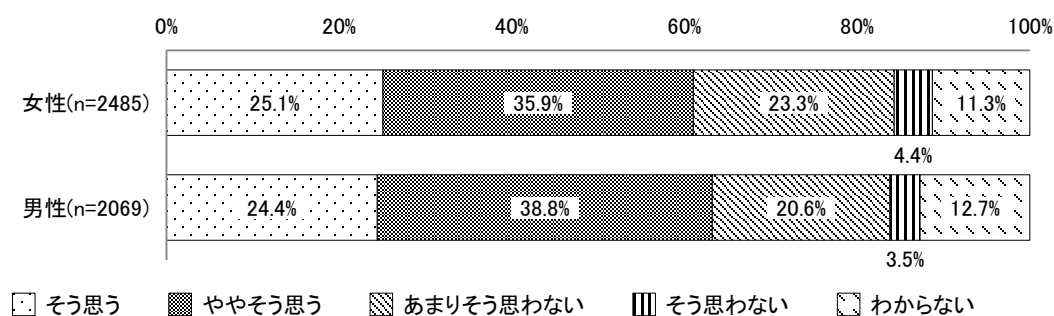
図表 92 「理系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか:単数回答 (Q22_2)



③「理系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が 35.9%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 25.1%となっている。男性では、「ややそう思う」が 38.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 24.4%となっている。

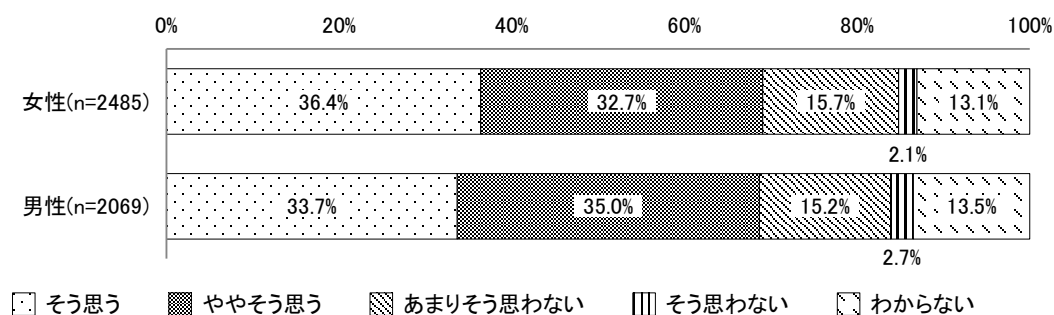
図表 93 「理系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか:単数回答 (Q22_3)



④「理系の学部は、学費が高い」と思うか

女性では、「そう思う」が 36.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が 32.7%となっている。男性では、「ややそう思う」が 35.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 33.7%となっている。

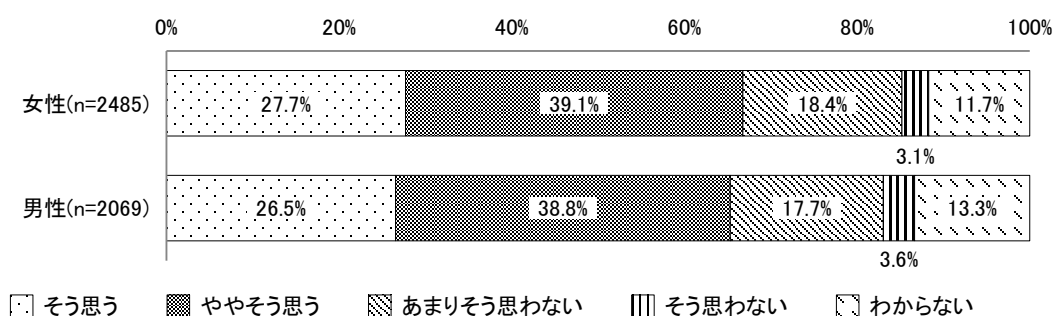
図表 94 「理系の学部は、学費が高い」と思うか:単数回答 (Q22_4)



⑤「理系科目を学んだ人の就職先は、男性が多い」と思うか

女性では、「ややそう思う」が 39.1%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 27.7%となっている。男性では、「ややそう思う」が 38.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 26.5%となっている。

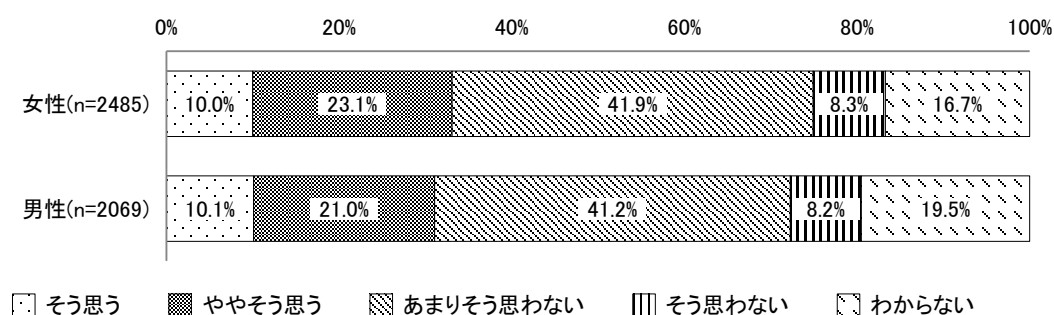
図表 95 「理系科目を学んだ人の就職先は、男性が多い」と思うか:単数回答 (Q22_5)



⑥「理系科目を学んだ人の就職先は、仕事と生活を両立しづらい」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が 41.9%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が 23.1%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が 41.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が 21.0%となっている。

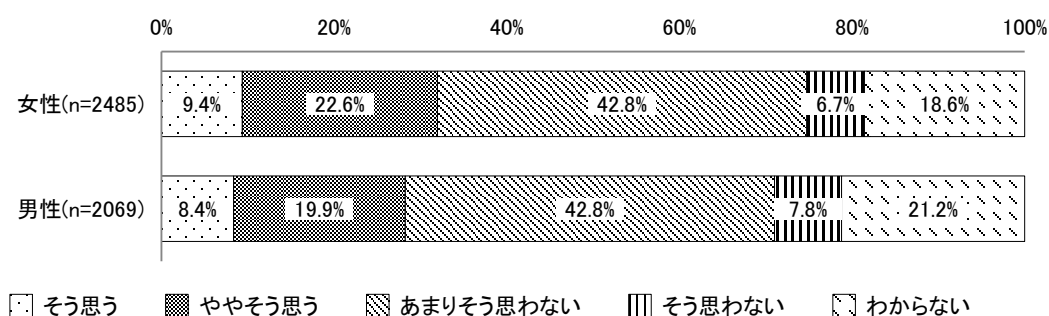
図表 96 「理系科目を学んだ人の就職先は、仕事と生活を両立しづらい」と思うか:単数回答 (Q22_6)



⑦「理系科目を学んだ人の就職先は、女性が活躍しやすい」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が 42.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が 22.6%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が 42.8%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 21.2%となっている。

図表 97 「理系科目を学んだ人の就職先は、女性が活躍しやすい」と思うか:単数回答 (Q22_7)

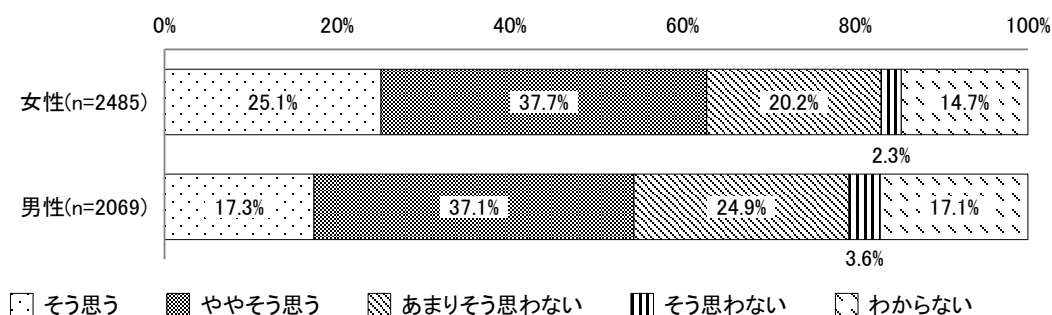


⑧「理系科目を学んだ人の就職先は、年収が高い」と思うか

女性では、「ややそう思う」が 37.7%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 25.1%となっている。男性では、「ややそう思う」が 37.1%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 24.9%となっている。

女性のほうが男性よりも、「そう思う」割合が高い傾向がみられる。

図表 98 「理系科目を学んだ人の就職先は、年収が高い」と思うか:単数回答 (Q22_8)



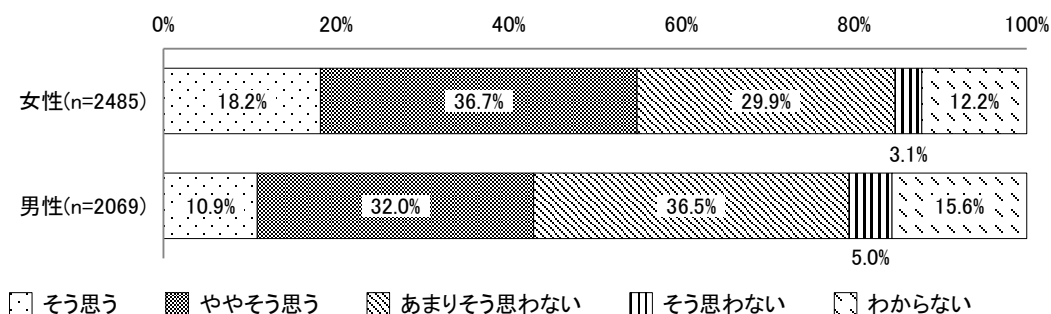
（９）文系のイメージ

①「文系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が36.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が29.9%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が36.5%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が32.0%となっている。

女性のほうが男性よりも、「そう思う」もしくは「ややそう思う」割合が高い傾向がみられる。

図表 99 「文系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか：単数回答（Q23_1）



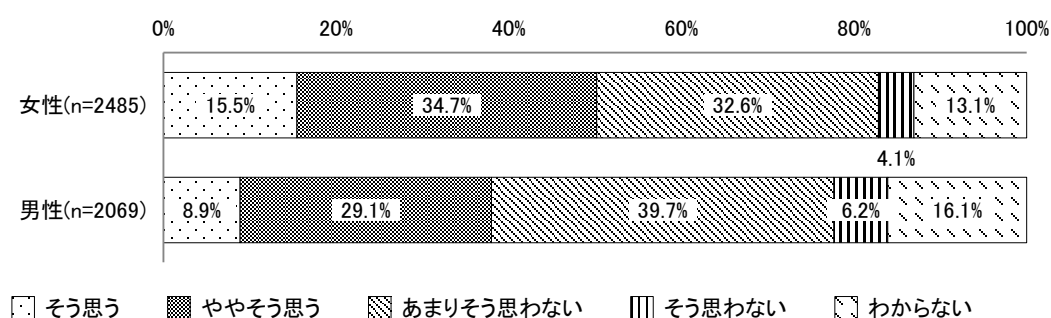
注) ①～⑧について、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。

②「文系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が34.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が32.6%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が39.7%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が29.1%となっている。

女性のほうが男性よりも、「そう思う」もしくは「ややそう思う」割合が高い傾向がみられる。

図表 100 「文系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか：単数回答（Q23_2）

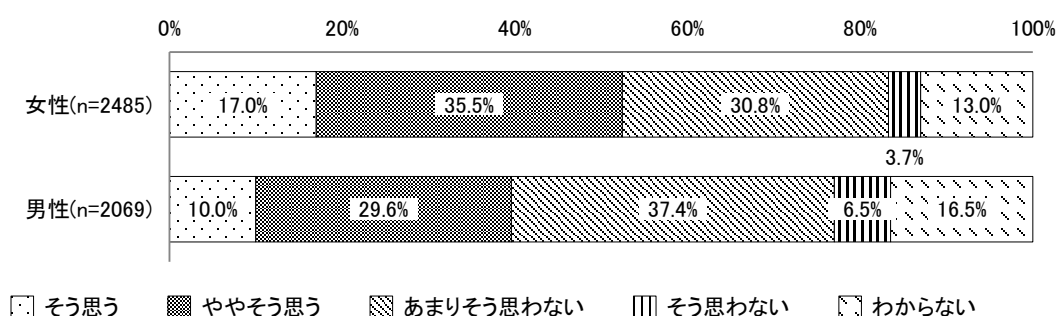


③「文系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか

女性では、「ややそう思う」が35.5%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.8%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が37.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が29.6%となっている。

女性のほうが男性よりも、「そう思う」もしくは「ややそう思う」割合が高い傾向がみられる。

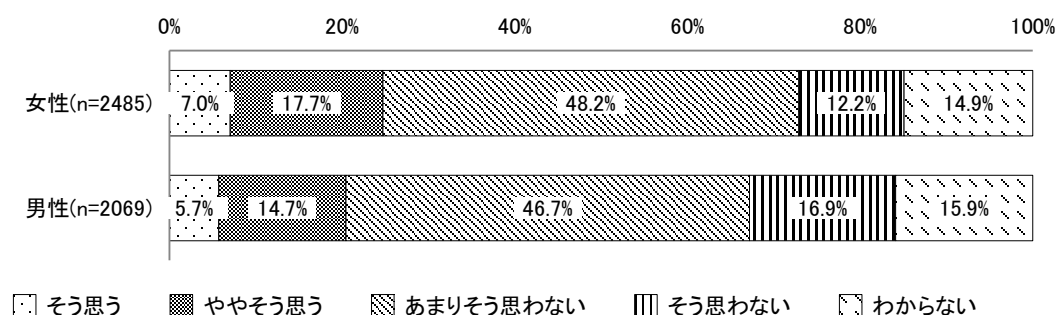
図表 101 「文系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか:単数回答 (Q23_3)



④「文系の学部は、学費が高い」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が48.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が17.7%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が46.7%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が16.9%となっている。

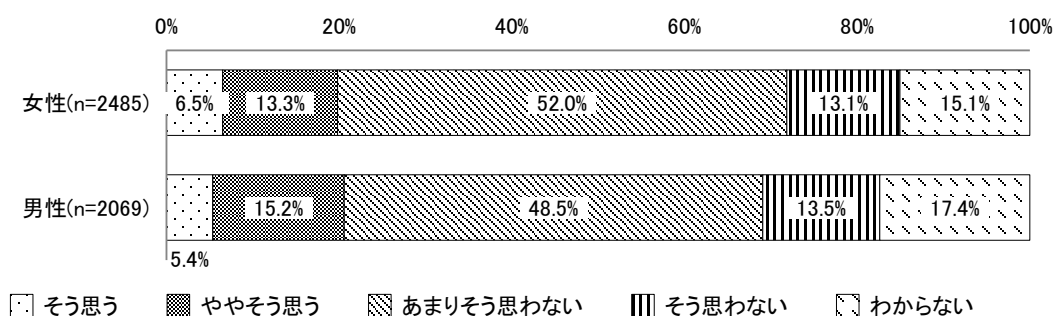
図表 102 「文系の学部は、学費が高い」と思うか:単数回答 (Q23_4)



⑤「文系科目を学んだ人の就職先は、男性が多い」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が 52.0%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 15.1%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が 48.5%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 17.4%となっている。

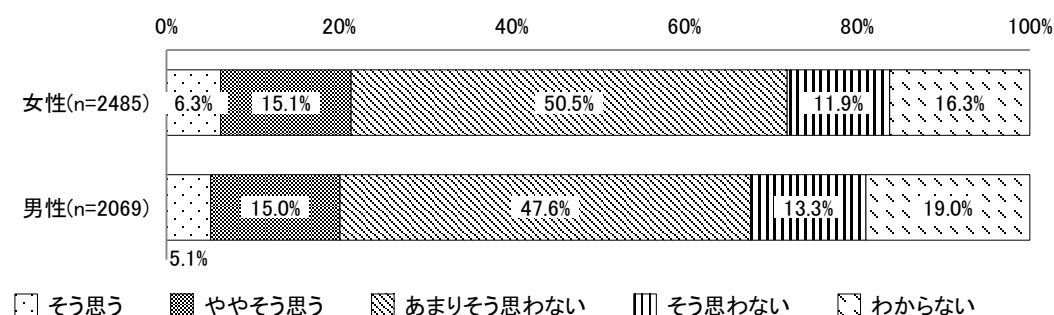
図表 103 「文系科目を学んだ人の就職先は、男性が多い」と思うか:単数回答 (Q23_5)



⑥「文系科目を学んだ人の就職先は、仕事と生活を両立しづらい」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が 50.5%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 16.3%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が 47.6%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 19.0%となっている。

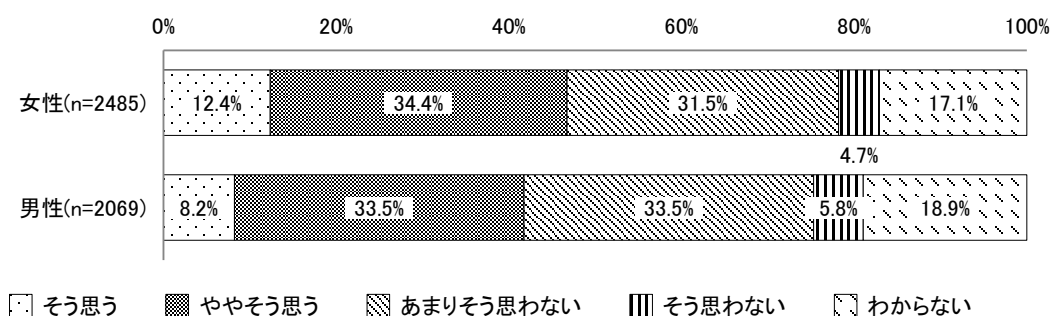
図表 104 「文系科目を学んだ人の就職先は、仕事と生活を両立しづらい」と思うか:単数回答 (Q23_6)



⑦「文系科目を学んだ人の就職先は、女性が活躍しやすい」と思うか

女性では、「ややそう思う」が34.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が31.5%となっている。男性では、「ややそう思う」「あまりそう思わない」が、ともに33.5%となっている。

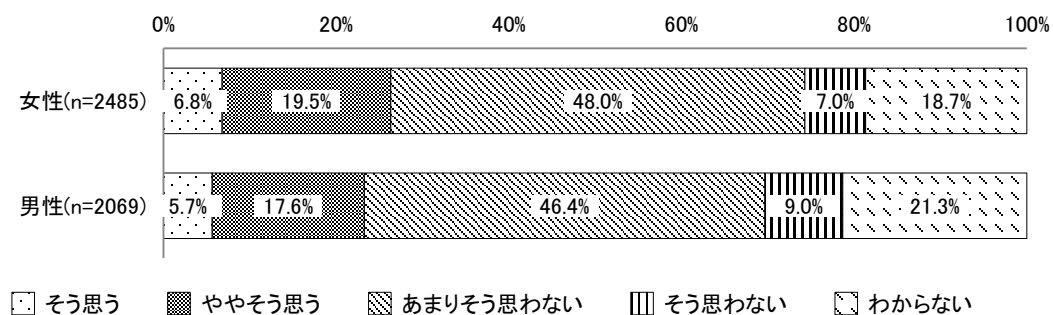
図表 105 「文系科目を学んだ人の就職先は、女性が活躍しやすい」と思うか:単数回答 (Q23_7)



⑧「文系科目を学んだ人の就職先は、年収が高い」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が48.0%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が19.5%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が46.4%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が21.3%となっている。

図表 106 「文系科目を学んだ人の就職先は、年収が高い」と思うか:単数回答 (Q23_8)



(10) 女性教員に教えてもらった経験

①女性教員に「数学」を教えてもらった経験

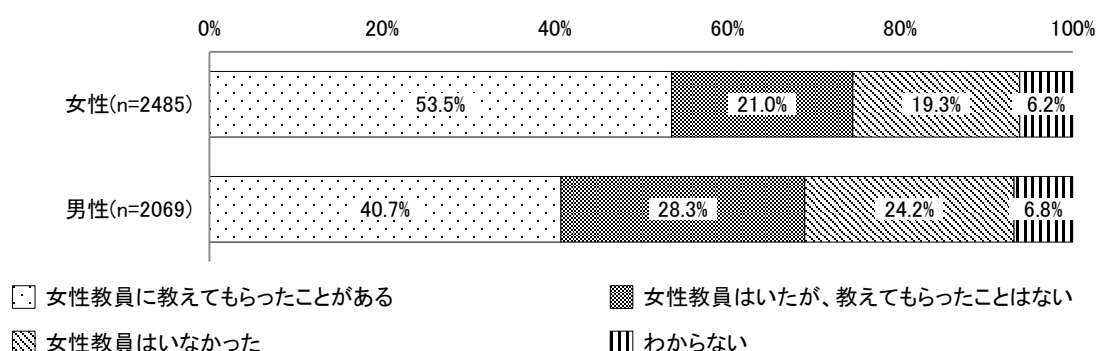
女性では、「女性教員に教えてもらったことがある」が 53.5%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいたが、教えてもらったことはない」が 21.0%となっている。男性では、「女性教員に教えてもらったことがある」が 40.7%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいたが、教えてもらったことはない」が 28.3%となっている。女性のほうが男性よりも、「女性教員に教えてもらったことがある」割合が高い傾向がみられる。

公立・私立別に「女性教員に教えてもらったことがある」割合をみると、公立では女性のほうが男性より約7ポイント、私立では同約22ポイント高くなっている。私立において差が大きいものの公立でも一定程度の差がみられており、女性のほうが、女性教員に教わったことをより記憶しているという可能性も考えられる。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「女性教員に教えてもらったことがある」が 59.4%と他と比べて割合が高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北陸」で「女性教員に教えてもらったことがある」割合が 63.2%と高くなっている。

図表 107 女性教員に「数学」を教えてもらった経験:単数回答 (Q24_1)



図表 108 公立・私立別 女性教員に「数学」を教えてもらった経験:単数回答 (Q7×Q24_1)

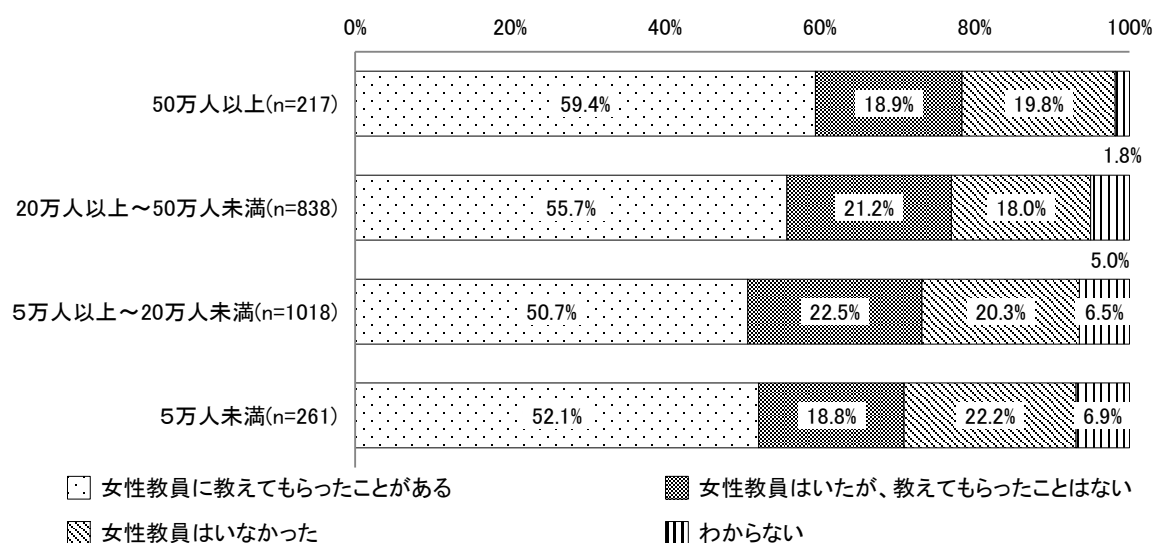
<公立>

	合計	Q24_1 女性教員に「数学」を教えてもらった経験			
		女性教員に教えてもらったことがある	女性教員はいたが、教えてもらったことはない	女性教員はいなかった	わからない
女性	1,450	50.3	22.3	21.8	5.7
男性	1,230	43.1	28.8	22.8	5.3

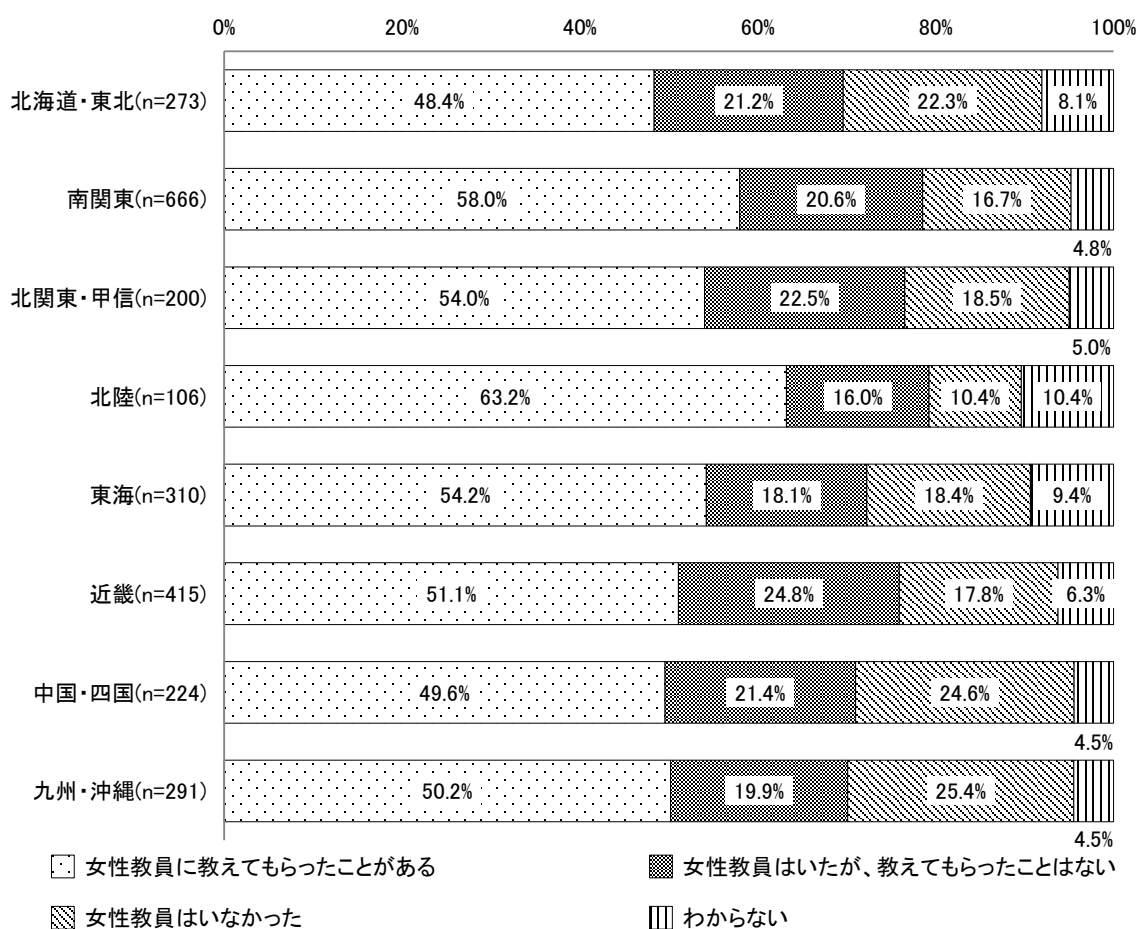
<私立>

	合計	Q24_1 女性教員に「数学」を教えてもらった経験			
		女性教員に教えてもらったことがある	女性教員はいたが、教えてもらったことはない	女性教員はいなかった	わからない
女性	906	57.6	19.6	16.1	6.6
男性	756	35.6	28.4	27.4	8.6

図表 109 人口規模別 女性教員に「数学」を教えてもらった経験（女性）：
単数回答（Q6×Q24_1）



図表 110 居住地域別 女性教員に「数学」を教えてもらった経験（女性）：
単数回答（Q5×Q24_1）



②女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験

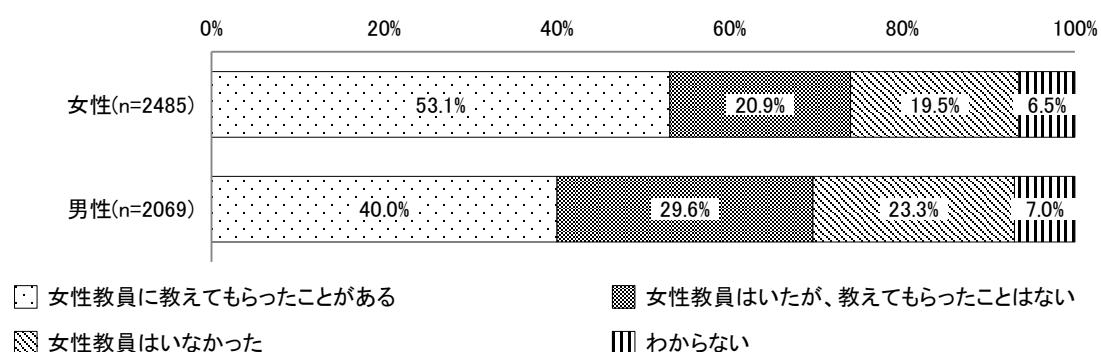
女性では、「女性教員に教えてもらったことがある」が 53.1%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいたが、教えてもらったことはない」が 20.9%となっている。男性では、「女性教員に教えてもらったことがある」が 40.0%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいたが、教えてもらったことはない」が 29.6%となっている。女性のほうが男性よりも、「女性教員に教えてもらったことがある」割合が高い傾向がみられる。

公立・私立別に「女性教員に教えてもらったことがある」割合をみると、公立では女性のほうが男性より約 9.5 ポイント、私立では同約 19 ポイント高くなっている。数学と同様に、私立において差が大きいものの公立でも一定程度の差がみられており、前述のとおり記憶効果の影響も考えられる。

また、女性について人口規模別にみると、「50 万人以上」で「女性教員に教えてもらったことがある」が 57.6%と他と比べて割合が高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「女性教員に教えてもらったことがある」が 60.5%と割合が高くなっている。

図表 111 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験：単数回答
(Q24_2)



図表 112 公立・私立別 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験：単数回答 (Q7×Q24_2)

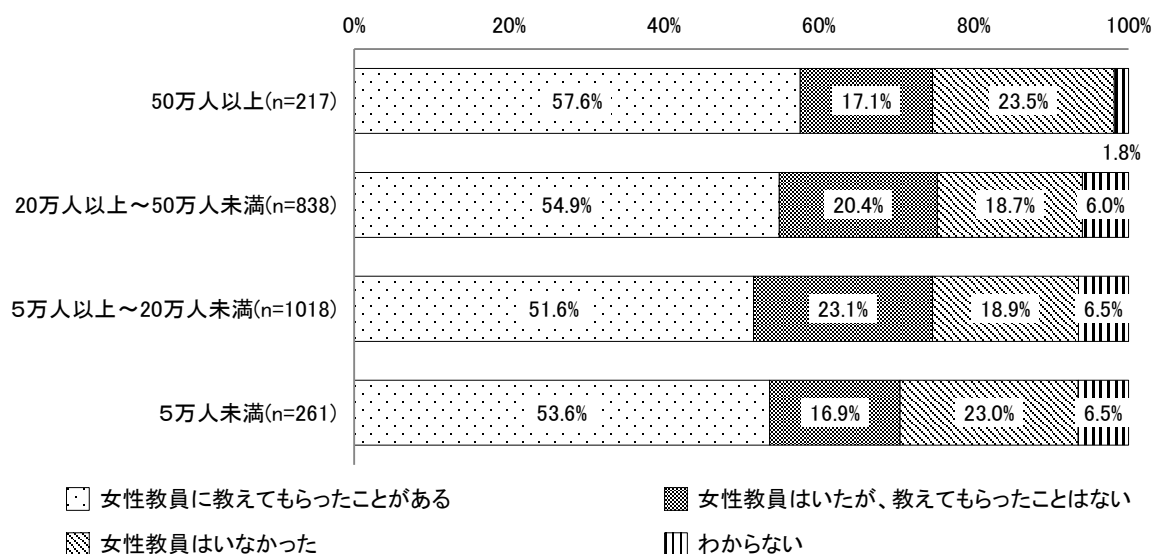
<公立>

	合計	Q24_2 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験			
		女性教員に教えてもらったことがある	女性教員はいたが、教えてもらったことはない	女性教員はいなかった	わからない
女性	1,450	51.0	21.5	21.6	5.9
男性	1,230	41.5	29.6	23.2	5.7

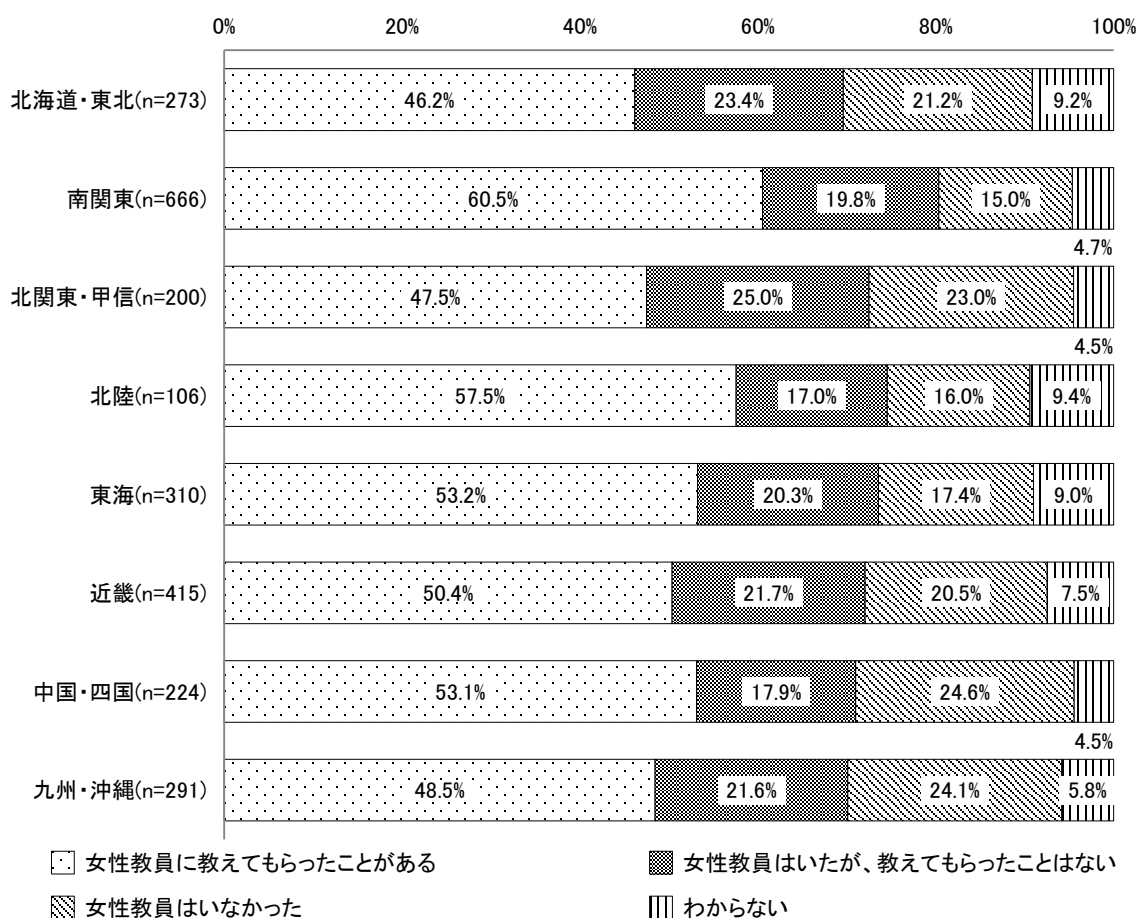
<私立>

	合計	Q24_2 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験			
		女性教員に教えてもらったことがある	女性教員はいたが、教えてもらったことはない	女性教員はいなかった	わからない
女性	906	55.6	21.0	16.3	7.1
男性	756	36.5	30.8	23.9	8.7

図表 113 人口規模別 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験
（女性）：単数回答（Q6×Q24_2）



図表 114 居住地域別 女性教員に「理科（物理・化学・生物・地学）」を教えてもらった経験
（女性）：単数回答（Q5×Q24_2）

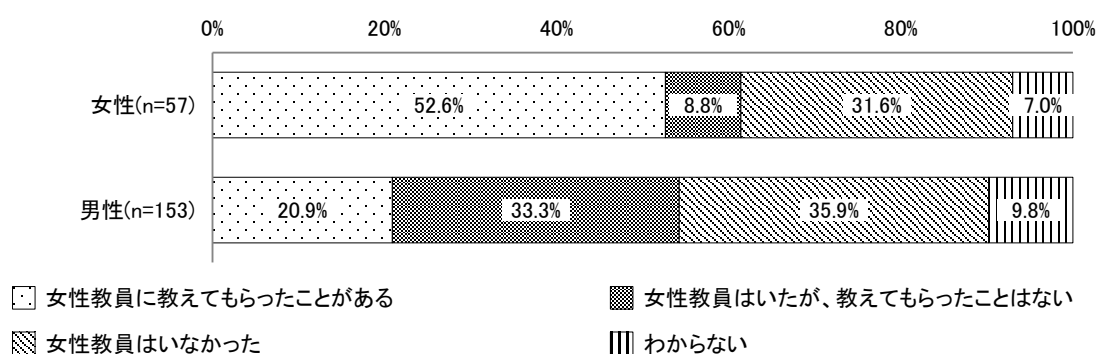


③女性教員に「農業、工業、水産に関連する科目（実習を含む）」を教えてもらった経験

現在通っている学校の学科について、「農業」「工業」「水産」のいずれかを選択した人について、女性教員に「農業、工業、水産に関連する科目（実習を含む）」を教えてもらった経験をみると、女性では、「女性教員に教えてもらったことがある」が52.6%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいなかった」が31.6%となっている。男性では、「女性教員はいなかった」が35.9%でもっとも割合が高く、次いで「女性教員はいたが、教えてもらったことはない」が33.3%となっている。

「女性教員に教えてもらったことがある」割合には、男女で大きな差がみられる。

図表 115 女性教員に「農業、工業、水産に関連する科目（実習を含む）」を教えてもらった経験：
単数回答（Q24_3）

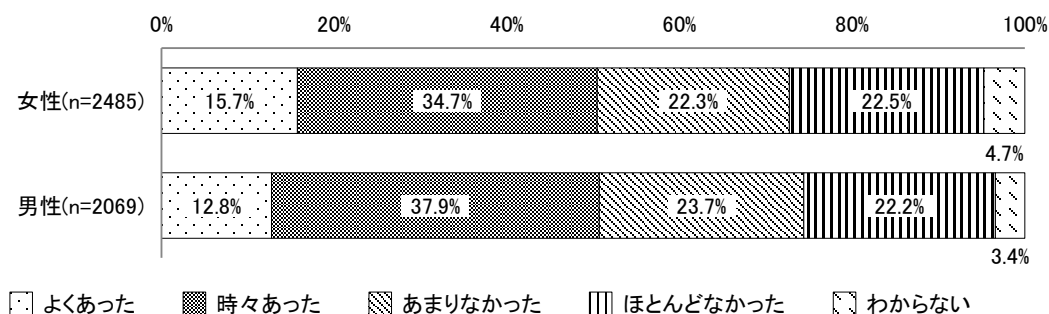


(11) 学校以外での理科・数学(算数)に関する経験

①「保護者に、理科や算数・数学の勉強を教えてもらうこと」があったか

女性では、「時々あった」が34.7%でもっとも割合が高く、次いで「ほとんどなかった」が22.5%となっている。男性では、「時々あった」が37.9%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が23.7%となっている。

図表 116 「保護者に、理科や算数・数学の勉強を教えてもらうこと」があったか:単数回答 (Q25_1)

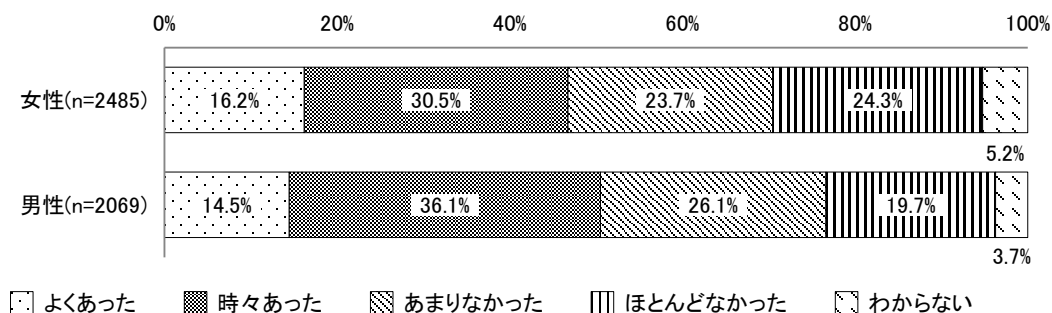


注) 人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。②～⑩についても同様に、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いがみられなかったものについてはグラフを掲載していない。

②「保護者に、理科の自由研究のアドバイスを受けること」があったか

女性では、「時々あった」が30.5%でもっとも割合が高く、次いで「ほとんどなかった」が24.3%となっている。男性では、「時々あった」が36.1%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が26.1%となっている。

図表 117 「保護者に、理科の自由研究のアドバイスを受けること」があったか:単数回答 (Q25_2)

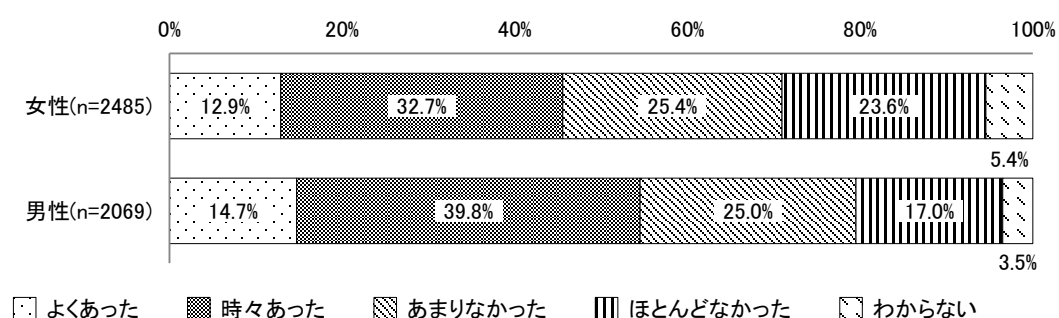


③「保護者に、科学館や博物館に連れていってもらったこと」があったか

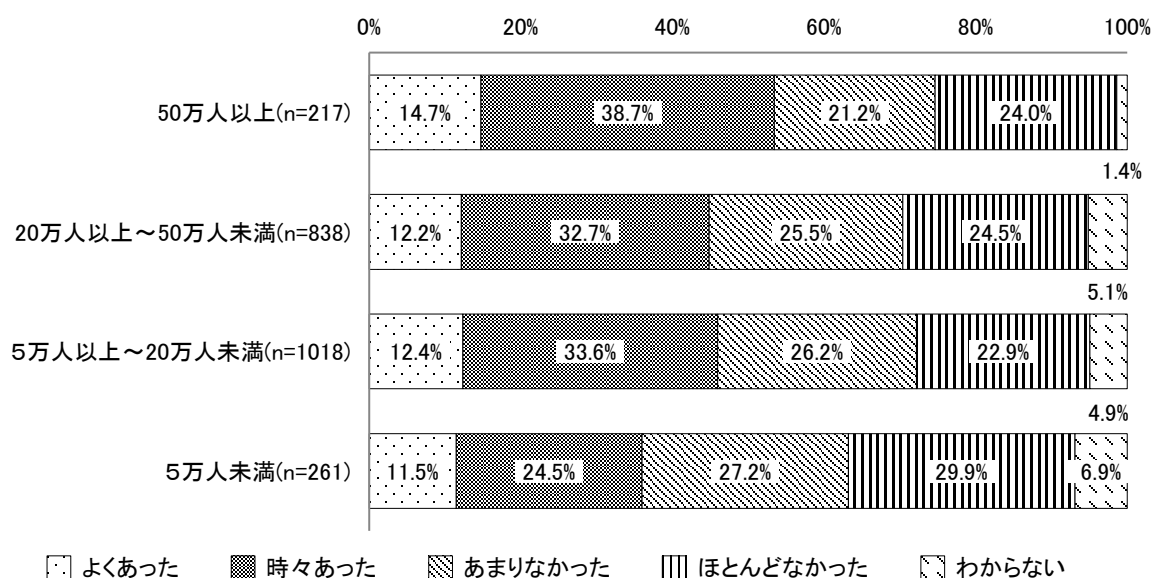
女性では、「時々あった」が32.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が25.4%となっている。男性では、「時々あった」が39.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が25.0%となっている。男性のほうが女性よりも、「時々あった」割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「時々あった」が38.7%、「5万人未満」で「ほとんどなかった」が29.9%と他と比べて割合が高くなっている。

図表 118 「保護者に、科学館や博物館に連れていってもらったこと」があったか：単数回答（Q25_3）



図表 119 人口規模別 「保護者に、科学館や博物館に連れていってもらったこと」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_3）

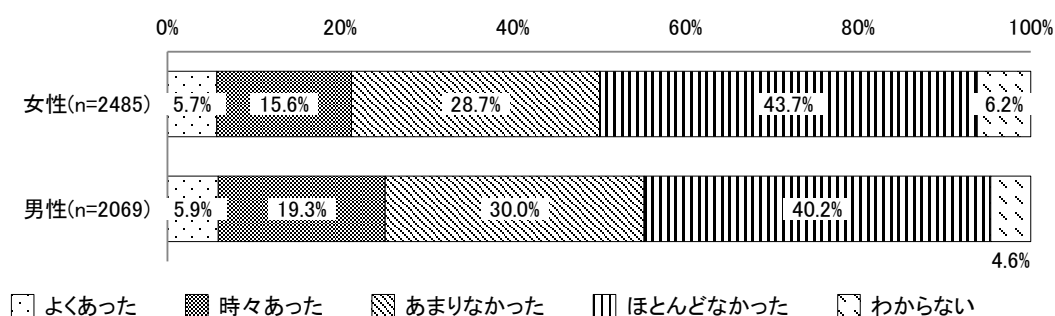


④「大学や自治体などが主催する、自然観察や野外活動に参加すること」があったか

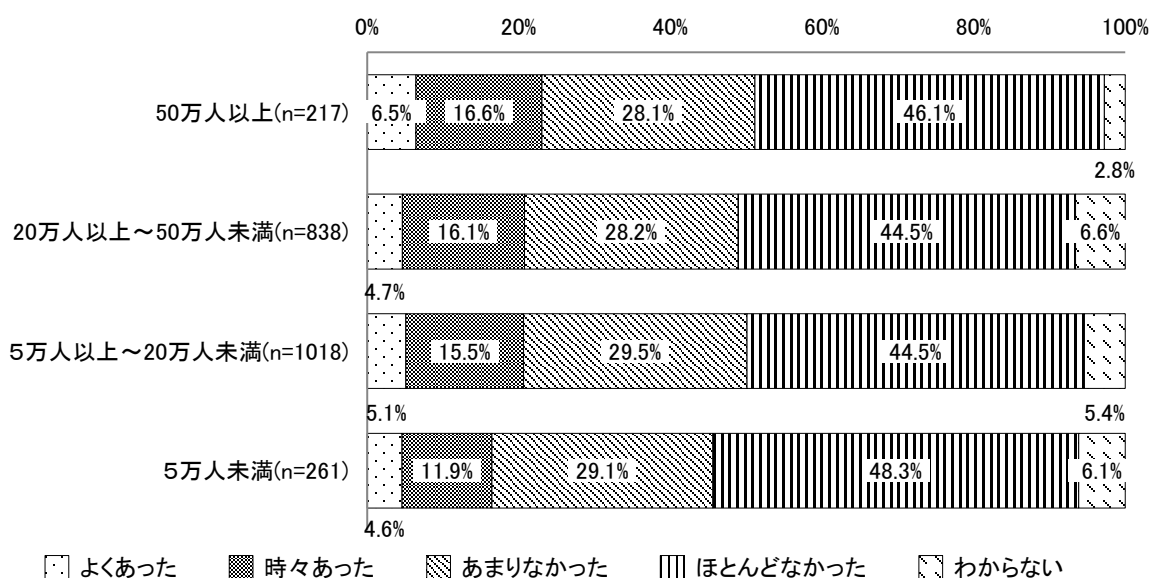
女性では、「ほとんどなかった」が43.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が28.7%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が40.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が30.0%となっている。男性のほうが女性よりも、「時々あった」割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」でそうした経験がなかった（「あまりなかった」「ほとんどなかった」の合計）割合が、他と比べて高くなっている。

図表 120 「大学や自治体などが主催する、自然観察や野外活動に参加すること」があったか：単数回答（Q25_4）



図表 121 人口規模別 「大学や自治体などが主催する、自然観察や野外活動に参加すること」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_4）

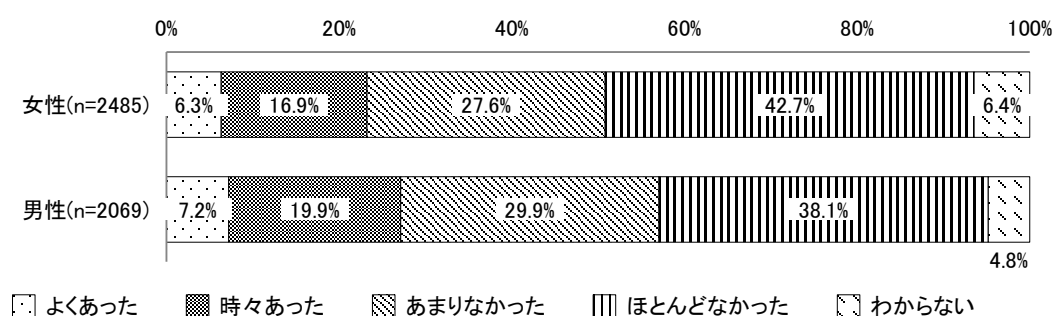


⑤「大学や自治体などが主催する、理科実験教室や工作教室に参加すること」があったか

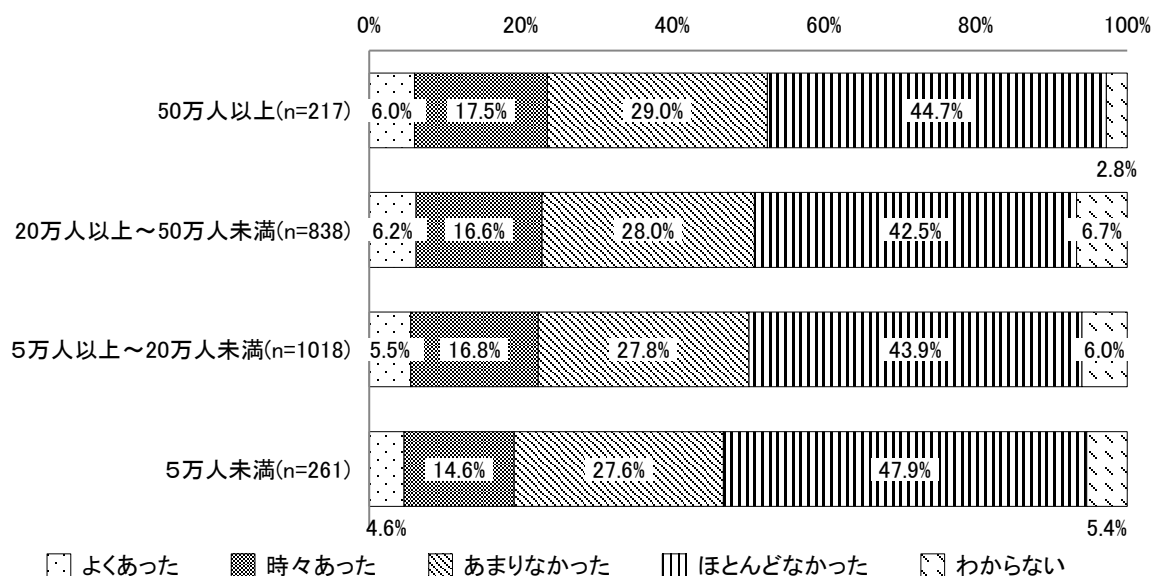
女性では、「ほとんどなかった」が42.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が27.6%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が38.1%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が29.9%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「ほとんどなかった」が47.9%と、他と比べてやや高くなっている。

図表 122 「大学や自治体などが主催する、理科実験教室や工作教室に参加すること」があったか：単数回答 (Q25_5)



図表 123 人口規模別 「大学や自治体などが主催する、理科実験教室や工作教室に参加すること」があったか（女性）：単数回答 (Q6×Q25_5)

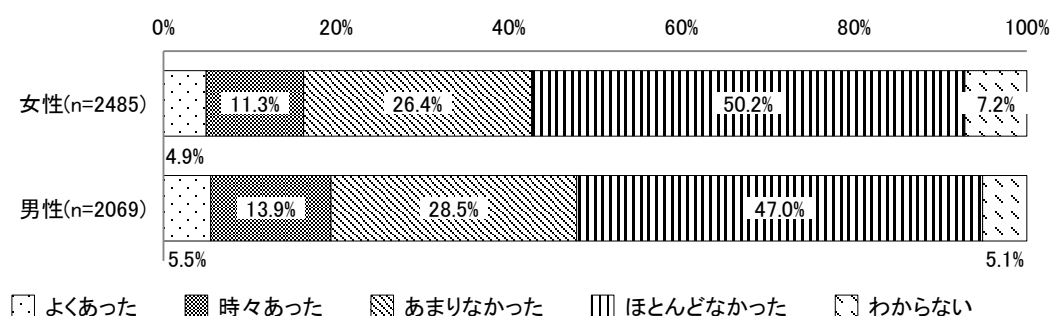


⑥「大学や自治体などが主催する、理工系進学に関するイベント・シンポジウムに参加すること」があったか

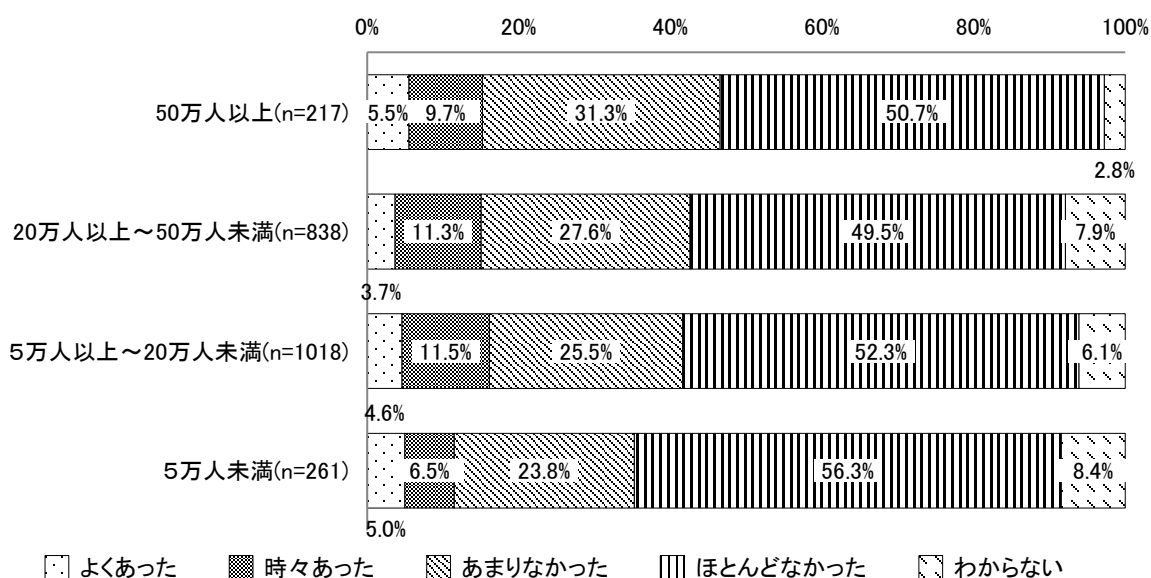
女性では、「ほとんどなかった」が50.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が26.4%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が47.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が28.5%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「ほとんどなかった」が56.3%と、他と比べて高くなっている。

図表 124 「大学や自治体などが主催する、理工系進学に関するイベント・シンポジウムに参加すること」があったか：単数回答（Q25_6）



図表 125 人口規模別 「大学や自治体などが主催する、理工系進学に関するイベント・シンポジウムに参加すること」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_6）

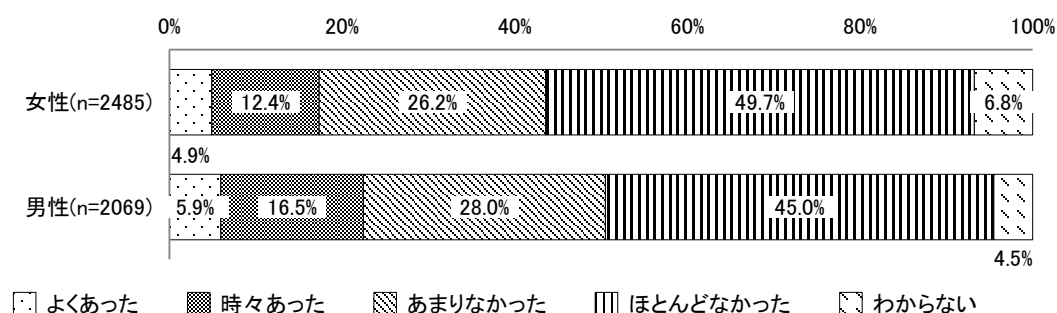


⑦「プログラミングやコンピュータの使い方に関する教室に参加すること」があったか

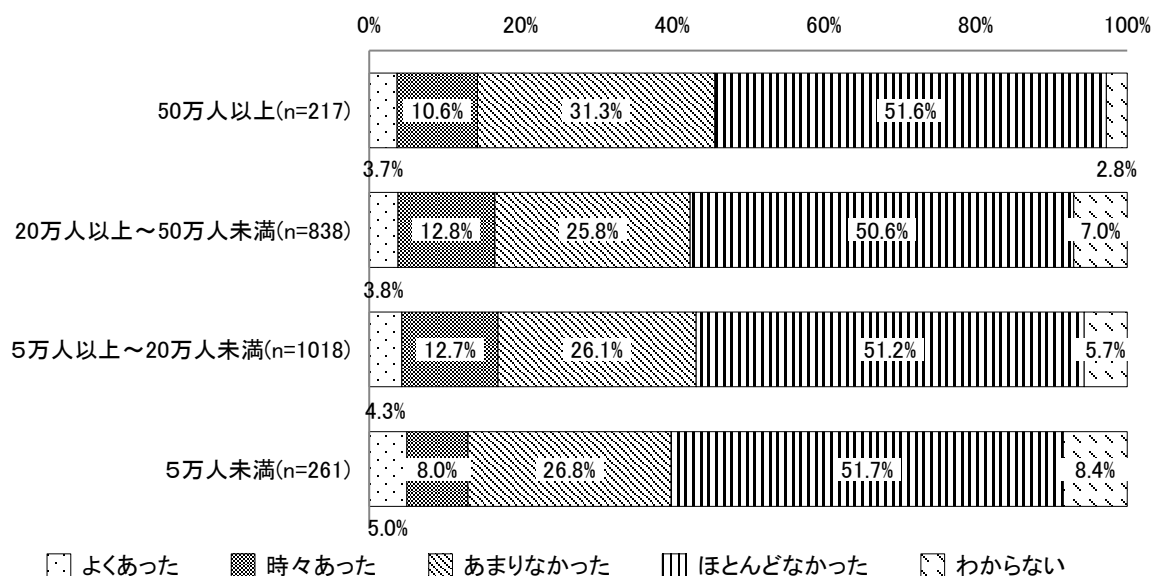
女性では、「ほとんどなかった」が49.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が26.2%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が45.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が28.0%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「あまりなかった」が31.3%と他と比べて割合が高くなっている。

図表 126 「プログラミングやコンピュータの使い方に関する教室に参加すること」があったか：単数回答（Q25_7）



図表 127 人口規模別 「プログラミングやコンピュータの使い方に関する教室に参加すること」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_7）

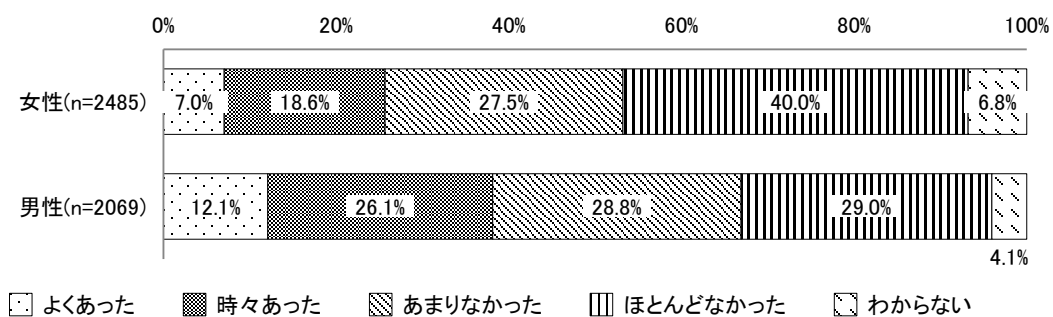


⑧「自身で工作やプラモデル作成など、ものづくりの経験をする事」があったか

女性では、「ほとんどなかった」が40.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が27.5%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が29.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が28.8%となっている。

男性のほうが女性よりも、「よくあった」もしくは「時々あった」割合が高い傾向がみられる。

図表 128 「自身で工作やプラモデル作成など、ものづくりの経験をする事」があったか:単数回答 (Q25_8)

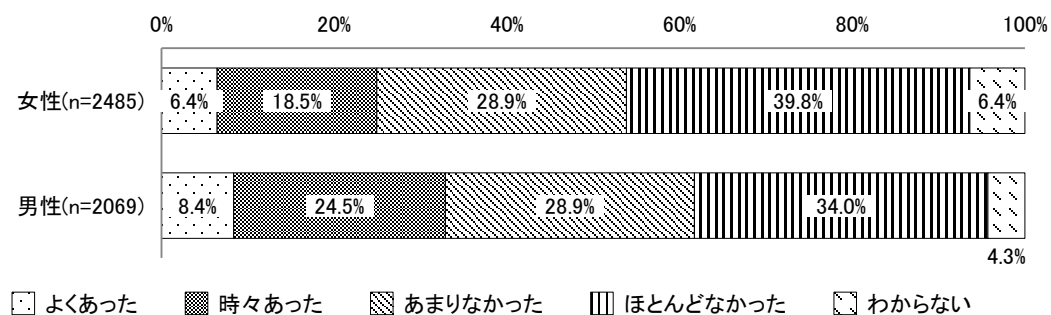


⑨「自身で天体観測や植物の観察、昆虫採集等を行うこと」があったか

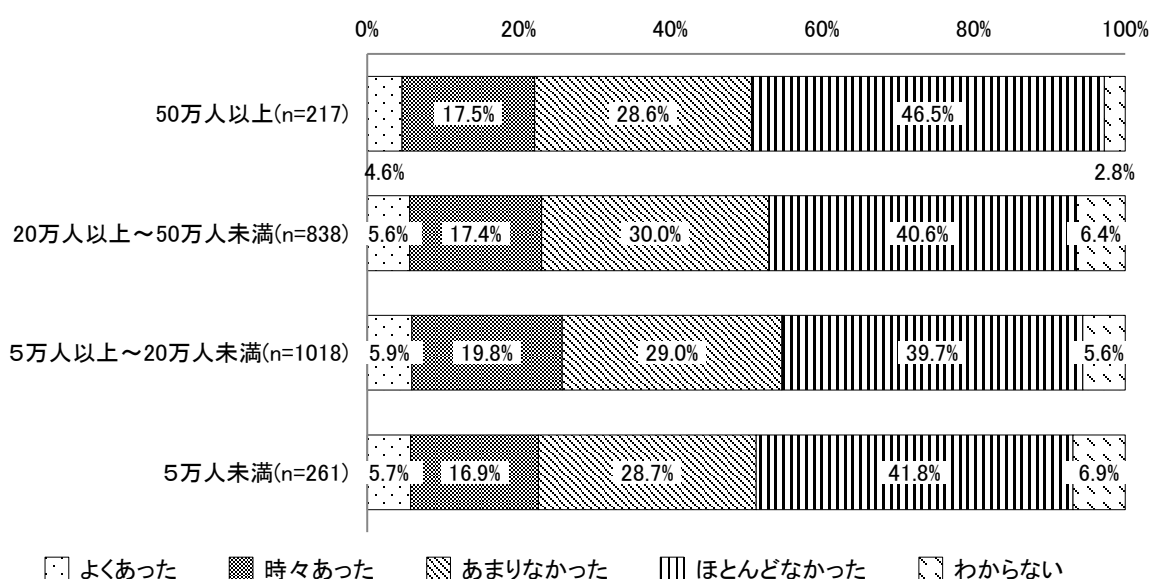
女性では、「ほとんどなかった」が 39.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が 28.9%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が 34.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が 28.9%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50 万人以上」で「ほとんどなかった」が 46.5%と他と比べて高くなっている。

図表 129 「自身で天体観測や植物の観察、昆虫採集等を行うこと」があったか：単数回答（Q25_9）



図表 130 人口規模別 「自身で天体観測や植物の観察、昆虫採集等を行うこと」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_9）

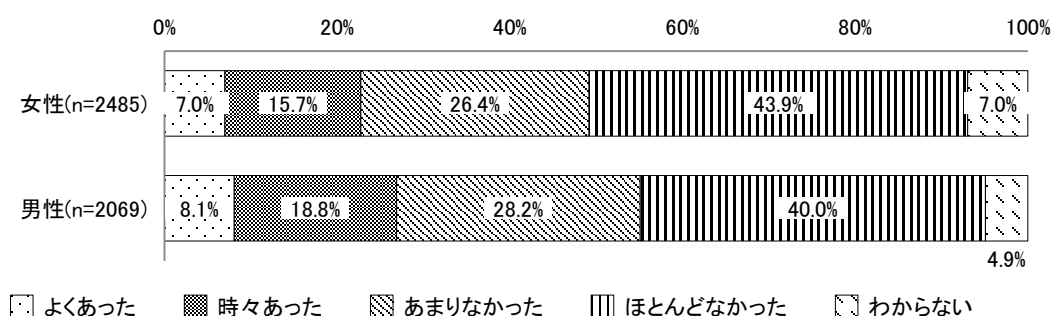


⑩「小学生までに、家庭でコンピュータを使って遊んだりプログラミングをしたりすること」があったか

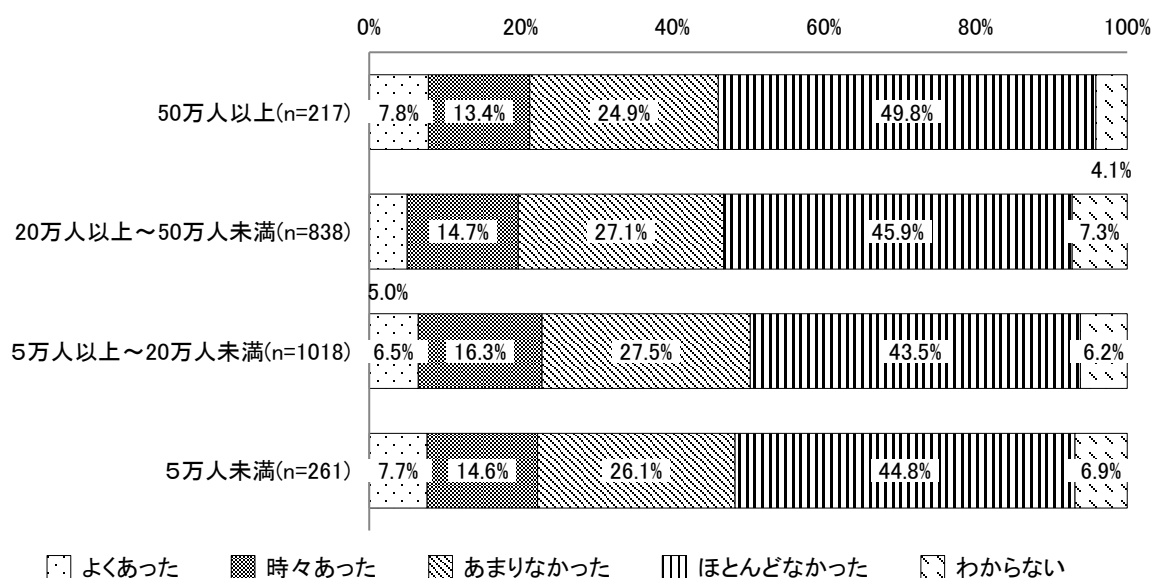
女性では、「ほとんどなかった」が43.9%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が26.4%となっている。男性では、「ほとんどなかった」が40.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりなかった」が28.2%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「ほとんどなかった」が49.8%と他と比べて高くなっている。

図表 131 「小学生までに、家庭でコンピュータを使って遊んだりプログラミングをしたりすること」があったか：単数回答（Q25_10）



図表 132 人口規模別 「小学生までに、家庭でコンピュータを使って遊んだりプログラミングをしたりすること」があったか（女性）：単数回答（Q6×Q25_10）



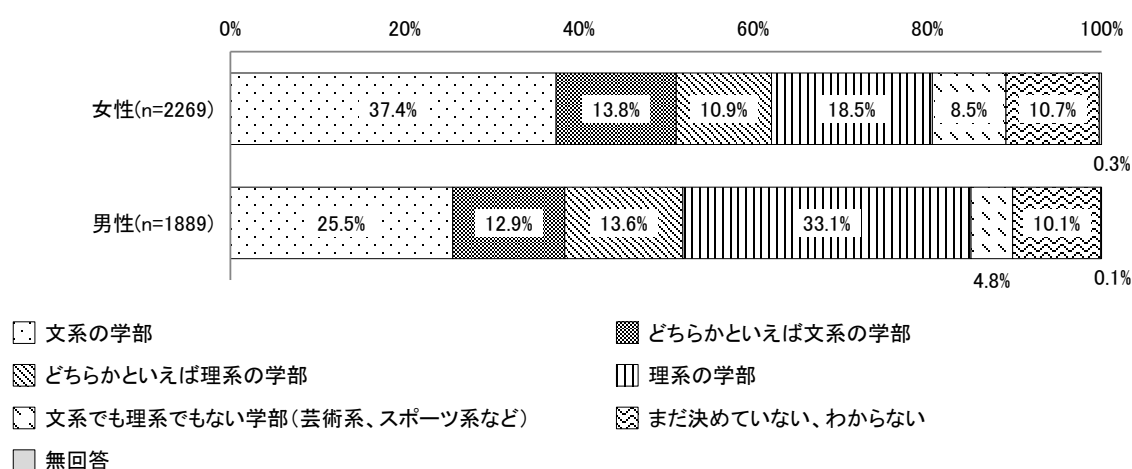
4-1-4. 進路について

(1) 文系・理系の志望

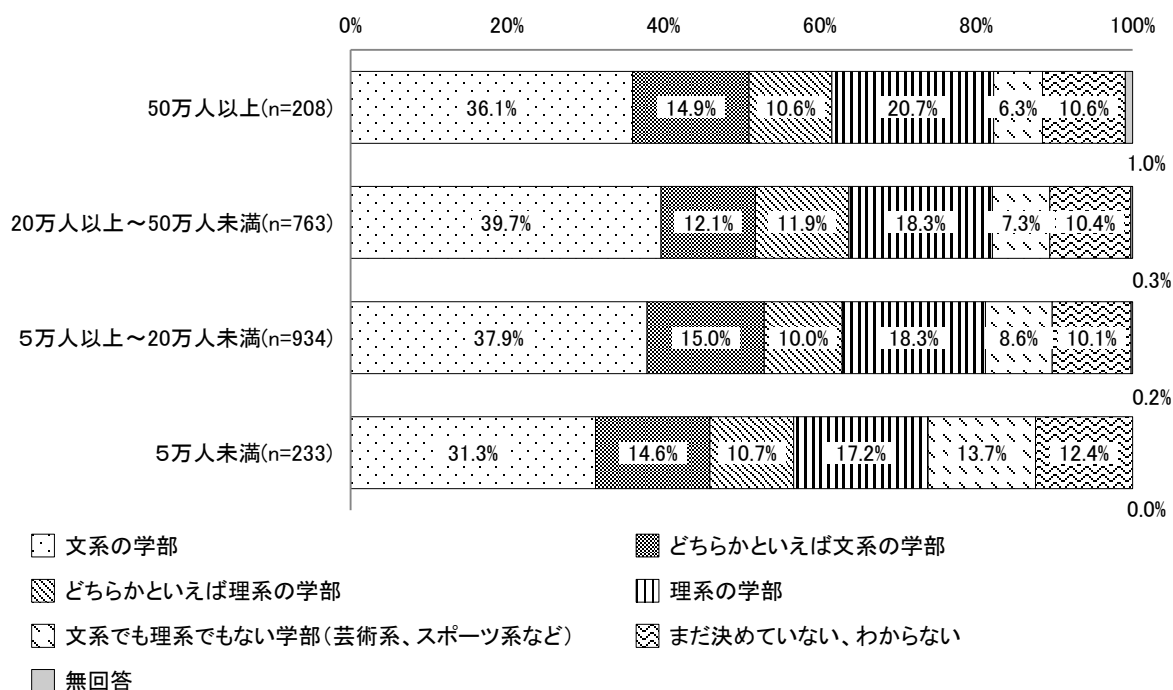
進学を希望している（就職を希望しているが、進学のある場合を含む）者について、文系・理系の志望をみると、女性では、「文系の学部」が 37.4%でもっとも割合が高く、次いで「理系の学部」が 18.5%となっている。男性では、「理系の学部」が 33.1%でもっとも割合が高く、次いで「文系の学部」が 25.5%となっている。女性のほうが男性よりも、「文系の学部」を志望する割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「文系でも理系でもない学部（芸術系、スポーツ系など）」が 13.7%と、他と比べて高くなっている。

図表 133 文系・理系の志望：単数回答（Q26）



図表 134 人口規模別 文系・理系の志望（女性）：単数回答（Q6×Q26）



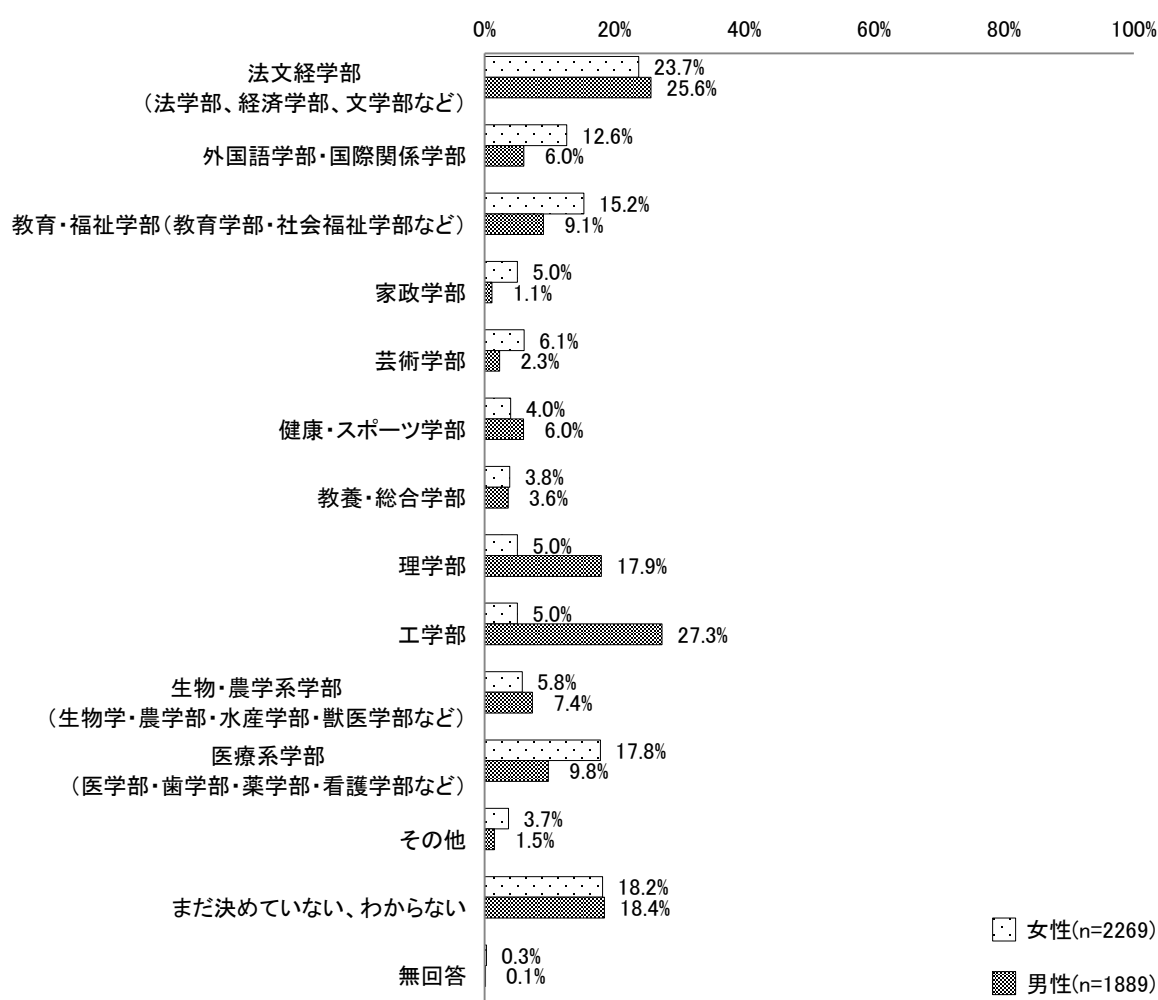
(2) 進学を希望する学部

女性では、「法文経学部（法学部、経済学部、文学部など）」が 23.7%でもっとも割合が高く、次いで「まだ決めていない、わからない」が 18.2%となっている。男性では、「工学部」が 27.3%でもっとも割合が高く、次いで「法文経学部（法学部、経済学部、文学部など）」が 25.6%となっている。

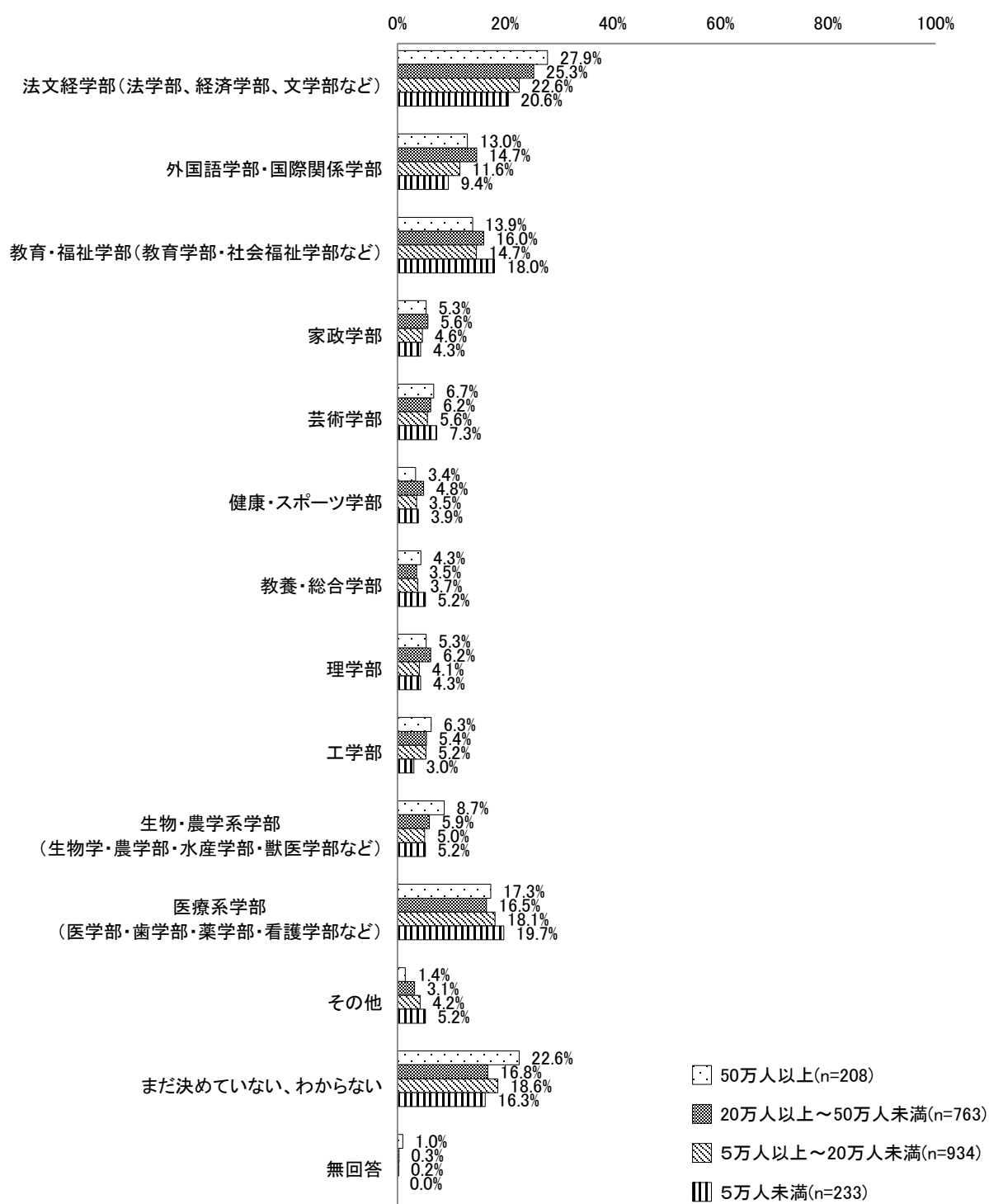
女性のほうが男性よりも、「外国語学部・国際関係学部」「医療系学部（医学部・歯学部・薬学部・看護学部など）」「教育・福祉学部（教育学部・社会福祉学部など）」を希望する割合が高い傾向がみられる。一方、男性のほうが女性よりも、「工学部」「理学部」を希望する割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、規模が大きくなるほど「法文経学部（法学部、経済学部、文学部など）」の割合が高い傾向がみられる。

図表 135 進学を希望する学部：複数回答（Q27）



図表 136 人口規模別 進学を希望する学部（女性）：複数回答（Q6×Q27）



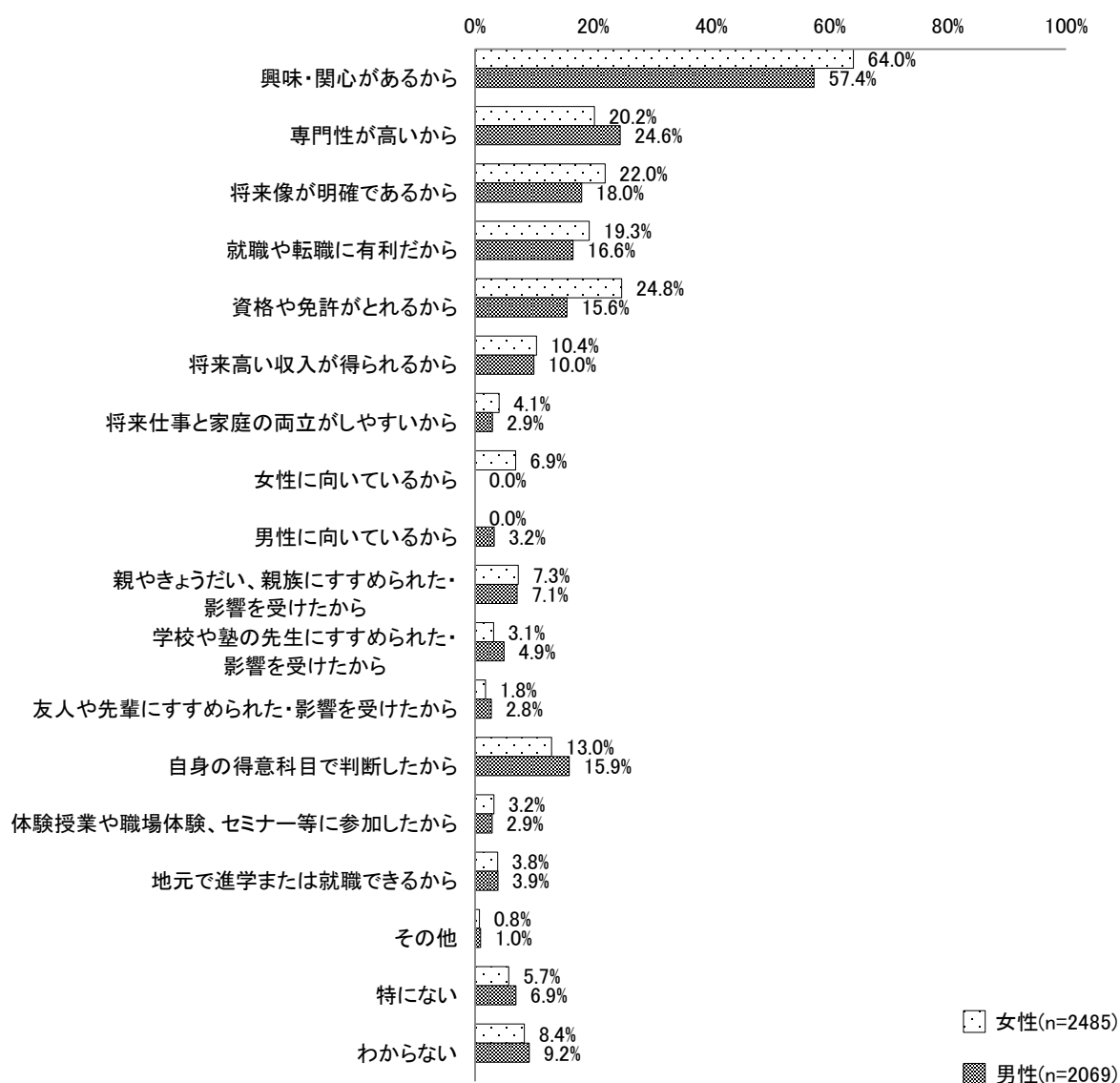
（３）進路希望の理由

女性では、「興味・関心があるから」が 64.0%でもっとも割合が高く、次いで「資格や免許がとれるから」が 24.8%となっている。男性では、「興味・関心があるから」が 57.4%でもっとも割合が高く、次いで「専門性が高いから」が 24.6%となっている。

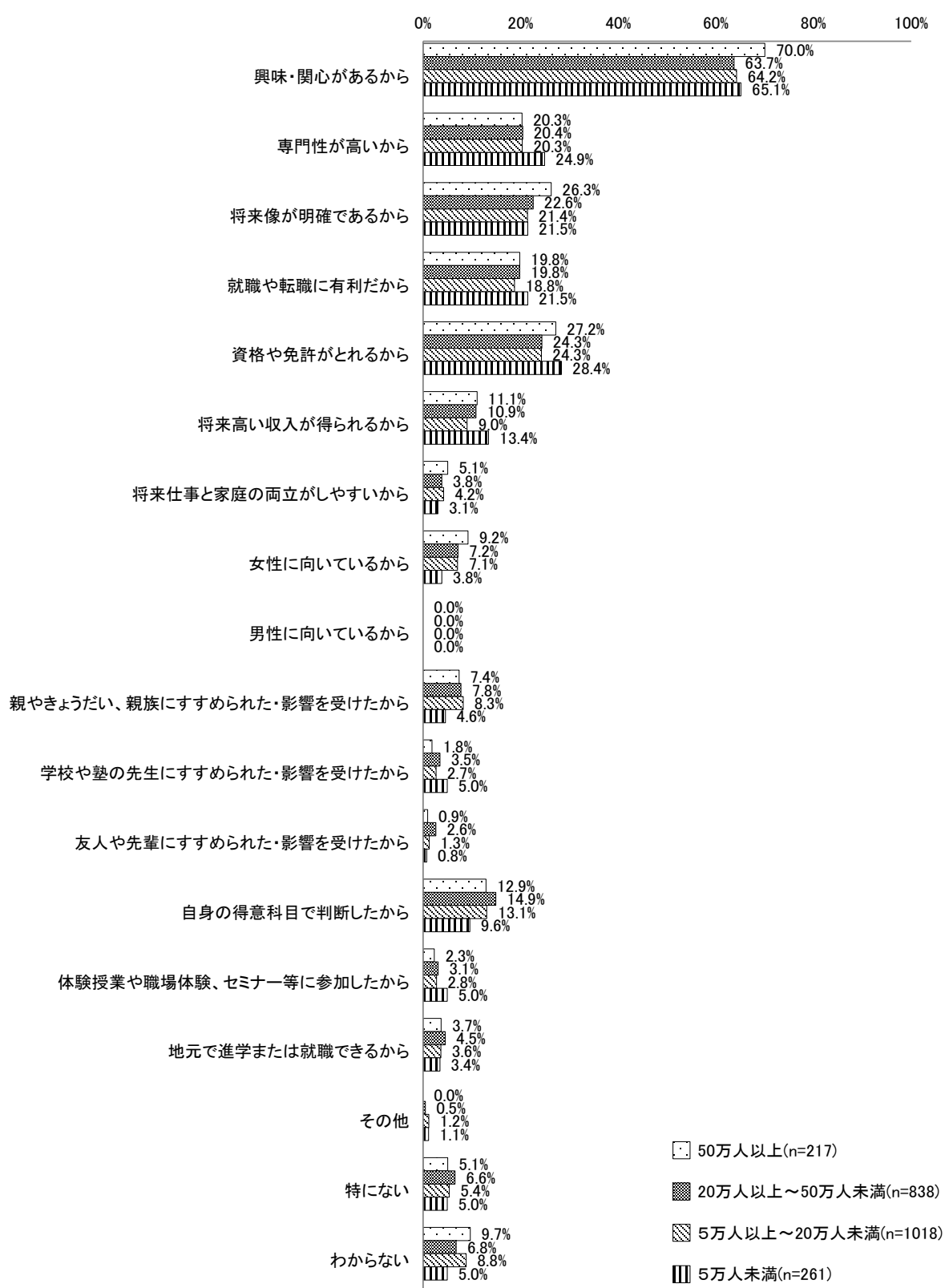
女性のほうが男性よりも、「興味・関心があるから」「資格や免許がとれるから」を挙げる割合が高く、自身の興味・関心に応じた進路選択と、資格や免許を重視している傾向がうかがえる。

また、女性について人口規模別にみると、「50 万人以上」で「興味・関心があるから」が 70.0%と、他と比べて割合が高くなっている。

図表 137 進路希望の理由：複数回答（Q28）



図表 138 人口規模別 進路希望の理由（女性）：複数回答（Q6×Q28）



（４）進路を選択するうえで、考慮しようとしていること

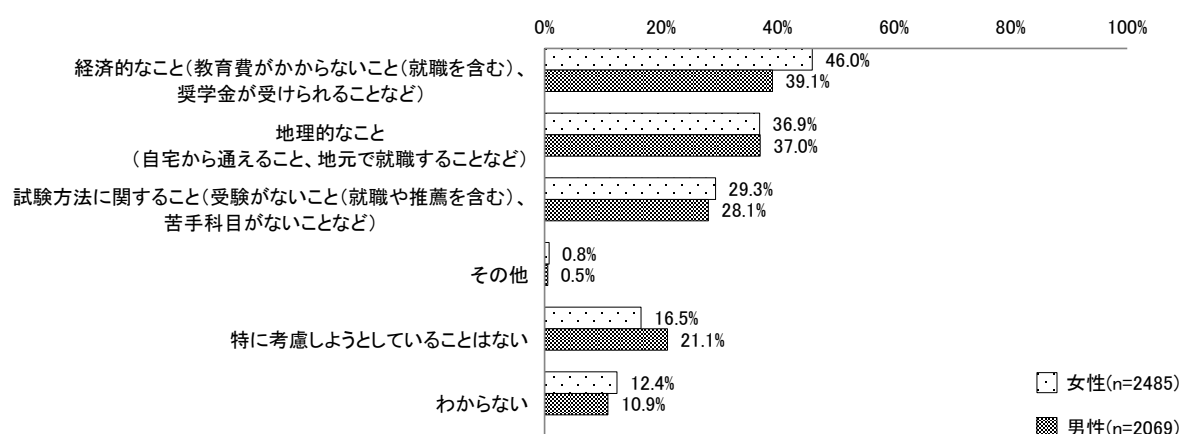
女性では、「経済的なこと（教育費がかからないこと（就職を含む）、奨学金が受けられることなど）」が 46.0%でもっとも割合が高く、次いで「地理的なこと（自宅から通えること、地元で就職することなど）」が 36.9%となっている。男性では、「経済的なこと（教育費がかからないこと（就職を含む）、奨学金が受けられることなど）」が 39.1%でもっとも割合が高く、次いで「地理的なこと（自宅から通えること、地元で就職することなど）」が 37.0%となっている。

女性のほうが男性よりも、「経済的なこと」を挙げる割合が高く、進路選択にあたって、家庭の経済状況を考慮している傾向がうかがえる。

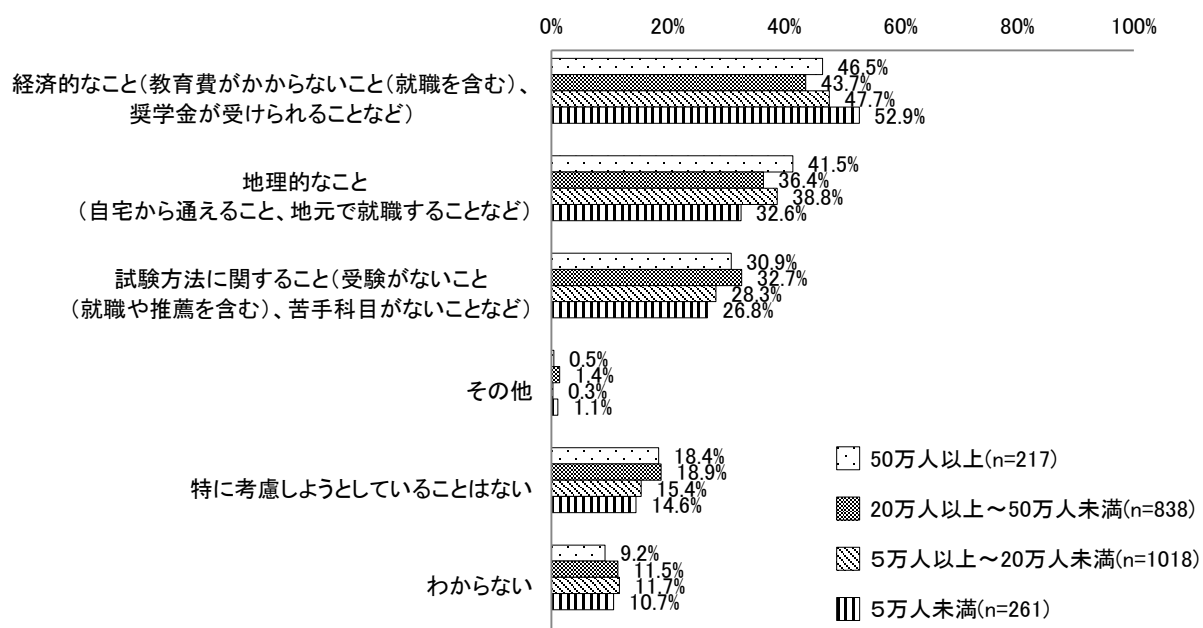
また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「経済的なこと」が 52.9%、「50万人以上」で「地理的なこと」が 41.5%と他と比べて高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「北海道・東北」「中国・四国」「九州・沖縄」で「経済的なこと」、「南関東」で「地理的なこと」「試験方法に関すること（受験がないこと（就職や推薦を含む）、苦手科目がないことなど）」、「東海」で「地理的なこと」を挙げる割合が高くなっている。

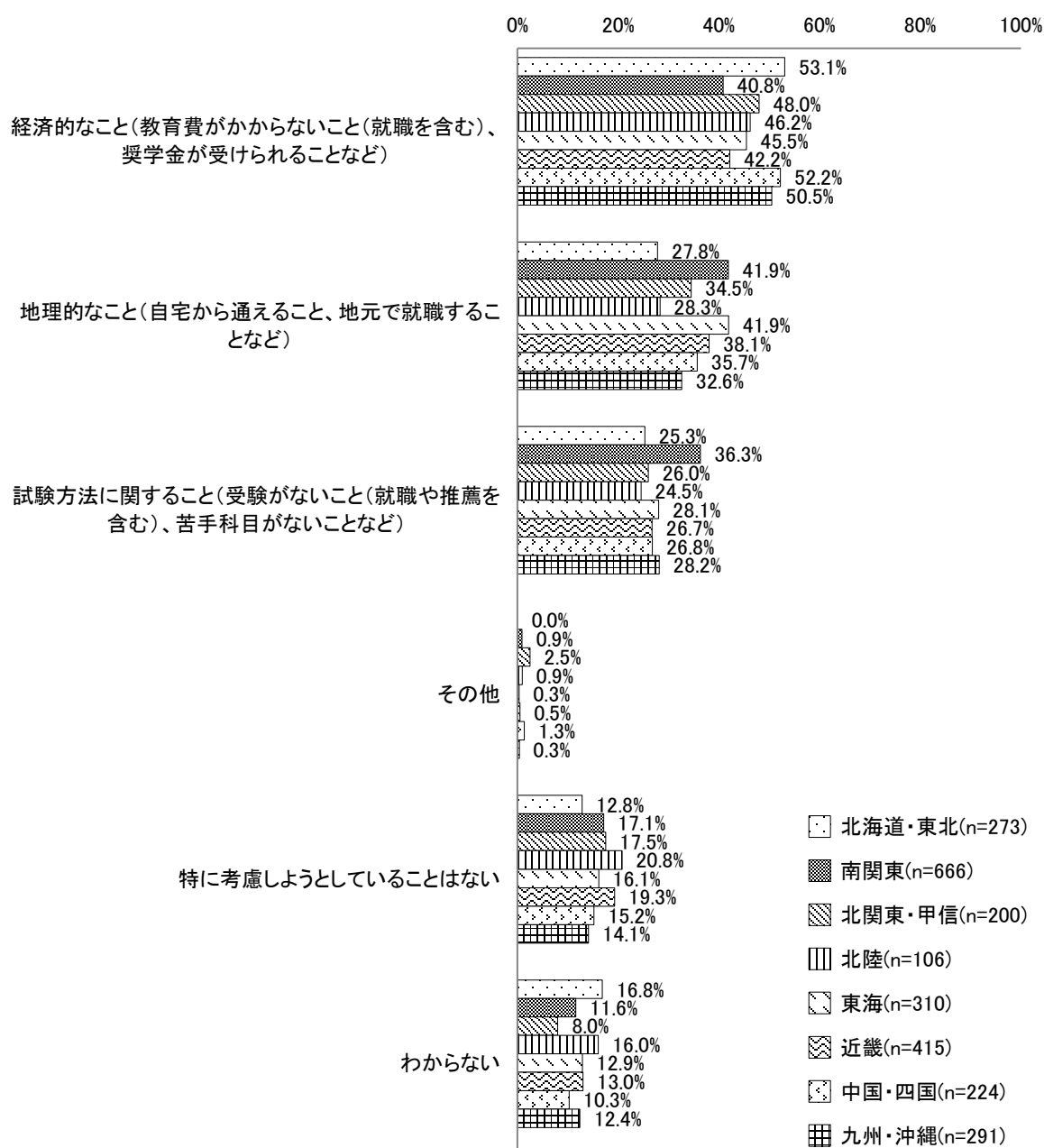
図表 139 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること：複数回答（Q29）



図表 140 人口規模別 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること（女性）：複数回答
(Q6×Q29)



図表 141 居住地域別 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること（女性）：複数回答
(Q5×Q29)



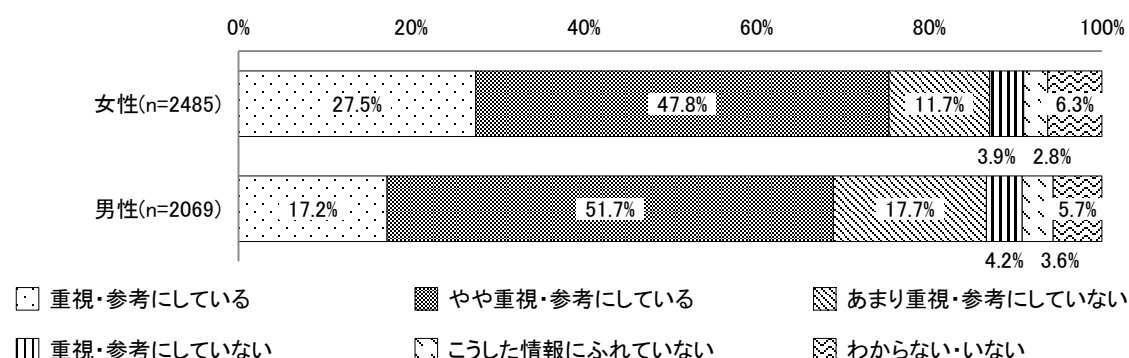
（５）進路選択において重視・参考にしていること

①進路選択において、「保護者（母親）の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか

女性では、「やや重視・参考にしている」が 47.8%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考にしている」が 27.5%となっている。男性では、「やや重視・参考にしている」が 51.7%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしていない」が 17.7%となっている。

女性のほうが男性よりも、進路選択において、保護者（母親）の意見・アドバイスを「重視・参考にしている」とする割合が高い傾向がみられる。

図表 142 進路選択において、「保護者（母親）の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか：
単数回答（Q30_1）

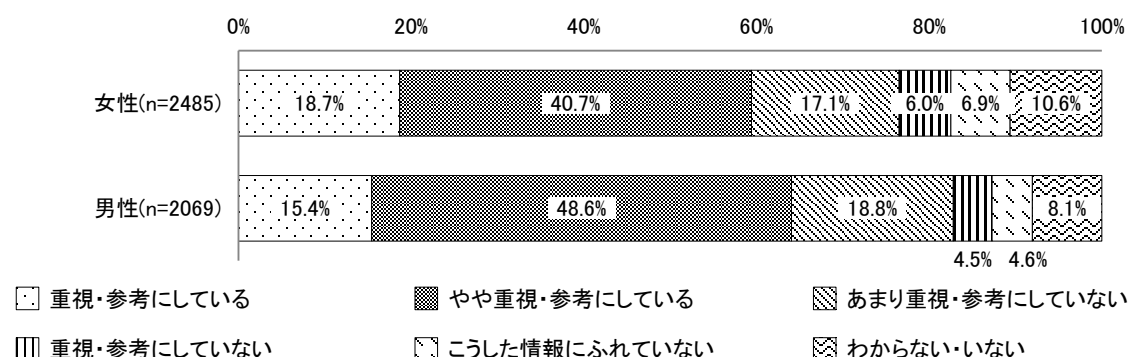


注）人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、人口規模別、居住地域別のグラフは掲載していない。②～⑨についても、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いがみられなかったものについてはグラフを掲載していない。

②進路選択において、「保護者（父親）の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか

女性では、「やや重視・参考にしている」が 40.7%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考にしている」が 18.7%となっている。男性では、「やや重視・参考にしている」が 48.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしていない」が 18.8%となっている。

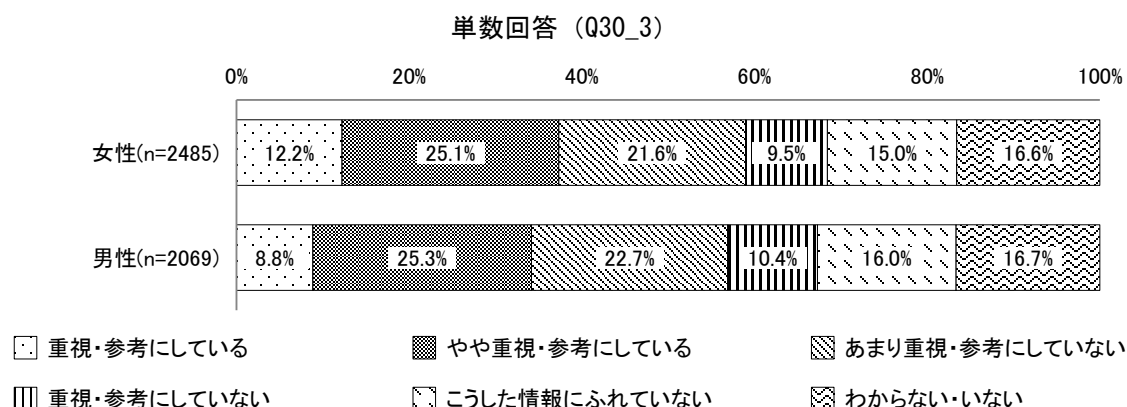
図表 143 進路選択において、「保護者（父親）の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか：
単数回答（Q30_2）



③進路選択において、「きょうだいからの意見・アドバイス」を重視・参考になっているか

女性では、「やや重視・参考になっている」が 25.1%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしている」が 21.6%となっている。男性では、「やや重視・参考になっている」が 25.3%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしている」が 22.7%となっている。

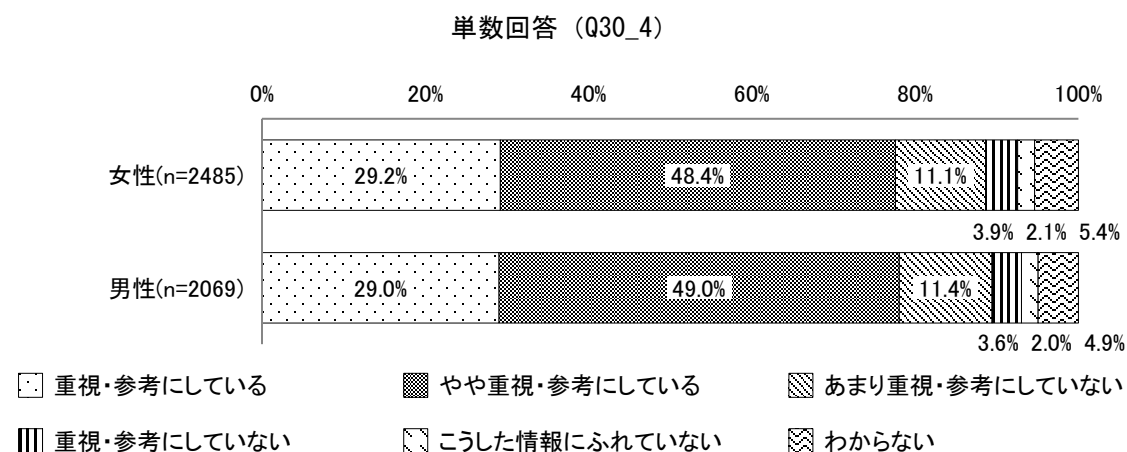
図表 144 進路選択において、「きょうだいからの意見・アドバイス」を重視・参考になっているか：



④進路選択において、「学校の先生の見解・アドバイス」を重視・参考になっているか

女性では、「やや重視・参考になっている」が 48.4%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考になっている」が 29.2%となっている。男性では、「やや重視・参考になっている」が 49.0%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考になっている」が 29.0%となっている。

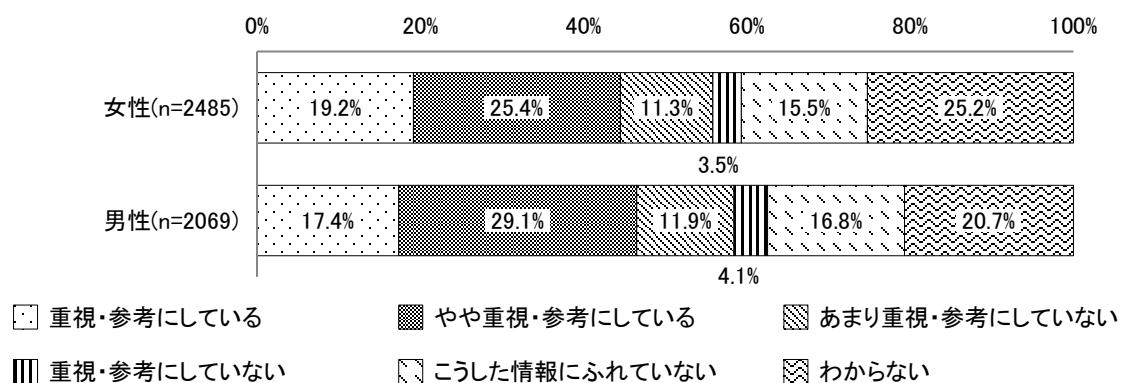
図表 145 進路選択において、「学校の先生の見解・アドバイス」を重視・参考になっているか：



⑤進路選択において、「塾や予備校の先生の見・アドバイス」を重視・参考になっているか

女性では、「やや重視・参考になっている」が 25.4%でもっとも割合が高く、次いで「わからない・いない」が 25.2%となっている。男性では、「やや重視・参考になっている」が 29.1%でもっとも割合が高く、次いで「わからない・いない」が 20.7%となっている。

図表 146 進路選択において、「塾や予備校の先生の見・アドバイス」を重視・参考になっているか：
単数回答 (Q30_5)

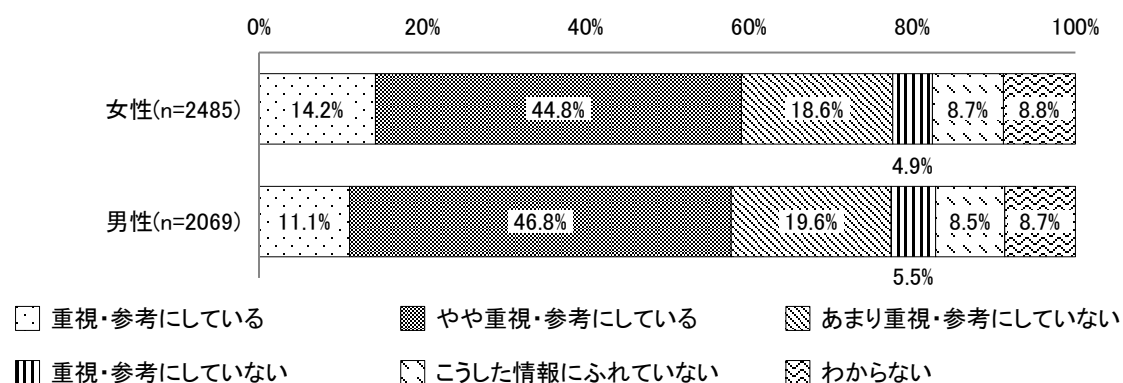


⑥進路選択において、「友人や先輩の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか

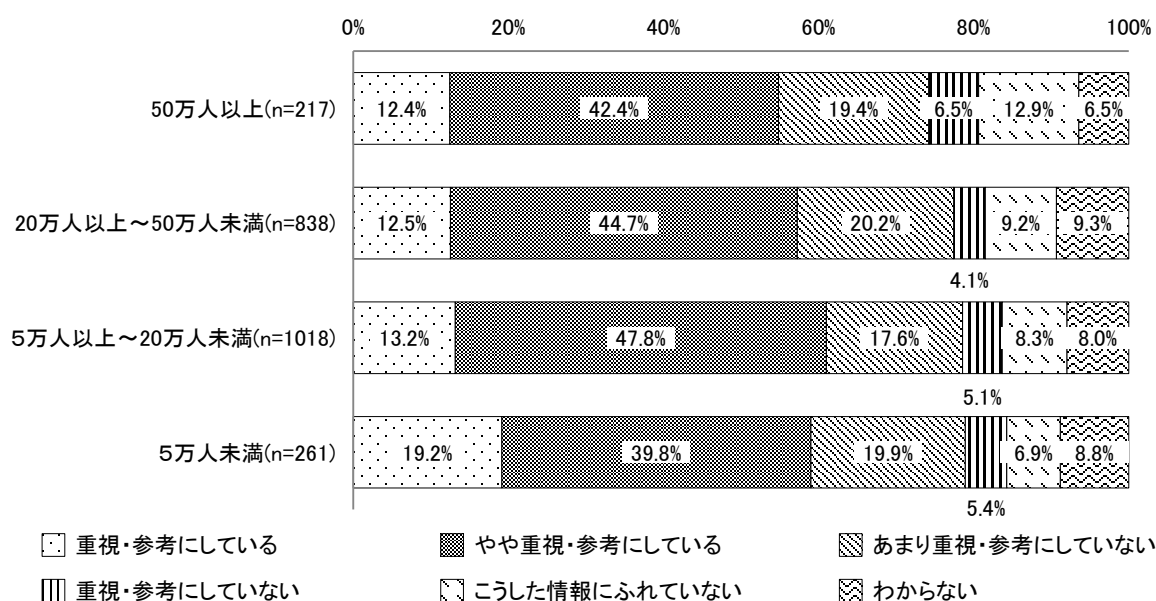
女性では、「やや重視・参考にしている」が 44.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしていない」が 18.6%となっている。男性では、「やや重視・参考にしている」が 46.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまり重視・参考にしていない」が 19.6%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「重視・参考にしている」が 19.2%と他と比べて高くなっている。

図表 147 進路選択において、「友人や先輩の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか：単数回答（Q30_6）



図表 148 人口規模別 進路選択において、「友人や先輩の意見・アドバイス」を重視・参考にしているか（女性）：単数回答（Q6×Q30_6）

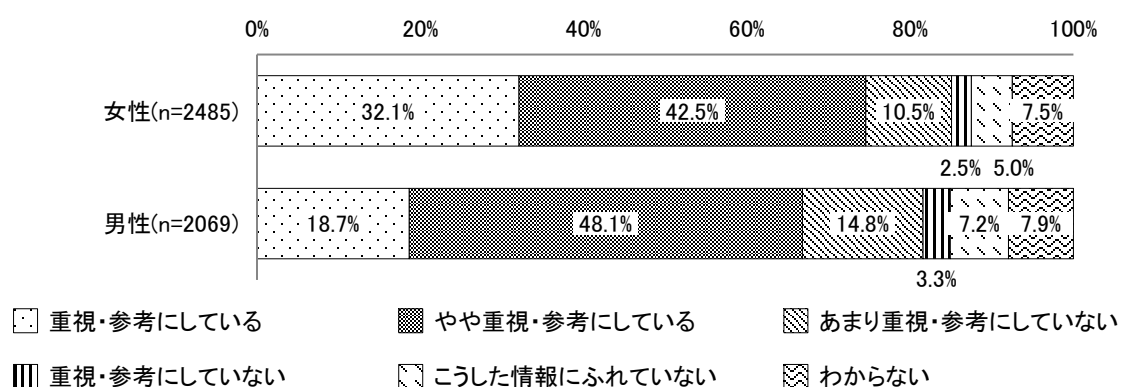


⑦進路選択において、「大学が公表する情報（HP、入学案内、パンフレット等）」を重視・参考
にしているか

女性では、「やや重視・参考になっている」が42.5%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考
にしている」が32.1%となっている。男性では、「やや重視・参考になっている」が48.1%でもっ
とも割合が高く、次いで「重視・参考になっている」が18.7%となっている。

女性のほうが男性よりも、進路選択において、大学が公表する情報（HP、入学案内、パンフ
レット等）を「重視・参考になっている」とする割合が高い傾向がみられる。

図表 149 進路選択において、「大学が公表する情報（HP、入学案内、パンフレット等）」を
重視・参考になっているか:単数回答（Q30_7）



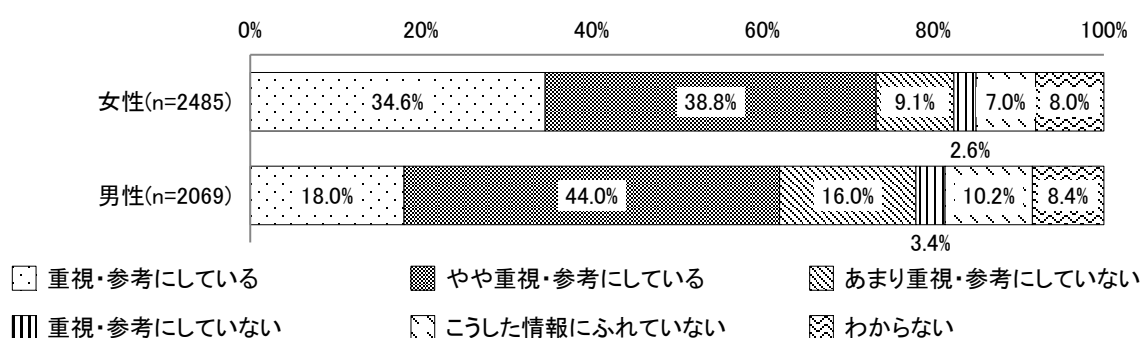
⑧進路選択において、「大学の説明会やオープンキャンパス」を重視・参考に行っているか

女性では、「やや重視・参考に行っている」が38.8%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考に行っている」が34.6%となっている。男性では、「やや重視・参考に行っている」が44.0%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考に行っている」が18.0%となっている。

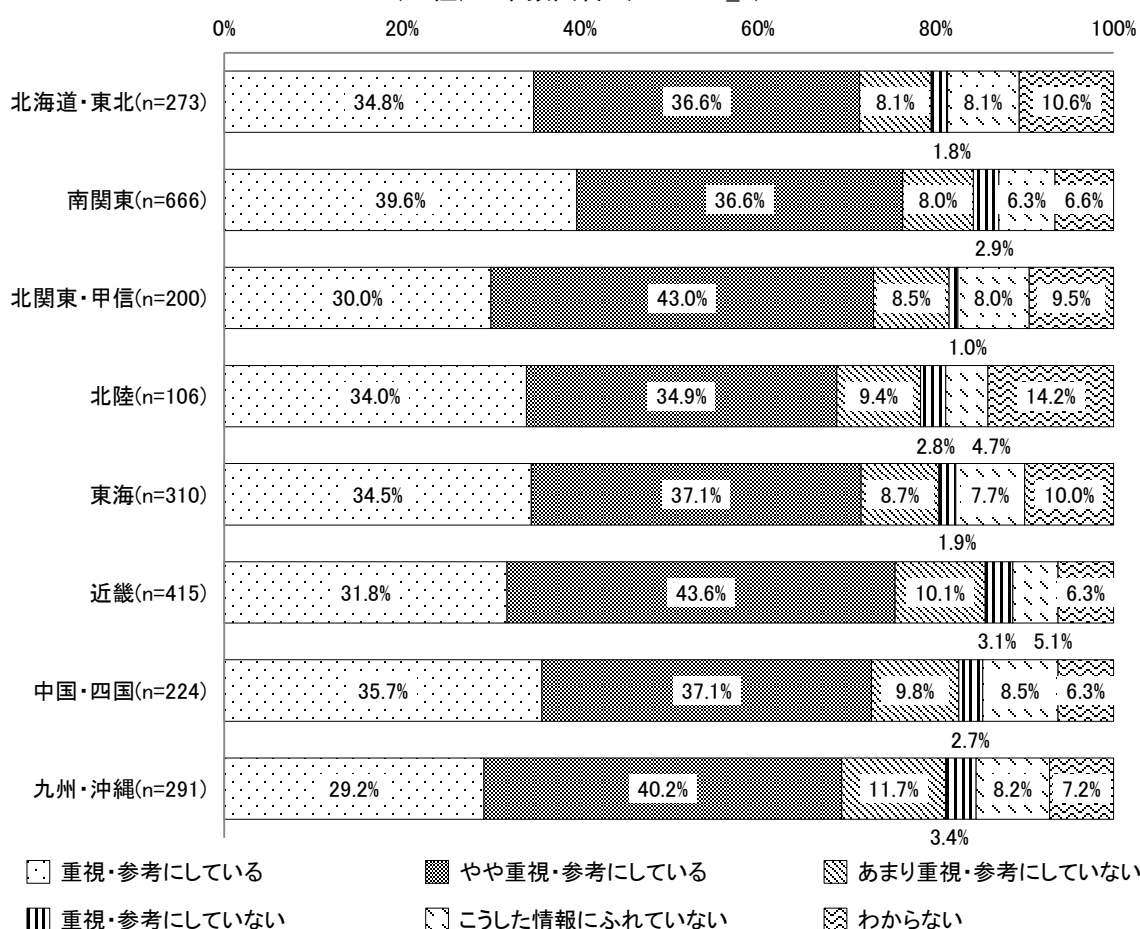
女性のほうが男性よりも、進路選択において、大学の説明会やオープンキャンパスを「重視・参考に行っている」とする割合が高い傾向がみられる。

また、女性について居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「重視・参考に行っている」が39.6%と割合が高くなっている。

図表 150 「大学の説明会やオープンキャンパス」を重視・参考に行っているか：単数回答（Q30_8）



図表 151 居住地域別 「大学の説明会やオープンキャンパス」を重視・参考に行っているか（女性）：単数回答（Q5×Q30_8）

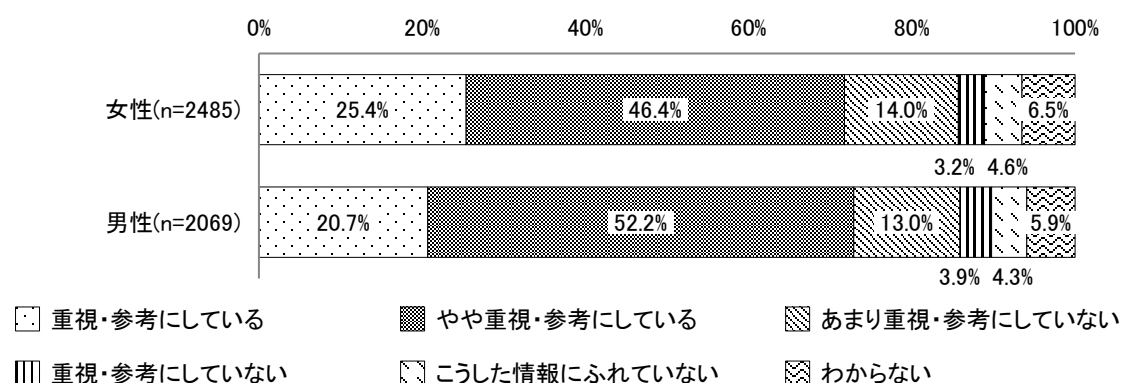


⑨進路選択において、「高校が提供する進路指導の資料」を重視・参考になっているか

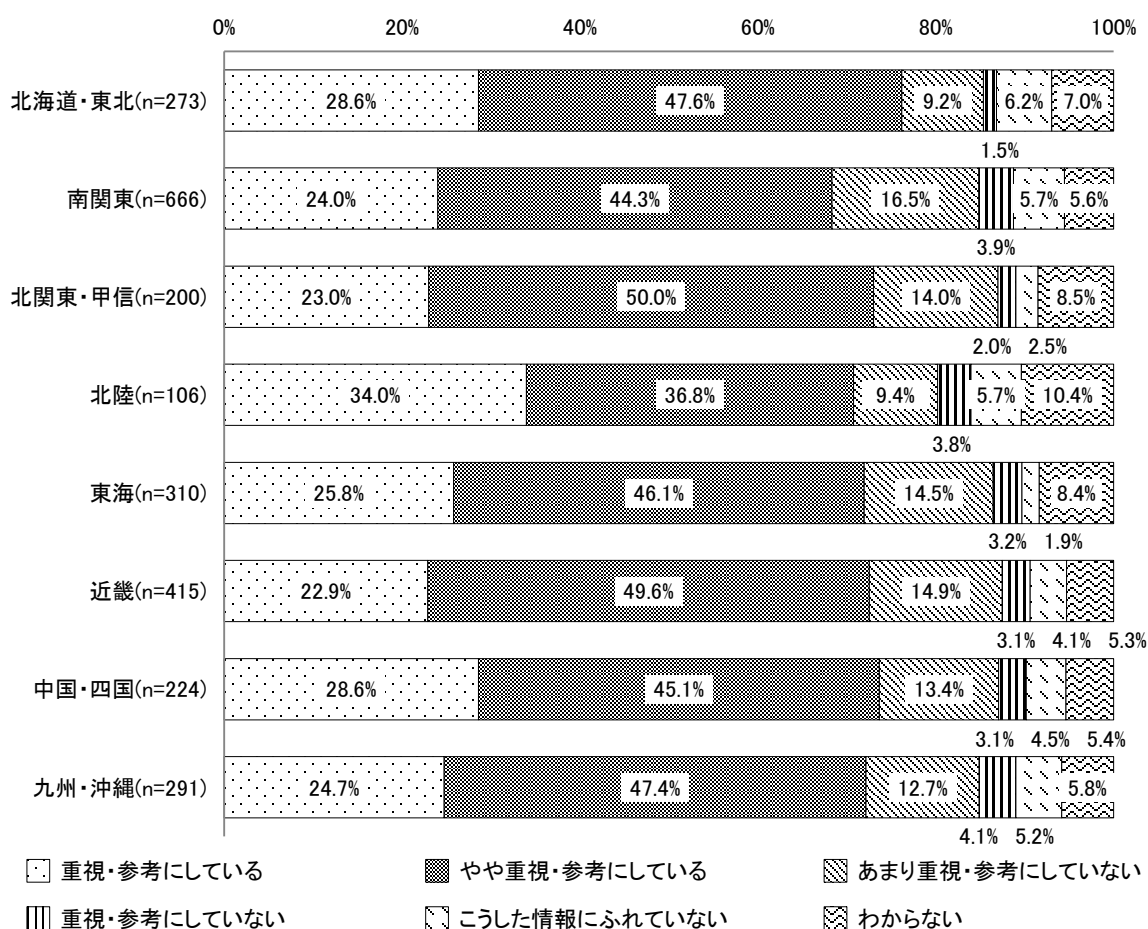
女性では、「やや重視・参考になっている」が46.4%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考になっている」が25.4%となっている。男性では、「やや重視・参考になっている」が52.2%でもっとも割合が高く、次いで「重視・参考になっている」が20.7%となっている。

また、女性について居住地域別にみると、他と比べて「北陸」で「重視・参考になっている」が34.0%と高くなっている。

図表 152 「高校が提供する進路指導の資料」を重視・参考になっているか：単数回答（Q30_9）



図表 153 居住地域別 「高校が提供する進路指導の資料」を重視・参考になっているか（女性）：単数回答（Q5×Q30_9）



（６）自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと

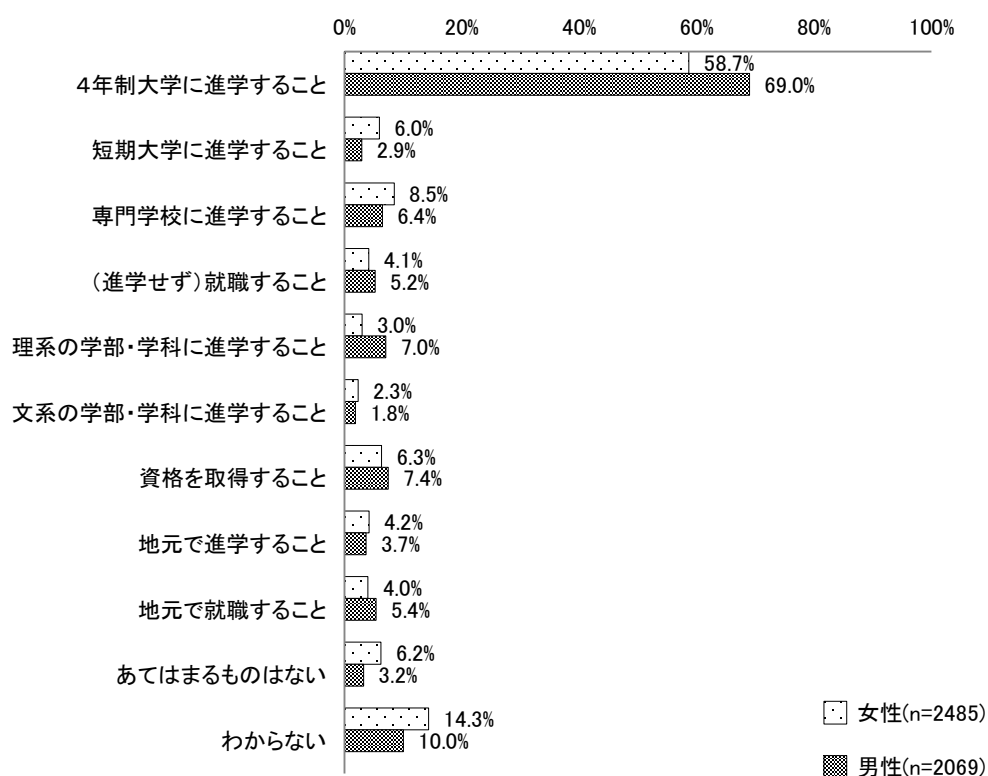
女性では、「４年制大学に進学すること」が 58.7%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 14.3%となっている。男性では、「４年制大学に進学すること」が 69.0%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 10.0%となっている。

男性のほうが女性よりも「４年制大学に進学すること」を挙げる割合が高く、保護者が４年制大学への進学を望んでいると思う割合が高い傾向がうかがえる。

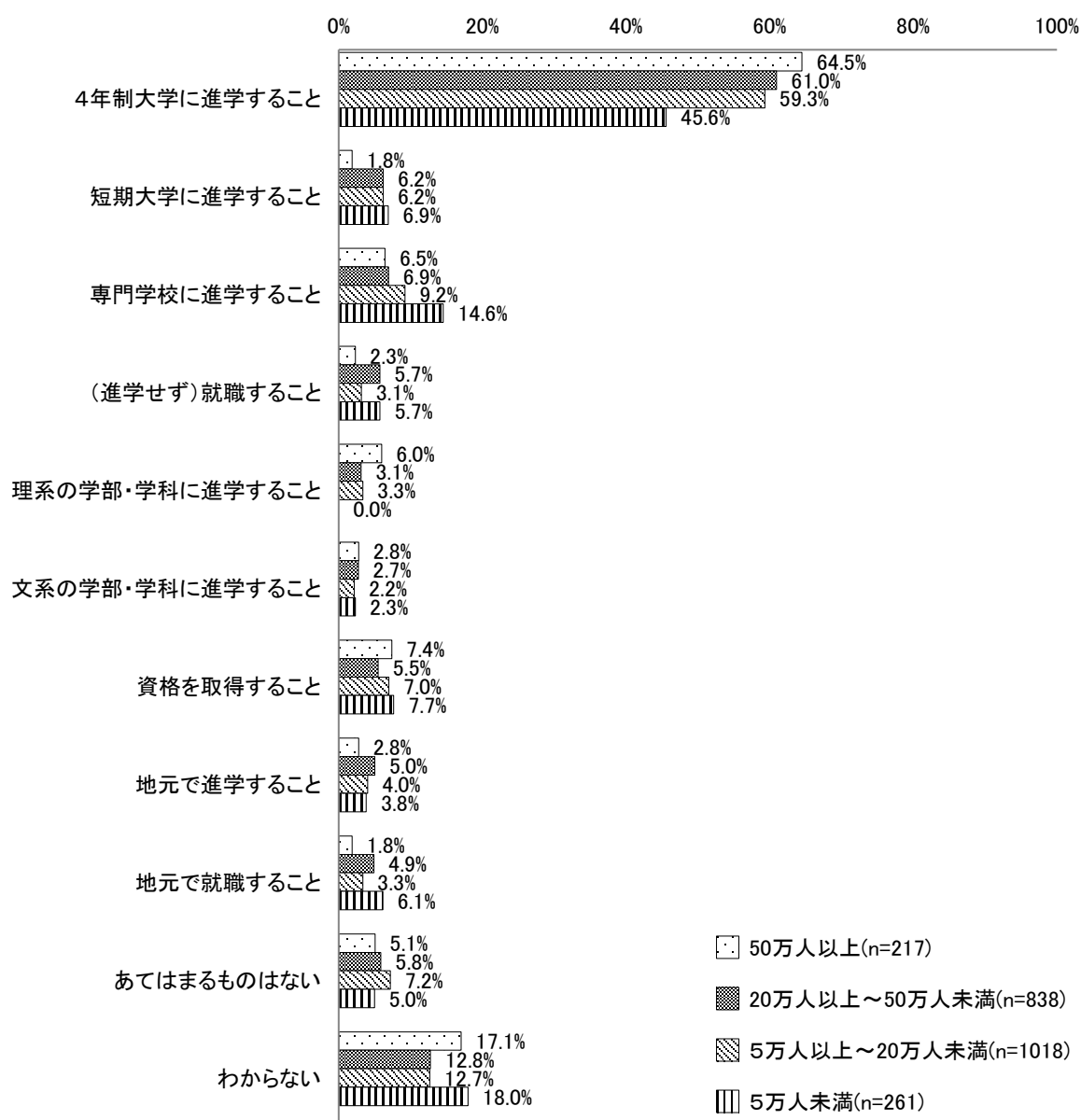
また、女性について人口規模別にみると、規模が大きくなるほど「４年制大学に進学すること」の割合が高い傾向がみられる。一方、「５万人未満」では他と比べて、「専門学校に進学すること」が 14.6%と高くなっている。

同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「４年制大学に進学すること」が 68.0%と割合が高くなっている。

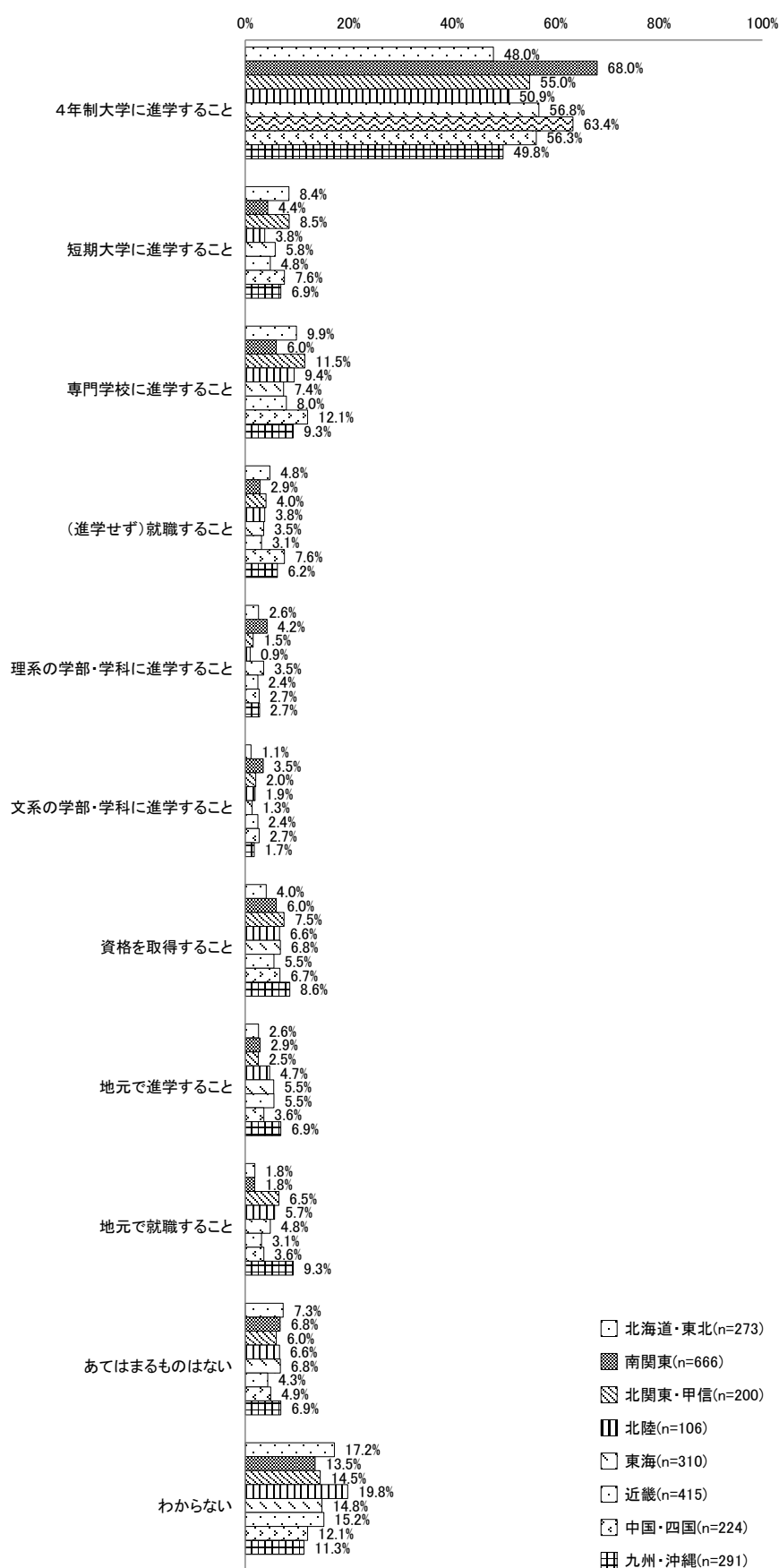
図表 154 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと：複数回答（Q31_1）



図表 155 人口規模別 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと（女性）：複数回答
(Q6×Q31_1)



図表 156 居住地域別 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと
(女性) : 複数回答 (Q5×Q31_1)



(7) 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと

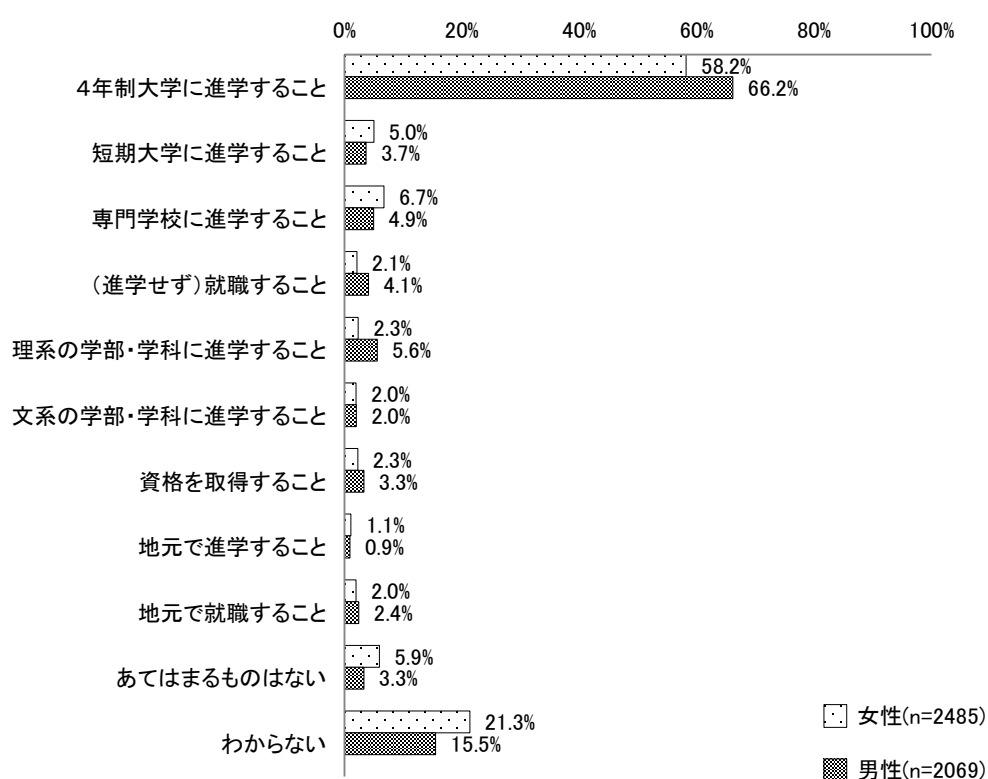
女性では、「4年制大学に進学すること」が 58.2%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 21.3%となっている。男性では、「4年制大学に進学すること」が 66.2%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 15.5%となっている。

男性のほうが女性よりも「4年制大学に進学すること」を挙げる割合が高く、教員が4年制大学への進学を望んでいると思う割合が高い傾向がうかがえる。

また、女性について人口規模別にみると、規模が大きくなるほど「4年制大学に進学すること」が高い傾向がみられる。

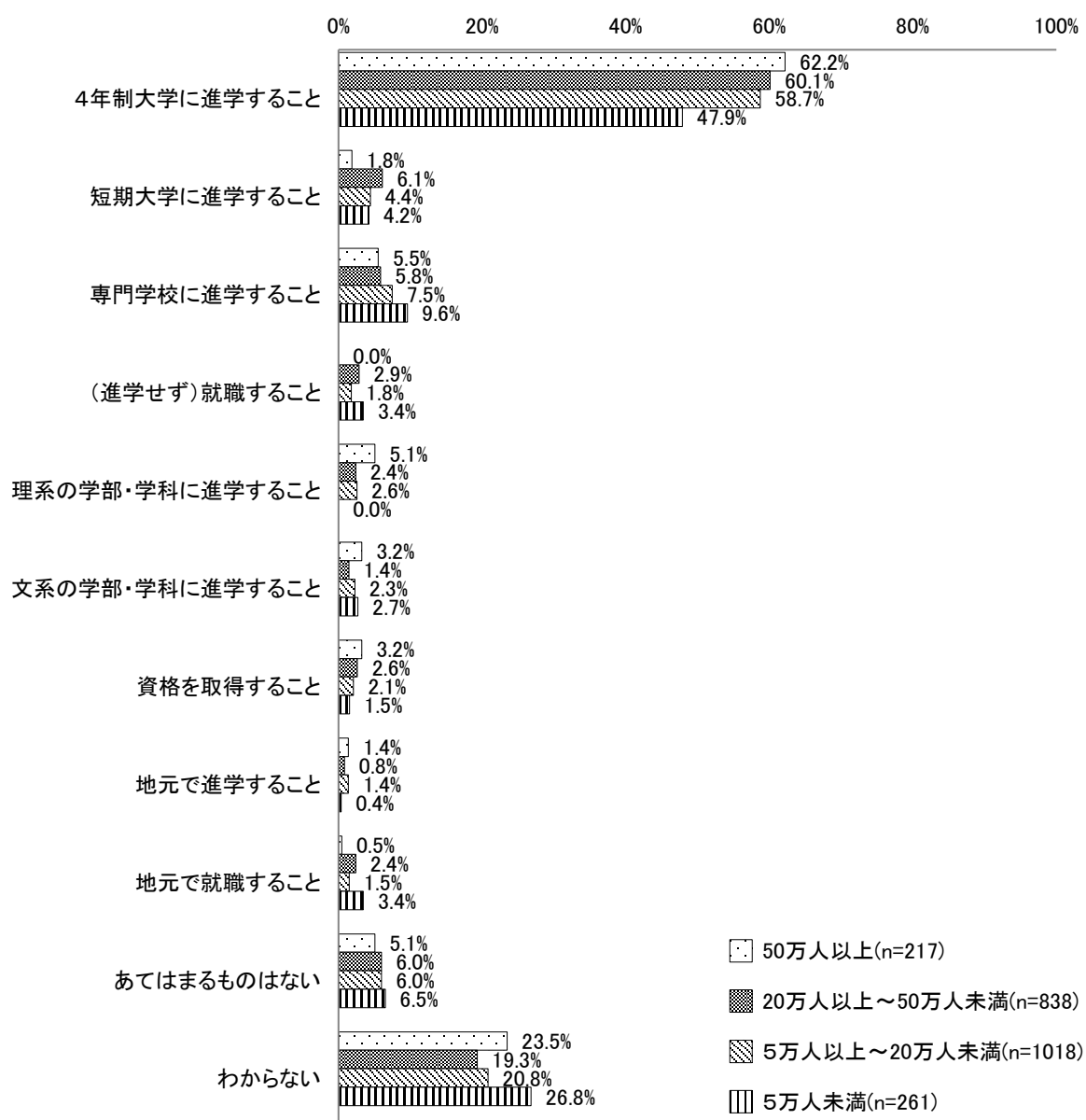
同じく居住地域別にみると、他と比べて「南関東」で「4年制大学に進学すること」が 65.3%と割合が高くなっている。

図表 157 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと：複数回答（Q31_2）

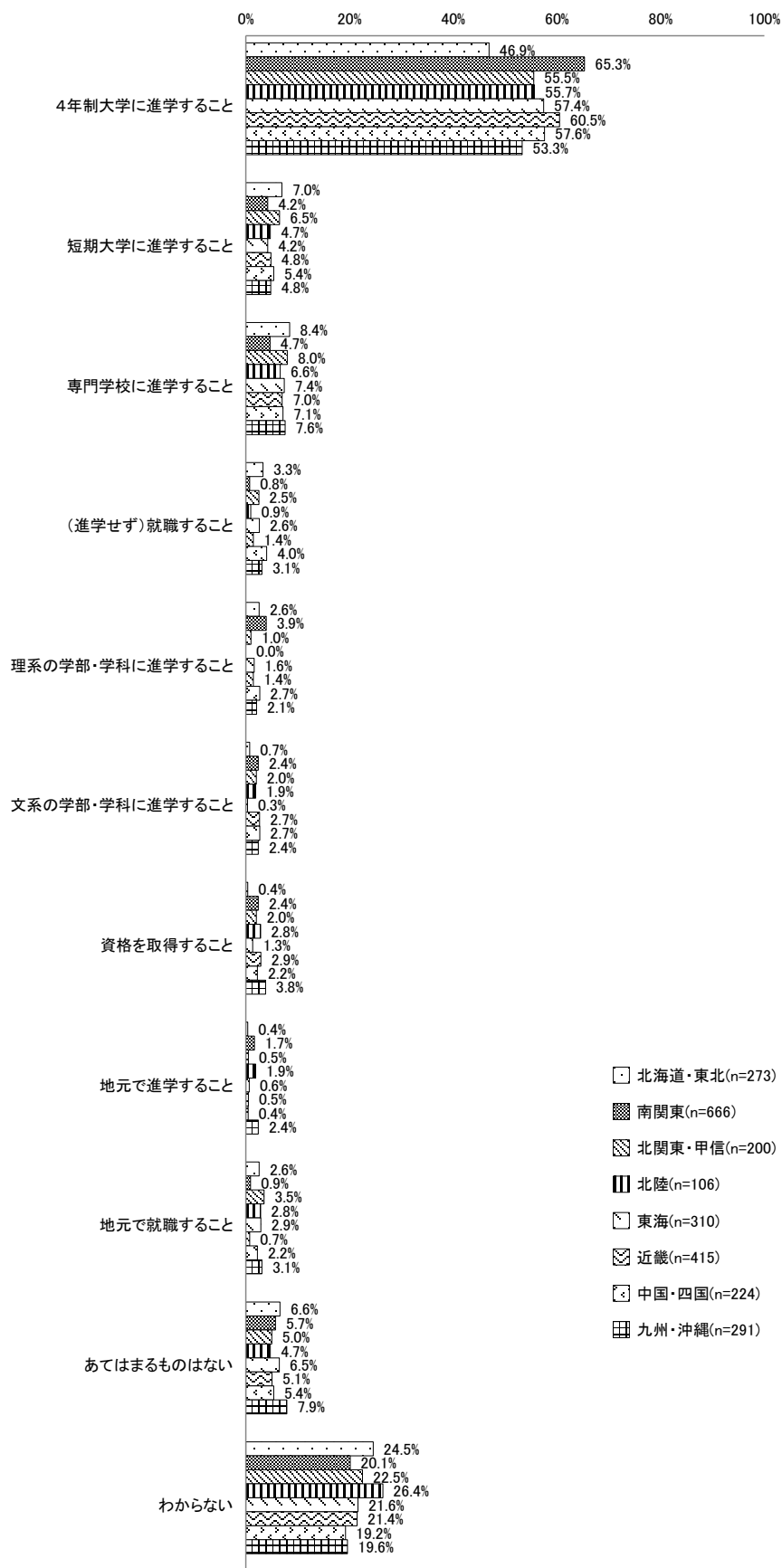


図表 158 人口規模別 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと（女性）：

複数回答（Q6×Q31_2）



図表 159 居住地域別 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと（女性）：
複数回答（Q5×Q31_2）



4-1-5. 固定的性別役割分担意識

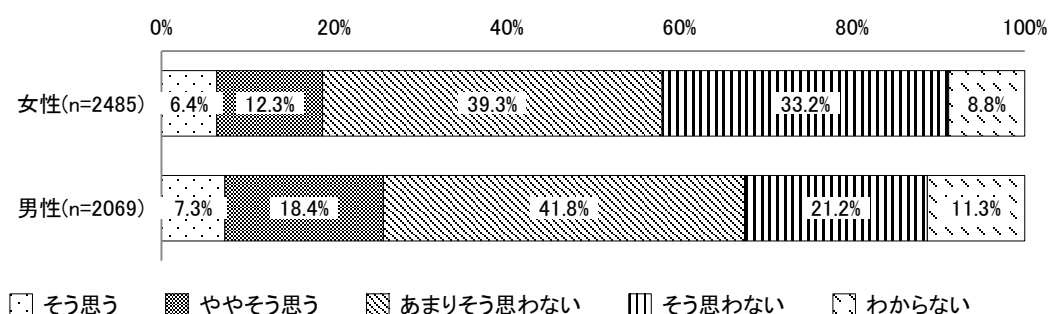
(1) 自身の固定的性別役割分担意識

①「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が39.3%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が33.2%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が41.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が21.2%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思わない」割合が高い傾向がみられる。

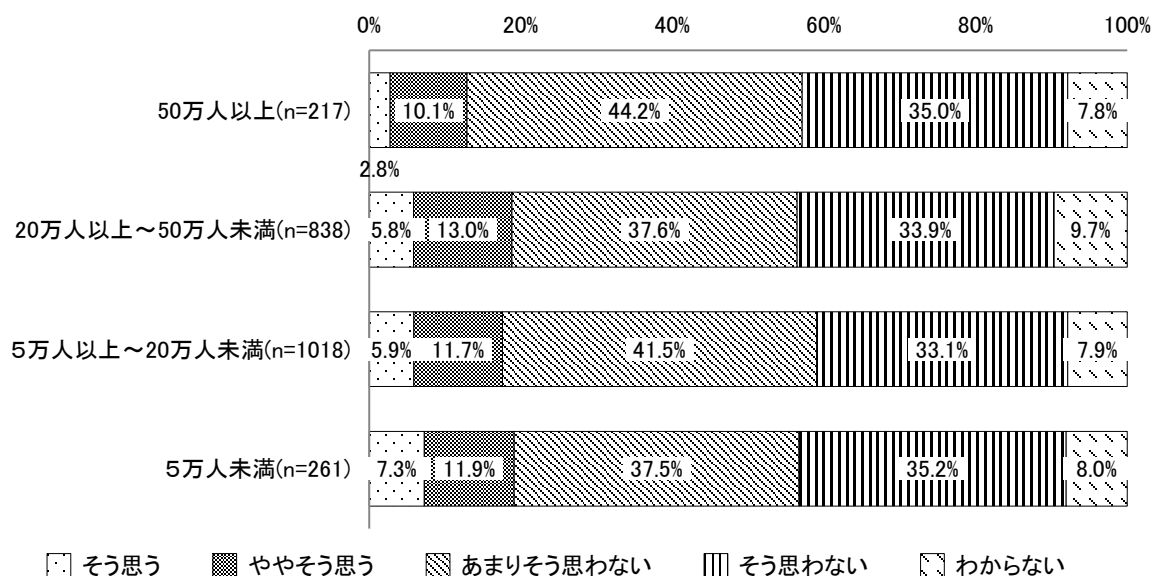
また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が79.3%と、他と比べてそう思わない割合が高くなっている。

図表 160 「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか:単数回答 (Q32_1)



注) 居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、居住地域別のグラフは掲載していない。②～⑥についても同様に、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いがみられなかったものについてはグラフを掲載していない。

図表 161 人口規模別 「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか (女性)
:単数回答 (Q6×Q32_1)

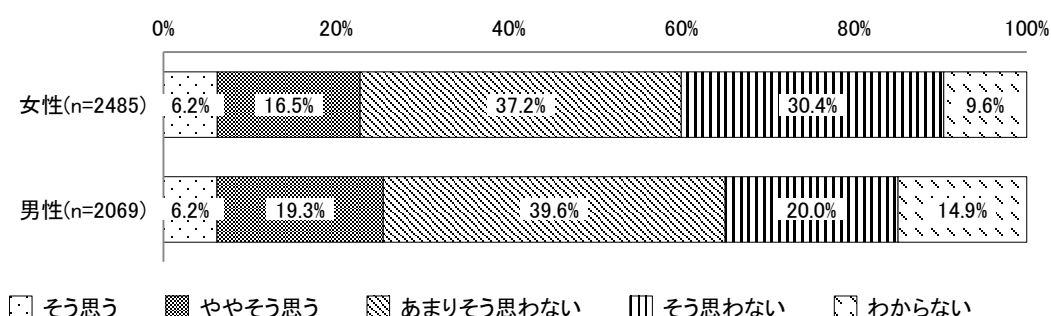


②「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」か

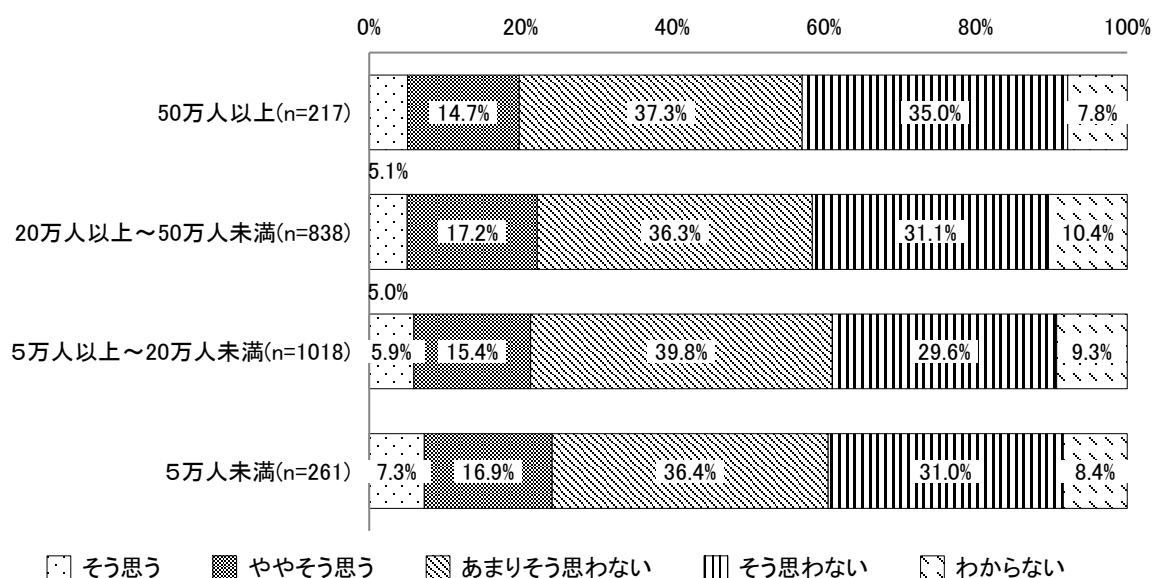
女性では、「あまりそう思わない」が37.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が30.4%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が39.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が20.0%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思わない」割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が72.4%と、他と比べてそう思わない割合がやや高くなっている。

図表 162 「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」か：単数回答（Q32_2）



図表 163 人口規模別 「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」か（女性）：単数回答（Q6×Q32_2）

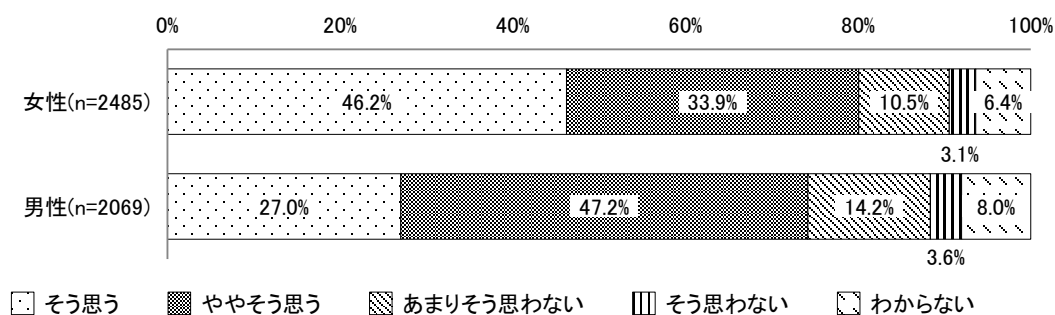


③「男性も家事や育児を担うべきだ」と思うか

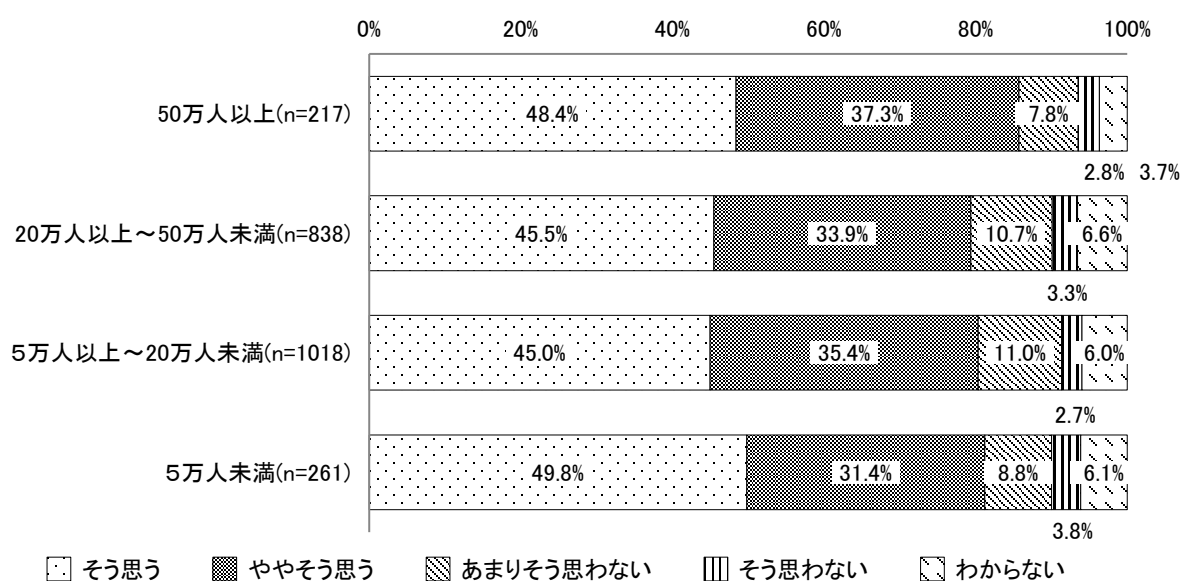
女性では、「そう思う」が46.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が33.9%となっている。男性では、「ややそう思う」が47.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が27.0%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思う」割合が高い傾向がみられる。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思う」「ややそう思う」の合計が85.7%と、他と比べてそう思う割合が高くなっている。

図表 164 「男性も家事や育児を担うべきだ」と思うか：単数回答（Q32_3）



図表 165 人口規模別 「男性も家事や育児を担うべきだ」と思うか（女性）：単数回答（Q6×Q32_3）

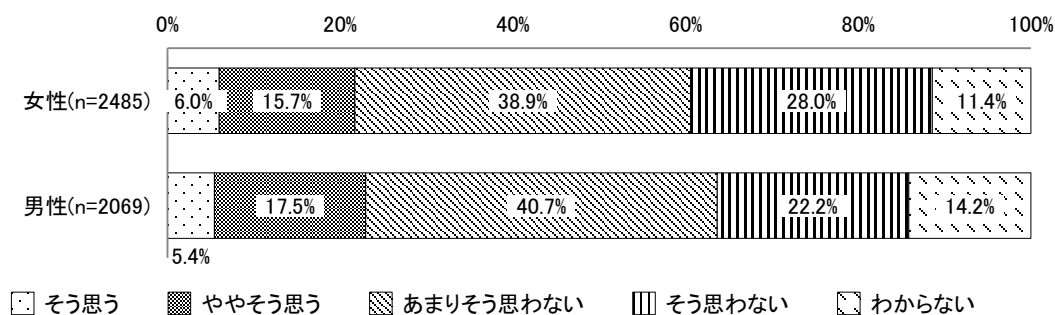


④「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と思うか

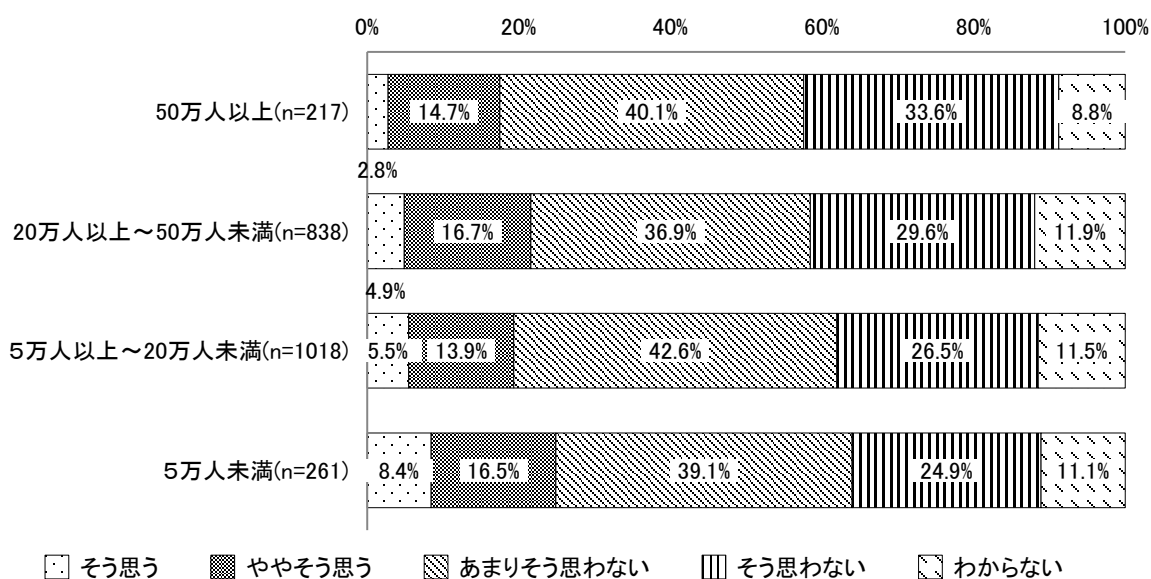
女性では、「あまりそう思わない」が38.9%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が28.0%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が40.7%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が22.2%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が73.7%と、他と比べてそう思わない割合が高くなっている。

図表 166 「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と思うか：単数回答（Q32_4）



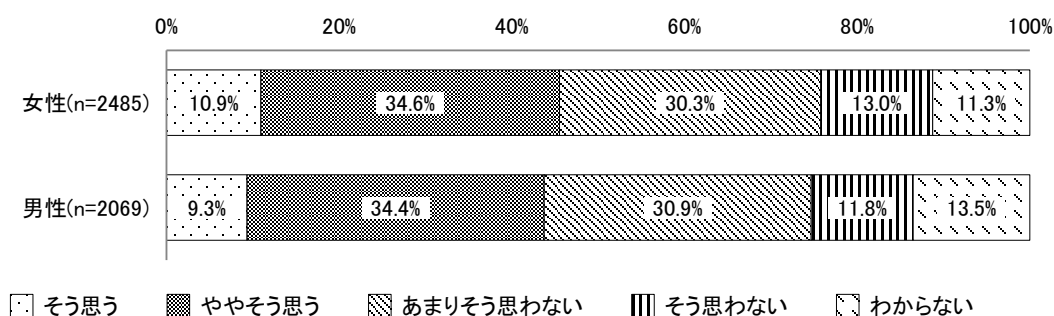
図表 167 人口規模別 「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と思うか（女性）：単数回答（Q6×Q32_4）



⑤「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」か

女性では、「ややそう思う」が34.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.3%となっている。男性では、「ややそう思う」が34.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.9%となっている。

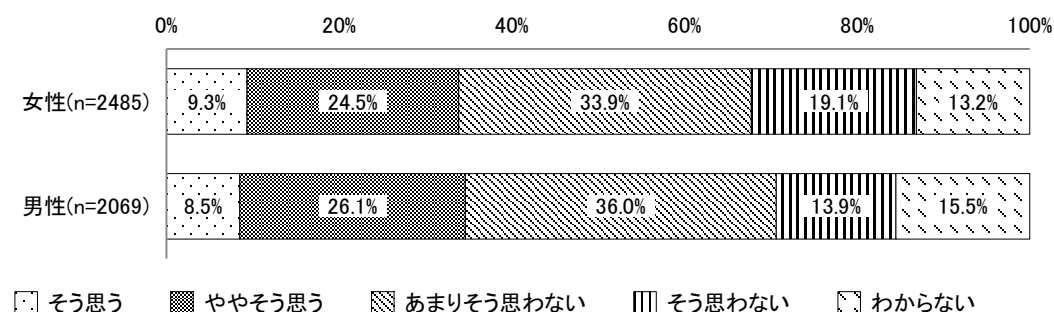
図表 168 「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」か:単数回答 (Q32_5)



⑥「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と思うか

女性では、「あまりそう思わない」が33.9%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が24.5%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が36.0%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が26.1%となっている。

図表 169 「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と思うか:単数回答 (Q32_6)



（２）保護者の固定的性別役割分担意識

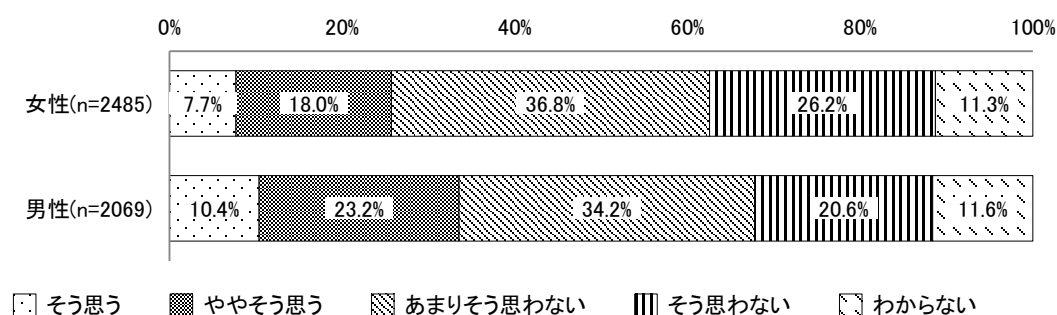
以下では、生徒本人に対し、固定的性別役割分担意識に関する各項目について、保護者がどのように考えていると思うかについてたずねた。

①保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と考えていると思うか

女性では、「あまりそう思わない」が 36.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が 26.2%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が 34.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が 23.2%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思わない」割合が高い傾向がみられる。

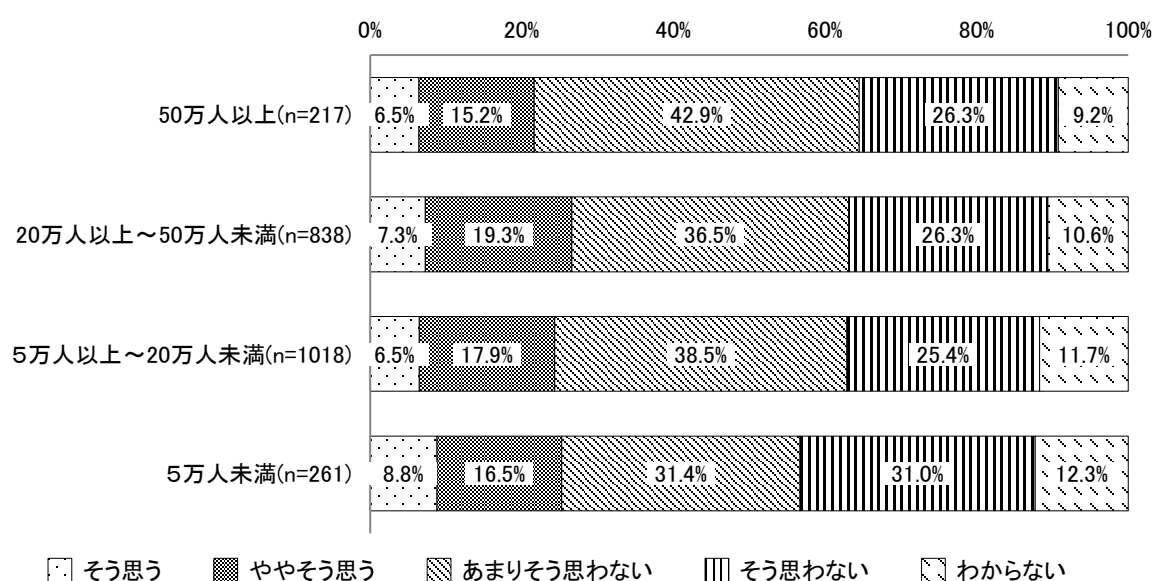
また、女性について人口規模別にみると、「50 万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が 69.1%と、他と比べてそう思わない割合が高くなっている。

図表 170 保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と考えていると思うか：単数回答（Q33_1）



注) 居住地域による特筆すべき傾向の違いはみられなかったため、居住地域別のグラフは掲載していない。②～⑥についても同様に、人口規模、居住地域による特筆すべき傾向の違いがみられなかったものについてはグラフを掲載していない。

図表 171 人口規模別 保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と考えていると思うか（女性）：単数回答（Q6×Q33_1）

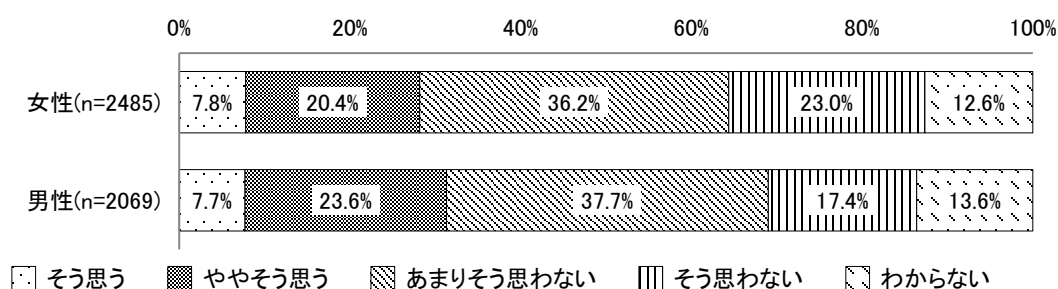


②保護者が「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」と考えていると思うか

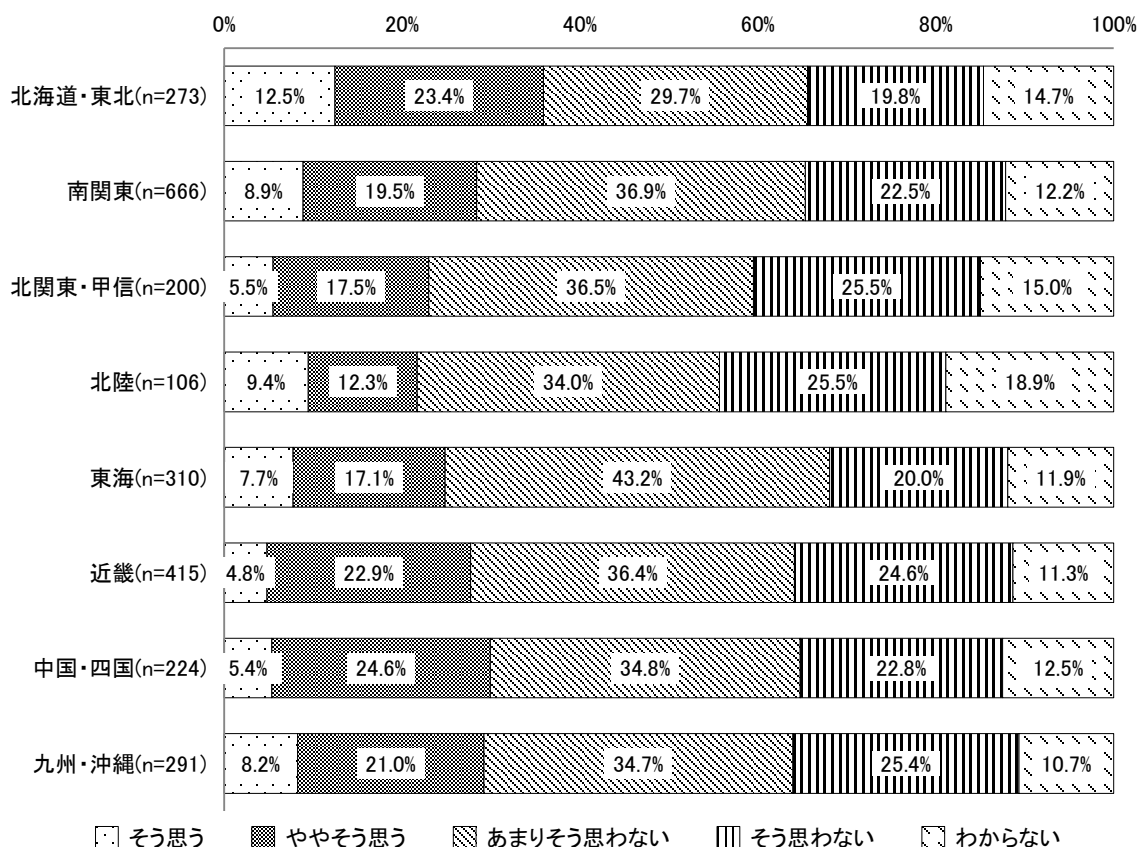
女性では、「あまりそう思わない」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が23.0%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が37.7%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が23.6%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思わない」割合が高い傾向がみられる。

また、女性について居住地域別にみると、「北陸」「北関東・甲信」「東海」では「そう思う」「ややそう思う」の割合が他と比べて低い傾向がみられる。

図表 172 保護者が「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」と考えていると思うか：単数回答（Q33_2）



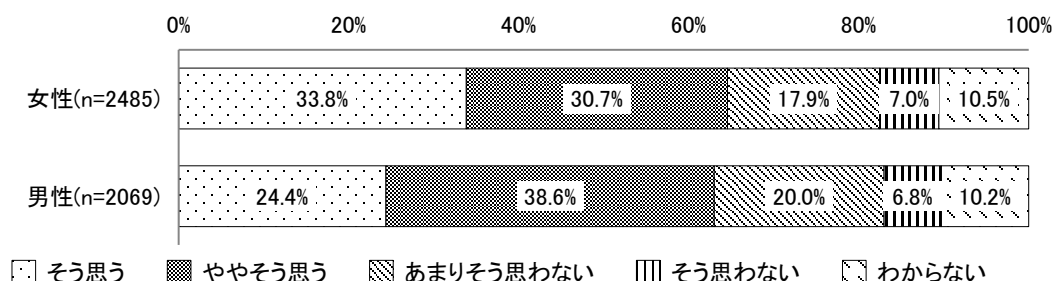
図表 173 居住地域別 保護者が「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」と考えていると思うか（女性）：単数回答（Q5×Q33_2）



③保護者が「男性も家事や育児を担うべきだ」と考えていると思うか

女性では、「そう思う」が33.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が30.7%となっている。男性では、「ややそう思う」が38.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が24.4%となっている。女性のほうが男性よりも、「そう思う」割合が高い傾向がある。

図表 174 保護者が「男性も家事や育児を担うべきだ」と考えていると思うか：単数回答（Q33_3）

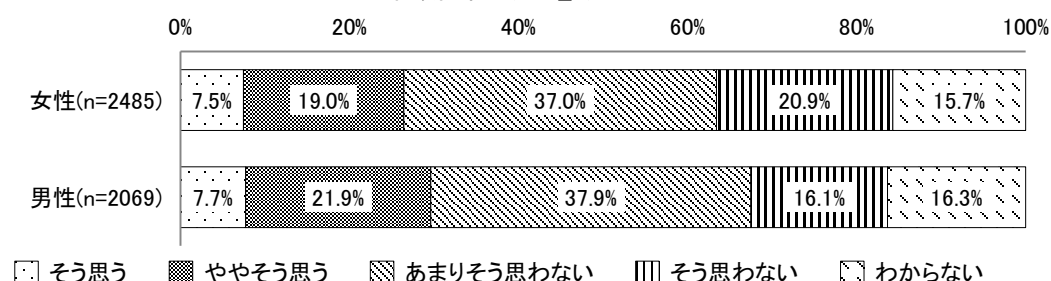


④保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と考えていると思うか

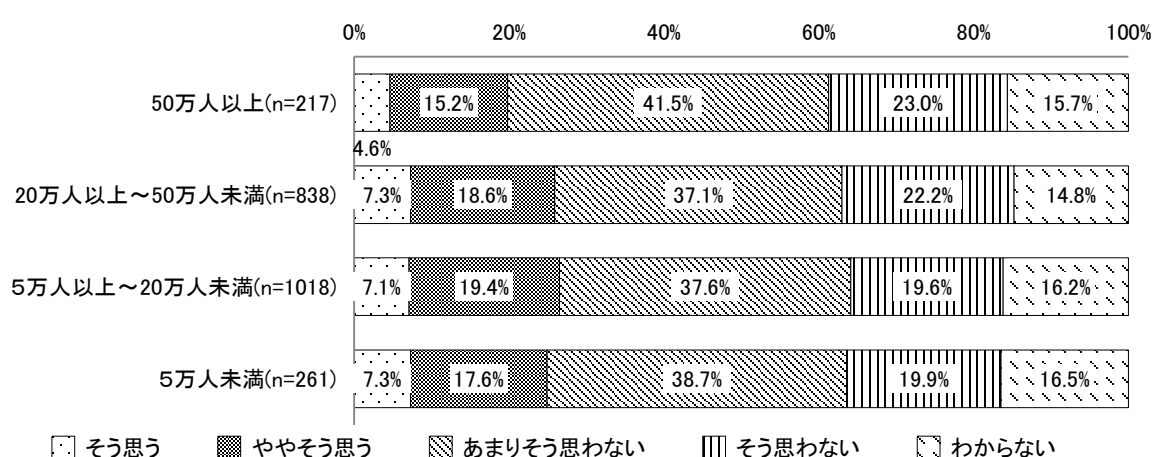
女性では、「あまりそう思わない」が37.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が20.9%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が37.9%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が21.9%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が64.5%と、他と比べてそう思わない割合が高くなっている。

図表 175 保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と考えていると思うか：単数回答（Q33_4）



図表 176 人口規模別 保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と考えていると思うか（女性）：単数回答（Q6×Q33_4）

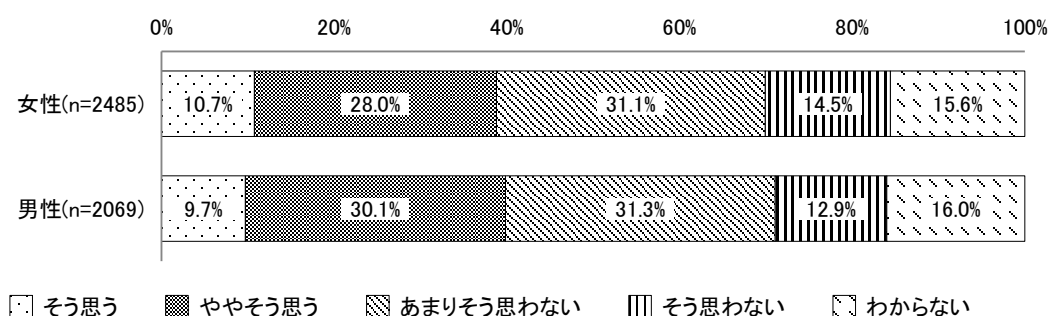


⑤保護者が「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」と考えていると思うか

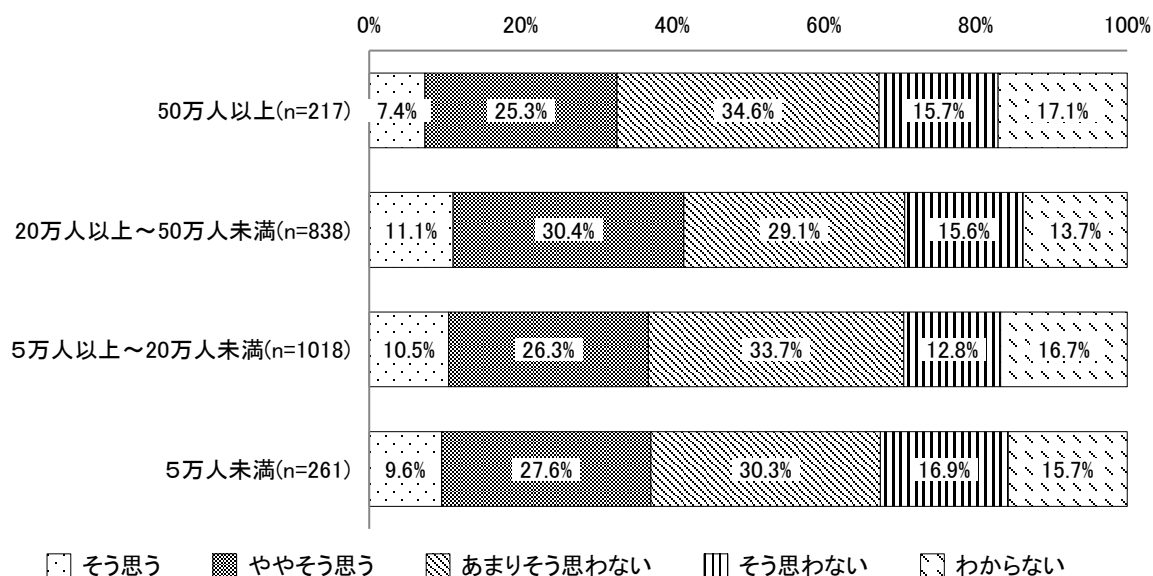
女性では、「あまりそう思わない」が31.1%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が28.0%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が31.3%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が30.1%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「50万人以上」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が50.2%と、他と比べてそう思わない割合がやや高くなっている。

図表 177 保護者が「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」と考えていると思うか：単数回答（Q33_5）



図表 178 人口規模別 保護者が「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」と考えていると思うか（女性）：単数回答（Q6×Q33_5）

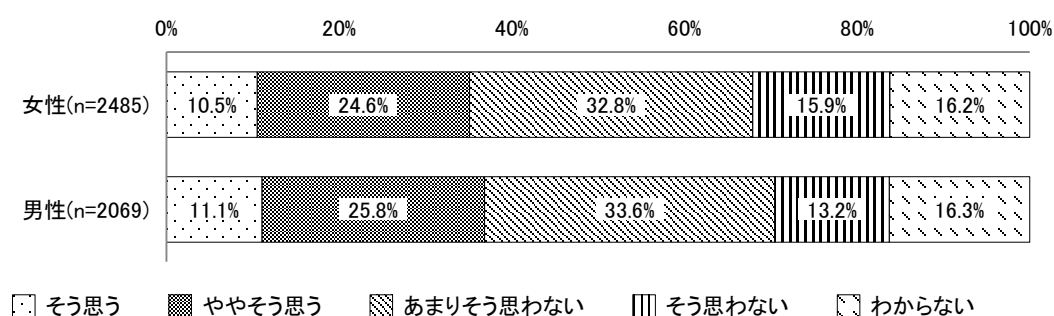


⑥保護者が「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と考えていると思うか

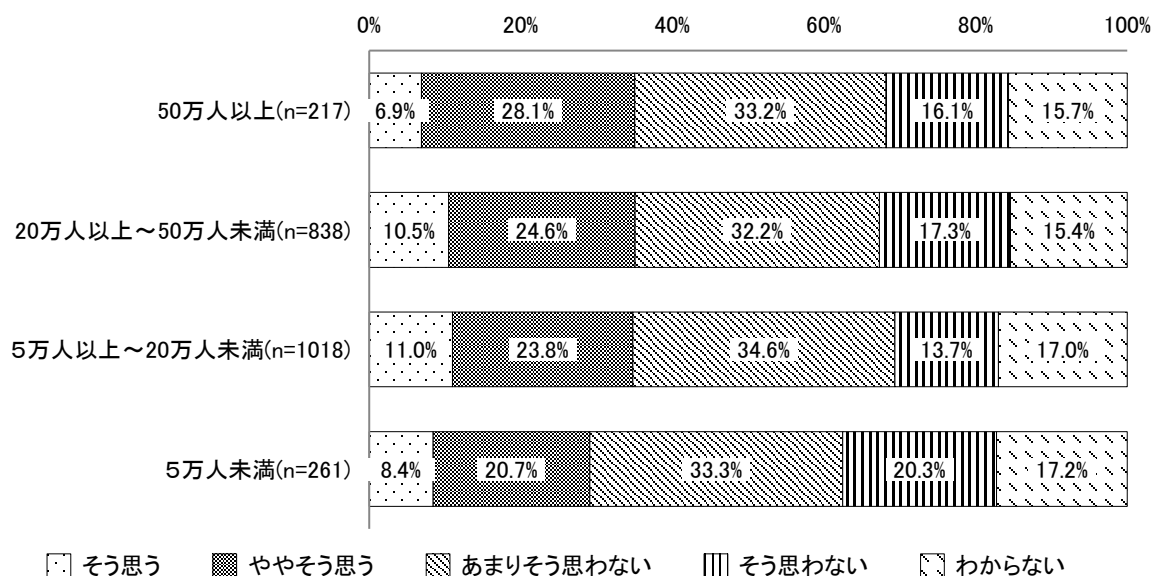
女性では、「あまりそう思わない」が32.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が24.6%となっている。男性では、「あまりそう思わない」が33.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が25.8%となっている。

また、女性について人口規模別にみると、「5万人未満」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計が53.6%と、他と比べてそう思わない割合が高くなっている。

図表 179 保護者が「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と考えていると思うか：単数回答（Q33_6）



図表 180 人口規模別 保護者が「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と考えていると思うか（女性）：単数回答（Q6×Q33_6）

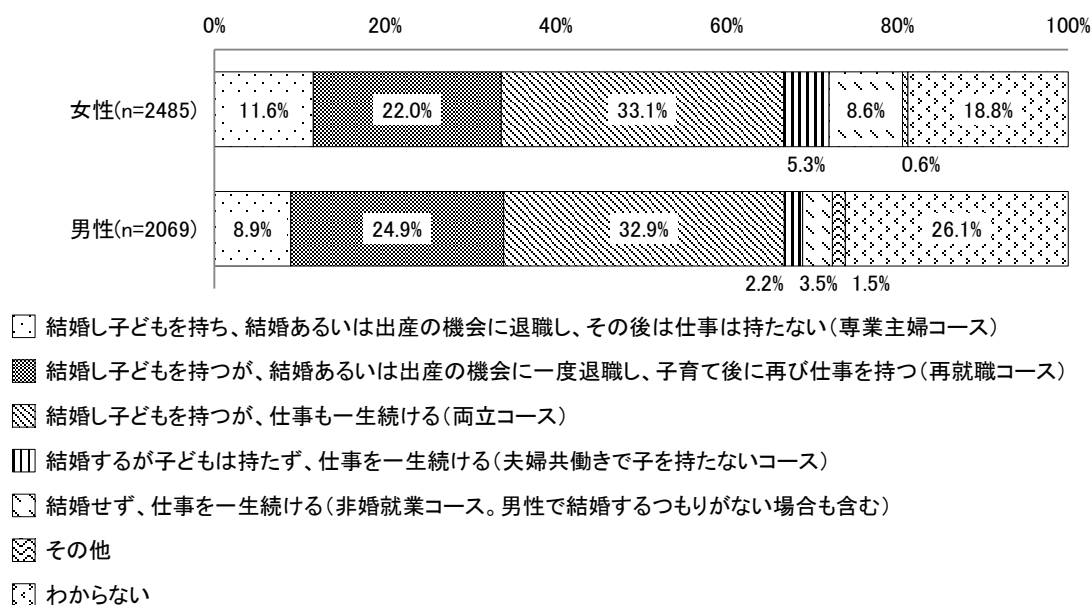


（３）将来のライフコースの希望

女性では、「結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）」が 33.1%でもっとも割合が高く、次いで「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会に一度退職し、子育て後に再び仕事を持つ（再就職コース）」が 22.0%となっている。男性では、「結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）」が 32.9%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が 26.1%となっている。女性のほうが男性よりも、「結婚せず、仕事を一生続ける（非婚就業コース）」を希望する割合が高い傾向がみられる。

また、女性について、生徒本人の固定的性別役割分担意識と将来のライフコースの希望との関連をみると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」や、「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」について、「そう思う」「ややそう思う」と回答した層は、「結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない（専業主婦コース）」の割合が、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した層は「結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）」を希望する割合が高い傾向がみられる。

図表 181 将来のライフコースの希望：単数回答（Q34）



図表 182 生徒本人の固定的性別役割分担意識別 将来のライフコースの希望（女性）：

単数回答（Q32_1・Q32_2×Q34）

＜「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか別＞

	合計	Q34 ライフコースの希望						
		結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない（専業主婦コース）	結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会に一度退職し、子育て後に再び仕事を持つ（再就職コース）	結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）	結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける（夫婦共働きで子を持たないコース）	結婚せず、仕事を一生続ける（非婚就業コース）	その他	わからない
全体	2,485	11.6	22.0	33.1	5.3	8.6	0.6	18.8
そう思う	159	34.6	23.9	20.1	4.4	2.5	0.6	13.8
ややそう思う	305	23.0	34.8	16.1	3.9	5.2	0.7	16.4
あまりそう思わない	977	10.2	25.1	35.7	4.1	8.3	0.6	16.0
そう思わない	825	5.2	17.1	43.3	8.1	12.4	0.8	13.1
わからない	219	9.1	7.8	16.0	2.7	5.0	0.0	59.4

＜「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」と思うか別＞

	合計	Q34 ライフコースの希望						
		結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない（専業主婦コース）	結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会に一度退職し、子育て後に再び仕事を持つ（再就職コース）	結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）	結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける（夫婦共働きで子を持たないコース）	結婚せず、仕事を一生続ける（非婚就業コース。男性で結婚するつもりがない場合も含む）	その他	わからない
全体	2,485	11.6	22.0	33.1	5.3	8.6	0.6	18.8
そう思う	155	32.3	31.0	18.7	1.9	2.6	0.0	13.5
ややそう思う	411	23.1	34.1	21.2	2.9	4.4	0.2	14.1
あまりそう思わない	924	8.4	22.9	40.4	4.4	6.7	0.5	16.6
そう思わない	756	6.0	16.0	38.8	9.0	15.7	1.3	13.2
わからない	239	8.4	10.9	16.7	3.3	4.6	0.0	56.1

4-2. テーマ別分析

以降では、アンケート調査の回答に基づき、第2章で述べた仮説に基づく分析を行った。はじめに、女性の4年制大学への進学に影響を与える要因を検討し、関連がみられた要因について、人口規模による傾向の違いを確認した(4-2-1)。次に、女性の理工系分野への進学に影響を与える要因を検討し、同様に関連がみられた要因について、人口規模による傾向の違いを確認した(4-2-2)。

4-2-1. 女性の進学に影響を与える要因についての分析

(1) 集計・分析の概要

理工系分野への進路選択においては4年制大学への進学が前提となることから、ここではまず、女性の進路選択の希望、特に4年制大学への進学を希望する女性の特徴を明らかにするため、将来の進路希望の状況について分析を行った。分析にあたっては、第2章で述べた仮説に基づき、女性を分析対象として将来の進路希望(4年制大学、短期大学、専門学校、就職)と、「個人要因」「環境要因」に係る設問との関連性を確認した。結果は「①女性の進学と関連がみられる要因」に記載している。

次に、将来の進路希望と関連がみられた要因について、居住地域の人口規模別に傾向の違いを確認した。結果は「②各要因の人口規模別の特徴」に記載している。なお、女性と男性で、人口規模別の結果について異なる傾向がみられたものについては、男性の結果についても記載している。

(2) 結果の概要

①女性の進学と関連がみられる要因

<個人要因>

○進路を選択するうえで、考慮しようとしていること

「4年制大学志望者」「短期大学志望者」では、「地理的なこと(自宅から通えること、地元で就職することなど)」を考慮する割合が高い。また、「4年制大学志望者」では、「試験方法に関すること(受験がないこと、苦手科目がないことなど)」を考慮する割合も高い。(図表 183)

○ライフコースの希望

「4年制大学志望者」では、「結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける(両立コース)」を希望する割合が高い一方、「短期大学志望者」では、「結婚や出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない(専業主婦コース)」を希望する割合が高い。(図表 184)

○固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ

「短期大学志望者」では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにあると思う」といった固定的性別役割分担意識や、「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」等のステレオタイプが他と比べて強い傾向がみられる。(図表 185)

<環境要因(家庭)>

○家庭の暮らしの状況

「4年制大学志望者」では、家庭の暮らしにゆとりがある割合が高い一方、「就職志望者」では、家庭の暮らしが苦しい割合が高い。(図表 186)

○保護者の最終学歴

「4年制大学志望者」では、保護者の最終学歴が「大学」である割合が高い。(図表 187、図表 188)

○自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと

「4年制大学志望者」「短期大学志望者」「専門学校志望者」「就職志望者」いずれについても、自身の希望する進路と、自身の進路について保護者が望んでいることへの認知が一致している傾向がみられる。また、「就職志望者」では、自身の進路について、保護者が「地元で就職すること」を望んでいると認知している割合が高い。(図表 189)

○保護者の固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ

「短期大学志望者」では、保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」等の固定的性別役割分担意識を抱いていると認知している割合が高い。また、「4年制大学志望者」「短期大学志望者」では、保護者が「理系科目は男性に向き、文系科目は女性に向いている」等のステレオタイプを抱いていると認知している割合が高い。(図表 190)

<環境要因（学校）>

○在学校の進学状況

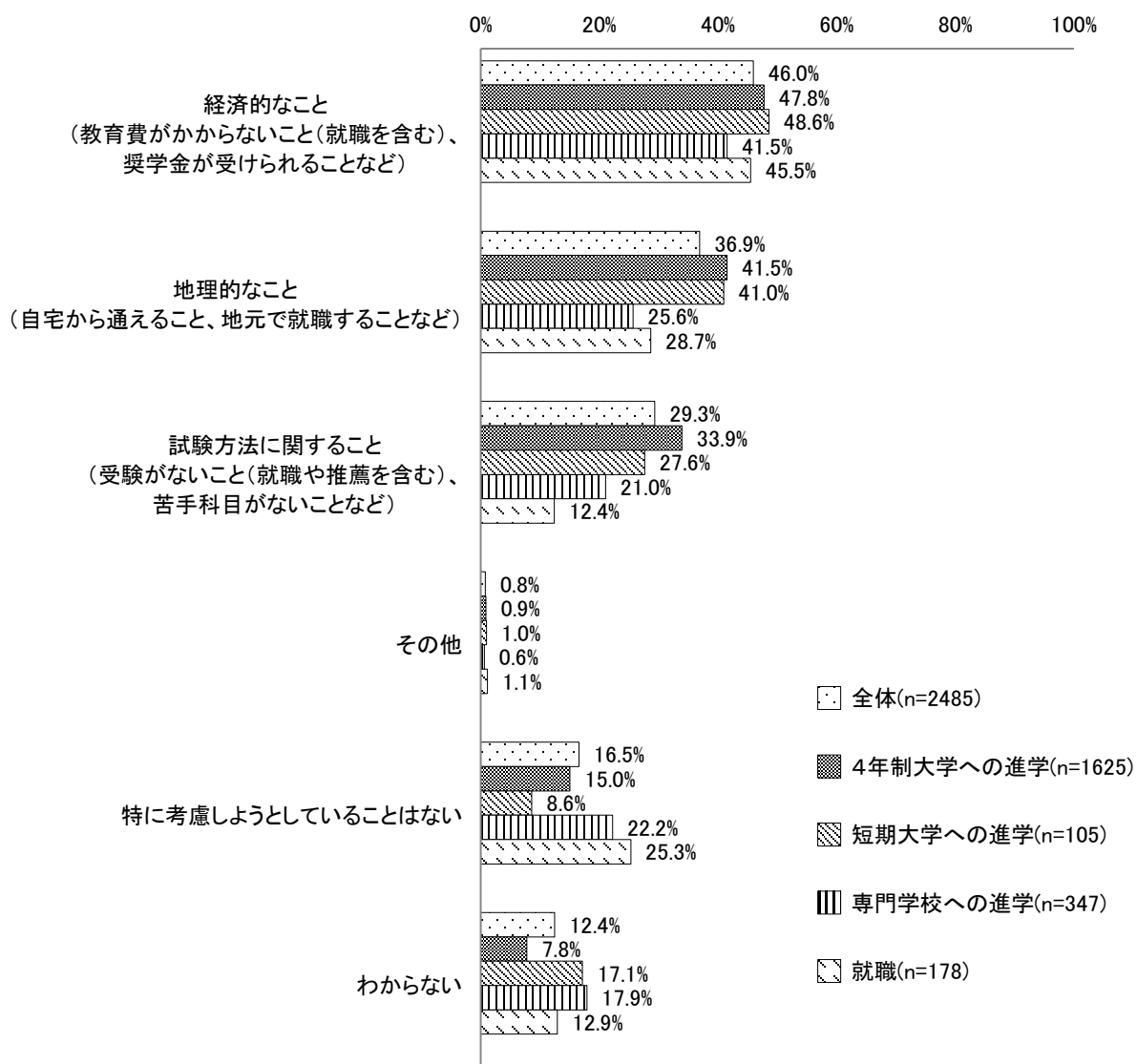
「4年制大学志望者」では、大学進学者が多い学校に通っている割合が高い。同様に、「短期大学志望者」では短期大学進学者が多い学校に、「専門学校志望者」では専門学校進学者が多い学校に、「就職志望者」では就職する生徒が多い学校に通っている割合が高い。(図表 191)

○自身の進路について、教員が望んでいると思うこと

「4年制大学志望者」「短期大学志望者」「専門学校志望者」「就職志望者」いずれについても、自身の希望する進路と、自身の進路について教員が望んでいることへの認知が一致している傾向がみられる。また、「就職志望者」では、自身の進路について、教員が「地元で就職すること」を望んでいると認知している割合が高い。(図表 192)

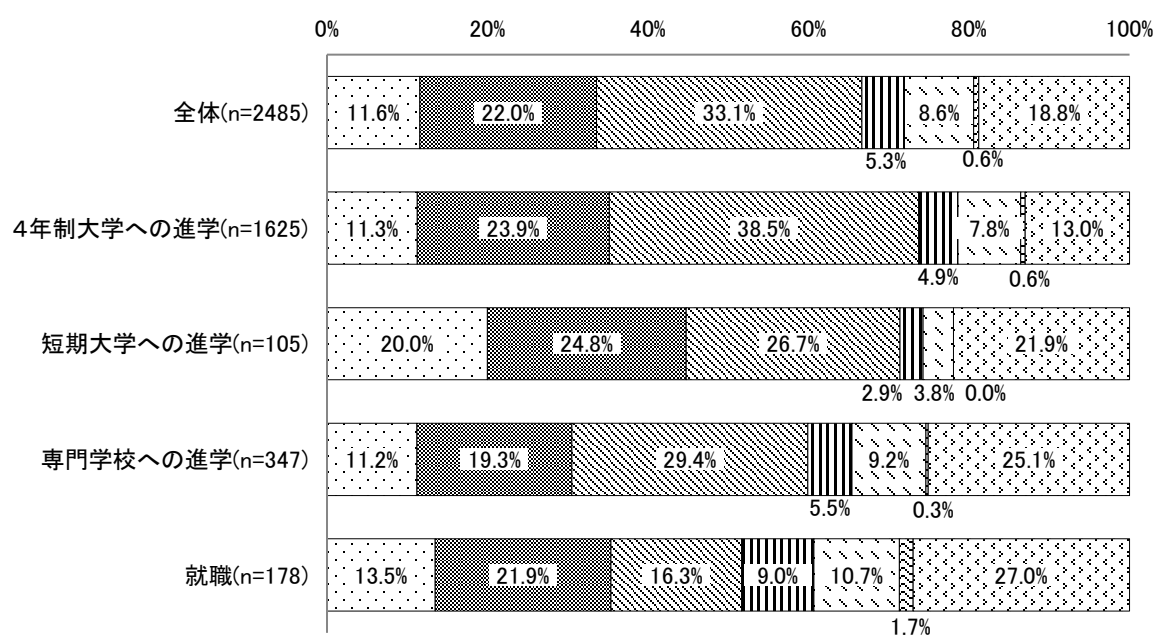
i) 個人要因

図表 183 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること（女性）：複数回答（Q29）



注) 高校卒業後の進路希望（Q9）別にクロス集計を行った。なお、進路希望について「その他」「まだ決めていない、わからない」と回答した者については、表示を省略している。以下同様。

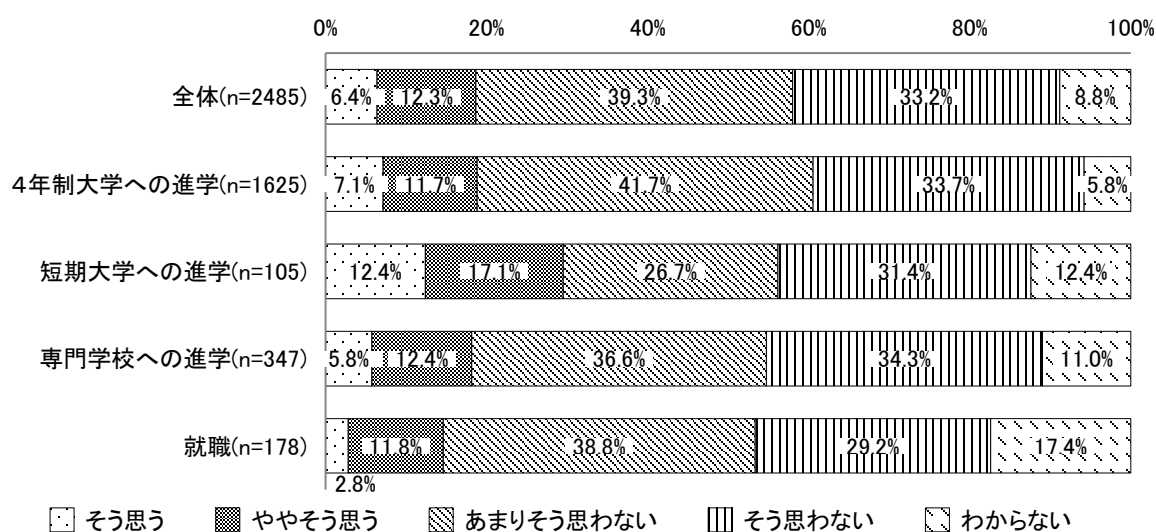
図表 184 ライフコースの希望（女性）：単数回答（Q34）



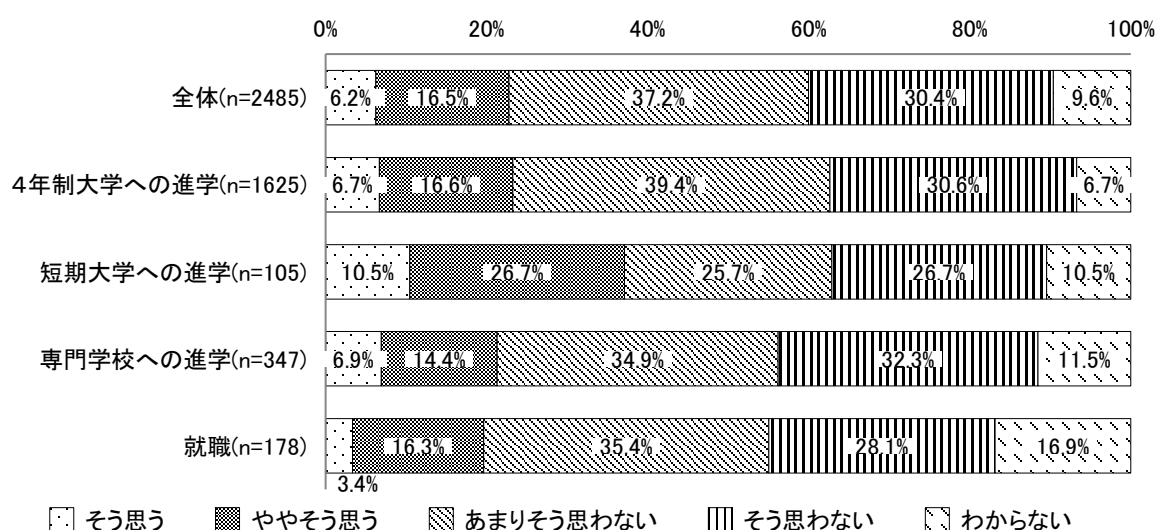
- 結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事は持たない（専業主婦コース）
- 結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会に一度退職し、子育て後に再び仕事を持つ（再就職コース）
- 結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける（両立コース）
- 結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける（夫婦共働きで子を持たないコース）
- 結婚せず、仕事を一生続ける（非婚就業コース。男性で結婚するつもりがない場合も含む）
- その他
- わからない

図表 185 固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ（女性）：単数回答（Q32）

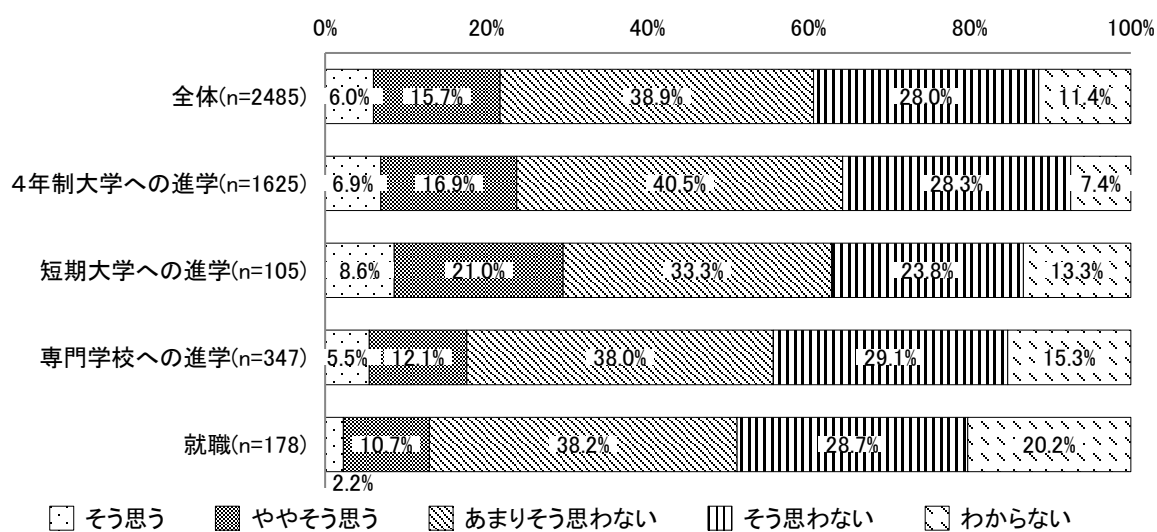
①「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか（Q32_1）



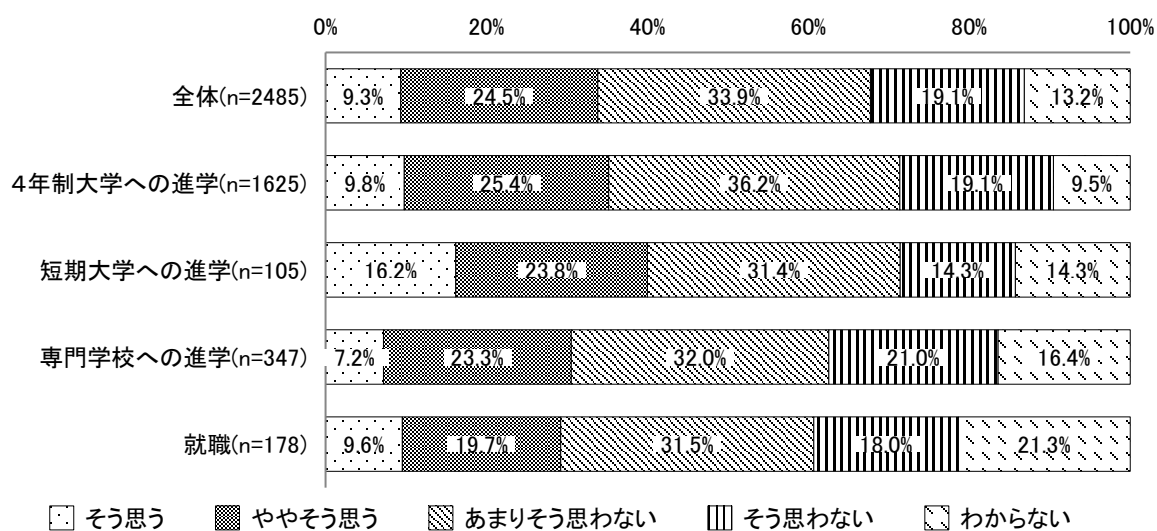
②「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにある」と思うか（Q32_2）



③「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と思うか (Q32_4)

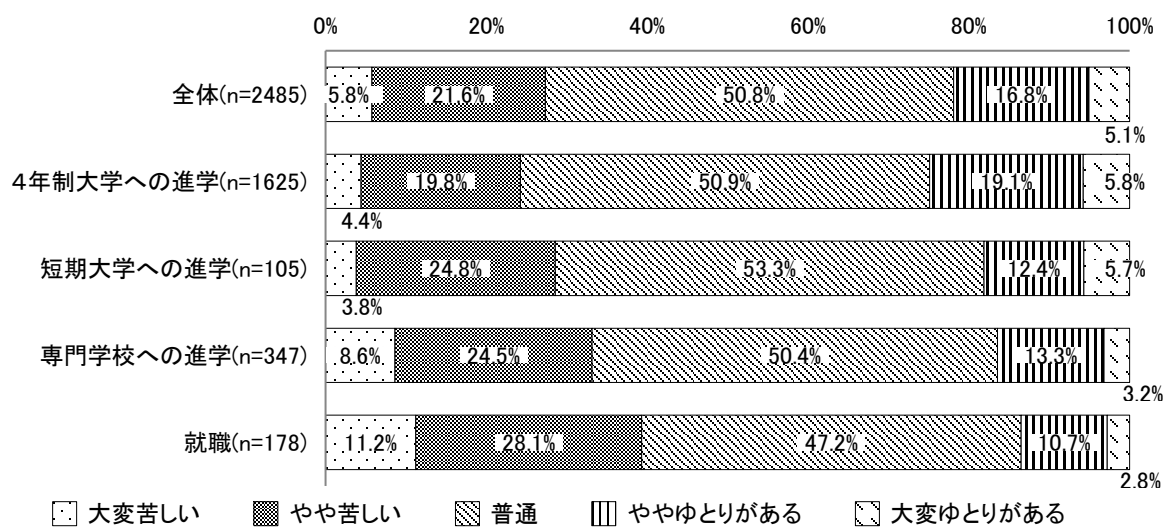


④「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と思うか (Q32_6)

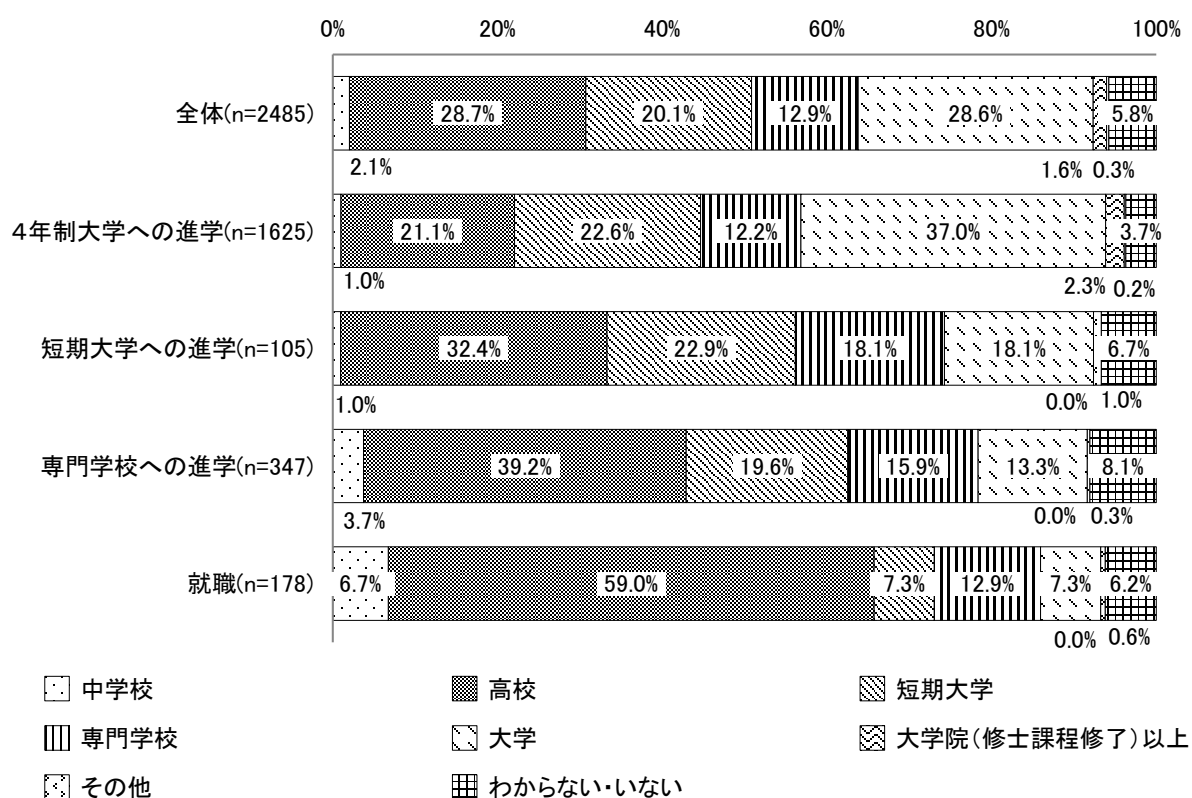


ii) 環境要因（家庭）

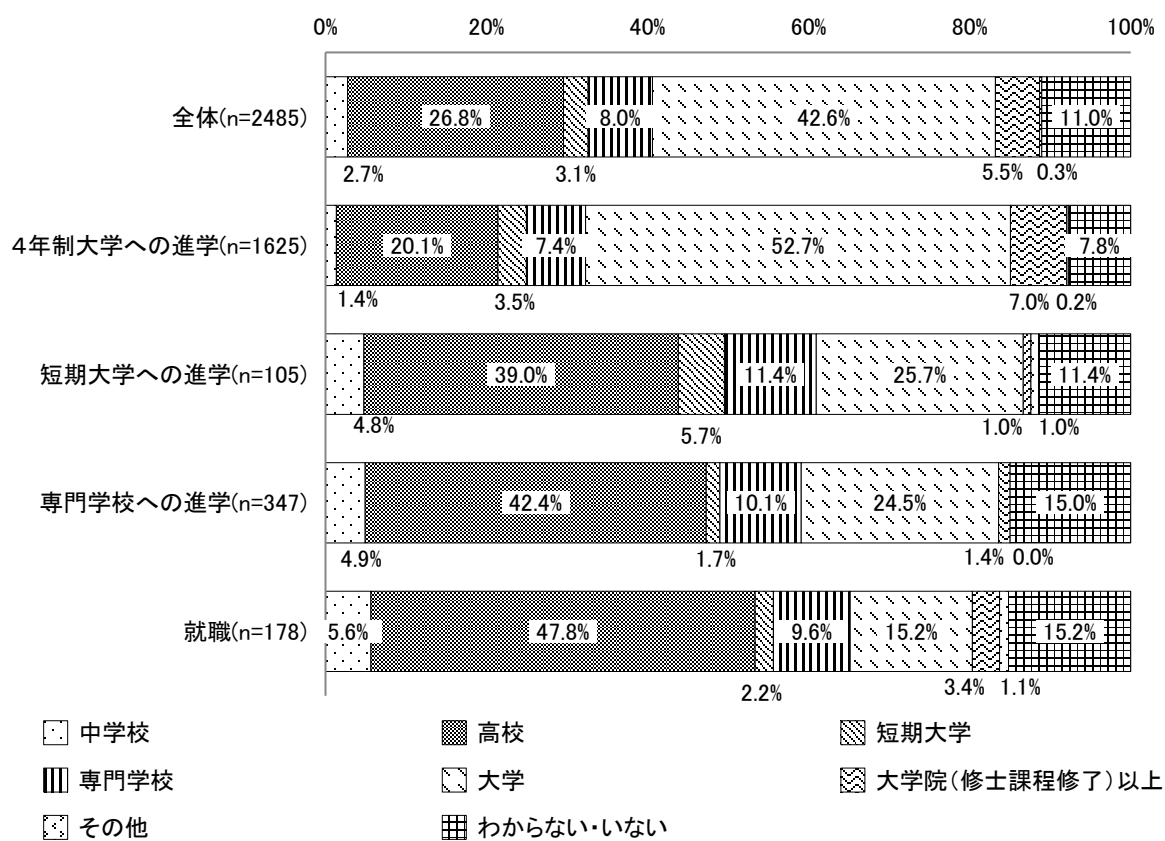
図表 186 家庭の暮らしの状況（女性）：単数回答（Q12）



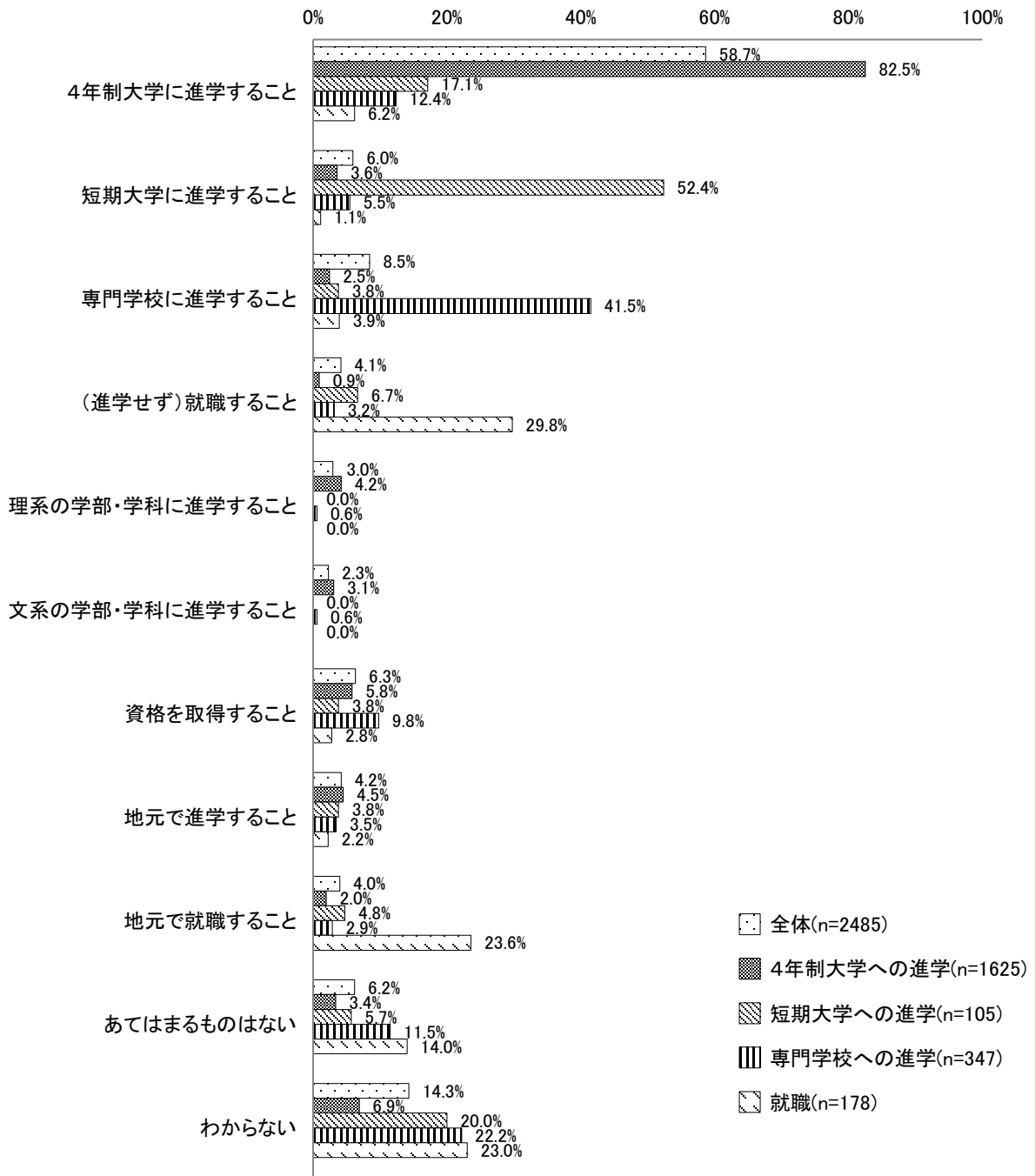
図表 187 母親の最終学歴（女性）：単数回答（Q13_1）



図表 188 父親の最終学歴（女性）：単数回答（Q13_2）

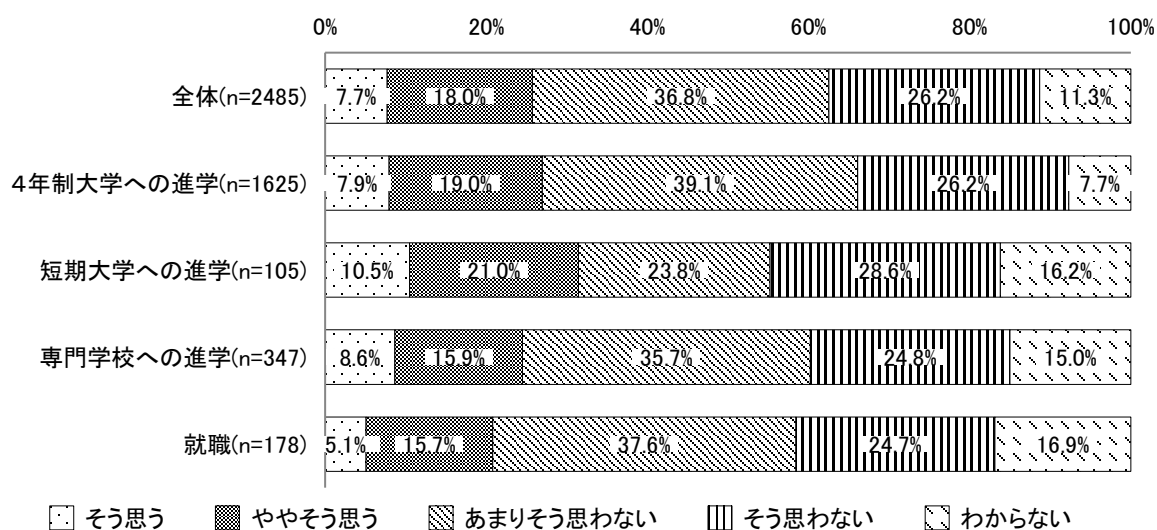


図表 189 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと（女性）：複数回答（Q31_1）

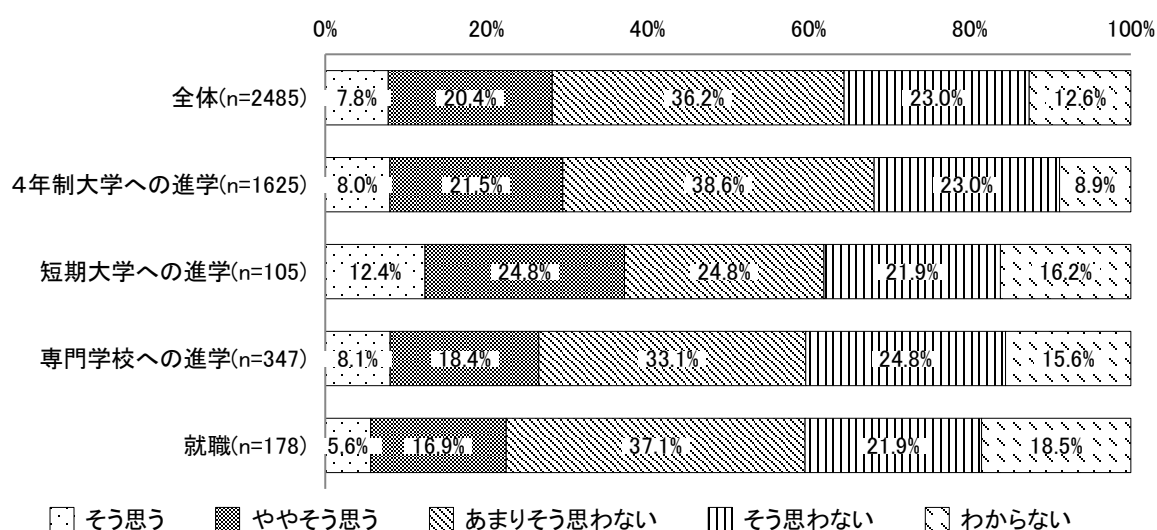


図表 190 保護者の固定的性別役割分担意識・ステレオタイプ（女性）：単数回答（Q33）

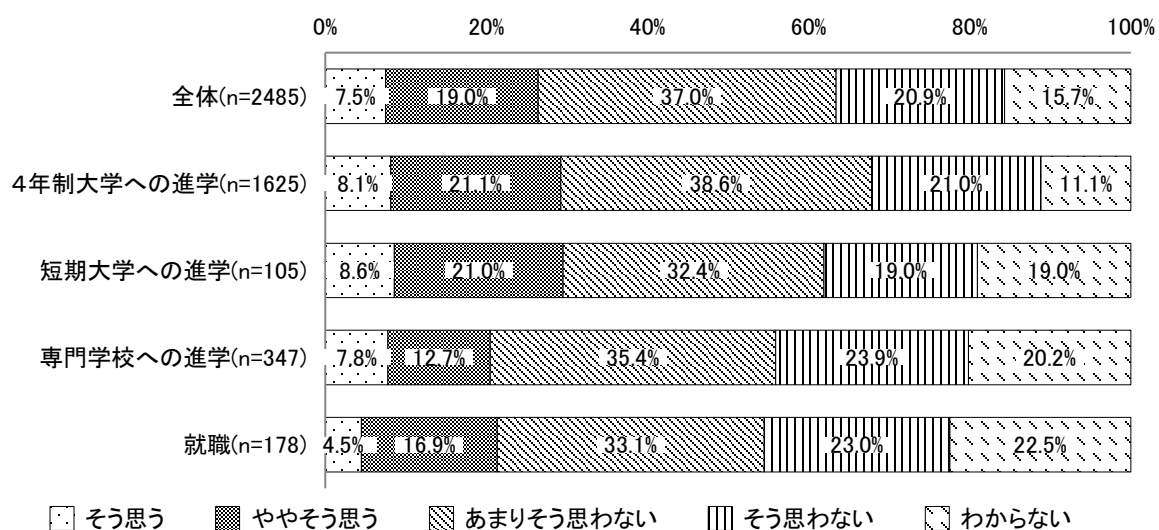
①保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と考えていると思うか（Q33_1）



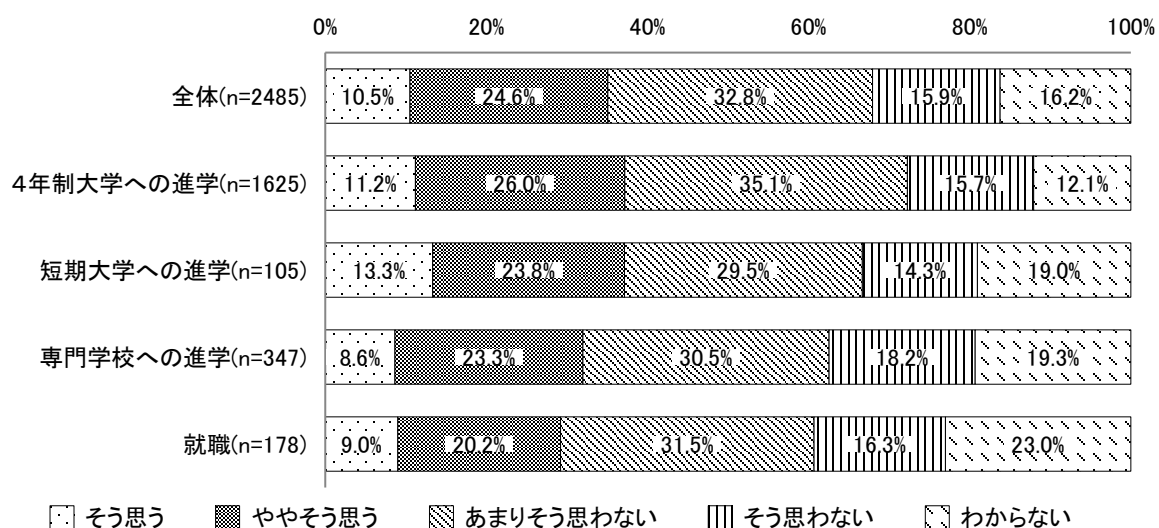
②保護者が「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにある」と考えていると思うか（Q33_2）



③保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と考えていると思うか (Q33_4)

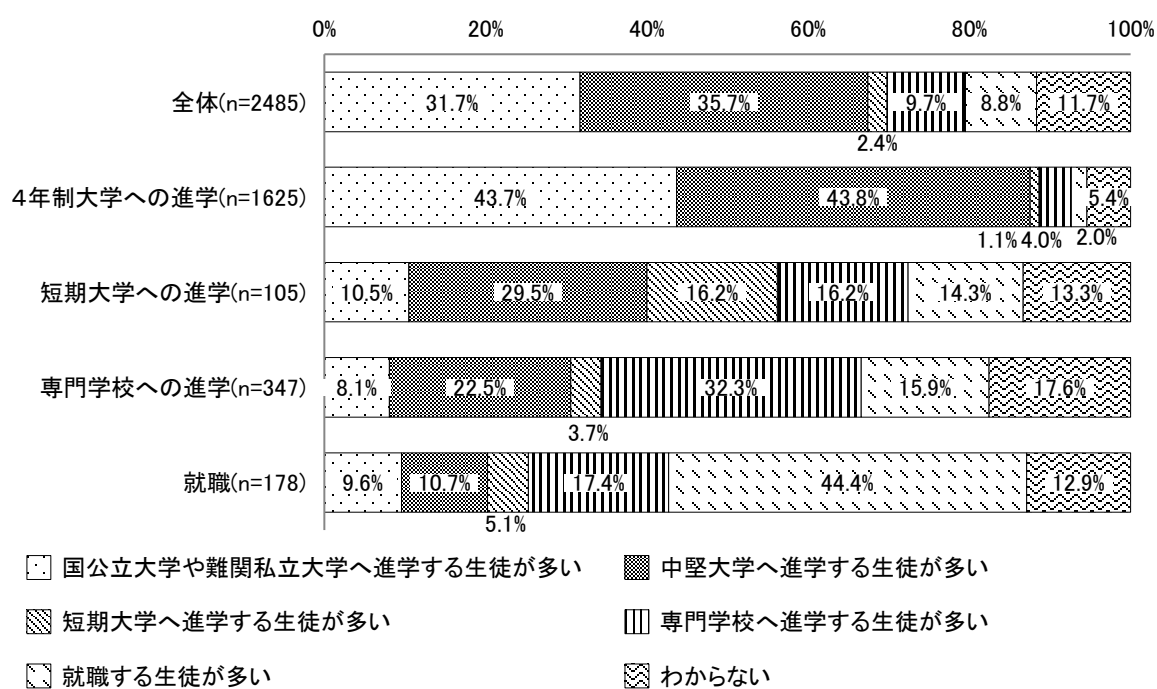


④保護者が「男性は論理的に考え、女性は感情的になりやすい」と考えていると思うか (Q33_6)

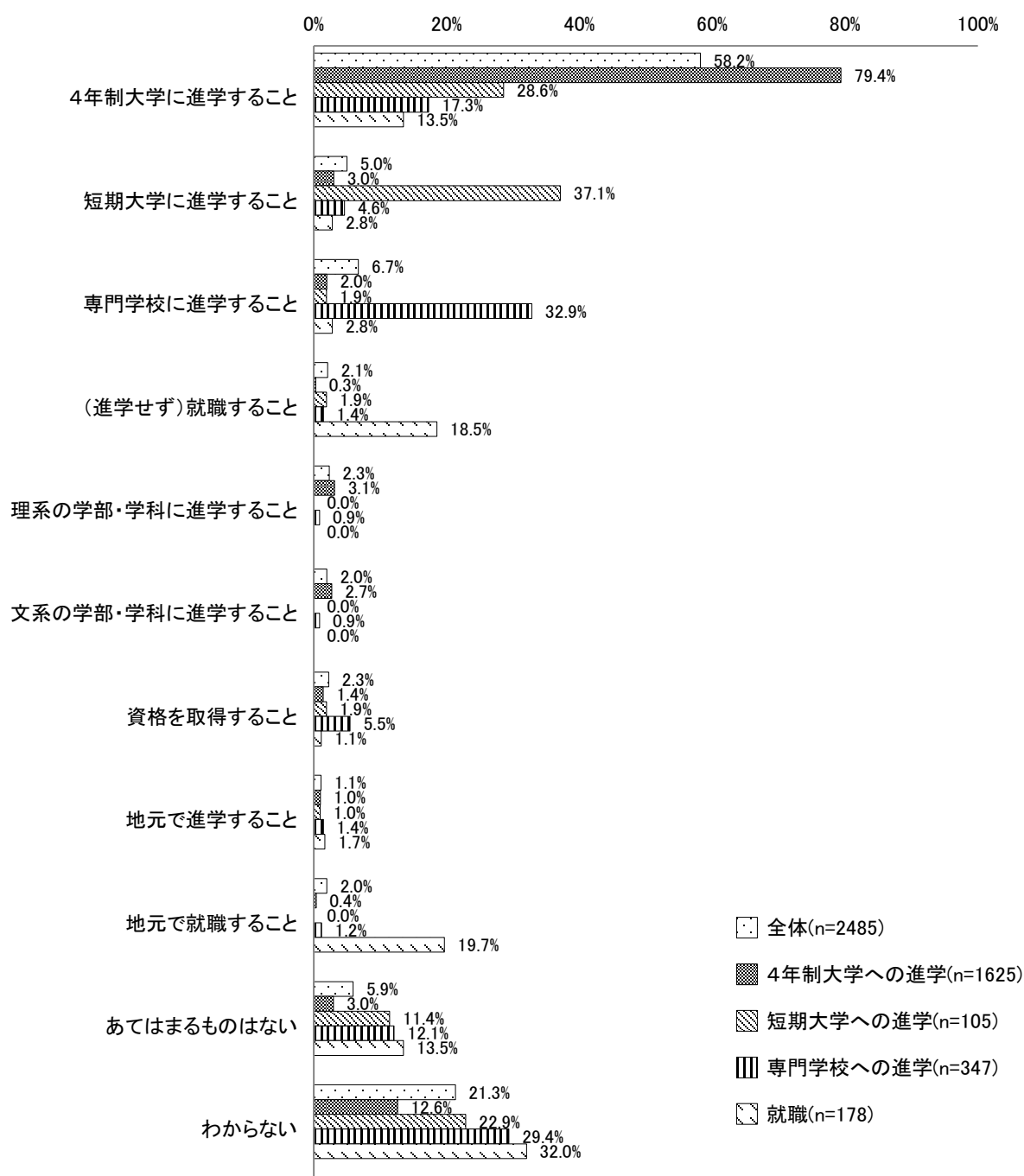


iii) 環境要因（学校）

図表 191 在学校の進学状況（女性）：単数回答（Q8）



図表 192 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと（女性）：複数回答（Q31_2）



②各要因の人口規模別の特徴

以下では、女性の進学と関連がみられた要因のうち、人口規模による傾向の違いがみられたものについて記載している。

個人要因のうち「ライフコースの希望」「ステレオタイプ」、環境要因（家庭）のうち「保護者のステレオタイプ」、環境要因（学校）のうち「自身の進路について、教員が望んでいると思うこと」については、人口規模による大きな傾向の違いはみられなかった。

<個人要因>

○進路を選択するうえで、考慮しようとしていること

「5万人未満」では、「経済的なこと（教育費がかからないこと、奨学金が受けられることなど）」を考慮する割合が高く、「地理的なこと（自宅から通えることなど）」を考慮する割合は低い。なお、男性については、「5万人未満」では女性と同様に「地理的なこと」を考慮する割合が低いが、「経済的なこと」を考慮する割合は他と同程度となっている。（図表 193）

○固定的性別役割分担意識

「50万人以上」では、固定的性別役割分担意識が比較的弱い傾向がみられる。男性については、「5万人未満」では固定的性別役割分担意識が弱い傾向がみられ、男女で異なる傾向が確認された。（図表 194）

<環境要因（家庭）>

○家庭の暮らしの状況

人口規模が大きいほど、家庭の暮らしにゆとりがある割合が高い。（図表 195）

○保護者の最終学歴

人口規模が大きいほど、保護者の最終学歴が「大学」以上である割合が高い。（図表 196、図表 197）

○自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと

「5万人未満」では、「4年制大学に進学すること」の割合が低く、「専門学校に進学すること」の割合が高い。なお、男性については、「5万人未満」では「4年制大学に進学すること」の割合が低く、「（進学せず）就職すること」「資格を取得すること」「地元で就職すること」の割合が高くなっており、男女で異なる傾向が確認された。（図表 198）

○保護者の固定的性別役割分担意識

「50万人以上」では、保護者の固定的性別役割分担意識が比較的弱いと認知している傾向がみられる。一方、男性については、「5万人未満」では保護者の固定的性別役割分担意識が弱いと認知している傾向がみられ、本人の固定的性別役割分担意識と同様、男女で異なる傾向が確認された。（図表 199）

<環境要因（学校）>

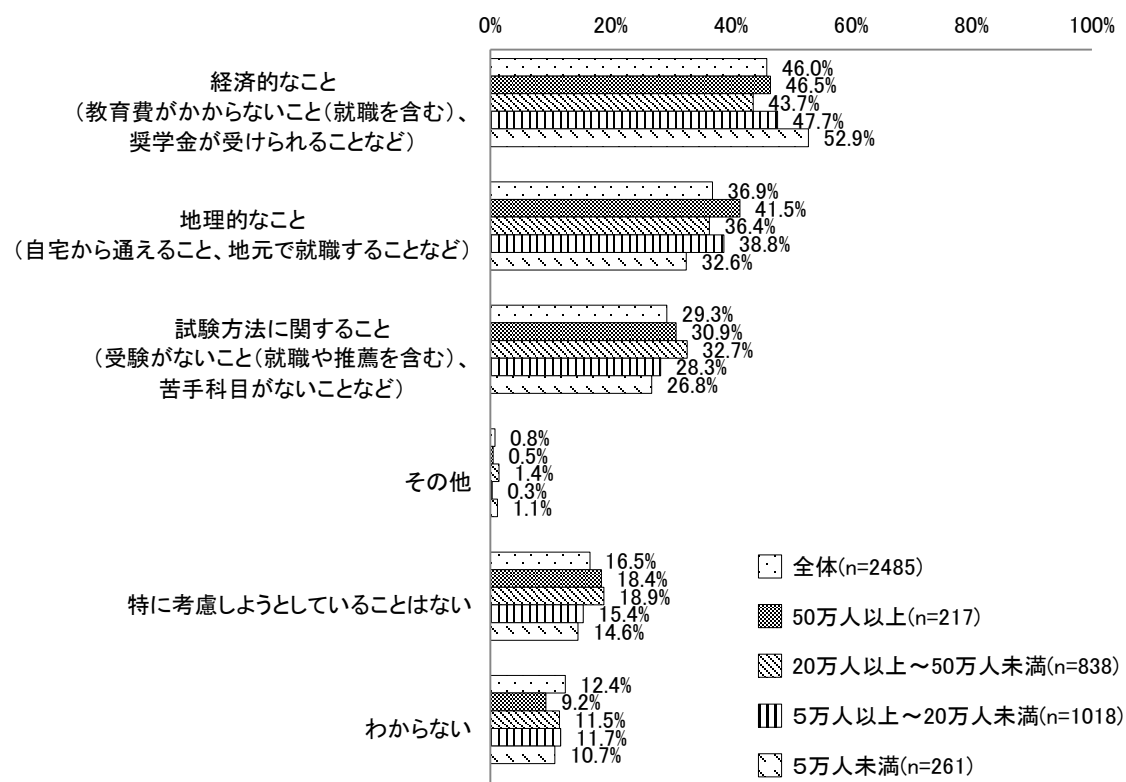
○在学校の進学状況

人口規模が大きいほど、大学進学者が多い学校に通っている傾向がみられる。また、「5万人未満」では、就職する生徒が多い学校に通っている割合が高い。（図表 200）

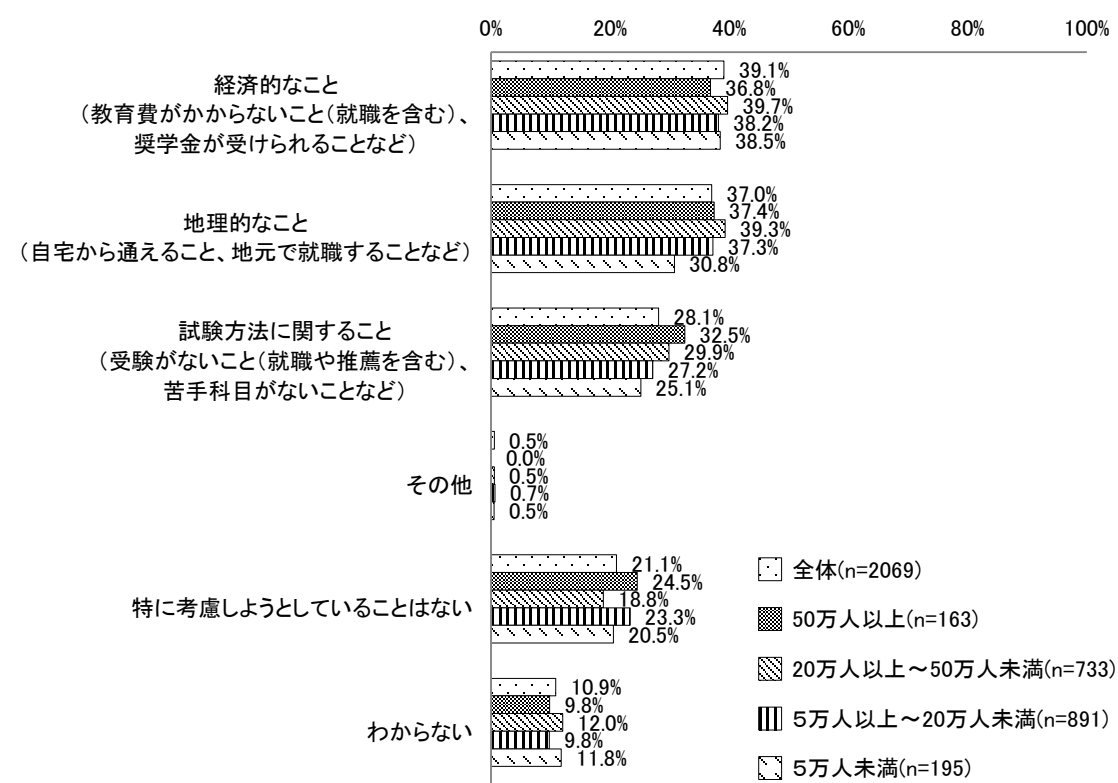
i) 個人要因

図表 193 人口規模別：進路を選択するうえで、考慮しようとしていること：複数回答（Q29）

<女性>



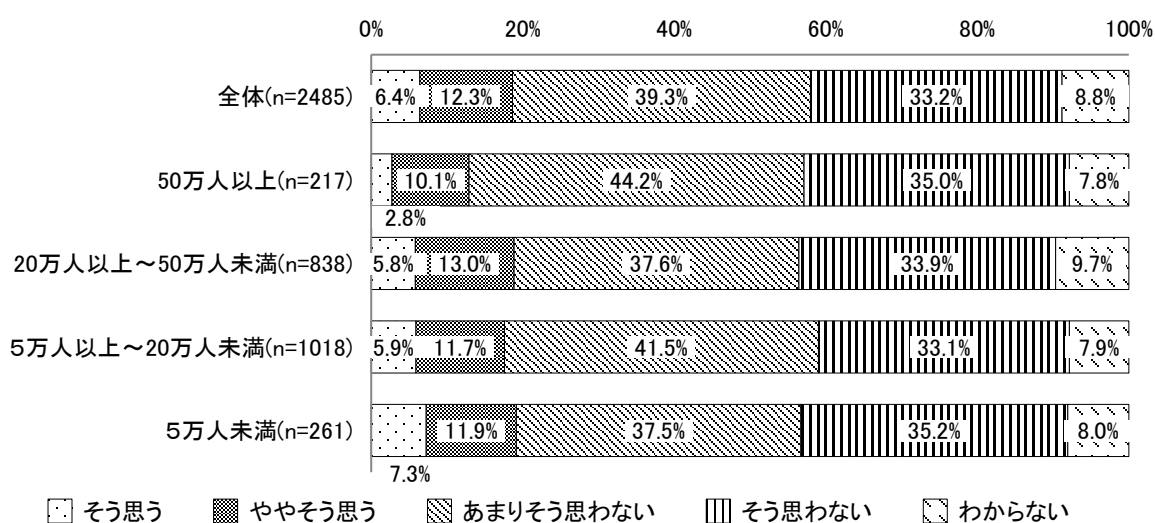
<男性>



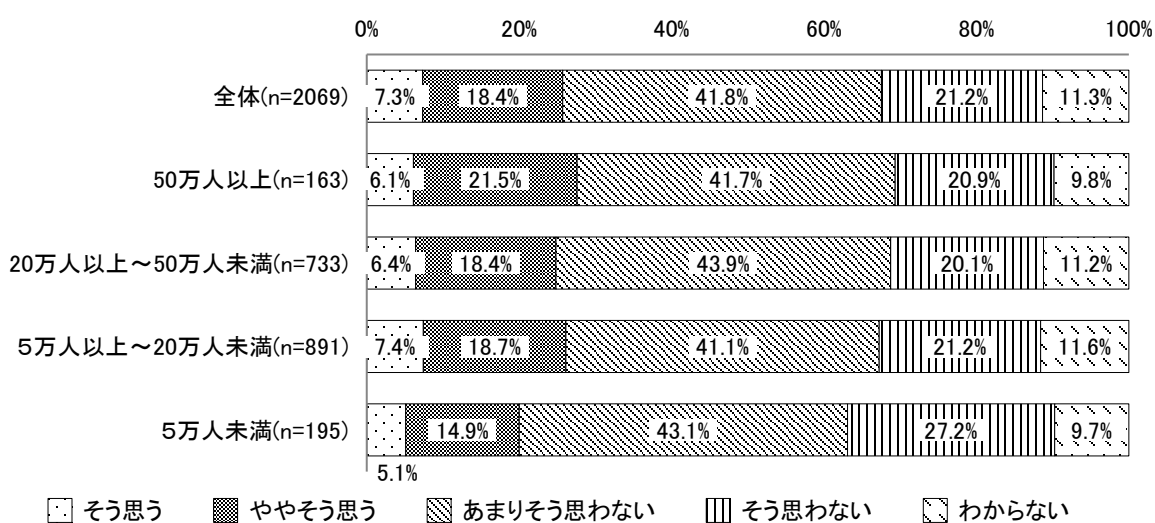
図表 194 人口規模別：固定的性別役割分担意識：単数回答（Q32）

①「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と思うか（Q32_1）

<女性>

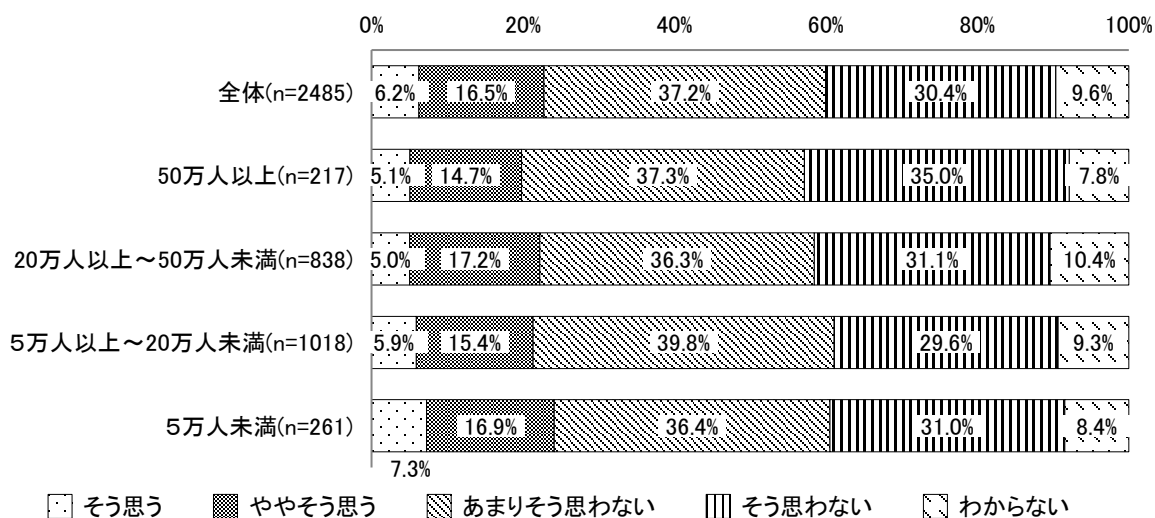


<男性>

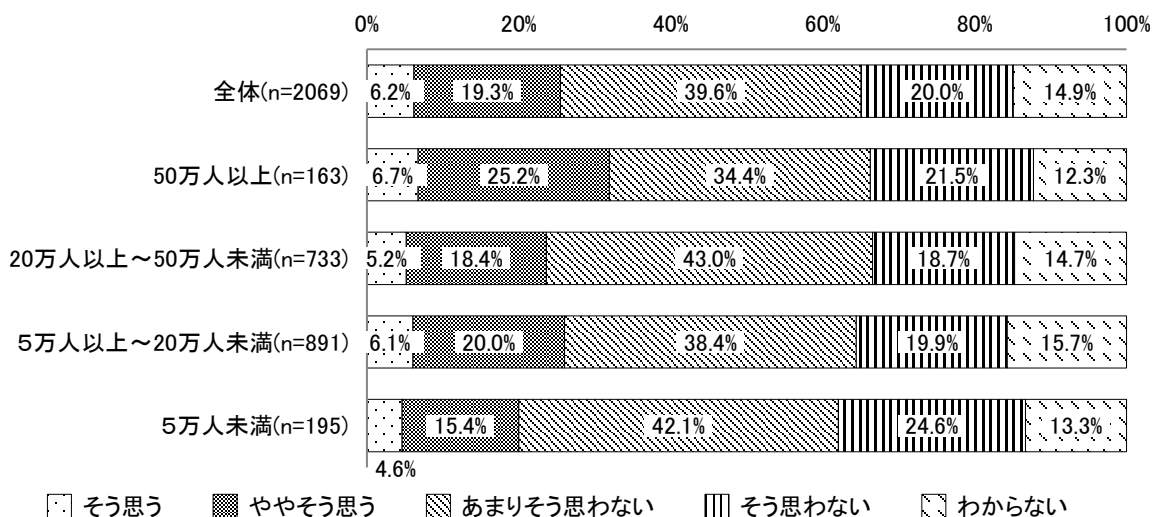


②「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにある」と思うか (Q32_2)

<女性>

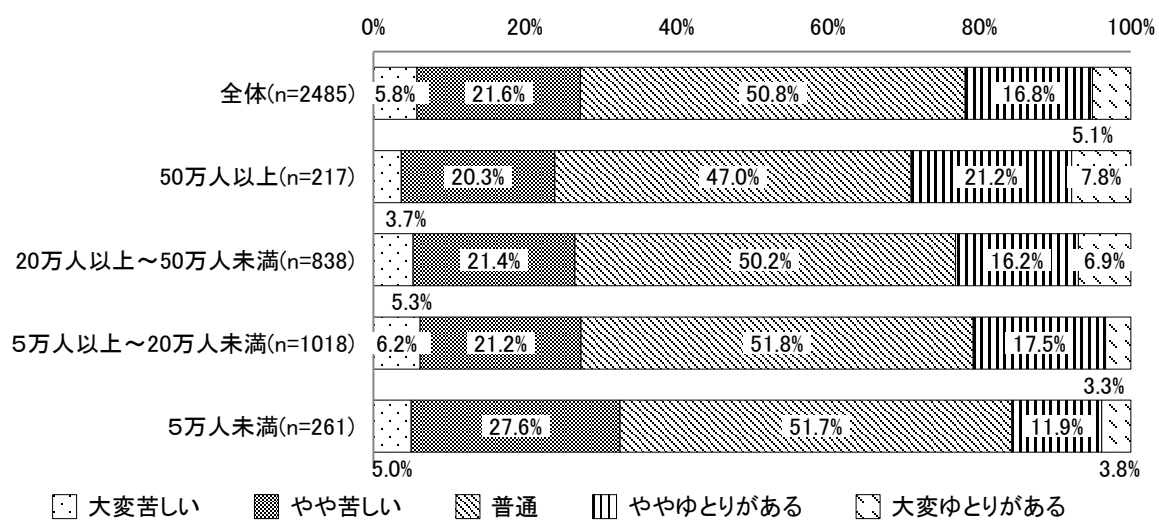


<男性>

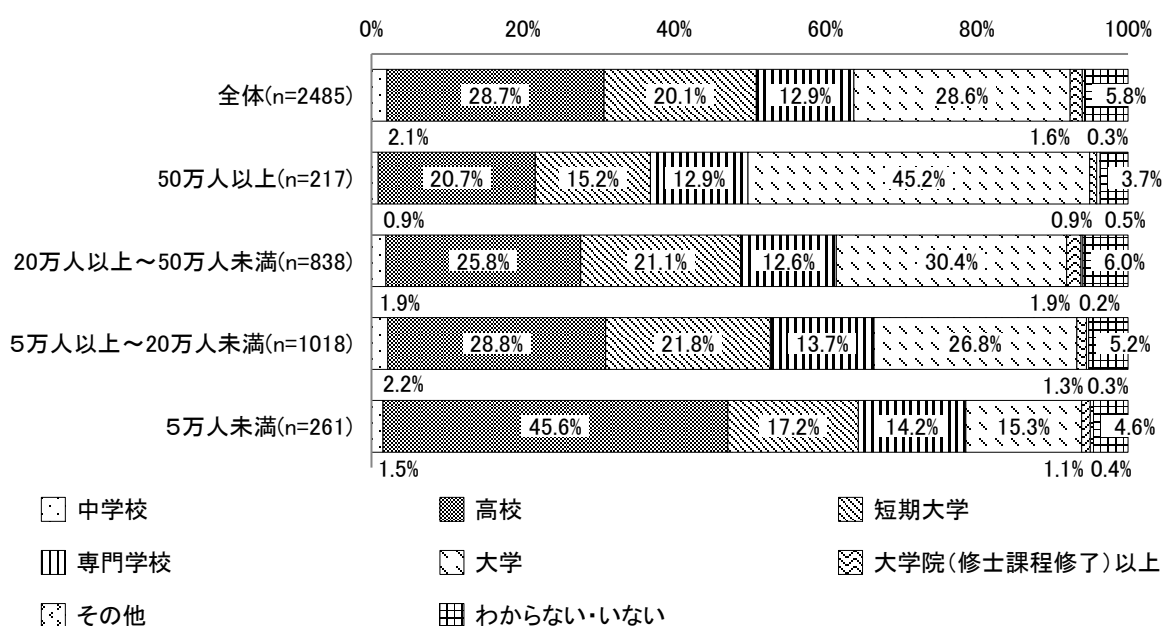


ii) 環境要因（家庭）

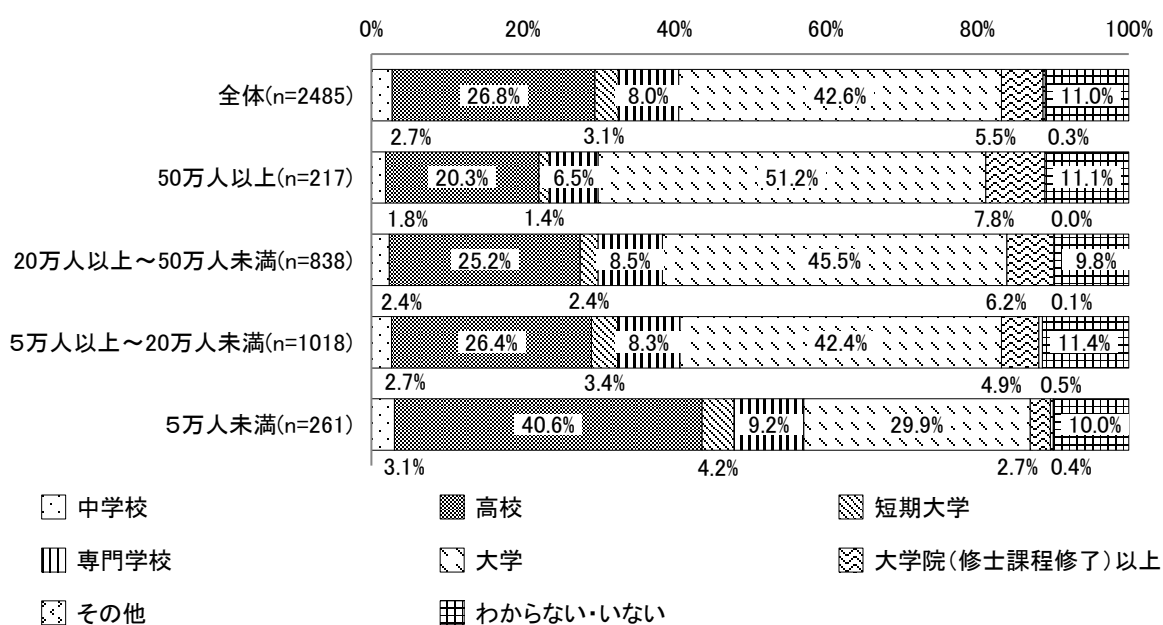
図表 195 人口規模別：家庭の暮らしの状況（女性）：単数回答（Q12）



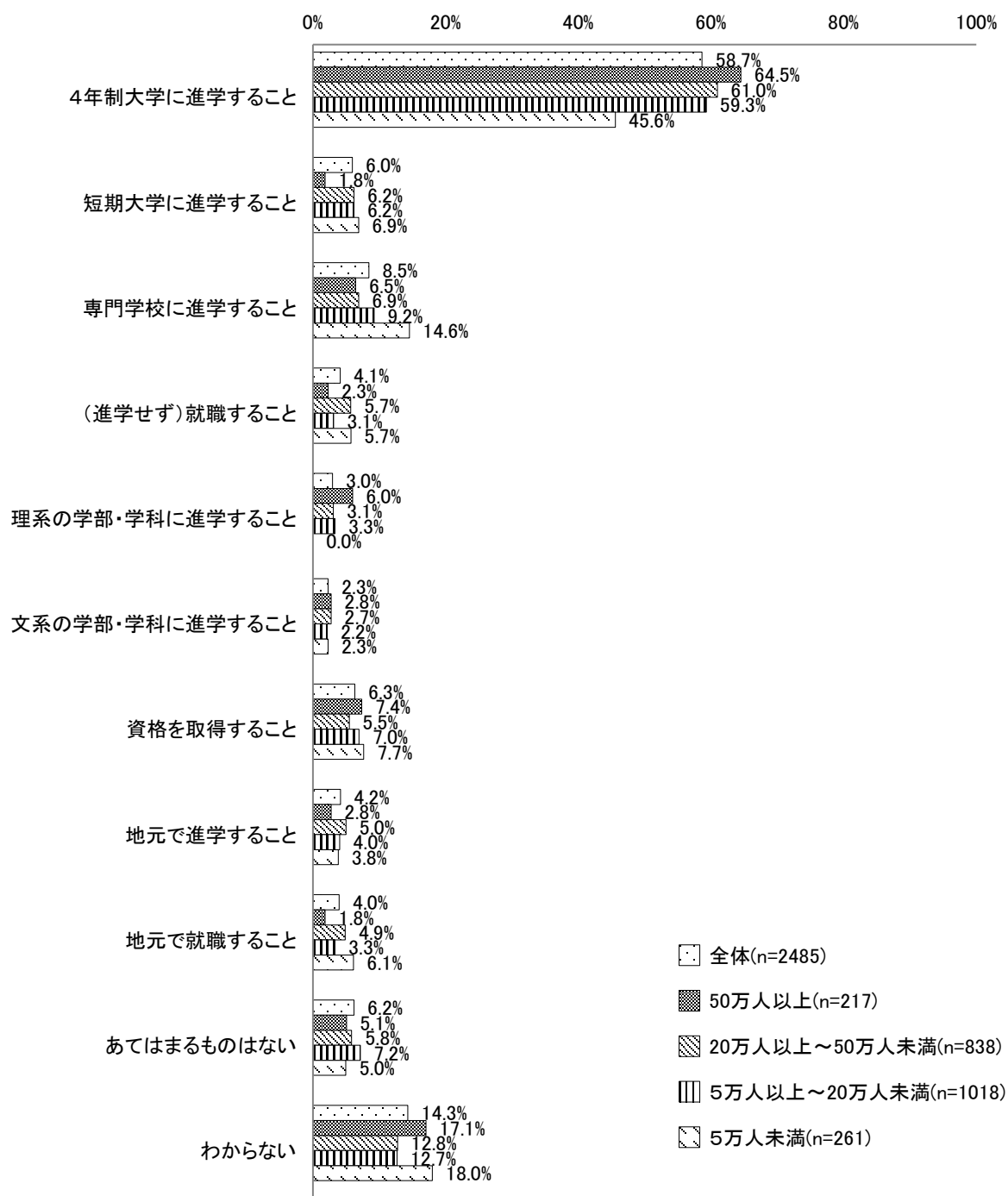
図表 196 人口規模別：母親の最終学歴（女性）：単数回答（Q13_1）



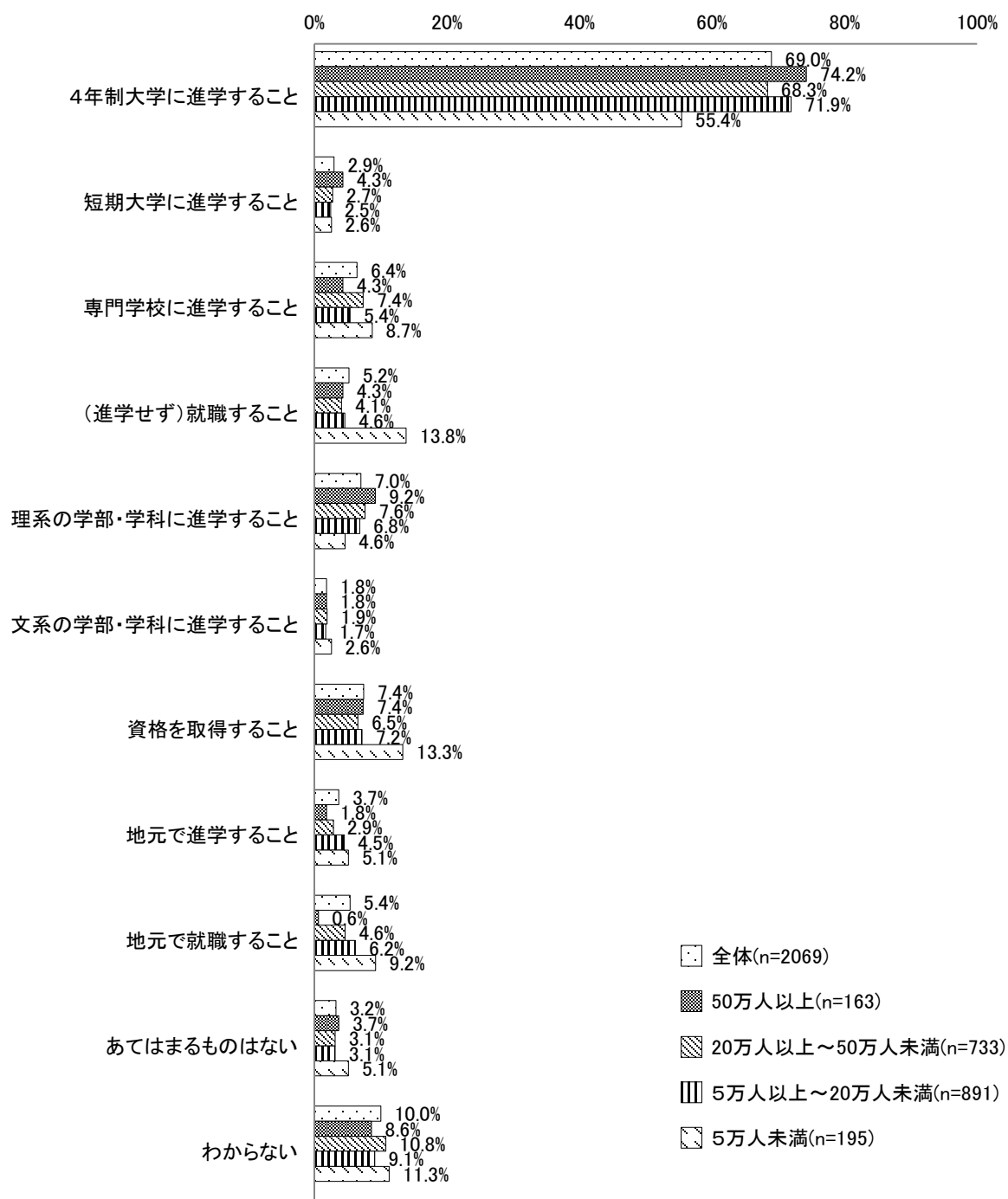
図表 197 人口規模別：父親の最終学歴（女性）：単数回答（Q13_2）



図表 198 人口規模別：自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと：複数回答（Q31_1）
 ＜女性＞



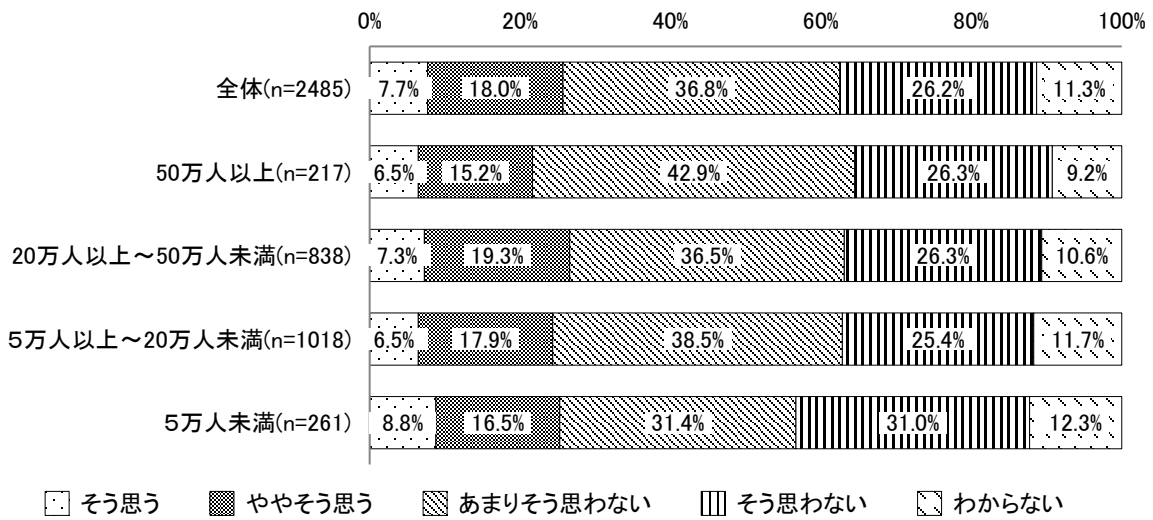
<男性>



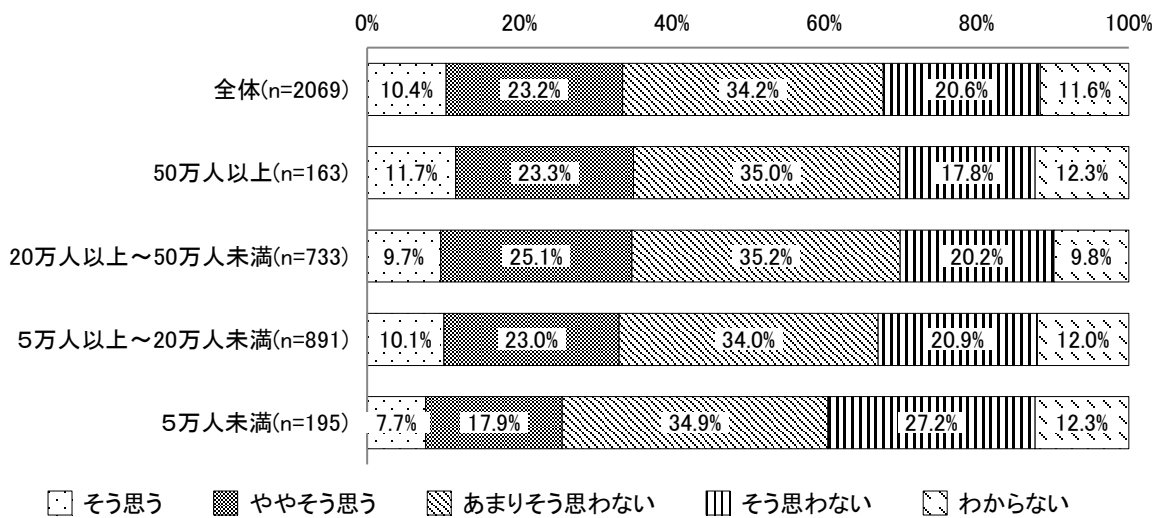
図表 199 人口規模別：保護者の固定的性別役割分担意識：単数回答（Q33）

①保護者が「夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい」と考えていると思うか（Q33_1）

<女性>

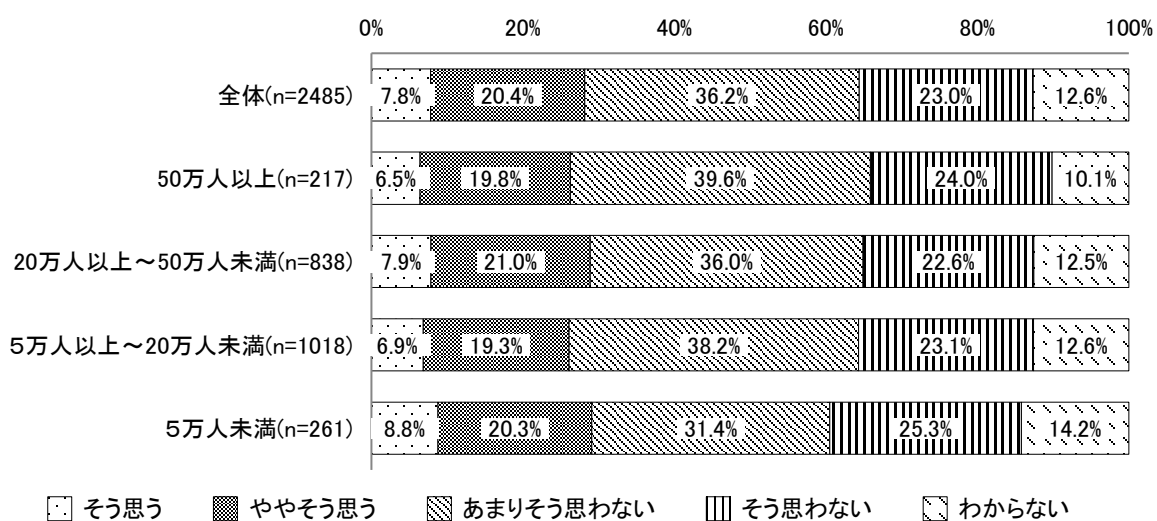


<男性>

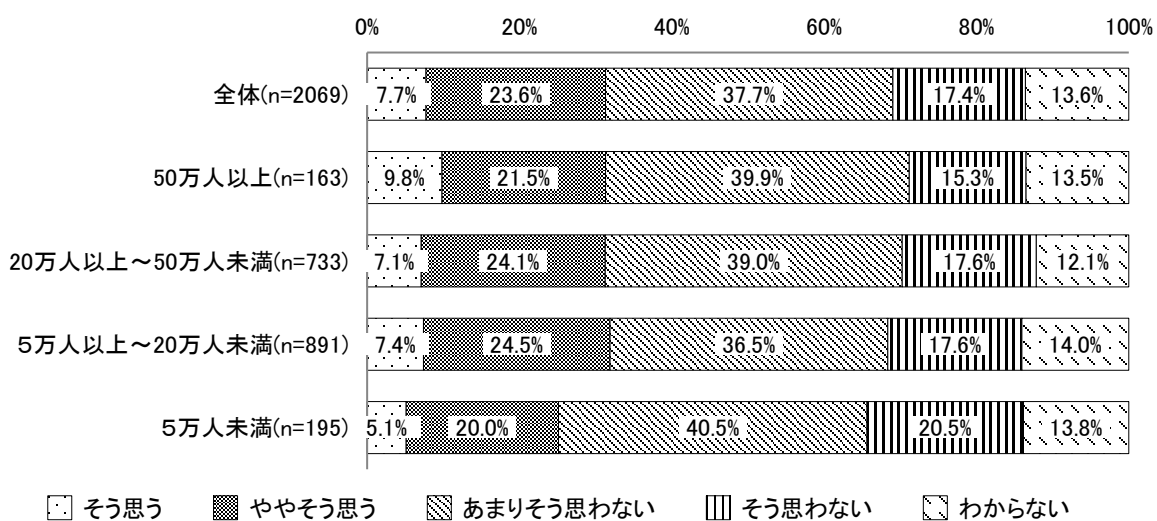


②保護者が「女性の幸せは仕事より結婚・出産・子育てにある」と考えていると思うか
(Q33_2)

<女性>

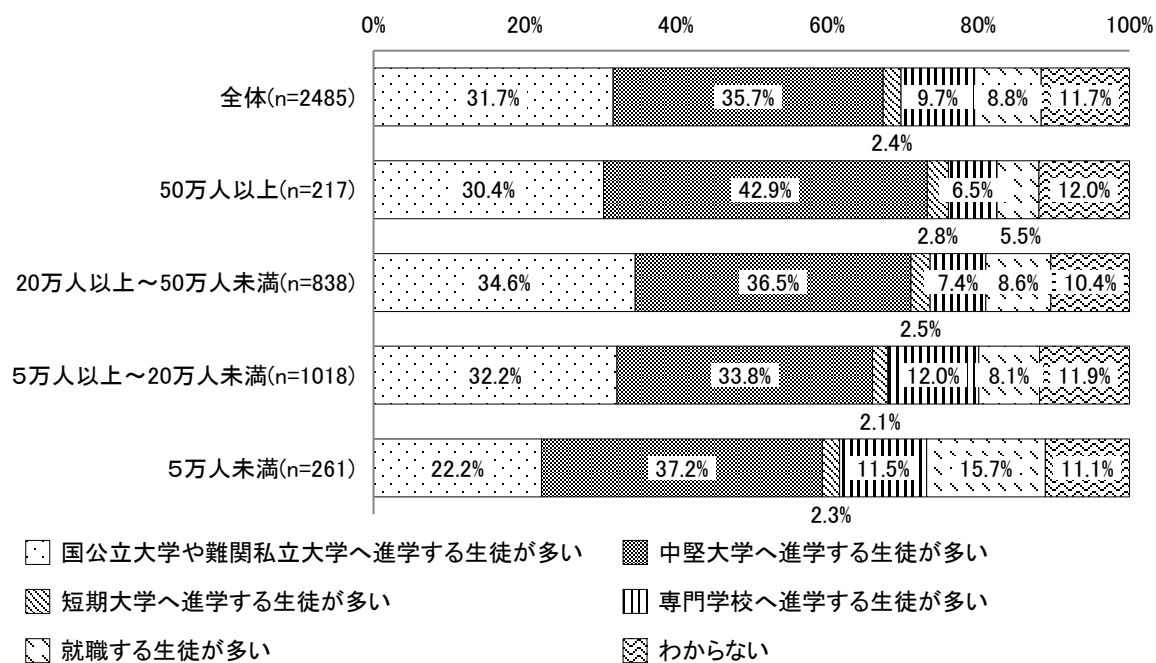


<男性>



iii) 環境要因（学校）

図表 200 在学校の進学状況（女性）：単数回答（Q9）



4-2-2. 女性の理工系分野への進路選択に影響を与える要因の分析

(1) 集計・分析の概要

理工系分野への進学を希望する女性の特徴を明らかにするため、進学を希望する学部別に分析を行った。分析にあたっては、女性を分析対象として第2章で述べた仮説に基づき「個人要因」「環境要因」に係る設問との関連性を確認した。結果は「①女性の理工系分野への進学と関連がみられる要因」に記載している。

次に、理工系分野への進学と関連性がみられた要因について、居住地域の人口規模別に傾向の違いを確認した。結果は「②各要因の人口規模別の特徴」に記載している。なお、女性と男性で、人口規模別の結果について異なる傾向がみられたものについては、男性の結果についても記載している。

(2) 結果の概要

①女性の理工系分野への進学と関連がみられる要因

<個人要因>

○好きだった科目・成績

「理学部・工学部を志望」では、中学生の頃に数学や物理が好きだった割合や、これらの科目の成績がよかったとする割合が高い。一方、「文系学部を志望」では、他と比べて中学生の頃に国語が好きだった割合が高いが、成績について大きな傾向の違いはみられない。(図表 201)

○進路希望の理由

「理学部・工学部を志望」では、「自身の得意科目で判断したから」の割合が高く、「生物・農学系学部または医療系学部を志望」では、「資格や免許がとれるから」「専門性が高いから」や、「親やきょうだい、親族にすすめられた・影響を受けたから」の割合が高い。また、「理学部・工学部を志望」「生物・農学系学部または医療系学部を志望」では、「文系学部を志望」に比べ、「将来像が明確だから」「将来高い収入が得られるから」の割合が高い。(図表 202)

○理系・文系のイメージ

「理学部・工学部を志望」「生物・農学系学部または医療系学部を志望」では、理系科目を学ぶと、進学や就職、資格取得に役立つとする割合が8割から9割前後である。一方「文系学部を志望」では、文系科目を学ぶと進学や就職、資格取得に役立つとする割合は、6割程度にとどまっている。理系志望者の理系のイメージと、文系志望者の文系のイメージには異なる傾向があることがうかがえる。(図表 203)

○理系的経験

「理学部・工学部を志望」では、幼少期の科学館や博物館体験や、大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験、自身で工作や天体観測、プログラミング等、理工系分野に関連する活動をした経験がある割合が高い。(図表 204)

○進路を選択するうえで、考慮しようとしていること

「理学部・工学部を志望」では、「経済的なこと（教育費がかからないこと等）」や「地理的なこと（自宅から通えること等）」を考慮する割合が高い。(図表 205)

＜環境要因（家庭）＞

○保護者の卒業した学部

「理学部・工学部を志望」では、保護者が理工系の学部を卒業した割合が高い。同様に、「生物・農学系学部または医療系学部を志望」では保護者が医歯薬学・医療系の学部を、「文系学部を志望」では文系の学部を卒業した割合が高い。（図表 206、図表 207）

○自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと

「理学部・工学部を志望」では、自身の進路について、保護者が「理系の学部・学科に進学すること」を望んでいると認知している割合が1割強である。一方、「文系学部を志望」では、自身の進路について、保護者が「文系の学部・学科に進学すること」を望んでいると認知している割合は5%弱にとどまっている。（図表 208）

○保護者のステレオタイプ

「理学部・工学部を志望」「文系学部を志望」では、保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」等のステレオタイプを抱いていると認知している割合が高い。（図表 209）

＜環境要因（学校）＞

○在学校の進学状況

「理学部・工学部を志望」では、国公立大学や難関私立大学への進学者が多い学校に通っている割合が高い。（図表 210）

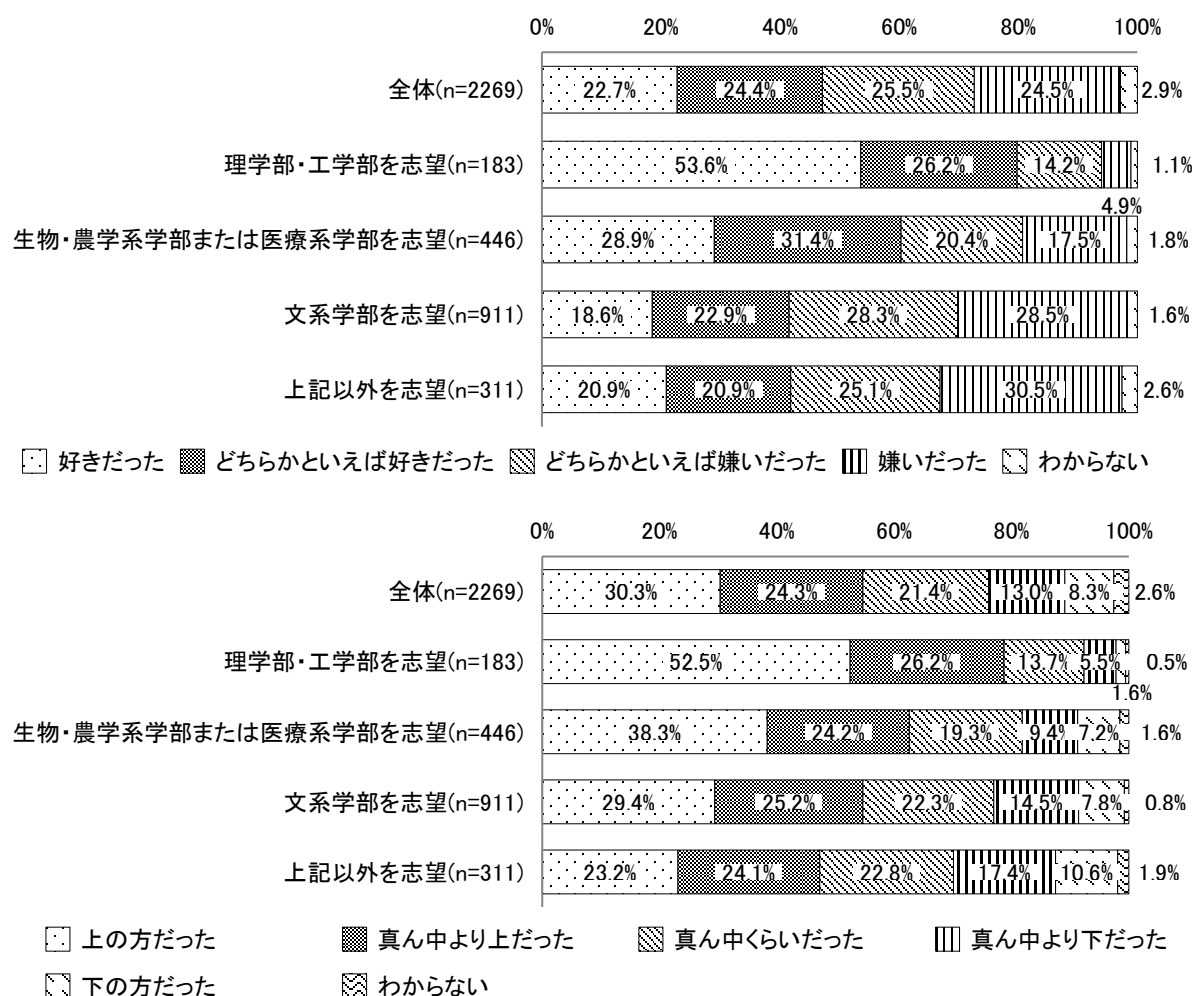
○自身の進路について、教員が望んでいると思うこと

「理学部・工学部を志望」では、自身の進路について、教員が「理系の学部・学科に進学すること」を望んでいると認知している割合が1割弱である。一方、「文系学部を志望」では、自身の進路について、教員が「文系の学部・学科に進学すること」を望んでいると認知している割合は、他と同程度である。（図表 211）

i) 個人要因

図表 201 中学生の頃に好きだった科目・成績（女性）：単数回答（Q20、Q21）

< 数学（上段：好きだった科目、下段：成績） >



注) 進学を希望する学部（Q27）別の分析を行った。各カテゴリは以下のとおり作成している。進学を希望する学部は、4年制大学の学部限定していない。

「理学部・工学部を志望」…「理学部」または「工学部」を選んだ者

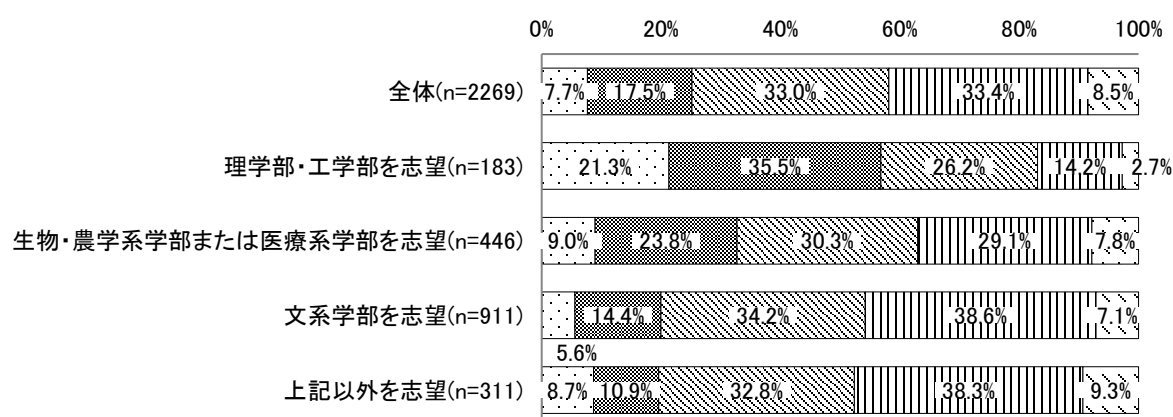
「生物・農学系学部、医療系学部を志望」…上記以外で「生物・農学系学部」「医療系学部」を選んだ者

「文系学部を志望」…上記以外で「法文経学部」「外国語学部・国際関係学部」「教育・福祉学部」を選んだ者

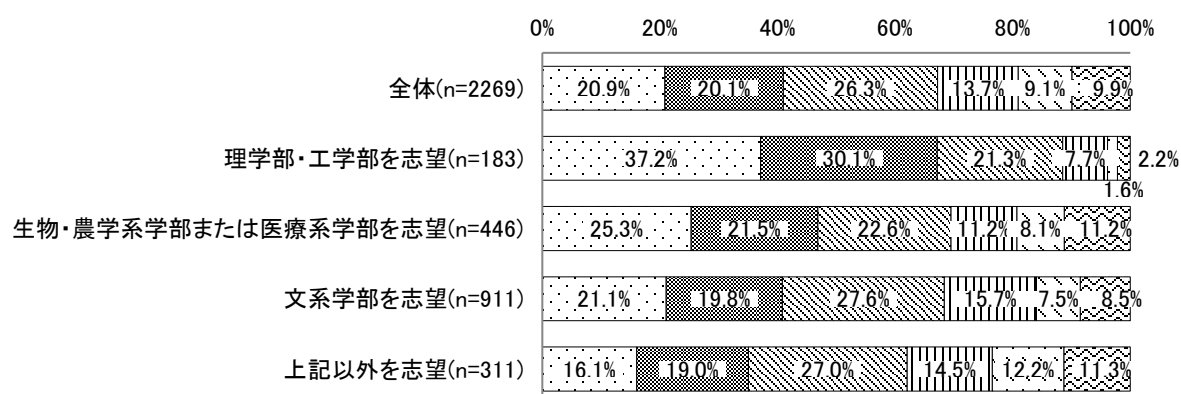
「上記以外を希望」…上記以外の学部を選んだ者

なお、希望する学部について「まだ決めていない、わからない」を選んだ者及び無回答だった者については、集計表上で表示を省略している。以下同様。

<物理（上段：好きだった科目、下段：成績）>



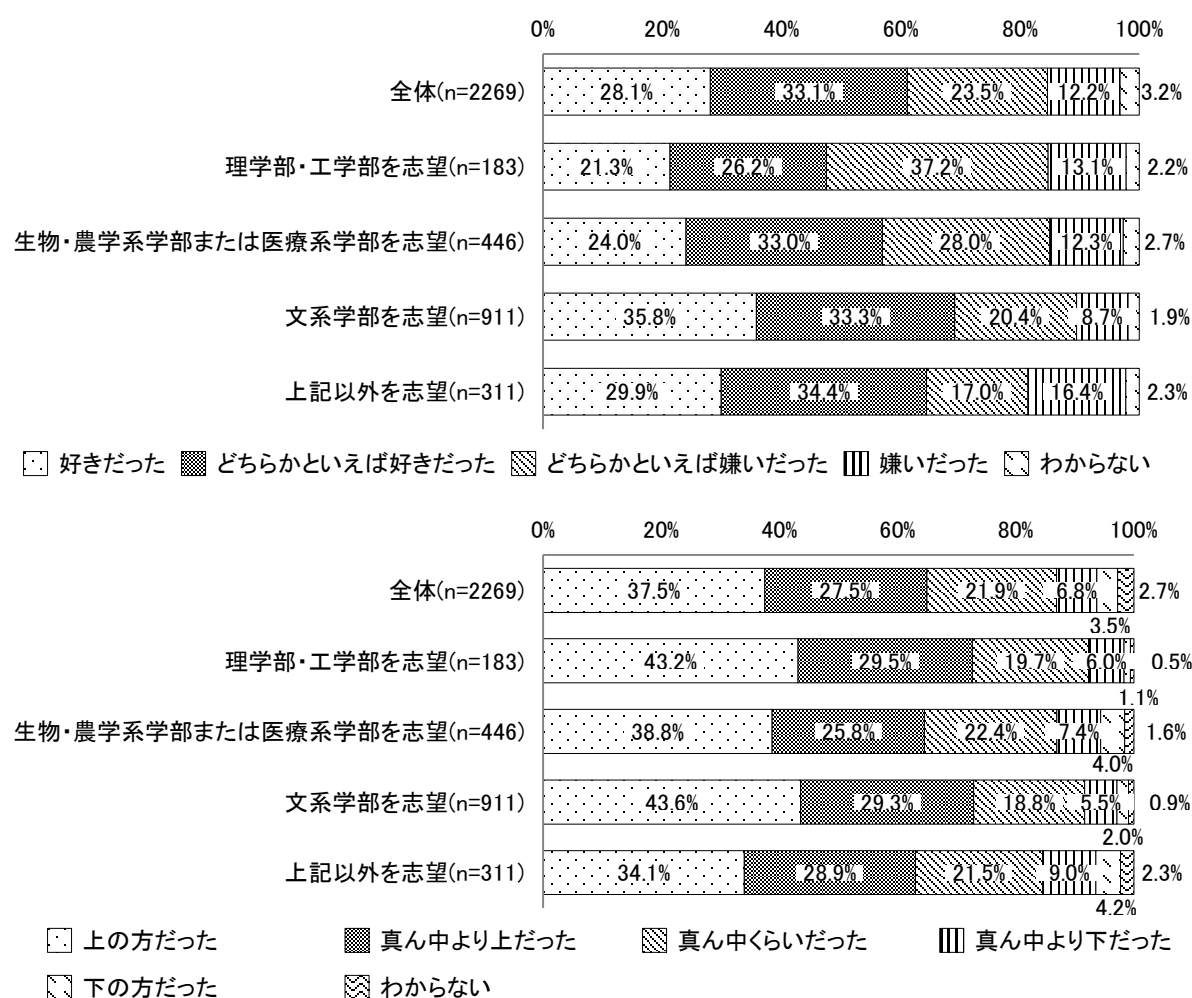
□ 好きだった ■ どちらかといえば好きだった ▨ どちらかといえば嫌いだった ▩ 嫌いだった □ わからない



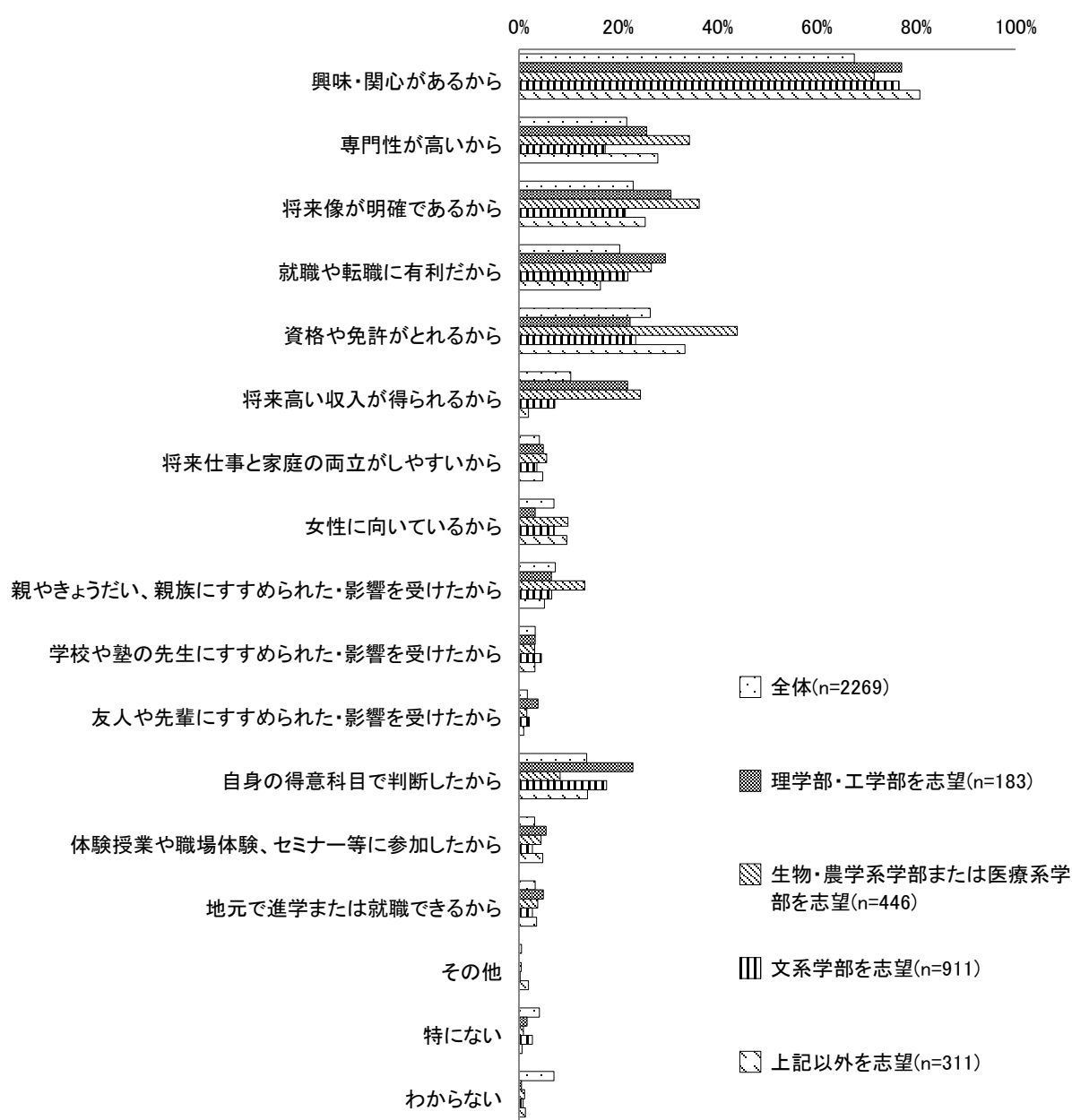
□ 上の方だった ■ 真ん中より上だった ▨ 真ん中くらいだった ▩ 真ん中より下だった
□ 下の方だった □ わからない

注) 化学・生物・地学についても、「理学部・工学部を志望」では「文系学部を志望」に比べ、好きだった割合・成績いずれも高い傾向がみられる。詳細は資料編を参照。

<国語（上段：好きだった科目、下段：成績）>



図表 202 進路希望の理由（女性）：複数回答（Q28）



注) 回答割合は次ページの数値表を参照。

<数値表>

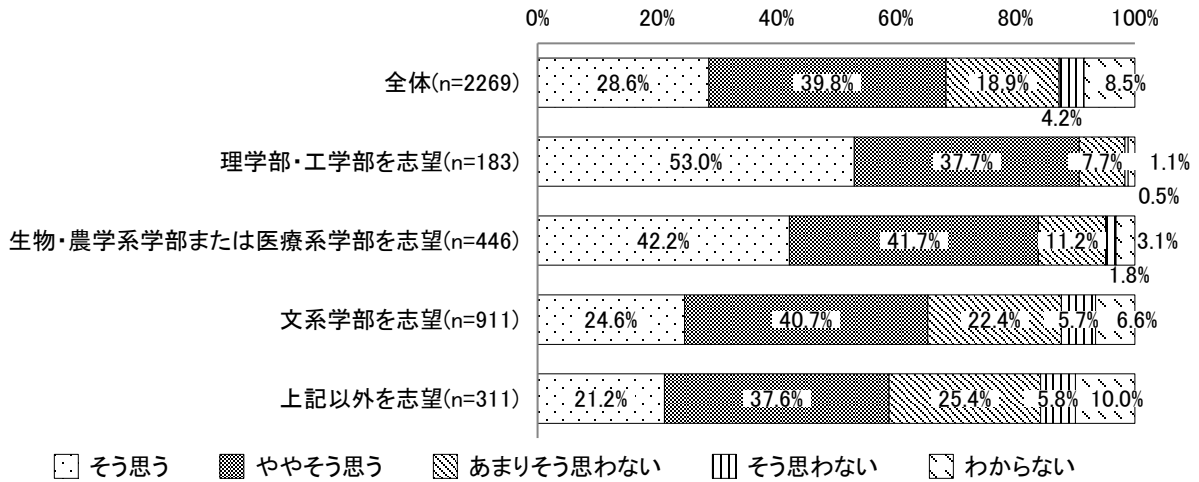
	合計	Q28 進路希望の理由					
		興味・関心があるから	専門性が高いから	将来像が明確であるから	就職や転職に有利だから	資格や免許がとれるから	将来高い収入が得られるから
全体	2,269	67.5	21.7	23.0	20.3	26.4	10.4
理学部・工学部を志望	183	77.0	25.7	30.6	29.5	22.4	21.9
生物・農学系学部、医療系学部を志望	446	71.5	34.3	36.3	26.7	43.9	24.4
文系学部を志望	911	76.5	17.3	21.4	22.0	23.5	7.2
上記以外を志望	311	80.7	28.0	25.4	16.4	33.4	1.9

	合計	Q28 進路希望の理由					
		将来仕事と家庭の両立がしやすいから	女性に向いているから	男性に向いているから	親やきょうだい、親族にすすめられた・影響を受けたから	学校や塾の先生にすすめられた・影響を受けたから	友人や先輩にすすめられた・影響を受けたから
全体	2,269	4.1	7.1	0.0	7.3	3.3	1.7
理学部・工学部を志望	183	4.9	3.3	0.0	6.6	3.3	3.8
生物・農学系学部、医療系学部を志望	446	5.6	9.9	0.0	13.2	3.1	1.6
文系学部を志望	911	3.6	7.1	0.0	6.6	4.5	2.1
上記以外を志望	311	4.8	9.6	0.0	5.1	3.2	1.0

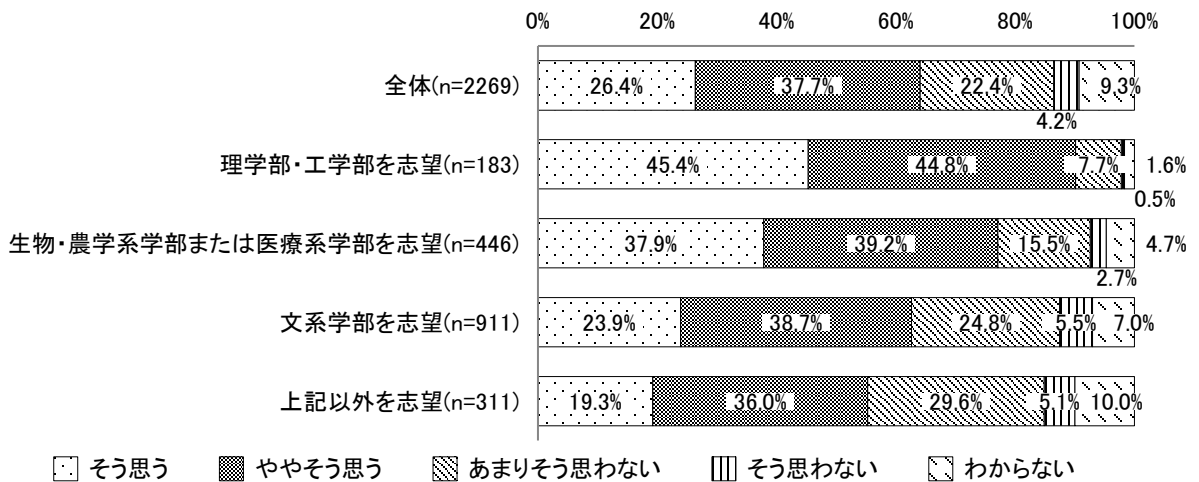
	合計	Q28 進路希望の理由					
		自身の得意科目で判断したから	体験授業や職場体験、セミナー等に参加したから	地元で進学または就職できるから	その他	特にない	わからない
全体	2,269	13.7	3.2	3.3	0.5	4.1	7.1
理学部・工学部を志望	183	23.0	5.5	4.9	0.0	1.6	0.5
生物・農学系学部、医療系学部を志望	446	8.3	4.5	3.8	0.4	0.9	1.1
文系学部を志望	911	17.7	2.7	2.7	0.2	2.7	0.9
上記以外を志望	311	13.8	4.8	3.5	1.9	0.6	1.3

図表 203 理系・文系のイメージ（女性）：単数回答（Q22、Q23）

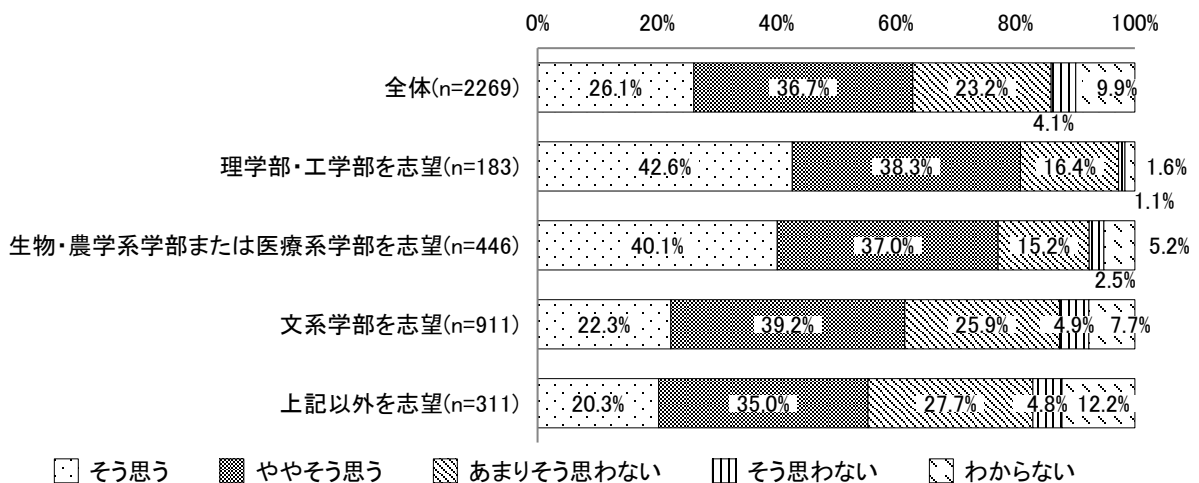
①「理系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか（Q22_1）



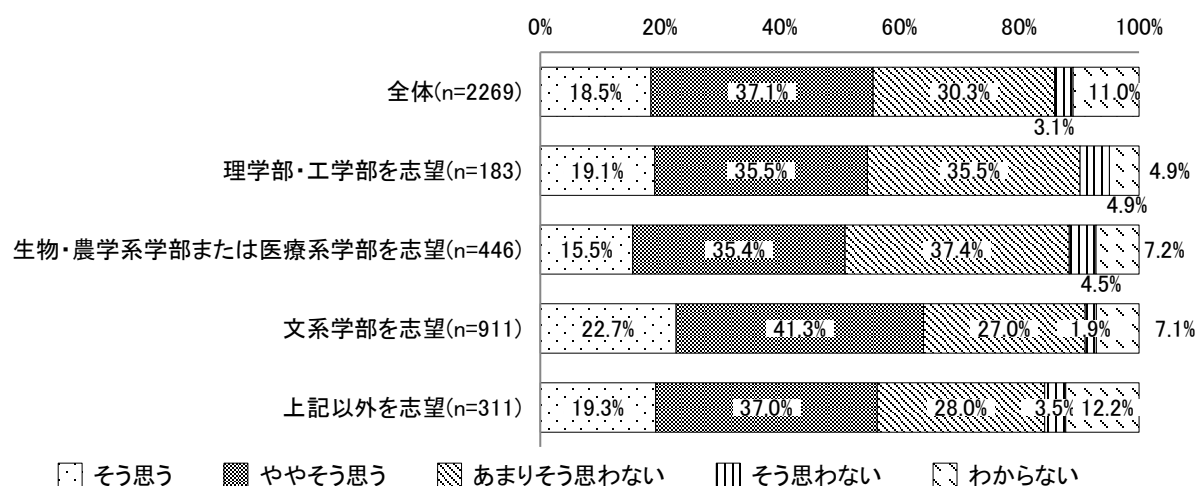
②「理系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか（Q22_2）



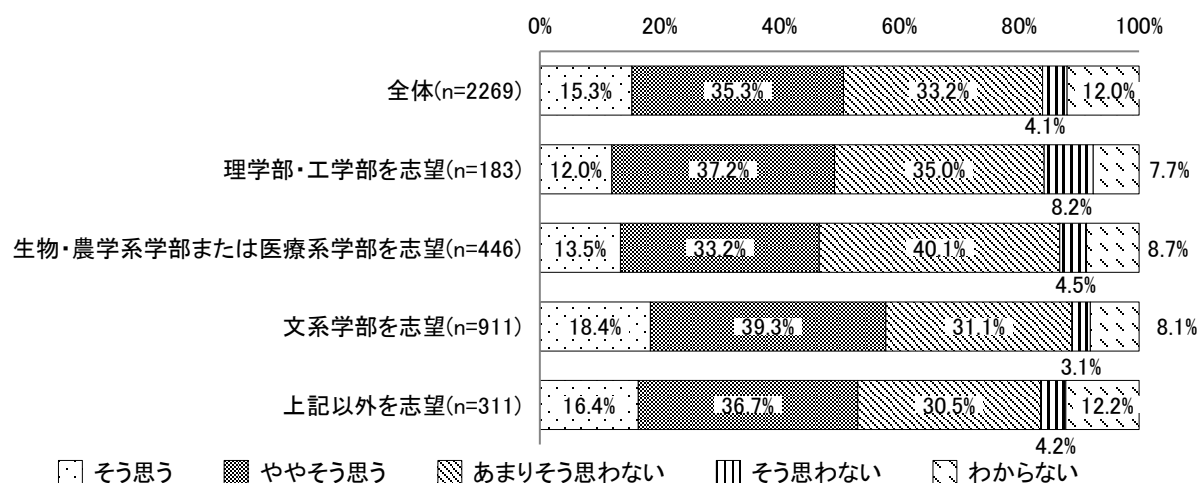
③「理系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか（Q22_3）



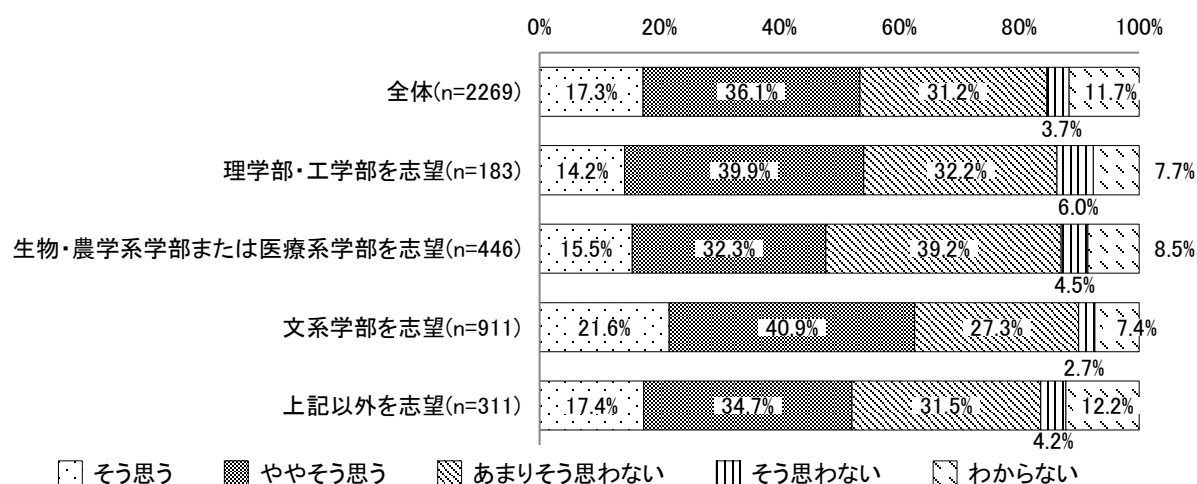
①「文系科目を学ぶと、進学に役立つ」と思うか (Q23_1)



②「文系科目を学ぶと、就職に役立つ」と思うか (Q23_2)



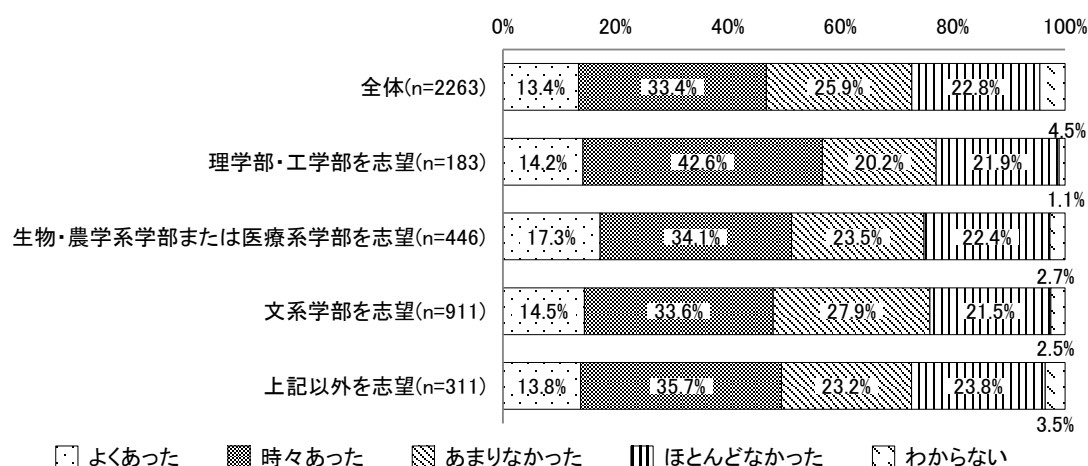
③「文系科目を学ぶと、資格取得に役立つ」と思うか (Q23_3)



図表 204 理系的経験（女性）：単数回答（Q25）

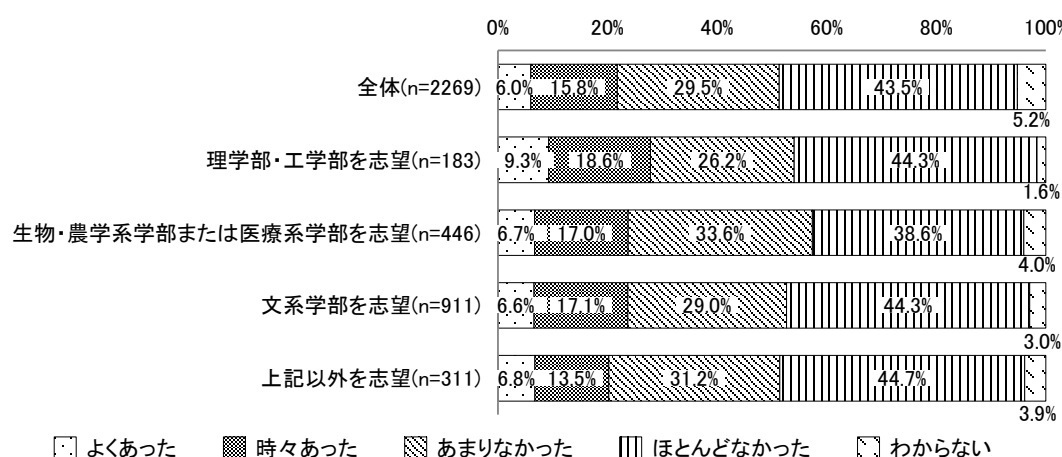
<幼少期の理系的な体験>

①「保護者に、科学館や博物館に連れていってもらったこと」があったか（Q25_3）

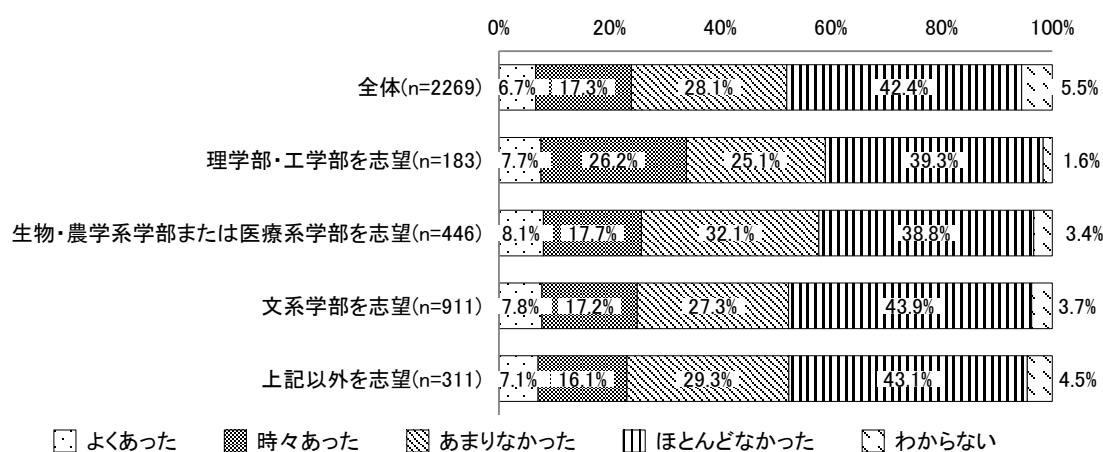


<大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験>

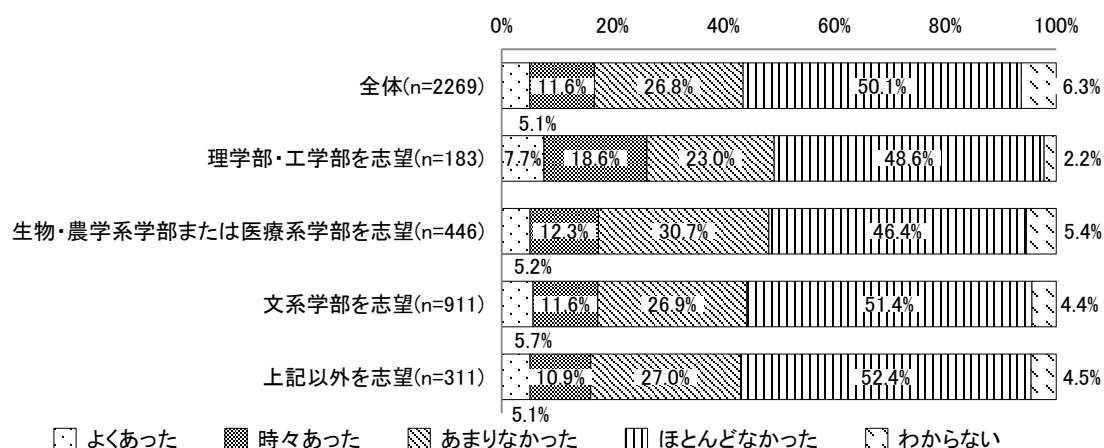
②「大学や自治体などが主催する、自然観察や野外活動に参加すること」があったか（Q25_4）



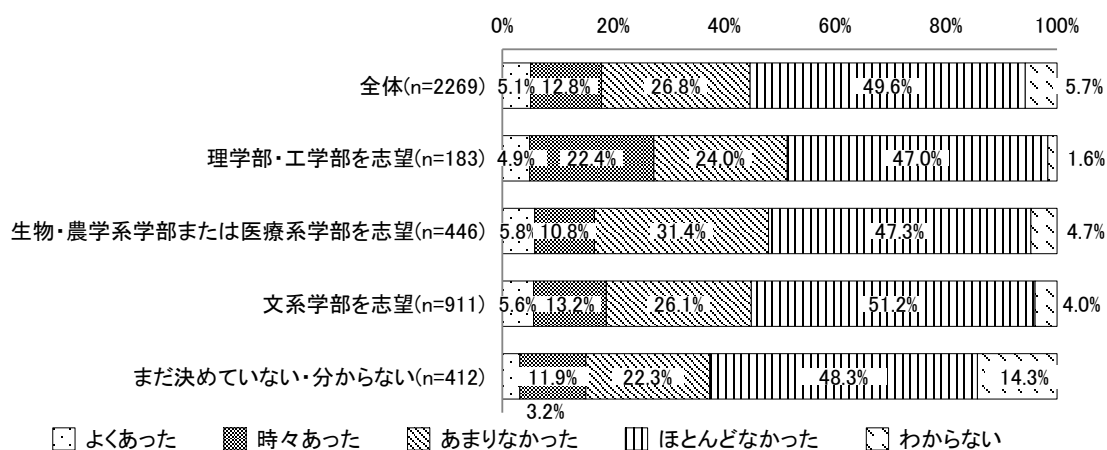
③「大学や自治体などが主催する、理科実験教室や工作教室に参加すること」があったか（Q25_5）



④「大学や自治体などが主催する、理工系進学に関するイベント・シンポジウムに参加すること」があったか (Q25_6)

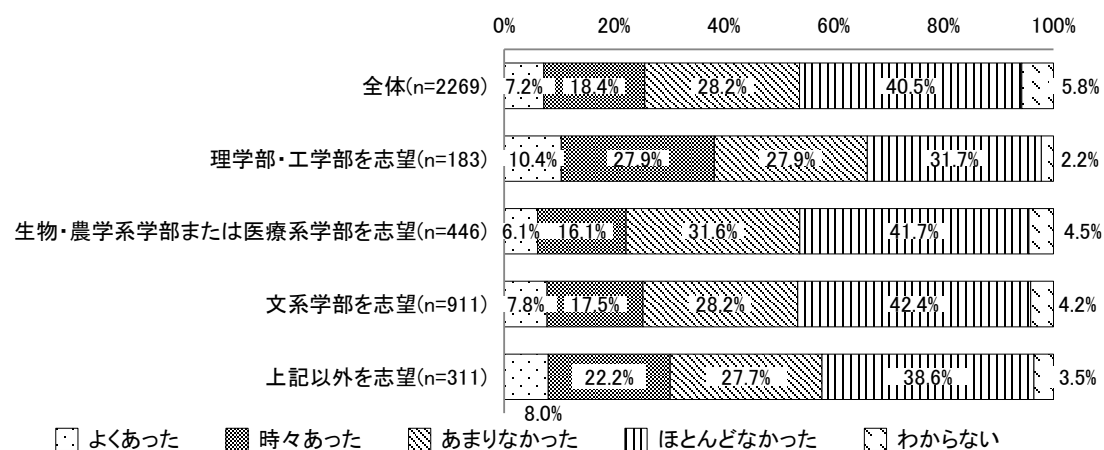


⑤「プログラミングやコンピュータの使い方に関する教室に参加すること」があったか (Q25_7)

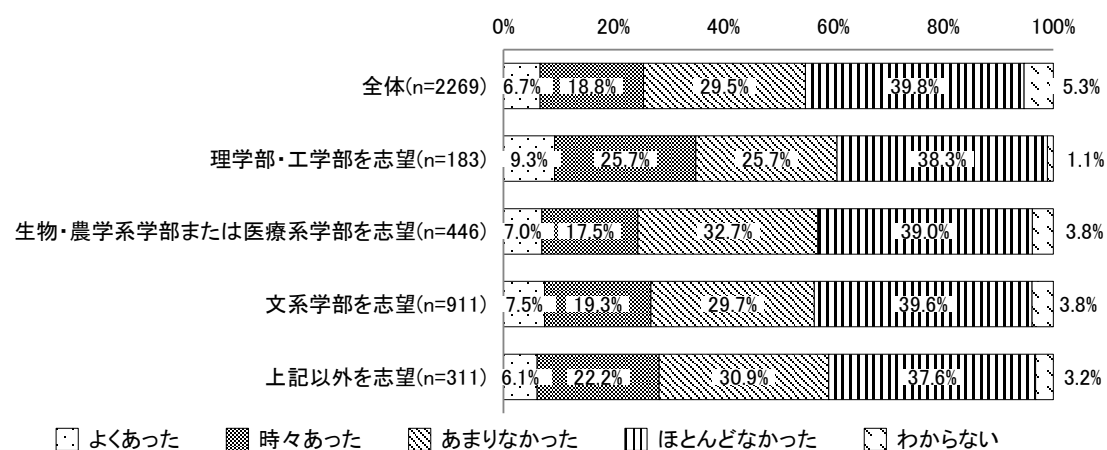


<自身で工作や天体観測、プログラミング等、理工系分野に関連する活動をした経験>

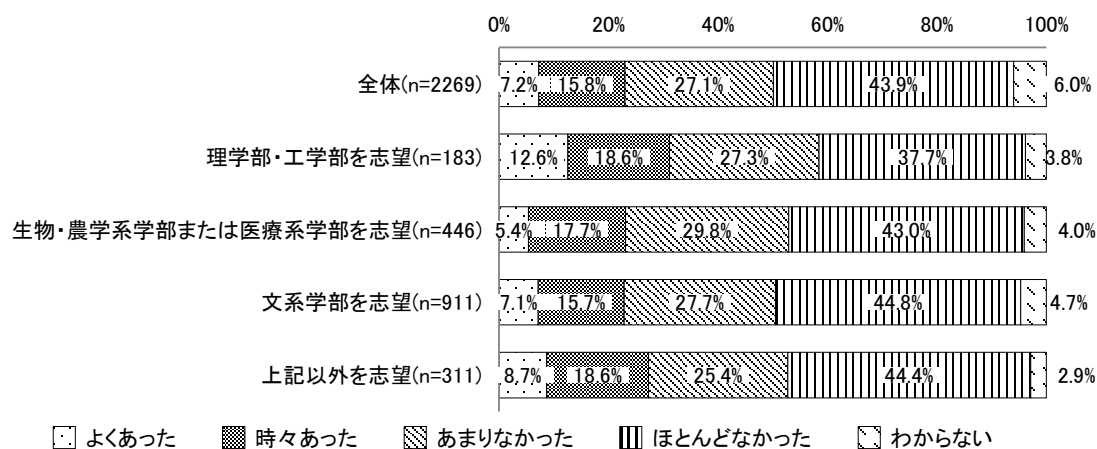
⑥「自身で工作やプラモデル作成など、ものづくりの経験をする事」があったか (Q25_8)



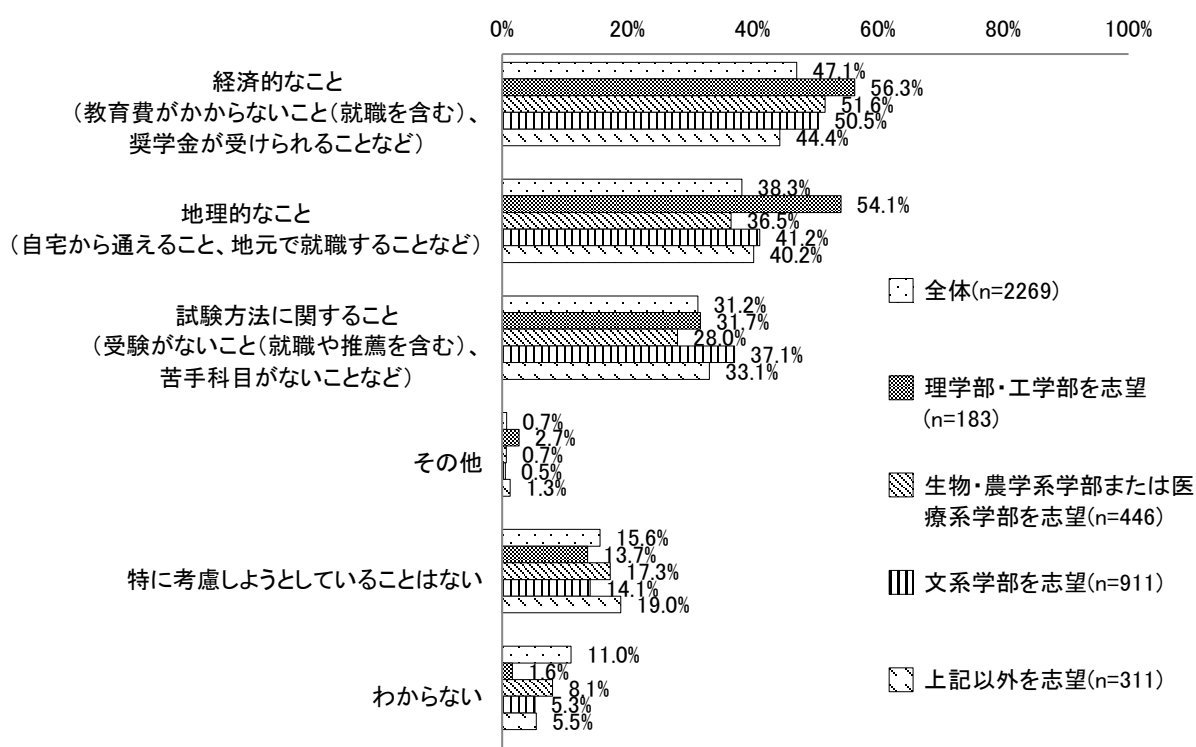
⑦「自身で天体観測や植物の観察、昆虫採集等を行うこと」があったか (Q25_9)



⑧「小学生までに、家庭でコンピュータを使って遊んだりプログラミングをしたりすること」があったか (Q25_10)

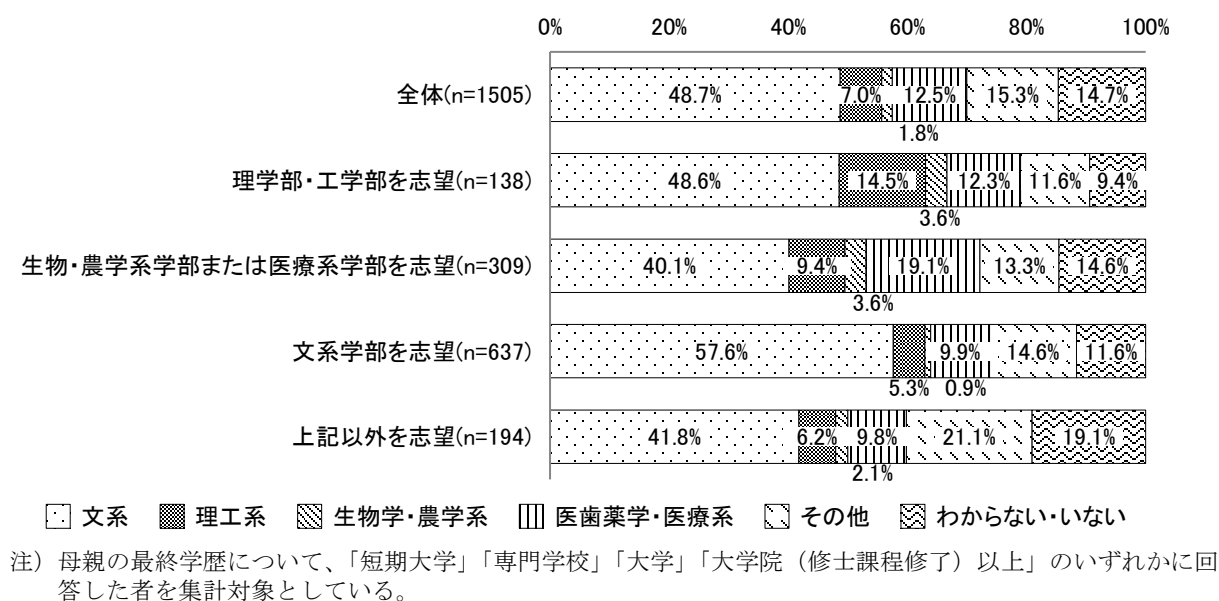


図表 205 進路を選択するうえで、考慮しようとしていること（女性）：複数回答 (Q29)

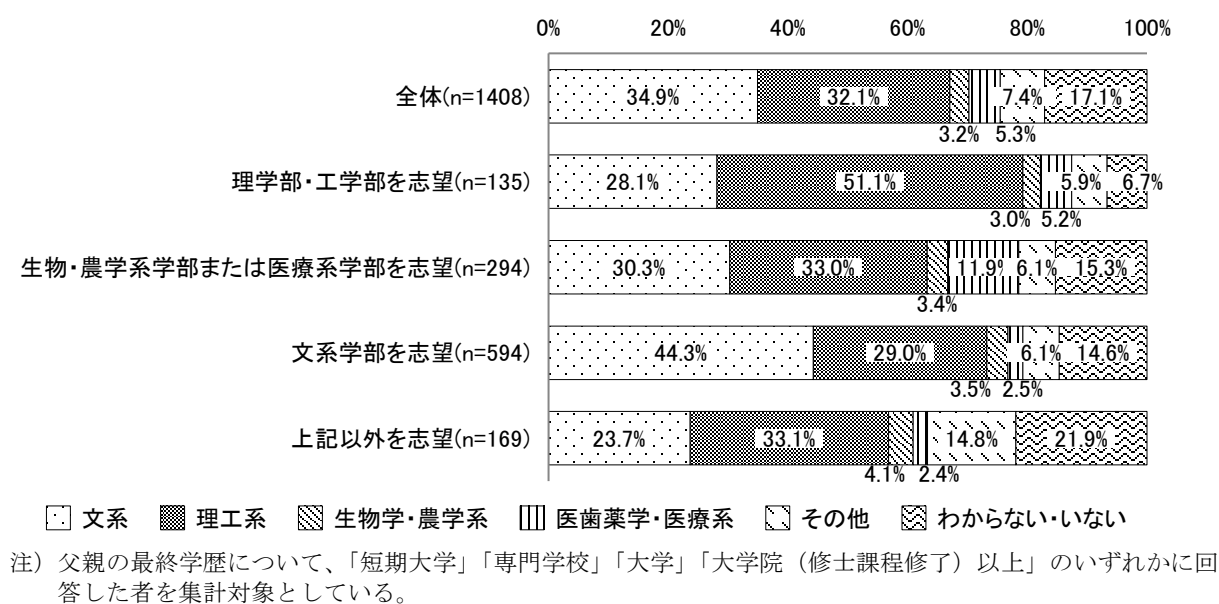


ii) 環境要因（家庭）

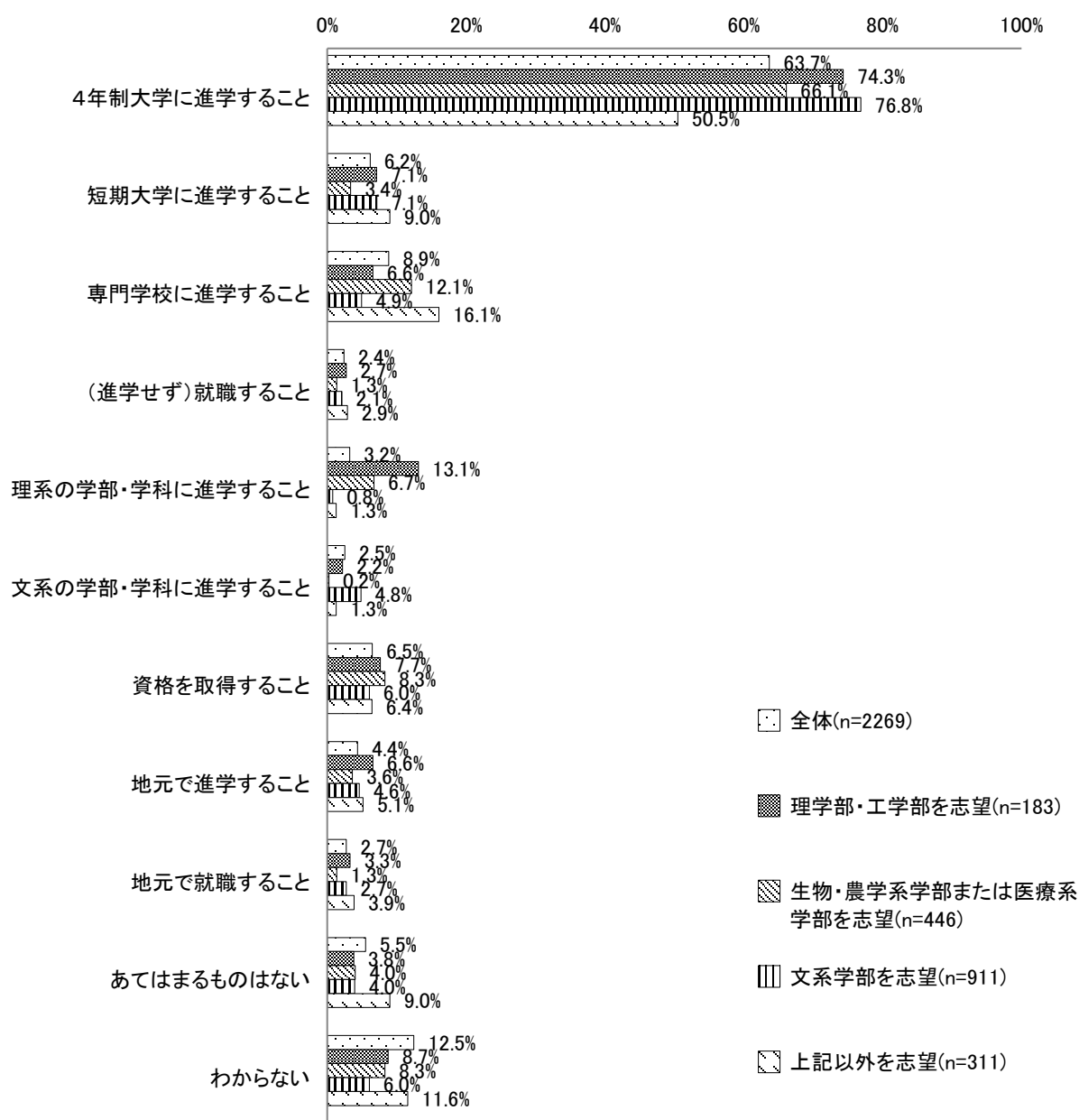
図表 206 母親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q14_1）



図表 207 父親の最終学歴_学部（専門科目）（女性）：単数回答（Q14_2）

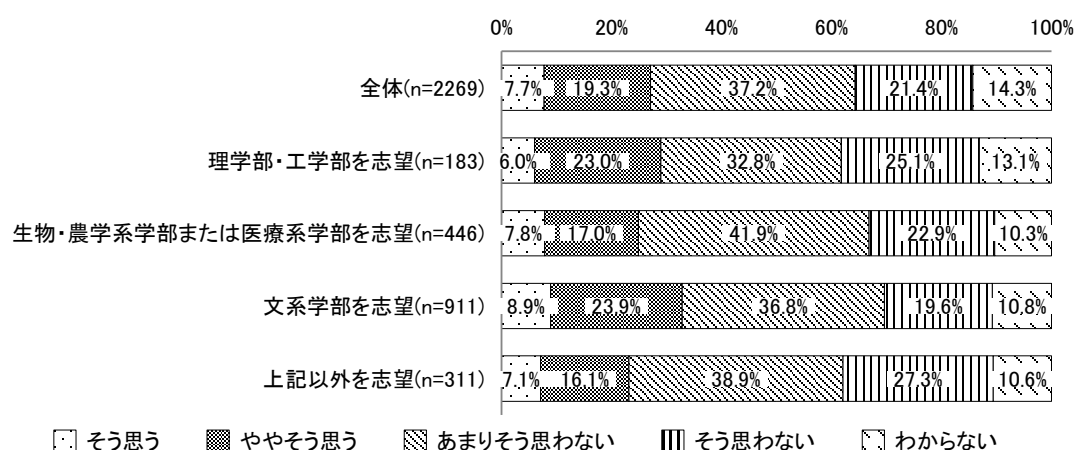


図表 208 自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと（女性）：複数回答（Q31_1）

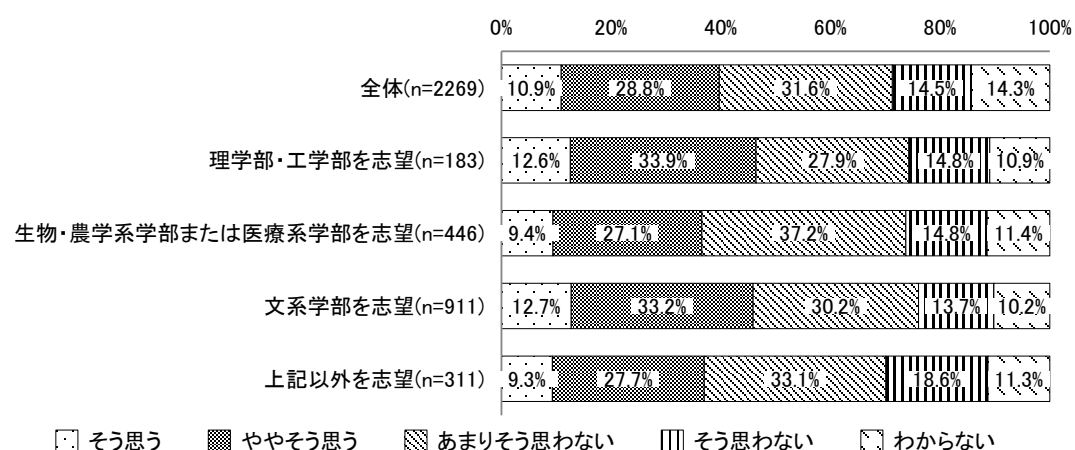


図表 209 保護者のステレオタイプ（女性）：単数回答（Q33）

①保護者が「男性は理系科目、女性は文系科目が向いている」と考えていると思うか（Q33_4）

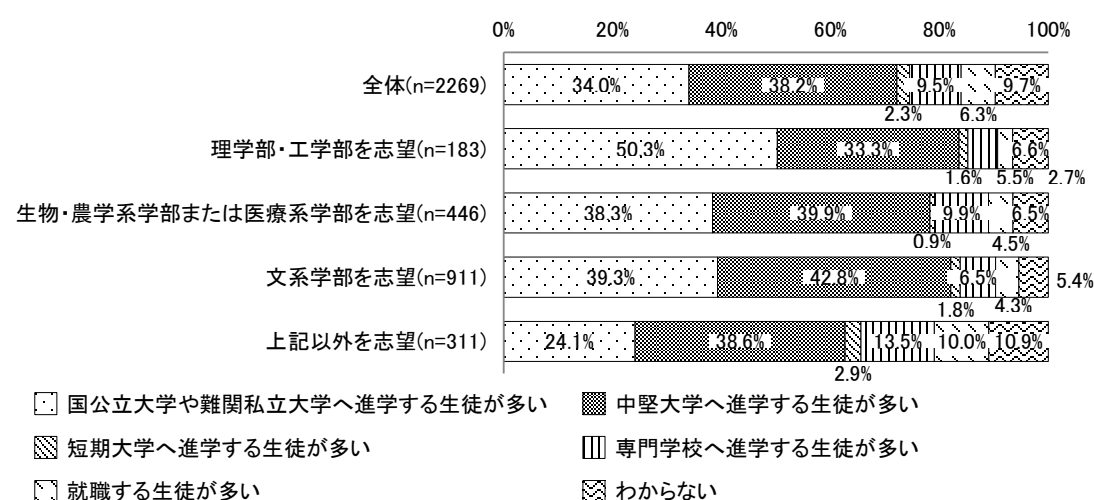


②保護者が「理系に進学・就職する女性は少数派だと思う」と考えていると思うか（Q33_5）

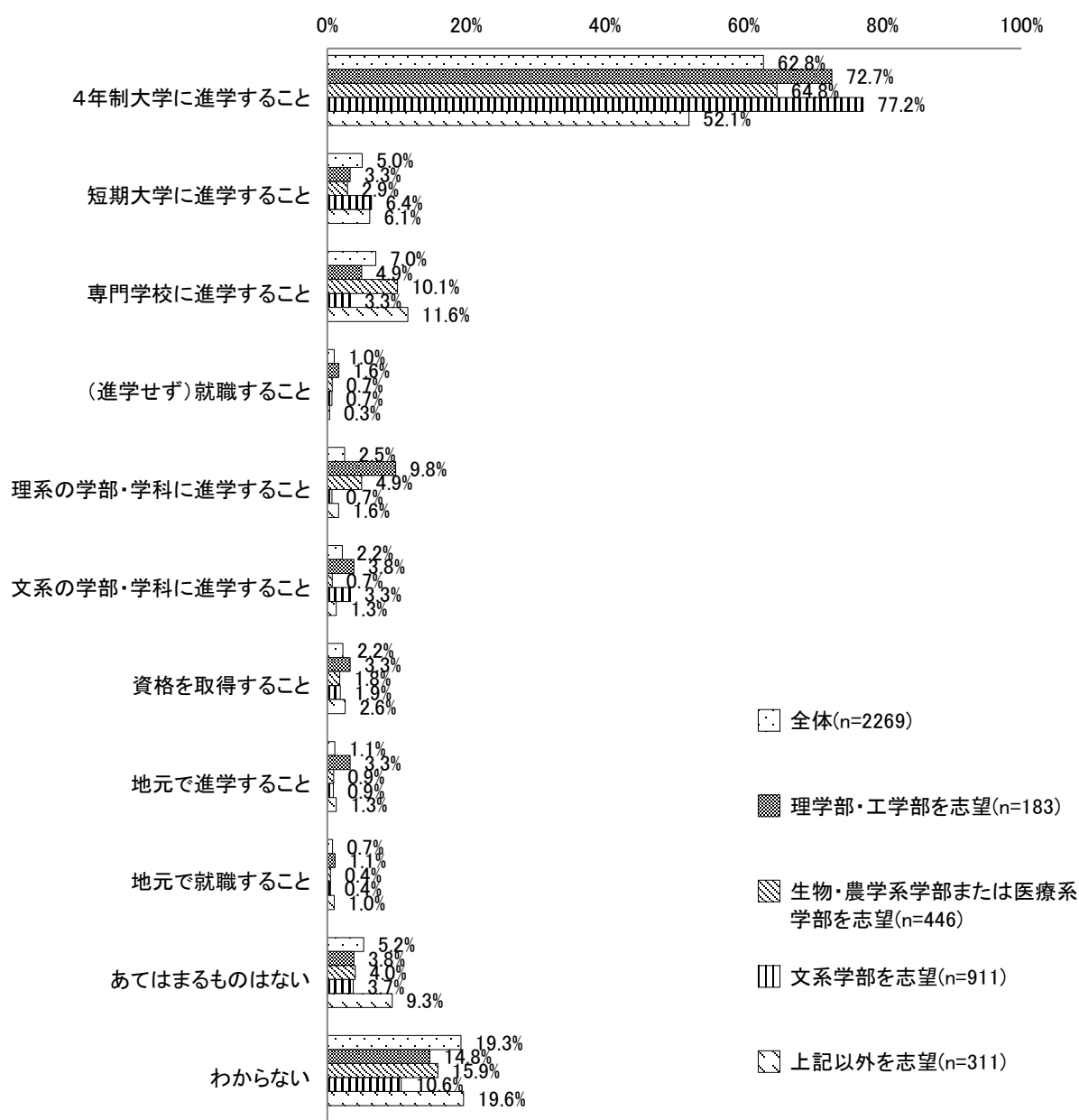


iii) 環境要因（学校）

図表 210 在学校の進学状況（女性）：単数回答（Q8）



図表 211 自身の進路について、教員が望んでいると思うこと（女性）：複数回答（Q31_2）



②各要因の人口規模別の特徴

以下では、女性の理工系分野への進学と関連がみられる要因のうち、人口規模による傾向の違いがみられたものについて記載している。

なお、個人要因のうち「好きだった科目・成績」「進路希望の理由」「理系・文系のイメージ」、環境要因（家庭）のうち「保護者の卒業した学部」「保護者のステレオタイプ」、環境要因（学校）のうち「自身の進路について、教員が望んでいると思うこと」については、人口規模による大きな傾向の違いはみられなかった。

<個人要因>

○理系的経験

「5万人未満」では、幼少期の科学館・博物館体験や、大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験がある割合が比較的低い。また、大学や自治体などが主催するイベントは5万人以上では同程度の割合となっており、5万人未満とそれ以上で差があるといえる。なお、男性については、人口規模が大きいほど大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験がある割合が高くなっており、女性よりも人口規模による傾向の違いが顕著である。（図表 212）

○進路を選択するうえで、考慮しようとしていること（再掲）

「5万人未満」では、「経済的なこと（教育費がかからないこと、奨学金が受けられることなど）」を考慮する割合が高く、「地理的なこと（自宅から通えることなど）」を考慮する割合が低い。なお、男性については、「5万人未満」では「地理的なこと」を考慮する割合が低い。（図表 193）

<環境要因（家庭）>

○自身の進路について、保護者が望んでいると思うこと（再掲）

「5万人未満」では、「4年制大学に進学すること」の割合が低く、「専門学校に進学すること」の割合が高い。なお、男性については、「5万人未満」では「（進学せず）就職すること」「資格を取得すること」「地元で就職すること」の割合が高い。（図表 198）

<環境要因（学校）>

○在学校の進学状況（再掲）

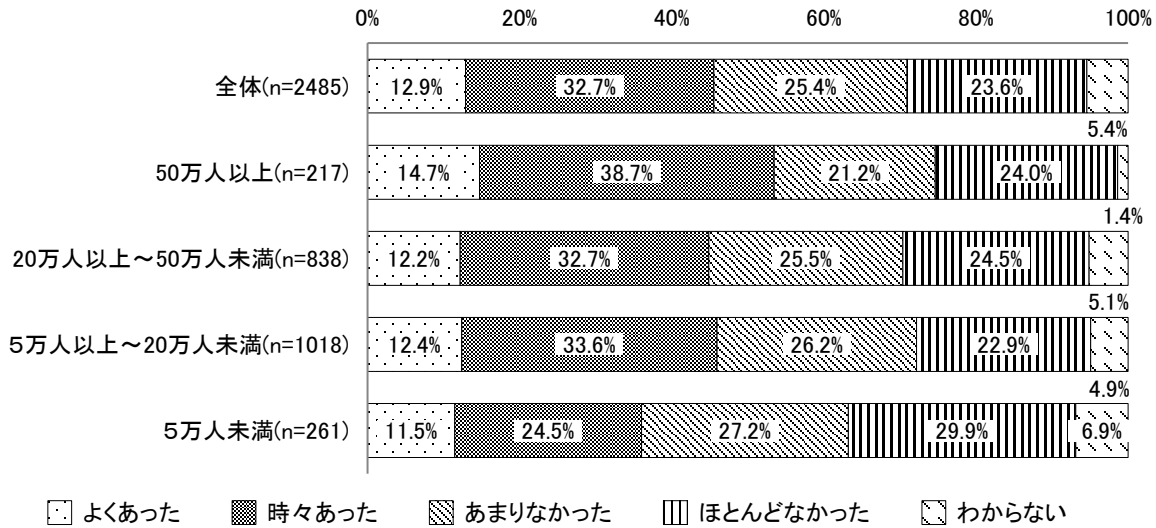
人口規模が大きいほど、大学進学者が多い学校に通っている傾向がみられる。また、「5万人未満」では、就職する生徒が多い学校に通っている割合が高い。（図表 200）

図表 212 人口規模別：理系的経験

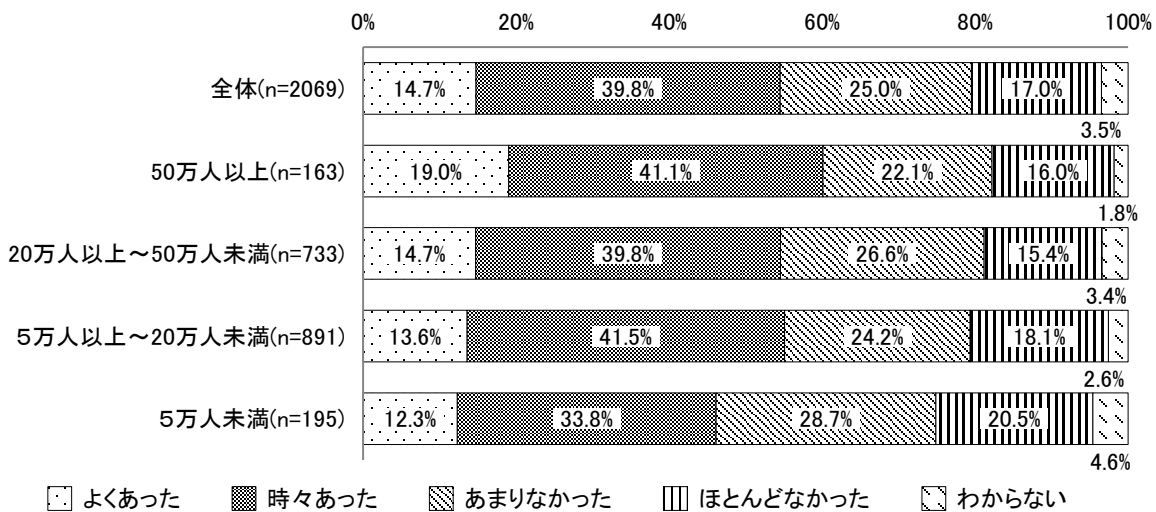
<幼少期の理系的な体験>

①「保護者に、科学館や博物館に連れていってもらったこと」があったか (Q25_3)

<女性>



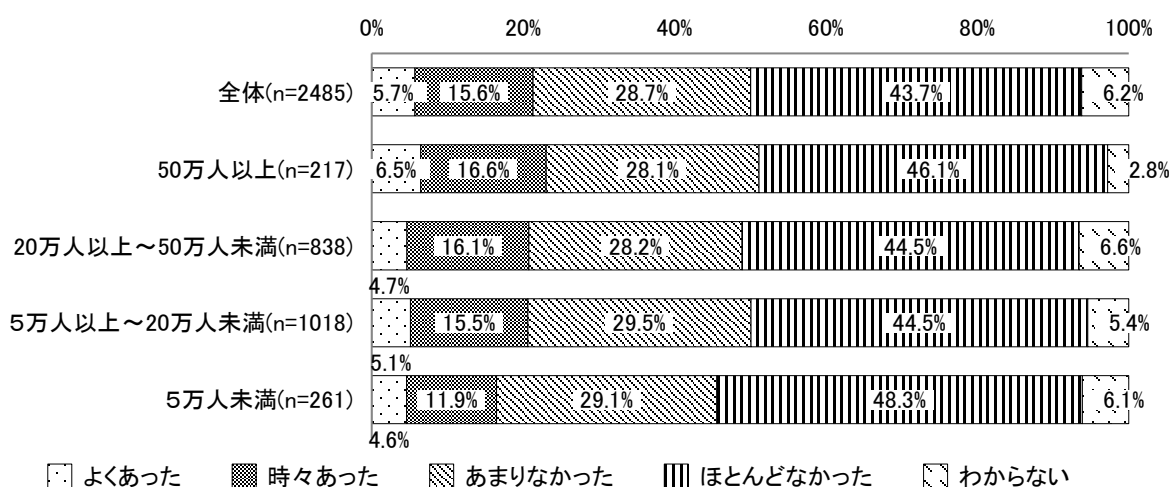
<男性>



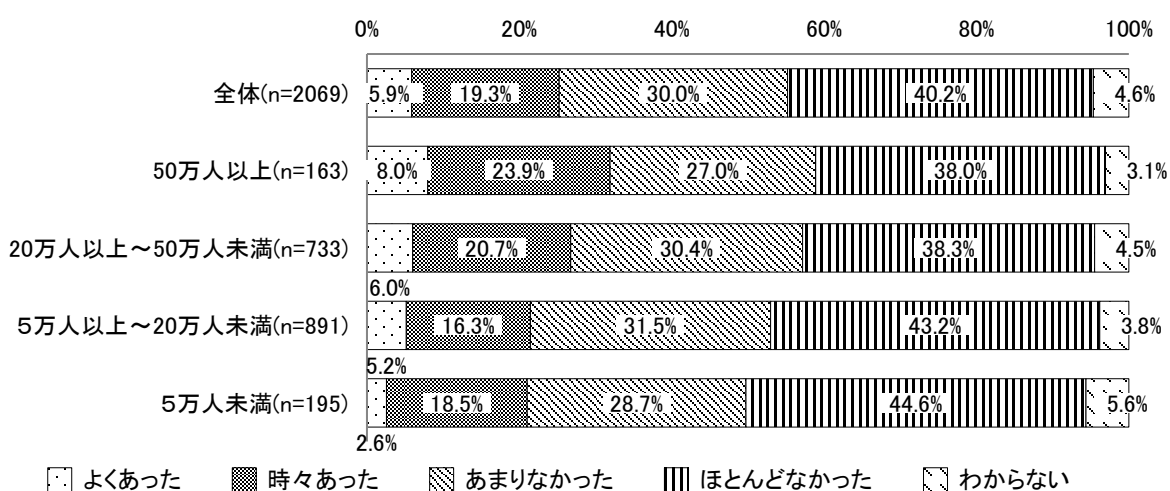
<大学や自治体などが主催するイベントへの参加経験>

①「大学や自治体などが主催する、自然観察や野外活動に参加すること」があったか (Q25_4)

<女性>

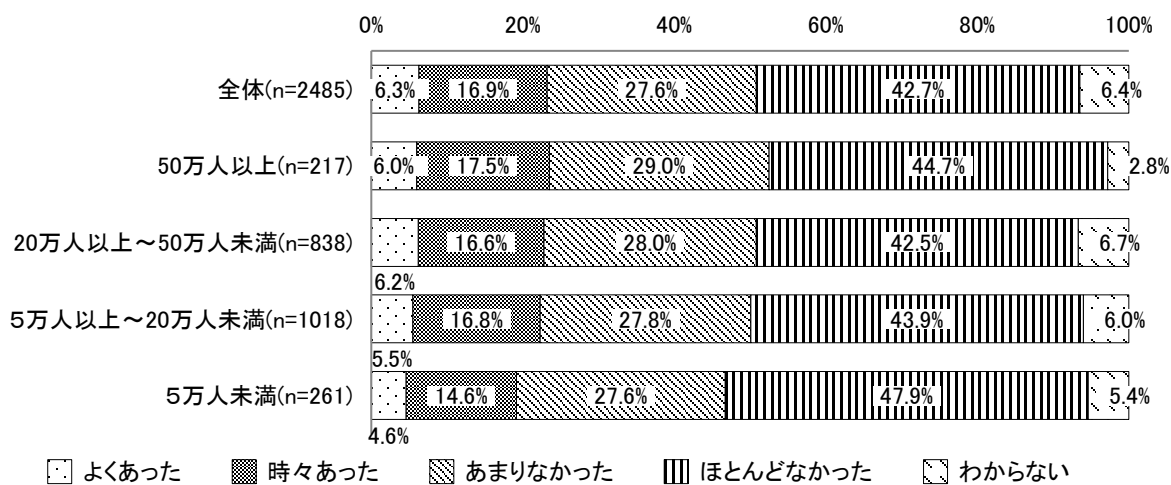


<男性>

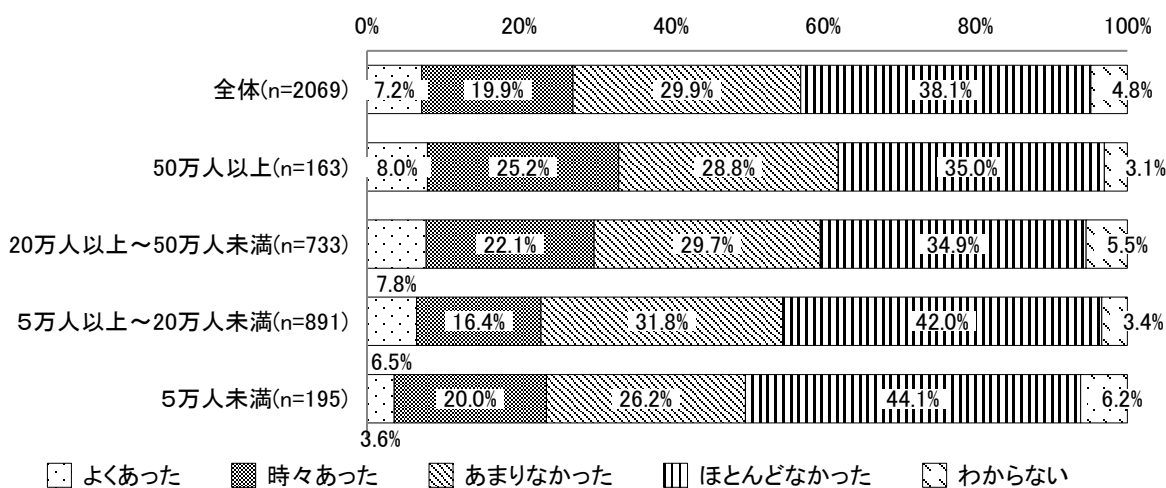


②「大学や自治体などが主催する、理科実験教室や工作教室に参加すること」があったか (Q25_5)

<女性>

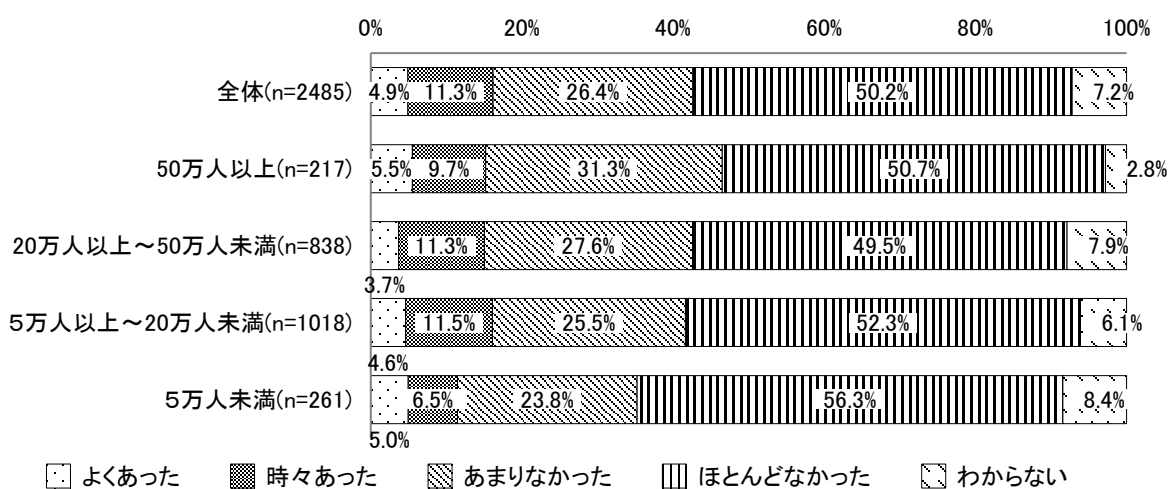


<男性>

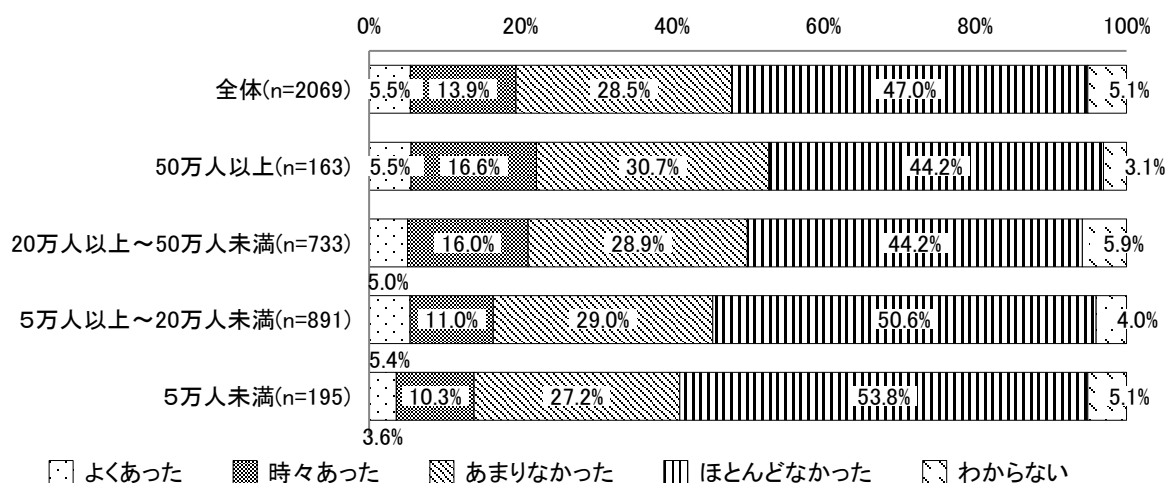


③「大学や自治体などが主催する、理工系進学に関するイベント・シンポジウムに参加すること」があったか (Q25_6)

<女性>

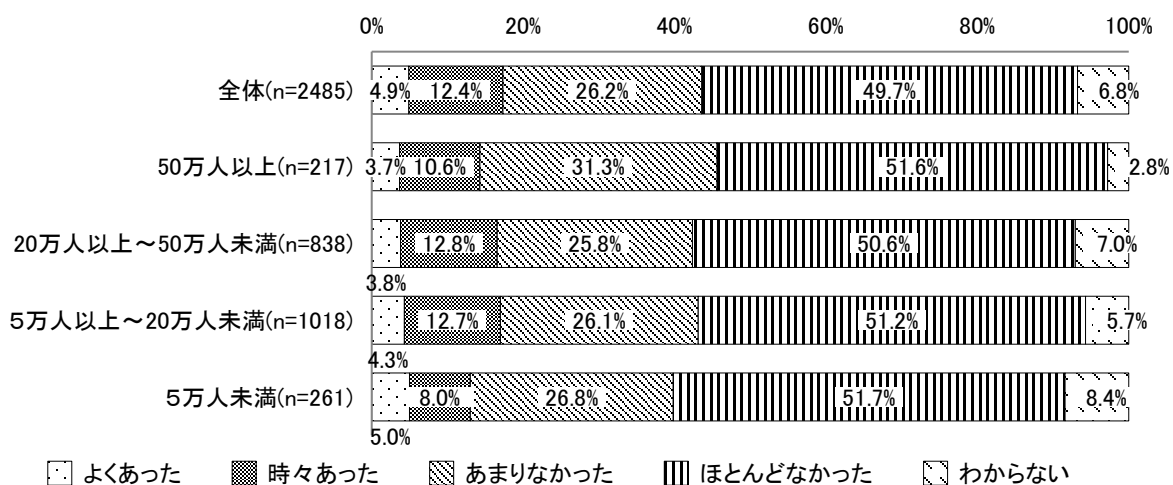


<男性>

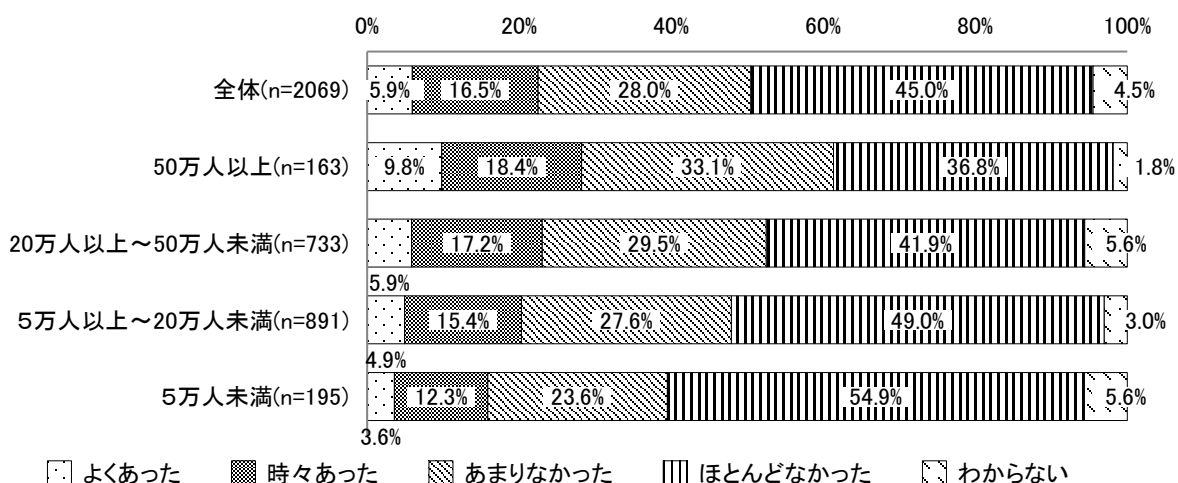


④「プログラミングやコンピュータの使い方に関する教室に参加すること」があったか (Q25_7)

<女性>



<男性>



(参考文献)

- 片岡栄美 (2001) 「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」『教育学研究』 68 (3) pp.259-273
- 上山浩次郎 (2011) 「大学進学率の都道府県間格差の要因構造とその変容—多母集団パス解析による4時点比較—」『教育社会学研究』 88, pp.207-227
- 河野銀子 (2019) 「理系進路選択とジェンダー—日本の現状を中心として—」『アジア・ジェンダー—文化学研究』 3, pp.3-12
- 河野銀子・藤田由美子編 (2018) 『新版 教育社会とジェンダー』 (学文社)
- 佐々木洋成 (2006) 「教育機会の地域間格差—高度成長期以降の趨勢に関する基礎的検討—」『教育社会学研究』 78, pp.303-320
- 田中寧・千葉能宏 (2011) 「女子の大学教育需要と雇用環境の変化—4年制大学と短期大学の志願率決定の二項・多項ロジットモデルによる時系列分析」『京都産業大学論集 社会科学系列』 (28) pp.89-113
- 田村一軌 (2017) 「県外大学進学率のパネル分析」『AGI Working Paper Series』 2, pp.1-23
- 林裕子・河野銀子ほか (2015) 『女性の理系進路選択における親の意識の影響に関する調査・分析』 (JSPS 科研報告書)
- 朴澤泰男 (2012) 「大学進学率の地域格差の再検討—男子の大学教育投資の都道府県別便益に着目して—」『教育社会学研究』 91, pp.51-71
- 朴澤泰男 (2014) 「女子の大学進学率の地域格差—大学教育投資の便益に着目した説明の試み—」『教育学研究』 81 (1) pp.14-25
- 朴澤泰男 (2015) 「大学進学率の地域格差の変化と課題」『大学時報』 64 (365) pp.70-77
- 平成 29 年度内閣府委託調査 (2018) 「女子生徒等の理工系進路選択支援に向けた生徒等の意識に関する調査研究 調査報告書」 https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/girls-course_h29.pdf (令和 4 年 2 月 16 日確認)
- 平成 30 年度内閣府委託調査 (2019) 「女子生徒等の理工系分野への進路選択支援に向けた保護者等の理解促進に関する調査研究 調査報告書」 https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/girls-course_h30.pdf (令和 4 年 2 月 16 日確認)